

# 史跡天然記念物屋島

－史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ－



2003.3

高松市教育委員会

# 史跡天然記念物屋島

— 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書 I —

長崎鼻古墳  
屋嶋城  
千間堂跡  
屋島寺

2003.3

高松市教育委員会



1. 屋島全景（北西から）



2. 屋島全景（北東から）



1. 南側くびれ部完掘状況



2. 石棺検出状況



1. 城門完掘状況（西から）



2. 城門完掘状況（東から）



1. 礎石建物跡完掘状況（東から）



2. 基壇中出土多口瓶

## 例 言

1. 本書は平成6年度から国庫および県費補助を得て実施している史跡天然記念物屋島基礎調査事業の調査報告書である。屋嶋城を除く長崎鼻古墳・北嶺千間堂跡の確認調査が終了したため、報告書Ⅰとして刊行した。
2. 本報告書には平成7年度から13年度にかけて行った確認調査の成果を収録した。
3. 調査を行うにあたり下記の関係機関、土地所有者（管理機関）ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略，五十音順）

香川県教育委員会文化行政課，環境省自然保護部高松自然保護官事務所，四国森林管理局香川森林管理事務所，屋島ドライブウェイ株式会社，讃岐文化遺産研究会，東 信男，池田 誠，今井和彦，白杵 勲，上原真人，瓜生秀文，大久保徹也，大山真充，小川秀樹，尾崎忠夫，小田富士雄，片桐孝浩，加藤真司，狩野 久，金田明大，亀田修一，岸本直文，北垣聰一郎，草原孝典，葛原克人，工藤茂博，久保田昇三，幸泉満夫，高 正龍，小林 克，坂井秀弥，狭川真一，笹川龍一，佐藤龍馬，菅原康夫，杉山 洋，高木恭二，竹田宏司，巽 淳一郎，伊達宗泰，田中淳也，田中哲雄，車 勇杰，坪井清足，出宮徳尚，寺岡 洋，中嶋 聡，仲野 浩，丹羽佑一，乗岡 実，平岡岩夫，広瀬昭雄，広瀬和雄，廣瀬常雄，間壁忠彦，松尾洋平，松波宏隆，松本敏三，水内昌康，皆川隆男，向井一雄，村上幸雄，本中 眞，門田誠一，山上雅弘，山田隆文，山村芳貴，山本和子，義則敏彦，渡部明夫，渡辺正気

調査年度	調査地点	土地所有者（管理機関等）	調査地（番地等）
平成7年度		屋島寺	屋島東町1821番地1
平成8年度	第1調査地点	国（四国森林管理局）	屋島国有林26林班は3小班
	第2調査地点	野田一博	屋島東町1814番地1，1814番地2
平成9年度	第1調査地点	国（四国森林管理局）	屋島国有林26林班は3小班
	第2調査地点	屋島寺	屋島東町1828番地1
平成10年度	第1調査地点	国（四国森林管理局）	屋島国有林26林班は3小班
	第2調査地点	国（環境省）	北嶺山上国立公園内
平成11年度	第1調査地点	屋島寺 国（四国森林管理局）	屋島東町1821番地1 屋島国有林26林班い4小班
	第2調査地点	国（環境省）	北嶺山上国立公園内
平成12年度	第1調査地点	国（環境省）	北嶺山上国立公園内
	第2調査地点	屋島寺 国（四国森林管理局）	屋島東町1821番地1 屋島国有林26林班い4小班
	第3調査地点	屋島寺	屋島東町1782番地1
平成13年度	第1調査地点	屋島寺	屋島東町1782番地1
	第2調査地点	国（環境省）	北嶺山上国立公園内
	第3調査地点	馬場安市	屋島東町1811番地1

4. 史跡天然記念物屋島基礎調査事業の現地調査は主に文化振興課文化財専門員山元敏裕が行ったが，平成9年度第2調査地点の調査は讃岐文化遺産研究会末光甲正，平成12年度・平成13年度の調査では讃岐文化遺産研究会中西克也の協力を得て行った。

5. 本報告書の執筆は、次に掲げる項以外について文化振興課文化財専門員山元敏裕が行い編集も山元が行った。
  - ・第3章第3節 長崎鼻地区の調査・第4章第1節 長崎鼻古墳について  
…徳島文理大学院生・大野宏和
  - ・第3章第4節 南嶺山上部の調査 平成9年度第2調査地点（出土遺物の項除く）  
…讃岐文化遺産研究会 末光甲正
  - ・第3章第6節 屋島寺宝物館建設予定地内（出土遺物の項除く）  
…文化振興課文化財専門員 川畑 聡
6. 本書には屋島基礎調査事業として実施したものではないが、本書をまとめる上で重要であることから、平成2年度に実施した屋島寺宝物館建設予定地内の発掘調査の成果未報告を収載した。
7. 長崎鼻古墳で確認された舟形石棺およびくびれ部出土の土師器壺口縁部に付着していた赤色顔料分については、徳島県立博物館学芸員 魚島純一氏に依頼し、玉稿を頂き本書に掲載することができた。記して謝意を表したい。
8. 本報告書掲載の遺物写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）の協力を得た。
9. 本文の挿図として、国土地理院発行2万5千分の1地形図「高松北部」「高松南部」および高松市都市計画図2千5百分の1「屋島1」「屋島2」「屋島3」を一部改変して使用した。
10. 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 本報告書中に掲載の図面の北方位については第1・2・5・6・8・10・11・13～19・21～25・27・28・30・60・107・109・111 図が真北で、それ以外は磁北である。
2. 本報告書の高度値は海拔高を表す。
3. 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。  
SA…柵列 SB…掘立柱建物 SD…溝 SK…土坑 SP…柱穴
4. 出土遺物の実測図は土器 1/4, 石器 1/2, 鉄器 1/2, 遺構については掘立柱建物跡 1/80, 土坑 1/40 に統一している。

# 目 次

## 第1章 調査の経緯・経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5

## 第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	1 1
第2節 分布調査	1 1
第3節 長崎鼻地区の調査	1 5
第4節 北嶺山上部の調査	3 8
第5節 南嶺山上部の調査	6 3
第6節 屋島寺宝物館建設予定地内の調査	1 0 6
第7節 長崎鼻古墳で確認された赤色顔料付着遺物の蛍光 X 線分析について	1 1 5

## 第4章 まとめ

第1節 長崎鼻古墳について	1 1 8
第2節 屋嶋城について	1 2 4
第3節 千間堂跡・屋島寺について	1 3 0

## 挿図目次

第 1 図 史跡天然記念物屋島基礎調査 事業調査地位置図 ……………	3	第 34 図 平成 11 年度 北嶺 第 2 トレンチ 平面図 ……………	42
第 2 図 史跡天然記念物屋島位置図 ……………	4	第 35 図 平成 11 年度 北嶺 第 2 トレンチ 出土遺物実測図 ……………	43
第 3 図 浜北 2 号墳出土遺物実測図 ……………	5	第 36 図 平成 12 年度調査地周辺地形測量図 ……	44
第 4 図 屋島中央東古墳出土遺物実測図 ……………	5	第 37 図 礎石建物跡平面図 ・土層図・断面図 ……………	45～46
第 5 図 史跡天然記念物屋島遺跡分布図 ……………	6	第 38 図 礎石建物跡基壇中出土遺物実測図 1 ……	48
第 6 図 遺物出土箇所位置図 ……………	8	第 39 図 礎石建物跡基壇中出土遺物実測図 2 ……	49
第 7 図 屋島東町 1655 番地 (尾崎忠夫邸) 出土遺物実測図 ……………	8	第 40 図 礎石建物跡南トレンチ 出土遺物実測図…	49
第 8 図 浦生石塁遺物表採箇所位置図 ……………	8	第 41 図 集石遺構 (火葬墓) 平面図・断面図 ……	50
第 9 図 浦生石塁表採遺物実測図 ……………	8	第 42 図 中央下部集石平面図 ……………	50
第 10 図 分布調査実施範囲図 ……………	12	第 43 図 中央下部土壇 (墓壇) 平面図 ……………	50
第 11 図 鵜羽神社境内遺跡神社位置図 ……………	13	第 44 図 集石遺構出土遺物実測図 1 ……………	51
第 12 図 鵜羽神社境内遺跡表採遺物実測図 ……	14	第 45 図 集石遺構出土遺物実測図 2 ……………	52
第 13 図 長崎鼻古墳位置図 ……………	16	第 46 図 集石遺構西トレンチ出土遺物実測図 ……	54
第 14 図 鯨の墓トレンチ配置図 ……………	16	第 47 図 長方形石積基壇周辺地形図 ……………	55
第 15 図 長崎鼻古墳墳丘測量図 ……………	17	第 48 図 長方形石積基壇平面図・断面図 ……………	56
第 16 図 第 1 トレンチ平面図・土層図 ……………	18	第 49 図 長方形石積基壇出土遺物実測図 ……	56
第 17 図 第 2 トレンチ平面図・土層図 ……………	18	第 50 図 平成 13 年度第 2 調査地点 平面図・土層図 ……………	57
第 18 図 第 3 トレンチ平面図・土層図 ……………	19	第 51 図 SB01 平面図・断面図 ……………	59
第 19 図 第 7 トレンチ平面図・土層図 ……………	19	第 52 図 SB02 平面図・断面図 ……………	59
第 20 図 第 7 トレンチ西壁土層図 ……………	21	第 53 図 SA01 平面図・断面図 ……………	59
第 21 図 第 8 トレンチ平面図・断面図・土層図…	21	第 54 図 SA02 平面図・断面図 ……………	59
第 22 図 第 4 トレンチ平面図・立面図・断面図…	22	第 55 図 集石遺構平面図・断面図 ……………	59
第 23 図 第 5 トレンチ平面図 ・土層図・石棺断面図 ……	23～24	第 56 図 SK01 平面図・断面図 ……………	59
第 24 図 第 6 トレンチ平面図・立面図・土層図 …	25	第 57 図 平成 13 年度北嶺遺構 出土遺物実測図 ……………	59
第 25 図 第 9 トレンチ平面図・立面図 ・土層図 ……………	27～28	第 58 図 平成 13 年度北嶺遺構外 出土遺物実測図 ……………	60
第 26 図 長崎鼻古墳横断面図①後円部 ②前方部 ③前方部端立面図…	27～28	第 59 図 平成 11 年度分布調査 表採遺物実測図 ……………	61
第 27 図 第 10 トレンチ平面図 ・立面図・土層図 ……………	30	第 60 図 南嶺調査地位置図 ……………	63
第 28 図 第 11 トレンチ平面図 ・立面図・土層図 ……………	31～32	第 61 図 平成 7 年度調査遺構配置図 ……………	65
第 29 図 長崎鼻古墳出土遺物実測図 ……………	33	第 62 図 集石遺構 1 平面図・断面図 ……………	66
第 30 図 北嶺調査地トレンチ配置図 ……………	38	第 63 図 集石遺構 2 平面図・断面図 ……………	67
第 31 図 北嶺北側湿地部分トレンチ平面図 ……	40	第 64 図 集石遺構 3 平面図・断面図 ……………	68
第 32 図 北側湿地部分トレンチ出土遺物実測図 …	40	第 65 図 平成 7 年度調査地点出土遺物実測図 ……	69
第 33 図 石列平面図・土層図・立面図 ……………	41	第 66 図 平成 8 年度第 2 調査地点 出土遺物実測図 1 ……………	70

第67図	平成8年度第2調査地点 地形測量図	71～72	第90図	西南外郭線地形測量図	96
第68図	西側土塁平面図・断面図	71～72	第91図	第1トレンチ土層図	97
第69図	北側土塁平面図・断面図	71～72	第92図	城門遺構平面図・立面図・土層図	98
第70図	平成8年度第2調査地点 出土遺物実測図2	73	第93図	城門内土層図	99
第71図	平成8年度第2調査地点 出土遺物実測図3	74	第94図	排水溝見通し断面図	99
第72図	平成9年度第2調査地点 平面図・土層図	77～78	第95図	第2トレンチ平面図・土層図	99
第73図	平成9年度第2調査地点 出土遺物実測図	80	第96図	城門南側石塁平面図・立面図・断面図	101
第74図	貯水池推定地トレンチ配置図・土層図	82	第97図	背面列石平面図・立面図	101
第75図	貯水池推定地出土遺物実測図1	83	第98図	屋島寺宝物館遺構配置図・土層図	107
第76図	貯水池推定地出土遺物実測図2	84	第99図	集石平面図	109
第77図	貯水池推定地出土遺物実測図3	85	第100図	屋島寺宝物館出土遺物実測図1	111
第78図	貯水池推定地出土遺物実測図4	86	第101図	屋島寺宝物館出土遺物実測図2	112
第79図	貯水池推定地出土遺物実測図5	87	第102図	土師器破片蛍光X線分析結果	116
第80図	北側外郭線地形測量図	89	第103図	土師器破片蛍光X線分析結果	116
第81図	第1トレンチ平面図・土層図	90	第104図	石棺破片蛍光X線分析結果	117
第82図	第2トレンチ平面図・土層図	91	第105図	石棺破片蛍光X線分析結果	117
第83図	第2トレンチ出土遺物実測図	91	第106図	石棺破片蛍光X線分析結果	117
第84図	第3トレンチ(A-A)土層図	92	第107図	墳岡形態復元図	118
第85図	第4トレンチ(B-B)土層図	92	第108図	阿蘇石・火山石・鷲の山石製 石棺分布図	119
第86図	第3・4トレンチ出土遺物実測図	92	第109図	屋嶋城関係遺構位置図 (S=1/40,000)	124
第87図	第3・4トレンチ平面図・立面図	93～94	第110図	古代山城で確認された 城門遺構の床面構造	128
第88図	第5トレンチ平面図・土層図	95	第111図	千間堂跡推定寺域	130
第89図	第5トレンチ出土遺物実測図	95	第112図	周辺地域で確認された 須恵器多口瓶の類例	132

## 表 目 次

第1表	史跡天然記念物屋島基礎 調査事業調査一覧表	2	第4表	香川県の割竹形・舟形石棺地名表	120
第2表	史跡天然記念物屋島基礎 調査事業分布調査一覧表	11	第5表	確認された古代山城の主な 城門遺構の規模	127
第3表	遺構一覧表	76・79			

## 図 版

- |  |   |
|--|---|
| <p>図版 1 - 1 鯨の墓完掘状況 (東から)</p> <p>- 2 鯨の墓頂上部完掘状況 (南から)</p> <p>- 3 後円部南斜面発掘調査前状況 (西から)</p> <p>- 4 前方部発掘調査前の状況 (西から)</p> <p>- 5 第 1 トレンチ (東から)</p> <p>- 6 第 1 トレンチ (西から)</p> <p>- 7 第 2 トレンチ墳頂部 (南西から)</p> <p>図版 2 - 1 第 2 トレンチ (北から)</p> <p>- 2 第 2 トレンチ (南から)</p> <p>- 3 第 3 トレンチ (南から)</p> <p>- 4 第 3 トレンチ 2・3 段目葺石 (南から)</p> <p>図版 3 - 1 第 3 トレンチ 2 段目葺石 (南西から)</p> <p>- 2 第 7 トレンチ全景 (北から)</p> <p>- 3 第 7 トレンチ全景 (南から)</p> <p>- 4 第 7 トレンチ全景 (南西から)</p> <p>- 5 第 7 トレンチ全景 (南東から)</p> <p>- 6 第 3 トレンチ 3 段目葺石 (南西から)</p> <p>- 7 第 1・2・8 トレンチ (東から)</p> <p>- 8 第 1・2・7 トレンチ (東から)</p> <p>図版 4 - 1 第 7 トレンチ (西から)</p> <p>- 2 第 8 トレンチ (西から)</p> <p>図版 5 - 1 第 8 トレンチ (南から)</p> <p>- 2 第 8 トレンチ 3 段目葺石 (南東から)</p> <p>- 3 第 8 トレンチ 2 段目葺石 (南東から)</p> <p>- 4 第 8 トレンチ端部 (南から)</p> <p>- 5 第 8 トレンチ (東から)</p> <p>- 6 第 8 トレンチ (北東から)</p> <p>- 7 第 8 トレンチ (北東から)</p> <p>図版 6 - 1 第 4 トレンチ (北から)</p> <p>- 2 第 4 トレンチ (北から)</p> <p>- 3 第 4 トレンチ 2 段目葺石 (北西から)</p> <p>- 4 第 4 トレンチ 3 段目葺石 (北西から)</p> <p>- 5 第 4 トレンチ墓壇 (北東から)</p> <p>- 6 第 4 トレンチ石槨 (北から)</p> <p>- 7 第 4 トレンチ墓壇土層 (東から)</p> <p>図版 7 - 1 第 6 トレンチ (南から)</p> <p>- 2 第 6 トレンチ 1 段目葺石 (南東から)</p> <p>- 3 第 6 トレンチ (南東から)</p> | <p>- 4 第 6 トレンチ 3 段目葺石 (南西から)</p> <p>- 5 第 6 トレンチ墓壇 (北東から)</p> <p>- 6 第 6 トレンチ墓壇掘削状況 (南から)</p> <p>- 7 第 6 トレンチ墓壇土層 (東から)</p> <p>図版 8 - 1 第 5 トレンチ墳丘斜面部 (東から)</p> <p>- 2 第 5 トレンチ墳丘斜面部 (西から)</p> <p>- 3 第 5 トレンチ 1 段目葺石 (南東から)</p> <p>- 4 第 5 トレンチ 2 段目葺石 (南東から)</p> <p>- 5 第 5 トレンチ 3 段目葺石 (南東から)</p> <p>- 6 第 5 トレンチ 3 段目葺石 (南から)</p> <p>図版 9 - 1 第 5 トレンチ石槨<br/>及び盗掘坑検出状況 (西から)</p> <p>- 2 第 5 トレンチ石槨<br/>及び盗掘坑検出状況 (東から)</p> <p>- 3 第 5 トレンチ墓壇 (東から)</p> <p>- 4 第 5 トレンチ墓壇 (南東から)</p> <p>- 5 第 5 トレンチ石槨西側 (南から)</p> <p>図版 10 - 1 第 5 トレンチ石槨検出状況 (西から)</p> <p>- 2 第 5 トレンチ盗掘土除去中① (東から)</p> <p>- 3 第 5 トレンチ盗掘土除去中② (南から)</p> <p>- 4 第 5 トレンチ盗掘土除去中③ (南から)</p> <p>- 5 第 5 トレンチ盗掘土除去後④ (南西から)</p> <p>- 6 第 5 トレンチ盗掘土除去後⑤ (南から)</p> <p>図版 11 - 1 第 5 トレンチ石槨状況 (東から)</p> <p>- 2 第 5 トレンチ石槨下部状況 (南東から)</p> <p>- 3 第 5 トレンチ石槨 (南東から)</p> <p>- 4 第 5 トレンチ石槨 (南から)</p> <p>- 5 第 5 トレンチ石槨西側 (南西から)</p> <p>- 6 第 5 トレンチ石槨西側土層① (南から)</p> <p>図版 12 - 1 第 5 トレンチ石槨西側土層② (南から)</p> <p>- 2 第 9 トレンチ小段遺構 (南から)</p> <p>- 3 第 9 トレンチ (西から)</p> <p>- 4 第 10 トレンチ全景 (北から)</p> <p>図版 13 - 1 第 10 トレンチ 1・2 段目葺石 (西から)</p> <p>- 2 第 10 トレンチ 1 段目葺石 (東から)</p> <p>- 3 第 10 トレンチ 2 段目葺石 (東から)</p> <p>- 4 第 10 トレンチ 3 段目葺石 (北東から)</p> <p>- 5 第 10 トレンチくびれ部 1・2 段目葺石<br/>(北から)</p> |
|--|---|

- 6 第10トレンチくびれ部1段目葺石  
(北から)
- 7 第10トレンチくびれ部2段目葺石  
(北から)
- 図版14-1 第10トレンチ遺物出土状況①(北から)
- 2 第10トレンチ遺物出土状況②(北から)
- 3 第11トレンチ全景①(南から)
- 4 第11トレンチ2・3段目葺石(西から)
- 5 第11トレンチ1・2段目葺石(西から)
- 図版15-1 第11トレンチ全景②(南西から)
- 2 第11トレンチくびれ部1段目葺石  
(南西から)
- 3 第11トレンチくびれ部2段目葺石  
(南西から)
- 4 第11トレンチくびれ部3段目葺石  
(南西から)
- 5 第11トレンチ2・3段目葺石  
(南東から)
- 図版16-1 土塁断ち割り状況(西から)
- 2 土塁断ち割り状況(東から)
- 3 石列完掘状況(北から)
- 4 石列完掘状況(南から)
- 5 土塁断面(東から)
- 6 土塁断面拡大(東から)
- 図版17-1 平成10年度石列西側遺物出土状況
- 2 平成11年度第1トレンチ遺物出土状況
- 3 平成11年度石列完掘状況(北から)
- 4 平成11年度石列完掘状況(南から)
- 5 平成11年度石列完掘状況(西から)
- 図版18-1 平成11年度石列完掘状況(南から)
- 2 平成11年度石列完掘状況(北から)
- 3 石列断ち割り状況(南から)
- 4 石列断ち割り状況(西から)
- 5 石列断ち割り状況(東から)
- 6 石列断ち割り状況(南から)
- 図版19-1 平成11年度第2トレンチ完掘状況  
(北から)
- 2 平成11年度第2トレンチ完掘状況  
(東から)
- 3 平成11年度第2トレンチ完掘状況  
(西から)
- 4 トレンチ内遺物出土状況
- 5 トレンチ内遺物出土状況
- 図版20-1 礎石建物跡分布調査時確認状況(東から)
- 2 礎石建物跡トレンチ掘削状況(東から)
- 図版21-1 礎石建物跡基壇内集石状況(東から)
- 2 基壇内西側土層(南から)
- 3 基壇内中央部土層(南から)
- 4 基壇内西部土層(西から)
- 5 基壇中央部土層(西から)
- 図版22-1 礎石下部状況①
- 2 礎石下部状況②
- 3 基壇内遺物出土状況①
- 4 基壇内遺物出土状況②
- 5 基壇内遺物出土状況③
- 6 基壇内遺物出土状況④
- 7 基壇内遺物出土状況⑤
- 8 基壇内遺物出土状況⑥
- 図版23-1 集石遺構確認状況(北から)
- 2 集石遺構確認状況拡大(北から)
- 3 集石遺構確認状況(南から)
- 4 集石遺構確認状況拡大(南から)
- 5 散乱した集石除去後(北から)
- 6 散乱した集石除去後(東から)
- 7 集石遺構半裁状況(東から)
- 8 集石遺構半裁状況拡大(東から)
- 図版24-1 集石遺構内土層検出状況(東から)
- 2 集石遺構内土坑完掘状況(北から)
- 3 集石内遺物出土状況①(灰釉陶器Ⅲ)
- 4 集石内遺物出土状況②(土師器杯)
- 5 集石内遺物出土状況③(平瓦)
- 6 集石内遺物出土状況④(土師器羽釜)
- 7 集石内遺物出土状況⑤(土師器杯)
- 8 集石内遺物出土状況⑥(土師器羽釜)
- 図版25-1 集石遺構西トレンチ完掘状況(西から)
- 2 集石遺構北トレンチ完掘状況(南から)
- 3 集石遺構西トレンチ遺物出土状況①
- 4 集石遺構西トレンチ遺物出土状況②
- 図版26-1 長方形石積基壇(西から)
- 2 長方形石積基壇(北から)
- 3 長方形石積基壇(東から)
- 4 トレンチ掘削前状況(北から)

- 5 トレンチ掘削状況 (西から)
  - 6 南北トレンチ南端遺物出土状況
  - 7 平成 12 年度第 4 トレンチ完掘状況 (西から)
  - 8 平成 12 年度第 4 トレンチ完掘状況 (南から)
- 図版 27
- 1 平成 13 年度トレンチ掘削状況 (西から)
  - 2 平成 13 年度トレンチ掘削状況 (東から)
  - 3 トレンチ東側完掘状況 (北から)
  - 4 トレンチ中央部完掘状況 (北から)
  - 5 トレンチ西側完掘状況 (北から)
  - 6 トレンチ内集石遺構
- 図版 28
- 1 平成 7 年度調査区西半完掘状況 (北から)
  - 2 平成 7 年度調査区東半完掘状況 (北から)
  - 3 平成 7 年度調査区中央完掘状況 (北から)
  - 4 平成 7 年度調査区南半完掘状況 (西から)
  - 5 平成 7 年度調査区北半中央完掘状況 (北から)
  - 6 平成 7 年度調査区東端完掘状況 (北から)
  - 7 平成 7 年度調査区北半完掘状況 (東から)
  - 8 平成 7 年度調査区南東部集石遺構 4 現況
- 図版 29
- 1 集石遺構 1 (南から)
  - 2 集石遺構 2 (北から)
- 図版 30
- 1 平成 8 年度西トレンチ全景 (東から)
  - 2 西土塁調査前 (北から)
  - 3 西土塁断ち割り状況 (北から)
  - 4 西土塁断ち割り状況 (東から)
  - 5 西土塁断ち割り状況 (西から)
- 図版 31
- 1 北トレンチ全景 (南から)
  - 2 北土塁調査前 (西から)
  - 3 北土塁断ち割り状況 (西から)
  - 4 北土塁断ち割り状況 (北から)
  - 5 北土塁断ち割り状況 (南から)
- 図版 32
- 1 東トレンチ全景 (西から)
  - 2 西トレンチ南東隅岩盤露出土状況 (西から)
  - 3 北トレンチ土層状況 (南西から)
  - 4 トレンチ内遺物散布状況①
  - 5 トレンチ内遺物散布状況②
- 図版 33
- 1 主トレンチ 50 ~ 60m 区ピット群 (北から)
- 2 支トレンチ 75m 区完掘状況 (西から)
  - 3 SP01 遺物出土状況
  - 4 SP02 遺物出土状況
  - 5 SK01 完掘状況
- 図版 34
- 1 北側外郭線調査前状況① No.1 付近上段 (東から)
  - 2 北側外郭線調査前状況② No.1 付近下段 (東から)
  - 3 北側外郭線調査前状況③ No.2 付近 (東から)
  - 4 北側外郭線調査前状況④ No.2 ~ 3 付近 (西から)
  - 5 北側外郭線調査前状況⑤ No.3 ~ 4 付近 (西から)
  - 6 北側外郭線調査前状況⑥ No.2 ~ 4 付近 石塁遠景 (東から)
  - 7 北側外郭線調査前状況⑦ No.3 ~ 4 石塁状況 (東から)
  - 8 北側外郭線調査前状況⑧ No.3 ~ 4 石塁状況 (西から)
- 図版 35
- 1 北側外郭線調査前状況⑨ No.4 ~ 5 付近 (東から)
  - 2 北側外郭線調査前状況⑩ No.4 付近 (北から)
  - 3 北側外郭線調査前状況⑪ No.5 付近 (東から)
  - 4 北側外郭線調査前状況⑫ No.5 付近 (西から)
  - 5 北側外郭線調査前状況⑬ No.5 ~ 6 付近 (南東から)
  - 6 北側外郭線調査前状況⑭ No.5 ~ 6 付近 (北西から)
  - 7 北側外郭線調査前状況⑮ No.6 ~ 8 付近 (東から)
  - 8 北側外郭線調査前状況⑯ No.8 (北から)
- 図版 36
- 1 第 1 トレンチ下部完掘状況 (北から)
  - 2 第 1 トレンチ上部完掘状況 (北から)
  - 3 第 1 トレンチ上部完掘状況 (南から)
  - 4 第 1 トレンチ上部土層堆積状況 (北西から)
  - 5 第 1 トレンチ中央部土層堆積状況 (北西から)
- 図版 37
- 1 第 2 トレンチ完掘状況 (北から)
  - 2 第 2 トレンチ完掘状況 (南から)
  - 3 第 2 トレンチ完掘状況 (南から)
  - 4 第 2 トレンチ完掘状況 (南西から)
  - 5 第 2 トレンチ上部土層堆積状況

- 6 第2トレンチ下部土層堆積状況
- 図版 38 — 1 第3トレンチ完掘状況（北から）
- 2 第3トレンチ完掘状況（南から）
- 3 第3トレンチ下部土層堆積状況
- 4 第4トレンチ遠景（西から）
- 5 第3～4トレンチ間石塁状況（西から）
- 図版 39 — 1 第4トレンチ完掘状況（北西から）
- 2 第4トレンチ完掘状況（北から）
- 3 第4トレンチ上部完掘状況（南から）
- 4 第4トレンチ完掘状況（北西から）
- 5 第4トレンチ上部土層堆積状況
- 6 第4トレンチ中央部土層堆積状況
- 図版 40 — 1 第5トレンチ完掘状況（南から）
- 2 第5トレンチ完掘状況（北から）
- 3 第5トレンチ上部土層堆積状況
- 4 第5トレンチ中央部土層堆積状況
- 5 第5トレンチ下部土層堆積状況
- 図版 41 — 1 西南外郭線調査前状況①（北から）
- 2 西南外郭線調査前状況②（北から）
- 3 西南外郭線調査前状況③（西から）
- 4 西南外郭線調査前状況④（西南から）
- 5 西南外郭線調査前状況⑤（北から）
- 6 西南外郭線調査前状況⑥（南西から）
- 7 西南外郭線調査前状況⑦（南西から）
- 8 西南外郭線調査前状況⑧（西から）
- 図版 42 — 1 西南外郭線遠景（南西から）
- 2 城門遺構調査前状況（北から）
- 3 城門遺構調査前状況（南から）
- 4 城門遺構調査前状況（東から）
- 5 城門遺構上部土層堆積状況
- 6 城門遺構下部土層堆積状況
- 7 城門側壁等崩落状況（西から）
- 8 城門側壁等崩落状況（東から）
- 図版 43 — 1 南側壁崩落状況（北から）
- 2 南側壁崩落状況拡大（北から）
- 3 南側壁崩落状況拡大（北から）
- 4 北側壁崩落状況（南から）
- 5 城門遺構完掘状況（西から）
- 図版 44 — 1 城門遺構完掘状況（東から）
- 2 城門遺構完掘状況（北から）
- 図版 45 — 1 城門遺構完掘状況（南から）
- 2 城門遺構南東部完掘状況（北西から）
- 図版 46 — 1 北側壁細部①
- 2 北側壁細部②
- 3 北側壁細部③
- 4 南側壁細部①
- 5 南側壁細部②
- 6 南側壁細部③
- 7 南側壁細部④
- 8 南側壁細部⑤
- 図版 47 — 1 城門上部完掘状況（西から）
- 2 城門北側下部完掘状況（西から）
- 3 城門下部完掘状況（西から）
- 4 城門下部完掘状況（北から）
- 5 城門遺構土層（西から）
- 図版 48 — 1 城門内排水溝（西から）
- 2 城門内排水溝（東から）
- 3 排水溝細部①（北から）
- 4 排水溝細部②（北から）
- 5 柱穴検出状況（北から）
- 6 柱穴半裁状況（北から）
- 図版 49 — 1 柱穴半裁状況（西から）
- 2 柱穴1半裁状況（北から）
- 3 柱穴2半裁状況（北から）
- 4 城門より南側石塁検出状況
- 5 城門より北側石塁検出状況
- 図版 50 — 1 背面列石状況（西から）
- 2 背面列石状況（北から）
- 3 背面列石状況（北から）
- 4 背面列石状況（南から）
- 5 第2トレンチ完掘状況（西から）
- 図版 51 — 1 第2トレンチ完掘状況（東から）
- 2 第2トレンチ土層①
- 3 第2トレンチ土層②
- 4 第2トレンチ土層③
- 5 城門北側張り出し部（雉城）
- 図版 52 — 1 北側張り出し部（南から）
- 2 張り出し部にみられる柱溝（西から）

- 3 張り出し部にみられる柱溝 (上から)
- 4 張り出し部 (北から)
- 5 張り出し部遠景 (南から)
- 6 城門遺構からみた屋島南西部 (東から)
- 図版 53 - 1 貯水池推定地調査前状況 (西から)
- 2 貯水池推定地調査前状況 (北から)
- 3 調査地南側池現況 (東から)
- 4 調査地南側池現況 (南東から)
- 5 貯水池推定地トレンチ完掘状況 (西から)
- 6 貯水池推定地トレンチ完掘状況 (東から)
- 7 トレンチ内土層堆積状況 (北から)
- 8 トレンチ内下部焼土・炭堆積状況
- 図版 54 - 1 東側外郭線現況 (北から)
- 2 東側外郭線南端現況 (南から)
- 3 東側外郭線北端現況 (南から)
- 4 東側外郭線前面状況 (東から)
- 5 山門西側貯水池推定地現況 (東から)
- 6 山門西側南水門現況 (南西から)
- 7 山門西側南水門現況拡大 (南西から)
- 8 水族館北側北水門現況 (北東から)
- 図版 55 - 1 調査前風景 (南から)
- 2 S X 01 完掘状況 (北から)
- 3 瓦溜遺構・S X 02 完掘状況 (北から)
- 4 S X 03 完掘状況 (北から)
- 5 SD 02・溝状落ち込み完掘状況 (西から)
- 6 SD 02・溝状落ち込み完掘状況 (東から)
- 7 S K 03 完掘状況 (東から)
- 8 S K 03 断面 (西から)
- 図版 56 - 1 集石完掘状況 (北から)
- 2 集石完掘状況 (南から)
- 3 集石間の遺物出土状況 (唐草文軒平瓦)
- 4 集石間の遺物出土状況 (蓮華文軒丸瓦)
- 5 集石間の遺物出土状況 (陶器碗)
- 6 調査区南側の遺構完掘状況 (北から)
- 7 SD 04 およびピット群完掘状況 (北から)
- 8 ピット群完掘状況 (北から)
- 図版 57 - 1 S D 04 完掘状況 (北から)
- 2 S D 05 完掘状況 (東から)
- 3 埋喪検出状況 (北東から)
- 4 埋喪内の寛永通宝出土状況
- 5 調査区南側の土層観察用断面 (南端, 東から)
- 6 調査区南側の土層観察用断面 (集石, 東から)
- 7 調査区南側の土層観察用断面 (埋喪, 東から)
- 8 調査区北側の西壁土層 (東から)
- 図版 58 - 1 長崎鼻古墳第 10 トレンチ出土壺口縁部
- 2 平成 11 年度第 1 トレンチ出土須恵器杯蓋
- 3 平成 7 年度石列西側出土遺物
- 4 北嶺出土灰釉陶器・緑釉陶器
- 5 集石遺構出土平瓦
- 図版 59 - 1 礎石建物跡基壇中出土遺物
- 2 礎石建物跡基壇中出土多口瓶 1
- 3 礎石建物跡基壇中出土多口瓶 2
- 4 礎石建物跡基壇中出土多口瓶 3
- 図版 60 - 1 集石遺構出土土師器
- 2 集石遺構出土須恵器
- 図版 61 - 1 集石遺構出土土師器 2
- 2 平成 13 年度第 2 調査地点出土遺物
- 図版 62 - 1 平成 7 年度調査地点出土遺物
- 2 屋島寺宝物館集石間出土軒平瓦・軒丸瓦
- 3 平成 8 年度第 2 調査地点出土遺物
- 図版 63 - 1 貯水池推定地第 3 層出土遺物
- 2 貯水池推定地第 4～6 層出土遺物
- 3 貯水池推定地第 6 層出土遺物
- 図版 64 - 1 貯水池推定地第 6 層出土蓮華文軒丸瓦
- 2 貯水池推定地第 4～6 層出土平瓦・丸瓦

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

屋島は昭和9年11月10日に

「瀬戸内海火山脈ノ特有熔岩トシテ知ラレ世界的ニ稀有ナル古銅輝石安山岩ヨリ成レル南北ニ長キ熔岩臺地ニシテ遠望屋根状ヲ成シ山容雄偉ナリ頂上ハ平夷ナレドモ四周絶壁ヲ繞ラシ地形上『メサ』ノ標識的ナルモノトシテ其ノ名ヲ知ラル又頂上近キ處ニ露出スル通称『疊石』ハ板状節理ノ最モ美ナルモノトシテ著名ナリ

山上ニ立チテ眼ヲ放テバ西方水邊ニ近ク高松市ノ城櫓家屋ヲ望ミ海上ニハ大小ノ島嶼浮ベルヲ見ル其ノ一帯ノ地ハ史蹟ニ富ミ天智天皇6年外寇防備ノ為メニ築カレタル山城ノ一ナリ又唐僧鑑真ノ創建ト傳フル屋島寺アリ壽永3年平宗盛等安徳天皇ヲ奉ジテ此ニ據リ源氏2氏ノ接戦セシ所ニシテ古戰場トシテ世ニ知ラル」

との理由で史跡天然記念物に指定された。史跡天然記念物として指定された当時は、歴史的にも有名で風光明媚な場所であったが、高松市中心部から近いこともあり、戦前戦後を通じて住宅・道路等の開発がなされ、特に昭和35年以降の高度経済成長期においては、周辺地域と同様に都市計画区域に指定され、これらの地域を中心に公共事業をはじめ各種の施設整備がなされた。その後、昭和51年に現行の史跡天然記念物屋島保存管理計画が策定され、その保護が図られてきたが、過去20年間の現状変更件数は年平均約150件と多く、時代時代の各種の要請を受け、わずかずつではあるが屋島はその姿を変えてきた。このような変化の結果、史跡天然記念物として国の指定を受けてから約60年を経、指定当時に比べ屋島の変貌は著しく、往時の姿を失いつつある。屋島の近年の人口増加数をみても、今後もその傾向は拡大していくことが予想され、文化財屋島の保存は深刻な状態にあるといえる。このような状況において屋島の有効な保存並びにその活用は、文化財保護法に照らし合わせても文化都市高松市にとって緊急な社会的課題であり、早急に屋島の適正な保存と整備に関する指針づくりが求められていた。

このような情勢の下、高松市は有識者・高松市関係者を中心に高松市史跡天然記念物屋島保存整備等基本構想策定委員会を設置し、各種の協議を行い、屋島の適正な保存と整備に関する指針づくりを行った。その成果は平成7年3月に『高松市史跡天然記念物屋島保存整備等基本構想』としてまとめられている。その中で、屋島に所在する文化財は歴史的価値の高いものが多く存在し、史跡の指定理由の構成要素にもなっている。しかしこれらの文化財は正式な発掘調査を行ったものが少なく、保存・整備を図るには情報量が不足していることから、平成7年度より史跡天然記念物屋島基礎調査事業として分布調査・確認調査を実施し屋島に所在する文化財の情報収集を行っている。

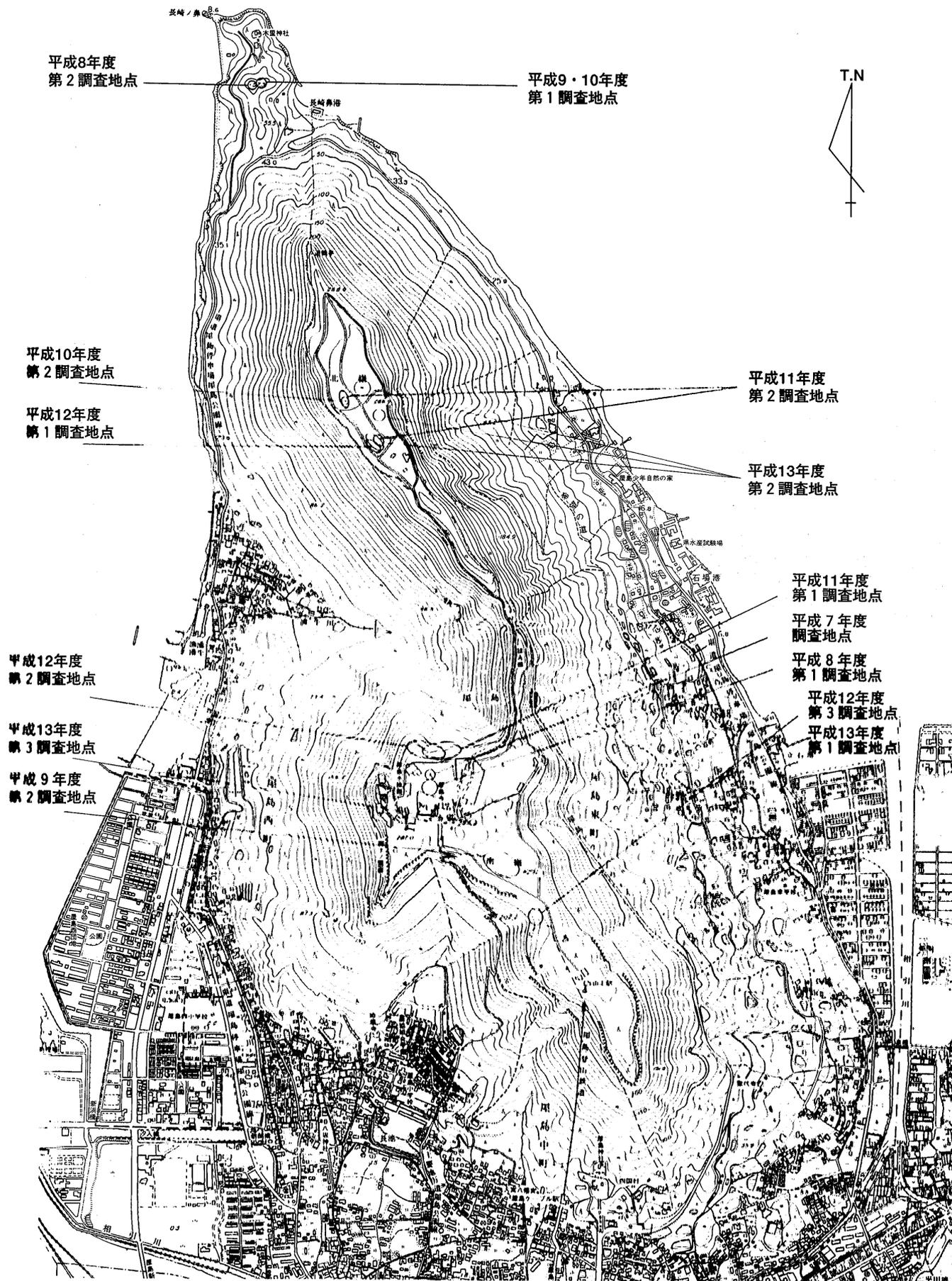
### 第2節 調査の経過

史跡天然記念物屋島基礎調査事業について、初年度の平成6年度は、次年度以降の調査で使用する詳細な地図を作成するため、屋島全域の航空写真を撮影した。確認調査は次年度の平成7年度から開始し、平成13年度まで行った。当初の予定は、平成13年度で確認調査を終了し、平成14年度に調査成果を報告書にまとめ、調査を終了する予定であったが、事業期間の後半に、北嶺千間堂跡の仏堂礎石を確認したほか、屋嶋城の城門遺構を確認するなど調査成果の大きな進展をみた。このため、文化庁ならびに香川県の御理解を頂き、平成15年度から、屋嶋城の確認調査に絞って継続する予定となっている。

これまで、屋島に所在する文化財は、史実として残っていないながら、その実態が不明なものが多くあったが、平成7年度からの史跡天然記念物屋島基礎調査事業によって、その実態がかなり明らかになってきたものと考えられる。とは言え、まだ解明すべき点は多くあり、調査目的である屋島に所在する文化財の適正な保存と整備ができるだけの基礎資料を得られるよう努力していきたい。なお、各年度の事業内容・調査成果の概要については次の一覧表を参照されたい。

年度	事業内容	成果
7	南嶺 屋島寺北側試掘調査	集石遺構(室町時代)を3基確認した
8	南嶺 屋島寺北側試掘調査 (第1調査地点)	屋島寺に関する土塁(室町時代)を確認した
	長崎鼻 長崎鼻地区試掘調査 (第2調査地点)	長崎鼻古墳前方部で葺石を確認した 鯨の墓周辺では遺構・遺物確認できず
9	南嶺 屋島寺南東部試掘調査 (第2調査地点)	弥生土器の包含層を確認した 古代から中世と考えられる柱穴を確認した
	長崎鼻 長崎鼻古墳試掘調査 (第1調査地点)	古墳全域に葺石を確認 盗掘を受けた主体部確認
10	北嶺 山上部試掘調査(第2調査地点)	鎌倉時代と考えられる石列を確認した
	長崎鼻 長崎鼻古墳試掘調査 (第1調査地点) 長崎鼻古墳現地説明会(H11.3.27)	くびれ部において良好な葺石確認 主体部において阿蘇熔結凝灰岩製舟形石棺確認
11	南嶺 北斜面テラス状遺構試掘調査 (第1調査地点)	土塁中から古代の須恵器片を確認したが、版築等は確認されなかった
	北嶺 北斜面テラス状遺構石積実測	石積の図化
	北嶺 山上部試掘調査(第2調査地点) 山上部分布調査	10世紀を中心とする遺物が多量に出土 基壇をもつ礎石建物、集石遺構他確認
	全体 文化庁加藤調査官現地指導 調査概報作成	北嶺において他に遺構がないか詳細に分布調査を実施するように指示された 本文58P(うち屋島18P)×300部印刷・発行
12	南嶺 北斜面テラス状遺構試掘調査 (第2調査地点)	版築は確認されなかった(古代に属する遺物無)
	北嶺 西南斜面石積遺構試掘調査 (第3調査地点)	
	全体 山上部礎石建物・集石遺構他2箇所を試掘調査 (第1調査地点) 京都大学上原教授現地指導 文化庁千村調査官現地指導 調査概報作成	基壇集石中から仏具である多口瓶が3個体分出土 北嶺礎石建物跡は多口瓶の出土から寺院遺構、集石遺構は火葬墓であるとの教示を得た 北嶺礎石建物跡周辺の整備の検討を指示された 本文32P(うち屋島9P)×300部印刷・発行
13	南嶺 西南斜面石積遺構試掘調査 (第1調査地点)	城門遺構を確認した。床面からは排水溝、柱穴を確認。城門北側には張り出し(雉城)をその一部から上部構造を想定できる柱溝を確認した
	南嶺 福岡大学小田教授現地指導	確認された遺構は城門遺構であり、その形態から屋島型城門遺構であるとの教示を得た
	南嶺 血の池南側駐車場試掘調査 (第3調査地点)	出土遺物の大半は屋島寺に伴う遺物であるが、最下層からは屋嶋城に関する可能性のある土師器・須恵器などが少量出土
	北嶺 西南斜面遺構周辺地形測量 礎石建物跡周辺試掘調査 (第2調査地点)	柱穴と考えられるピットを確認したが、当初想定した僧坊などの大規模建物は認められず、小規模な建物遺構しか復元できない
全体	千間堂跡現地説明会(H13.11.11) 調査概報作成	180名の参加を得た 本文32P(うち屋島11P)×300部印刷・発行
14	全体 整理事務 千間堂跡出土鉄製品(鉄釘)保存処理 委託 基礎調査事業報告書刊行	

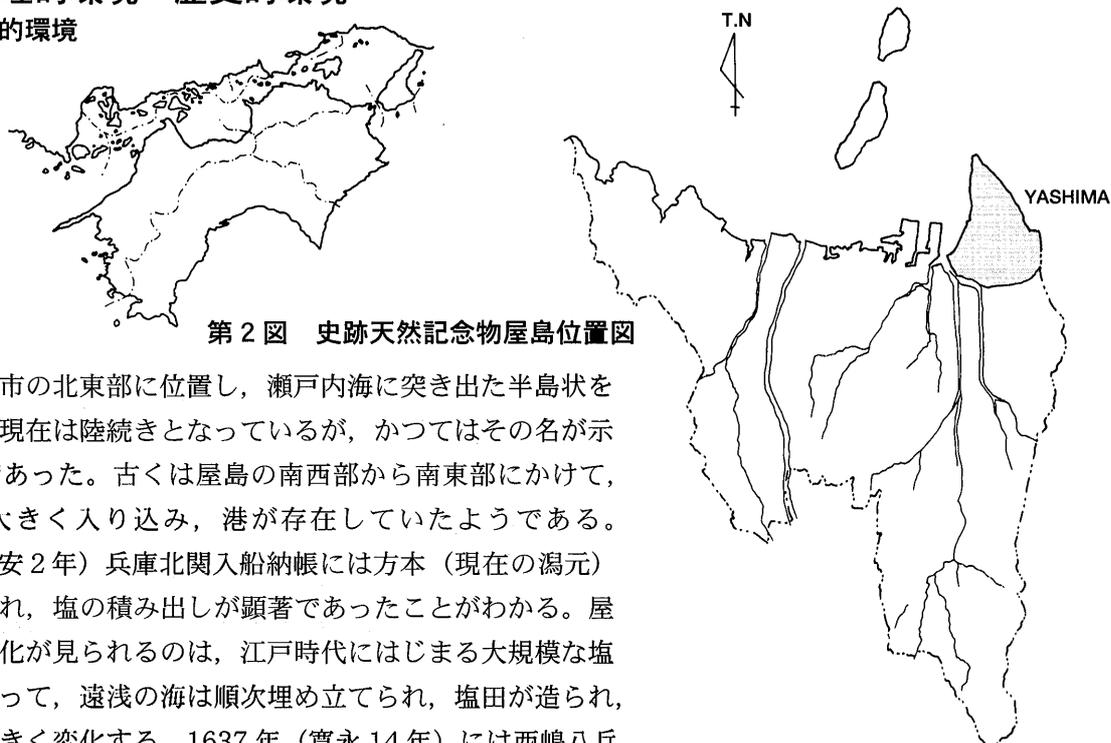
第1表 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査一覧表



第1図 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査地位置図

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 地理的環境



第2図 史跡天然記念物屋島位置図

屋島は高松市の北東部に位置し、瀬戸内海に突き出た半島状を呈している。現在は陸続きとなっているが、かつてはその名が示すとおり島であった。古くは屋島の南西部から南東部にかけて、遠浅の海が大きく入り込み、港が存在していたようである。1445年（文安2年）兵庫北関入船納帳には方本（現在の湯元）の地名がみられ、塩の積み出しが顕著であったことがわかる。屋島の地形に変化が見られるのは、江戸時代にはじまる大規模な塩田の開発によって、遠浅の海は順次埋め立てられ、塩田が造られ、その風景は大きく変化する。1637年（寛永14年）には西嶋八兵衛の埋め立てにより高松平野と陸続きとなった。その後、1647年（正保4年）松平頼重が陸続きとなった屋島相引の地に相引川を切り開き、現在に至っている。

屋島は日本を代表する「メサ」地形の典型として余りにも有名であり、東西から見たその山容は屋形を形成し、天然記念物としての指定理由の一つでもある。これらの地形は、熔岩の周囲とその上部が開析されて形成された開析熔岩台地で、基盤が花崗岩、中腹から上部が凝灰岩、最上部に讃岐岩質安山岩が水平にのり、浸食作用によってできた安山岩の垂直に切り立った崖が山頂の平坦面を取り囲む特徴的な景観を呈している。この地形には、先人も注目し、後述するが、古代山城屋嶋城の築造に際しては、この地形を巧みに外郭線として利用したのであろう。特に、北嶺の西斜面は断崖が約30m程垂直に切り立っており、これを見れば人工的な構造物を必要としなかったであろうことが容易に分かる。一方、中腹に存在する凝灰岩は江戸時代にさかんに採石され、火鉢や灯籠・祠の材料として切り出された。現在、その採石場跡は叢林に埋没しコウモリの生息地となっている。凝灰岩の一部は山上部にも露出しており、表面を造形して雪に見立てた名所「雪の庭」は屋島寺宝物館から見学することができる。

また、屋島は源平合戦の古戦場としても有名であり、東側を中心に史跡が点在する。また、山上には四国霊場札所である屋島寺が所在する。これらを売り物に明治末年頃から山上部観光客向けの旅館や売店が次々と建設されていった。昭和47年には過去最高の246万人の観光客が訪れ、観光地屋島の黄金期を迎える。しかし、その後はレジャーの多様化などで、下降線を辿りはじめ、平成12年度の観光客は60万人を切り、最盛期の4分の1にまで減少している。観光客の減少に伴い、近年、旅館や売店などの施設閉鎖が相次ぎ、閉鎖された廃屋が目立つようになっている。

一方、山麓平野部については、山上部の様相とは反対に、昭和30年以降高松市中心部と近接し、自然豊かで風光明媚な環境であることとも相俟って、南西部を中心に急速に宅地化が進展している。特に昭和46年に塩田が廃止され、その跡地が区画整理事業で良好な住宅地となったことが、人口増加に拍車がかかる大きな要因となった。屋島地区の人口増加は、その後も続いており、平成14年12月1日現在の屋島西町・屋島中町・屋島東町を合わせた人口は23,859人で、高松市の人口の約7%強を占め、市内を代表する住宅地となっている。

## 第2節 歴史的環境

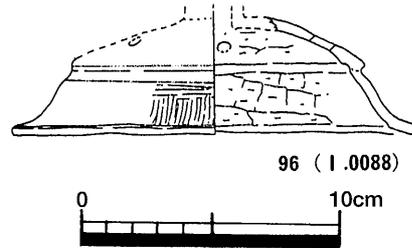
屋島といえば「源平合戦古戦場」として高松市民・香川県民のみならず、県外の人にも有名である。

源平合戦古戦場の現地比定は、高松藩初代藩主松平頼重が行ったもので、現在もそれを踏襲している。源平合戦古戦場以外の史跡としては、白村江の戦いの敗戦を契機として造られた屋島城や唐僧鑑真開基と伝えられる四国霊場84番札所屋島寺等があるが、この地における先人の活動の痕跡は弥生時代中期にまで遡る。

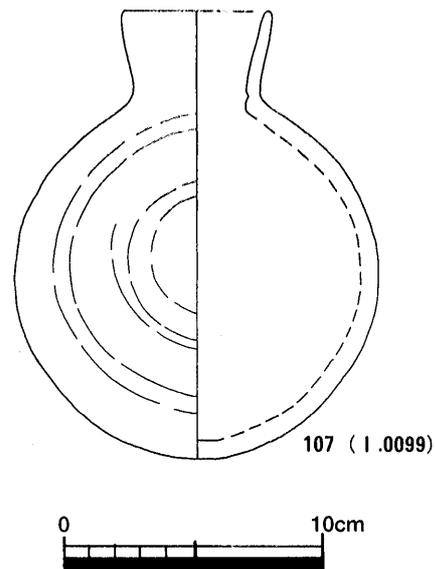
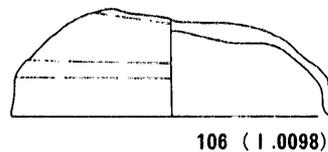
旧石器・縄文時代にまで遡ると、その時代に関する遺跡は現在確認されていないが、屋島の南対岸にある古高松には縄文時代後期の遺跡が確認されている。明確に屋島で人々の活動が確認されるのは弥生時代中期である。遺構こそ確認できていないものの、他の時期の遺物に混じり、南嶺で行った確認調査などで遺物が検出されたほか、弥生土器が集中する箇所が認められている。今回調査を行った箇所では、量の多少はあるものの必ず弥生土器や石鏃などの石器が認められる。このことから、弥生時代の遺跡は南嶺の平地全域に広がっていたものと想定される。ほかにも、一定期間は置くが、弥生時代後期末頃の上器が南嶺北斜面、北嶺山頂部で認められる。遺物の量は極めて少なく、定住していたのか否かは不明である。

屋島西町の浦生集落には製塩土器が出土したことから製塩遺跡と考えられる鷺羽神社境内遺跡があるが、多くの製塩土器に混じり弥生時代後期末の土器も出土している。

弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と想定される墳墓がまじる古墳群として、尾根稜線の上に作られた3基からなる浜北古墳群がある。正式な調査を経ていないので詳細は不明であるが、一番山側が2号墳で全長30m程度の前方後円墳である。前方部を山側に向け、後円部を斜面側に作るという讃岐の在地色を濃く出しているもので、山側の前方部端は明確な堀切をもたず不明瞭である。これも讃岐の特徴である。くびれ部は明瞭で前方部は大きく開かない。2号墳は1号墳よりも下方に位置し、現状では隆起が少なく、かろうじて南北約10m、東西約5～6mの範囲で墳丘状の隆起が認められる程度である。小竹一郎氏の報告では長径約15m、短径約12m、高さ2mと報告されている。墳裾をどの位置に持ってくるかという点で差が出てくるのであろうが、当時はまだ墳丘としての認識ができる状態であったようである。昭和47年6月6日に小竹一郎氏によって採集されている土器がすでに公表されており<sup>(1)</sup>、古墳に伴うものであれば古墳時代前期でも古い段階に位置づけられる。一般的に古い古墳は明確な墳丘をもたない状況が認められるが、浜北2号墳の墳丘の状態からもその時期が裏付けられる。浜北3号墳は小竹一郎氏作成の資料では、浜北2号墳の北西下方約50m西面崖面において確認されており、箱式石棺状の主体部の残存が認められ、残存している古墳

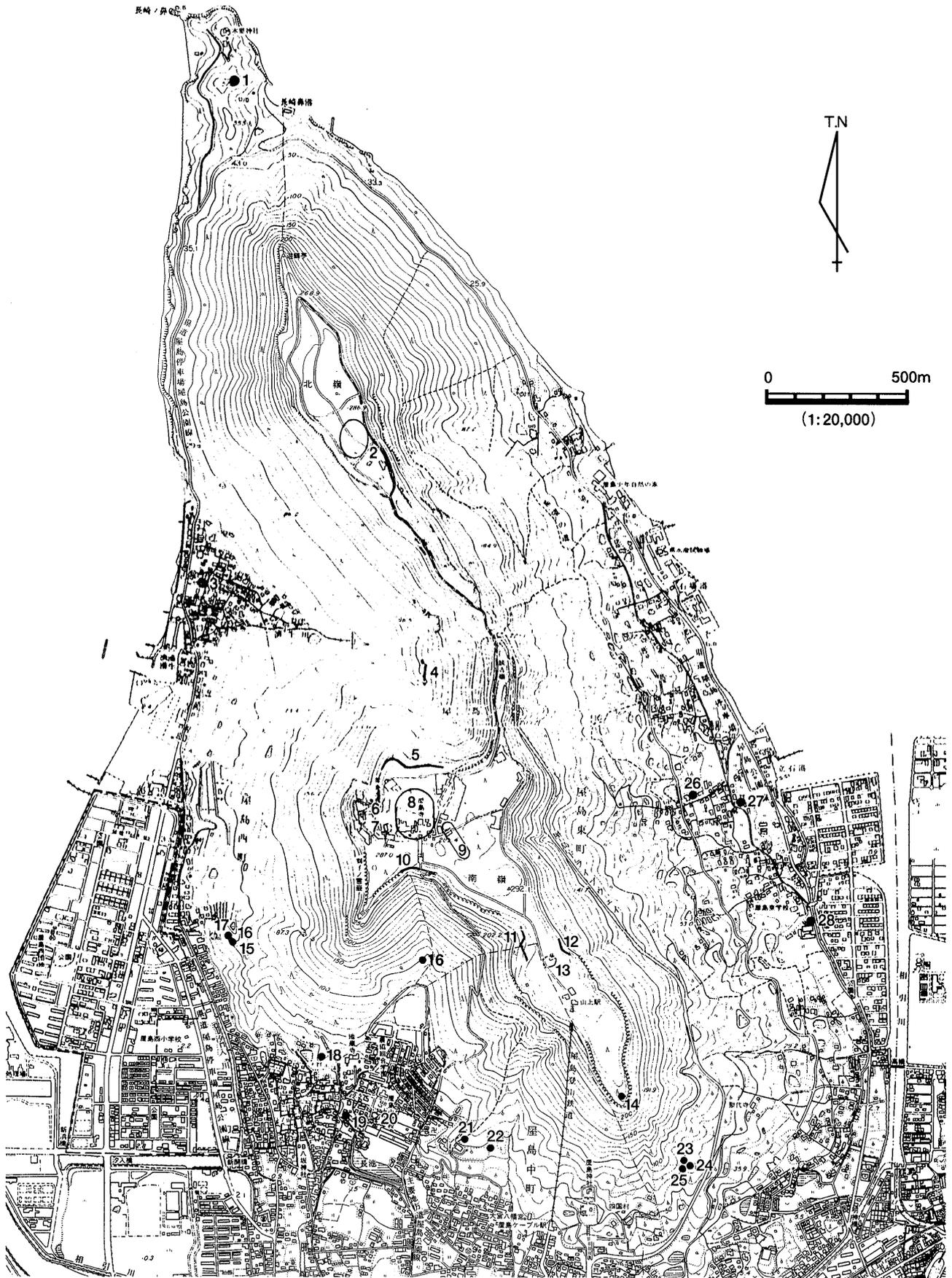


第3図 浜北2号墳出土遺物実測図 (S=1/3)



第4図 屋島中央東古墳出土遺物実測図 (S=1/3)

※ 上記の土器実測図はいずれも注1b文献より引用



第5図 史跡天然記念物屋島遺跡分布図

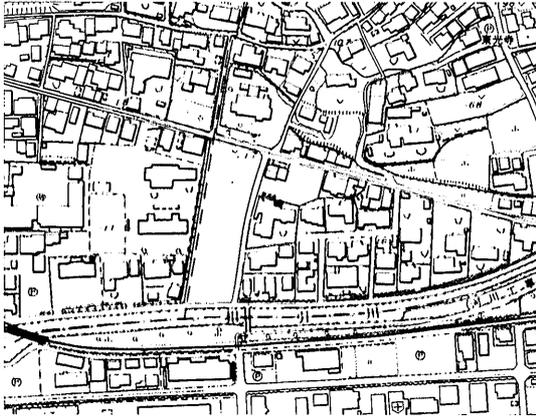
1	長崎鼻古墳	11	西南斜面外郭線	21	金刀比羅宮社域古墳
2	千間堂跡		城門	22	東山地古墳
3	鵜羽神社境内遺跡	12	東斜面外郭線	23	湯ノ谷1号古墳
4	浦生石塁	13	貯水池推定地	24	湯ノ谷2号古墳
5	屋嶋城北斜面外郭線	14	屋嶋経塚	25	湯ノ谷3号古墳
6	北水門推定地	15	浜北1号古墳	26	佐藤継信の墓
7	貯水池推定地	16	浜北2号古墳	27	安徳天皇社
8	屋嶋寺	17	浜北3号古墳	28	菊王丸の墓
9	貯水池推定地	18	中筋北古墳		
10	南斜面外郭線	19	屋嶋中央西古墳		
	南水門推定地	20	屋嶋中央東古墳		

域は長径約8m、短径約7mと報告されている。平成11年度に行った分布調査でそれに該当する箇所を踏査したが、痕跡さえ見つける事ができなかった。残念ながら長い年月の間に流出したものと想定される。これら3基による浜北古墳群であるが、墳形・出土遺物・立地状況をみても3基同時に併存していたとは考えられず、前期の中で古い順から2号墳→1号墳→3号墳に作られていったものと想定される。

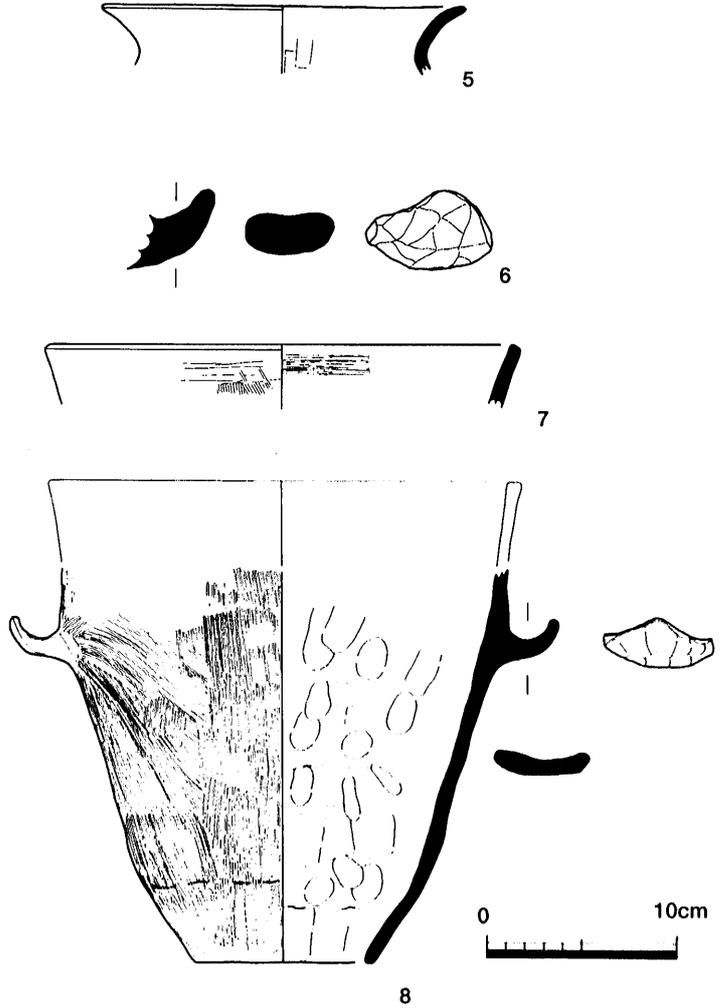
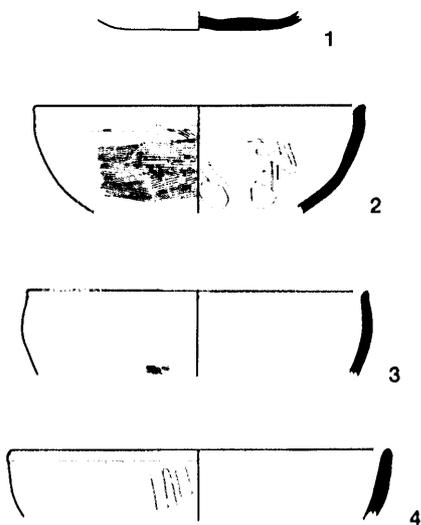
古墳時代中期では、今回の基礎調査事業の確認調査対象となった長崎鼻に位置する長崎鼻古墳がある。これまで海上交通に関係した人物の古墳であると考えられていたが、その想定を裏付けるように主体部から阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺が確認され、被葬者の広域な活動が想定される。

古墳時代後期では数基からなる古墳群が認められているが、いずれの古墳も正式な発掘調査を経ていないので詳細は不明である。古墳時代後期と考えられる古墳は屋嶋南側山裾に点在している。順を追ってみると中筋北古墳は地藏寺西方、小丘の南端部にあり、南面した緩やかな傾斜地にあつて、墳丘は削平流失してその跡をとどめない。蓋石を失った組合式石棺が残存する。石棺の内法規模は長さ約2.4m、幅約0.6mである。明確な出土遺物がないことから詳細な時期は不明である。屋嶋中央東古墳は屋嶋西町谷東1119-7に所在した古墳で、昭和43年の宅地造成の際に破壊され、現在は宅地内の庭園の一隅に石室に使用されていたであろう石が2石残存するのみである。石の規模から横穴式石室であったものと想定される。昭和43年2月に小竹一郎氏が墳丘跡で須恵器を採集している<sup>(2)</sup>。須恵器提瓶と杯蓋があり、形態等から古墳時代後期のものであろう。屋嶋中央西古墳は屋嶋中央東古墳の西方に位置し、住宅地の中に存在する。天井石は除去され両側壁と奥壁の基底部近くが残るのみである。残存石室の規模は幅約2.5m、長さ約5.0m、残存高約1.2mである。出土遺物は確認されていない。谷東古墳は農協学園グラウンドの上方に位置する横穴式石室を内部主体とする古墳である。

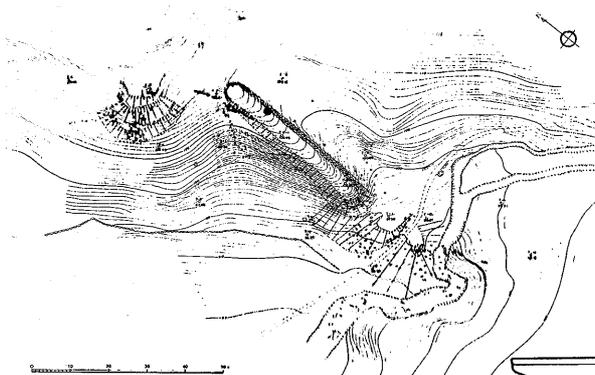
金刀比羅宮社域古墳は屋嶋小学校の北東、四国電力高松荘裏山に存在する。金刀比羅宮の小祠、東側約8.0mに箱式石棺が認められる。箱式石棺は北側部分に小祠がのり状況が不明であるが、南半分は蓋石を失い、上縁部が露出している。現存の墳丘の規模は長径約8.0m、短径約6.0m、高さ1.0mである。東山地古墳は金刀比羅宮社域古墳の東方に位置する。墳丘の大半は流出しており、横穴式石室が部分的に残存する。湯の谷古墳群は3基からなる古墳群で屋嶋の南東斜面に位置する。1号墳は直径約6.0m、高さ0.5mの規模をもつ。古墳墳丘の中央部には盗掘坑と考える窪みが認められる。2号墳は1号墳の南隣に存在する。古墳の規模は1号墳と同規模で長径約6.0m、短径約5.5m、高さ0.5mである。1号墳と同様に墳丘中央部に盗掘坑が認められる。主体部の構造は不明である。遺物の出土は伝えられていない。3号墳は1・2号墳の西方約50mに存在する。墳域の直径は1・2号墳に比べて一回り大きな直径約8.0m、高さ約1.2mの規模をもつ。墳丘中央部には盗掘坑がみられる。主体部の構造は盗掘を受けており不明である。湯の谷古墳群は墳丘の規模等から金刀比羅宮社域古墳や中筋北古墳と同様に箱式石棺を主体部にもつ古墳であったと想定される<sup>(3)</sup>。



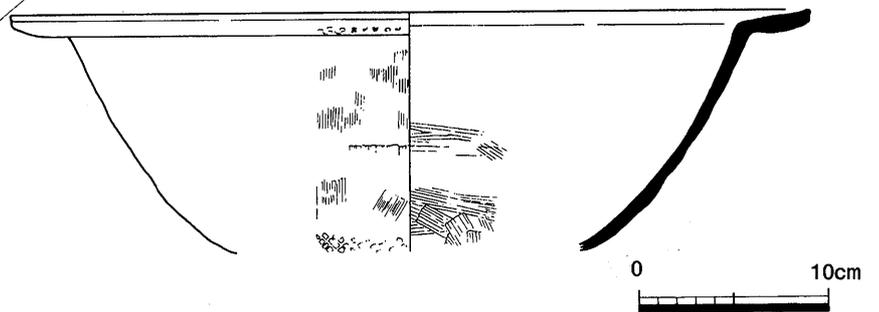
第6図 遺物出土箇所位置図(S=1/5,000)



第7図 屋島東町 1655 番地 (尾崎忠夫邸) 出土遺物実測図



第8図 浦生石罫遺物表採箇所位置図



第9図 浦生石罫表採遺物実測図

屋島には古墳時代の集落は認められていないが、浦生の鵜羽神社の境内、特に本殿裏側を中心に製塩土器の散布、製塩炉と考えられる焼土、炭などが露出している部分があり製塩遺跡と想定されている。製塩土器の古いものでは古墳時代後期のものから平安時代にはいるものまで認められることから、製塩遺跡として長期間の操業が想定される。

## 讀

## 調塩一カ

屋島が所在する山田郡では『平城宮出土木簡』の中に「□岐国山田郡海郷□葛木部龍麻呂□□斗」がみられる<sup>(4)</sup>、『倭名類聚抄』には山田郡は11郷存在するが、海郷の記載はなく平安時代初期には姿を消しているようである<sup>(5)</sup>。海郷とは山田郡のどの場所を指すものであるかは不明であるが、海の文字が示すとおり、海に面した郷であることは間違いなく、『倭名類聚抄』では山田郡の北端は高松郷であることから、平安時代の初めまでには高松郷に吸収されたのかもしれない。いずれにしても屋島を含む山田郡の海岸線では調質用の塩の生産が行われていたことは間違いのないようである。

屋島の中では小規模な古墳が屋島南西部から南部にかけて点在するが、対岸の南部では小山古墳・山ノ下古墳・久本古墳などの後期巨石墳があり、中でも久本古墳は県内では唯一の奥壁に石柵をもつ横穴式石室を有し、陶棺や承盤付銅碗が出土するなど、山田郡を代表する古墳として有名である。これら巨石墳を造営した末裔が屋嶋城の構築に大きく寄与したものと想定される。

飛鳥時代の遺跡としては屋嶋城がある。長らくその実態が不明であったが、平成13年度の確認調査で城門遺構が確認されたことから、日本書紀の記述を裏付けることとなった。飛鳥時代に関するものとして正式な発掘調査を経たわけではないが、屋島中町1655番地で井戸掘削中に地表下約4mから土器が出土している(第7図)。出土した土器は土師器甕・甕・杯、須恵器杯蓋片などがある。甕把手の形態や須恵器の特徴より7世紀後半頃の時期が想定される。遺物を保管されている尾崎忠夫氏の話では、遺物はこの他には出土していないようである。この土器が使用されていた当時は、この辺りは海岸線であった可能性があり、なぜ、現在の地表下約4mから出土するのか不明であるが、屋嶋城が機能していた時期に同じ屋島の中で人々の活動が確認できたという点で、重要な出土遺物である<sup>(6)</sup>。

屋島ではこれ以外に飛鳥時代の遺跡は認められないが、屋島の南岸、古高松町地区では現在の高松平野の条里地割とは異なる地割が存在する。この地割の中に存在する小山・南谷遺跡では祭祀性の高い井戸が確認されている<sup>(7)</sup>。

小山・南谷遺跡の東斜面にある奥の坊遺跡では旧河道の堆積物から飛鳥時代の遺物が出土している。また、山田郡に一般的にみられる条里地割とは異なる方位(N-5°-E)の条里地割を検出している。この条里方位は約2km西に所在する小山・南谷遺跡で検出された条里と一致し、この条里地割と同一方向の掘立柱建物跡を数棟検出している<sup>(8)</sup>。屋嶋城の南側の限られた範囲に山田郡の条里地割より先行する地割が存在するのであれば、屋嶋城との関係も考える必要があるだろう。この点に関しては、調査されている遺跡の内容が概要しか公表されておらず、正式な報告書が刊行された時点で再度検討してみたい。

屋島寺に残る寺伝では、同寺は唐僧鑑真が京へ登る途中に屋島北嶺に開基したと伝えられており「千間堂」という地名も伝承されている。しかし、この位置については、長らく不明であったが、平成11年度の分布調査で基壇をもつ礎石建物跡が確認され、平成12年度に基壇内部を調査したところ須恵器多口瓶が3点確認されたことから、伝承のとおり北嶺に寺院跡が存在していたことが判明した(本書第3章第4節詳細を報告)。しかし、出土した多口瓶は形態等の特徴から最も古いものでも9世紀後半までしか遡らず、周辺部で出土した土器にも8世紀中頃まで遡るものは見当たらない。今回の確認調査では広大な北嶺の一部分を調査したにすぎず、重要遺構が埋没している可能性も考えられるなど不確定な要素も多く残っていることから、今後の調査成果に期待するところは大きいですが、現状での調査成果からは鑑真開基とするには無理があるように思われる。

この時代の遺跡としては、小山・南谷遺跡と新田街道(県道屋島西塩江線)を挟んで西側に位置する新田本村遺跡がある。同遺跡では10世紀頃の掘立柱建物群が確認されており、確認された掘立柱建物のうち、遺跡東端の小山・南谷遺跡との境では2間×5間の規模になる東西に長い総柱の掘立柱建物が確認されており、倉庫跡になるものと考えられる。新田本村遺跡の南東約600mには山下廃寺が存在する。山下廃寺は瓦の散布があることから寺跡と想定されているが、採集されている瓦に細片が多く、文様構

成が多岐にわたること、瓦の散布する場所が斜面近くであること、周辺部に寺を想定できるような礎石なども見当たらないことから、瓦窯の可能性が想定されている<sup>(9)</sup>。新田本村遺跡は、様相について一部しか公表されていないが、古代には屋島の南西部分の新川・春日川河口は大きく海が湾入していたことが想定されており、瓦窯で作られた瓦の積出し場所（港湾施設・一時集積地）の可能性も考えられる<sup>(10)</sup>。

さらに時を経て、元暦2（1185）年2月19～21日にかけて屋島の東側を中心として源平の屋島合戦が行われている。

合戦の内容は「源平盛衰記」「平家物語」「吾妻鏡」「玉葉」の中に詳しい。屋島東町・牟礼町・庵治町の各所には合戦関連の史跡（伝承地）が点在する。

室町時代から江戸時代にかけては屋島の西側から南西にかけて相次いで塩田が作られ、文安2年（1445）正月から同3年正月にわたる記録である「兵庫北関入船納帳」には船籍地として方本（現在の屋島西町潟元）の地名もみられ、港として機能していたことがわかる。方本を船籍地とする船は400石以上の大型船であり、大型船の多くが塩の輸送に使われていたと考えられ、屋島周辺の塩田で作られた塩が盛んに積み出しされていたことがわかる<sup>(11)</sup>。

注

(1) a 『高松平野の考古学のあけぼの～小竹一郎旧蔵資料展』高松市歴史資料館 1994 P 23 に土師器高杯として報告されている。土器は歪みが激しく、胎土も精良ではない。土器の装飾は脚部外面に円孔が3箇所認められる。一般に古墳などの墳墓に副葬される土器は精良な胎土であり、作りもしっかりとしているが、この土器はそのいずれにも該当しない。

b 『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』高松市歴史資料館 1996

(2) 注(1)に同じ

(3) 小竹一郎編 『高松市文化財（史跡）分布調査報告』

(4) 橋詰 茂「第6章第3節 海の時代—内海産業と水運の発達—」『香川県史2 中世』1989.3

(5) 岡島浩正「第5章第3節 律令体制と讃岐」『香川県史1 原始・古代』1988.3

(6) 『県道高松志度線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告 小山・南谷遺跡I』香川県教育委員会、  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997

藤好史郎「高松市新田町小山・南谷遺跡の発掘調査」『条里制研究』第12号 条里制研究会 1996

(7) 大嶋和則「奥の坊遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度』香川県教育委員会 2000. 3

(8) 遺物を保管されている尾崎忠夫氏には遺物が発見された当時の状況を御教示いただいた。

(9) 川畑 聡『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館 1996

(10) 川畑 聡氏の御教示による

(11) 橋詰 茂「第6章第3節 海の時代—内海産業と水運の発達—」『香川県史2 中世』1989.3

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

屋島基礎調査事業では、文化財調査の実施にあたり分布調査と確認（試掘）調査を併用して実施した。その理由は第2章第2節で述べたとおり屋島には多くの文化財が存在するが、このうち『日本書紀』に記述のある屋嶋城や屋島寺の前身で唐僧鑑真によって北嶺で開基されたと伝えられる千間堂などは、文献上や伝承としては存在するものの、遺跡としては長らくその所在および実態が不明であった。このような遺跡については遺跡の所在・広がりを確認するため、遺構の想定箇所や伝承地を中心に分布調査によって確認することとした。一方、『木田郡誌』に、明治初年に行われた盗掘内容や石棺を含む出土遺物等が報告されている長崎鼻古墳および屋島寺宝物館建設に伴う発掘調査で7世紀代の遺物が出土し屋嶋城の関係遺構が埋没している可能性が高いと想定されていた屋島寺周辺については、基礎データがある程度存在したことから確認調査によって遺構・遺物の確認を行うこととした。

### 第2節 分布調査

発掘調査と併行して屋島全域の分布調査を断続的に実施した。分布調査を行った期間については下記のとおりであるが、この一連の調査で大きな成果を得た。分布調査で新たに遺構（千間堂礎石建物跡・集石遺構・長方形石積基壇・屋嶋城東側外郭線）が確認されたり、分布地図には掲載があるものの、長らく所在が不明で今回の分布調査において再確認（浜北古墳群）したものなどがある。その他、屋嶋城西南外郭線が発見された後の平成10年度には10月から11月にかけて、屋嶋城の外郭線を確認する目的で分布調査を市単費で実施している。

これらの遺跡のうち、屋島の歴史を考える上で重要と思われる遺構については、一部確認調査を実施し遺構の性格把握に努めた。その成果については、本章第3節以降に詳述した。一方、遺構・遺物が確認されたものの、基礎調査事業期間の関係等から確認調査には至らなかったものについては、この節で報告する。

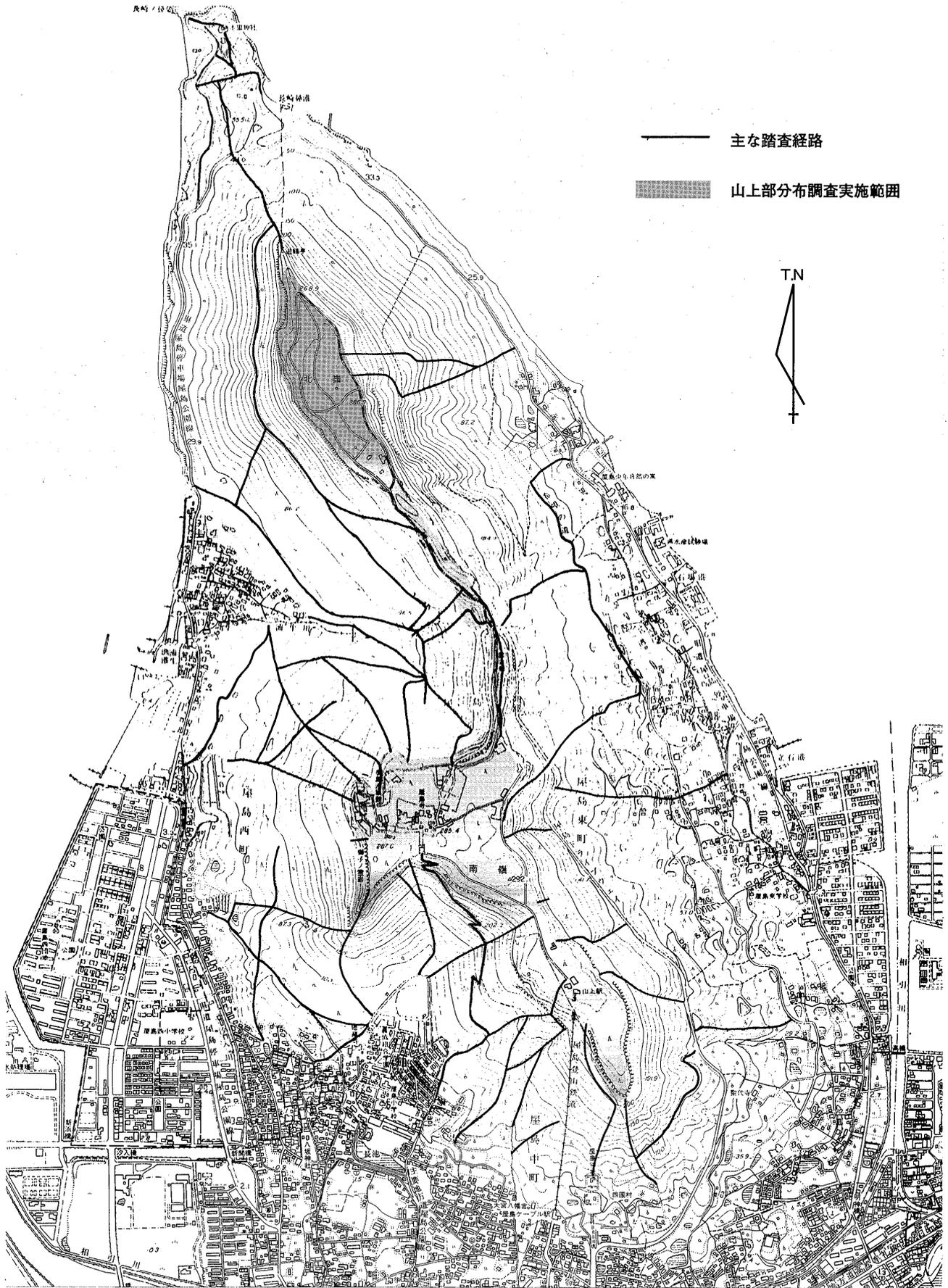
年 度	期 間	場 所	確認遺構等
平成6年度	平成6年9月5日～6日	南嶺山上北側	
	平成7年3月25日～27日	北嶺山上平坦部他	
平成11年度	平成11年4月27日～5月20日	南嶺斜面部一帯	屋嶋城東側外郭線確認
	平成11年12月1日～平成12年2月7日	北嶺一帯(主に斜面)	
	平成12年2月10日～3月30日 (確認調査と平行して実施)	北嶺山上部	礎石建物跡・集石遺構 ・長方形石積基壇
平成12年度	平成12年4月17日～5月19日	北嶺山上部一帯	

第2表 史跡天然記念物屋島基礎調査事業分布調査一覧表

### 鶴羽神社境内遺跡（第11図）

屋島西町浦生の県道150号線・屋島停車場屋島公園線の東側、コトデンバス浦生停車場北東の鶴羽神社の境内に位置する。遺物は鶴羽神社境内の本殿裏側を中心に散布しており、本殿南東側では、炭・焼土を含む包含層が露出している部分がある。以前から、製塩土器を出土する遺跡としてその存在が知られていたが、正式な調査は行われておらず、遺跡全体の様相は不明である。遺跡の広がりについては神社周辺部の内、本殿前面や北側の墓地・旧屋島小学校浦生分校運動場には土器の散布は現在のところ認められないが、この分布状況をもって遺跡の広がりとするには判断材料が不足しており、今後の課題としたい。

採集した土器は製塩土器が多数を占め、須恵器杯身、土師器（小型丸底壺・甕・小皿・飯蛸壺）、弥生土器甕などがある。大半が製塩土器であり、大型のものと小型のものが存在する。表採した製塩土器の時期は6世紀末から8世紀中頃の製塩土器が大半を占め、一部には古墳時代前期に遡るものも含まれる。



第10図 分布調査実施範囲図



第11図 鶴羽神社境内遺跡位置図 (S=1/5,000)

出土した土器が示すとおり長期間の製塩作業が行われたものと推定される。

第12図は鶴羽神社境内遺跡で分布調査の折に表採した遺物である。

1～32は製塩土器である。1～25は小型、26～32は大型に分かれる。33、34は弥生土器の甕である。口縁部上端部を上方につまみあげる。35は須恵器杯蓋であり天上部には明瞭なヘラ切りが認められる。36、37は飯蛸壺である。38、39は土師器の小皿である。39の底部にはヘラ切りが認められる。40は形態が変わっているが側面が溝状に凹んでいることから有溝土錘であると考えられる。

#### 浜北古墳群 (第5図 15～17)

弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と想定される墳墓がまじる古墳群として尾根稜線上を中心に作られている。分布調査の結果、1・2号墳は再度確認ができたものの、残念ながら3号墳は確認できなかった。



第12図 鶴羽神社境内遺跡表採遺物実測図

### 第3節 長崎鼻地区の調査

#### はじめに

長崎鼻古墳は屋島山嶺より北に派生する尾根がさらに起伏を持ちながら東側の海に向かい突き出ている尾根鞍部先端に築かれている(第13図)。古墳の立地場所は長崎鼻と呼ばれ、地形形状最も海に突き出ており、後円部上から広範囲に海を見渡せ眺望をかなり意識して古墳が築かれていることが分かる。

古墳は後円部を下方に向ける形で尾根の主軸に沿って築かれ、前方部西側には後円部よりも高いマウンドが存在し墳丘が地形を最大限利用し造られていることが分かる。長崎鼻古墳は『木田郡誌』に長崎墳と記載されており、明治初年に後円部が掘られ石棺が出土したことが伝えられている<sup>(1)</sup>。

発掘調査は、平成8年度から平成10年度までの3ヵ年にわたりトレンチ調査を行った(第15図・附図1)。平成8年度には墳丘範囲の確認を行なうため、鯨の墓と呼ばれる前方部西側のマウンドについてトレンチ調査を行い円墳や遺構がないことを確認した。また、前方部主軸上に第1トレンチを設定し墳丘を区画するための掘り割りと葺石を確認した。平成9年度に第2・3・5・7・8トレンチを設定し後円部主軸上の墳丘範囲と前方部の構造を確認した。平成10年度では第4・6・5・9・10・11トレンチを設定し後円部の構造および埋葬施設の確認を行った。調査により全長・各部の状況が良好に確認でき、長崎鼻古墳は全長45.8mの後円部・前方部ともに3段築成の前方後円墳であることが分かった。

#### 鯨の墓トレンチ(第14図)

鯨の墓と呼ばれる祠が前方部西側に祭られており、この鯨の墓のマウンドは古墳よりも高い位置にあることから、別の古墳が存在している可能性が考えられたため、トレンチを鯨の墓の祠を中心に北・南・東方向に設定し調査を行なった。トレンチ調査の結果、トレンチ内からは何も検出できず遺構は存在しないことが判明した。

#### 前方部

1・2・3・7・8トレンチを設定し前方部の規模・構造を確認した。各段の葺石の残りは南側や主軸端部付近においては良く、北側側面部と裾部については葺石の残りが悪かった。

##### 第1トレンチ(第16図)

墳丘主軸上に設定した幅1.0m、長さ3.7mのトレンチである。通称鯨の墓と呼ばれる祠を頂部に持つ円形のマウンドが前方部に隣接しており、墳端の範囲や形状が不明なため、このトレンチを設定した。トレンチ調査の結果、葺石の残りは良く基底石も残っており墳丘端部が確認できた。

古墳は尾根を掘り切って墳丘端部を形成しており、さらに葺石を使って区画していた。上部にある鯨の墓のマウンドから下方は尾根の傾斜がほぼ水平な状態が続き、尾根を最大限使い古墳が形成されていることが分かった。葺石基底石については転落石などのために基底部分までは確認できず、上面についても崩壊のために良く分からないが、現状では段築は認められず1段のみであったと考えられている。基底部分については基底石上面が確認できる52.600m付近の高さと考えられている。

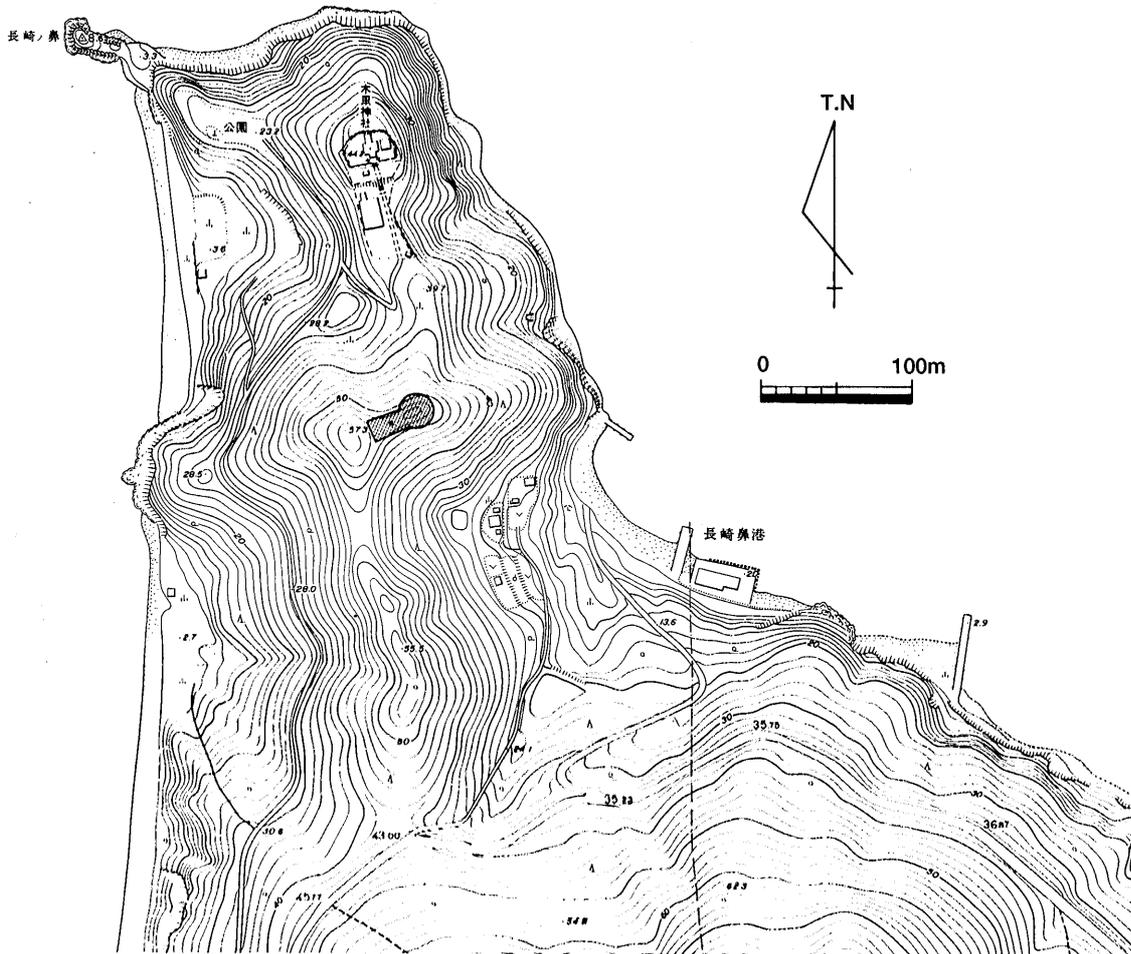
葺石の葺き方については、基底石に長軸40cm大の塊石を用い、上部に20~30cm大の塊石を積み上げ築かれている。墳頂部において若干の小礫が確認でき、墳頂にそれら小礫を敷いていた可能性がある。

##### 第2トレンチ(第17図)

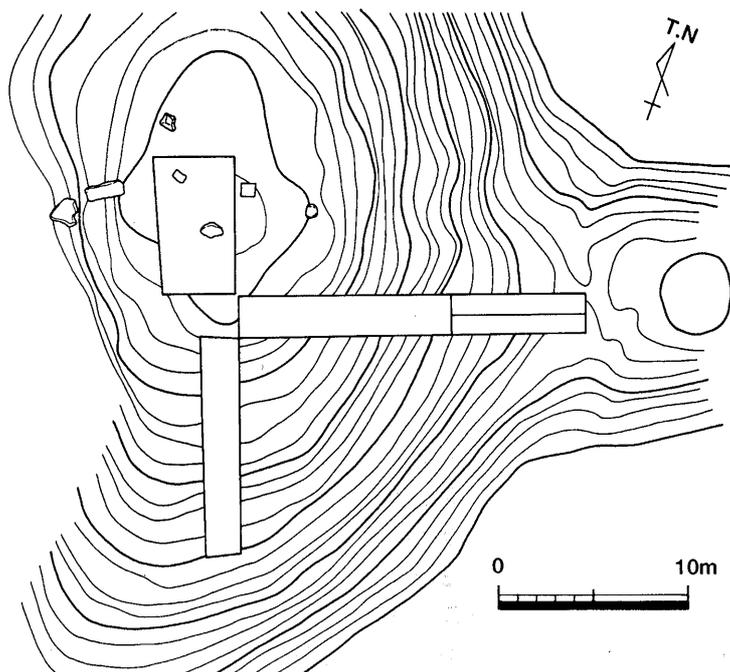
北側側面部に設定した幅1.0m、長さ11.0mのトレンチである。葺石残存状況は非常に悪く、基底石や構築部分などは全く残存しておらず確認できない。ただ、土層断面や石の堆積状況から3段の変換点は想定でき、2・3段目と考えられている変換点付近には小礫が散らばっており、この付近にテラスが存在したことを裏付けるものと考えられている。墳頂部において盛土が確認出来るので前方部側頂上部は盛土によって墳丘を整えていると考えられる。また、小礫が何点か確認できるので、前方部墳頂部の範囲は不明だが小礫によって覆われていた可能性がある<sup>(2)</sup>。

##### 第3トレンチ(第18図)

南側側面部に設定した幅1.0m、長さ10.5mのトレンチである。葺石の残存状況はあまり良くないが、3段の段築と葺石を確認でき各段において葺石の基底石も確認できる。



第13図 長崎鼻古墳位置図



第14図 鯨の墓トレンチ配置図

葺石1段目の基底石は50.850 m・2段目基底石は51.400 m・3段目基底石は52.500 mの高さに確認できる。1段目の高さは、60cm、2段目の高さは110cm、3段目は110cmと、上段に行くほど墳丘が高くなる。

1・2段目の葺石は基底石に長軸約30cm大の安山岩の塊石を使い、上部は厚さ約10cm・長軸20cm大の安山岩の板石などが使われている。3段目は長軸40cmほどの安山岩塊石や扁平な安山岩板石を立てて使い上部には厚さ5cmほどの板石を積み上げ葺かれている。2・3段目の基底石付近に5cm大の小礫が確認できるのでテラス部分には小礫が敷かれていたと考えられる。

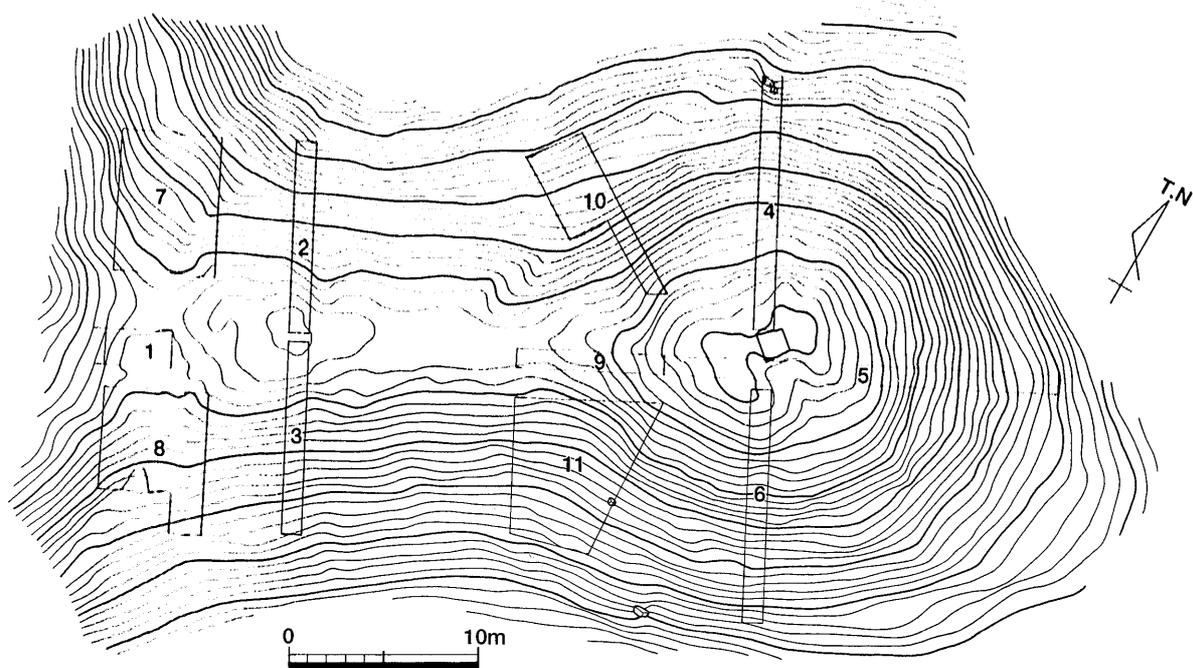
墳頂部においては2・3層の盛土が確認でき、地山を削り墳丘形成をするだけでなく盛土により前方部墳頂付近を整えたと考えられている。ただ、この盛土は薄く墳丘形成というよりも墳丘を整える目的で覆われたものである。また、小礫が何点か確認できるので墳丘上部での範囲は不明だが小礫によって覆われていた可能性がある。

#### 第7トレンチ(第19・20図)

前方部端北側のトレンチである。葺石は、端部においては残存状況が良く段の構成が分かる。

側面側では基底石付近しか部分的に確認できないため、段の高さ・テラス幅などの構成は良く分からない。また、裾部の石が抜けているために端部への取り付きが不明瞭である。

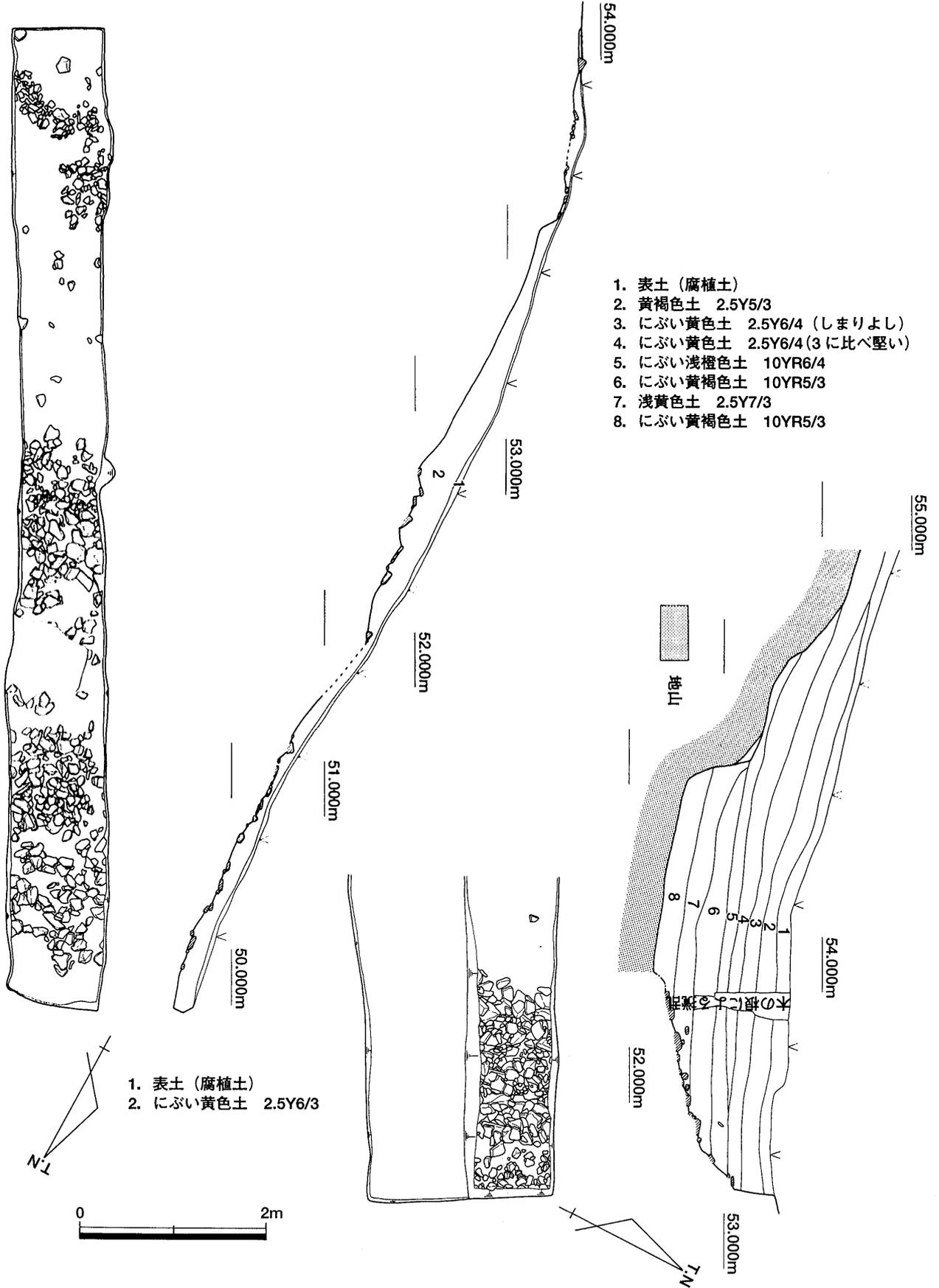
側面側では葺石1段目は現状では不明である。2段目は転落石などのために判然としないが基底石付近が50.900 mであると考えている。基底石は長軸約30cmの安山岩塊石であり上部に厚さ8cm程の安山



第15図 長崎鼻古墳トレンチ配置図

岩板石などが使われている。また、裾部付近に葺き方が違う箇所があり、約20cm大の安山岩塊石が緩い傾斜で葺かれている。他の段と違い基底石に大きな石を使わず葺き方も違うため裾部の葺石を形成しているとはいいがたいが、現状では石の積み方から葺石の一部と考えられ、2段目裾部は主軸方向に若干屈曲すると思われる。ただ、端部基底石とのつながりは確認できなかったため、裾部の形状について断定することはできない。3段目基底石は51.620～51.700 mに裾部付近においてのみ基底石が確認できる。長軸30cmほどの安山岩塊石を用いており、3段目基底石のみが端部基底石とつながる<sup>(3)</sup>。

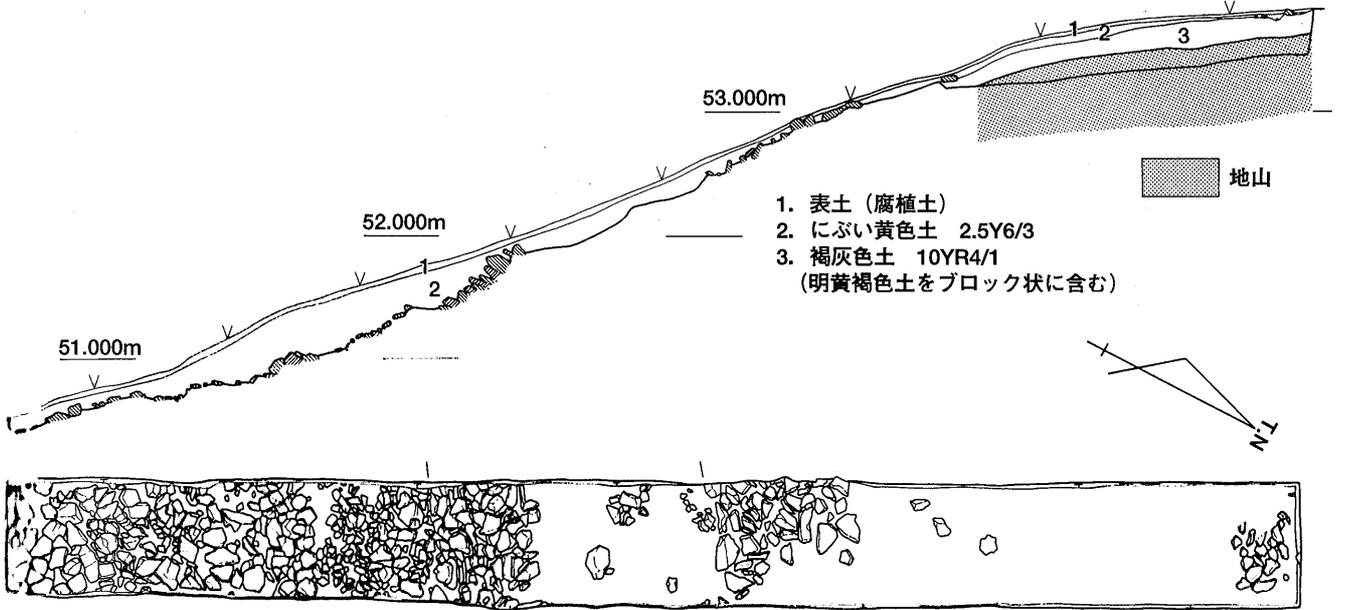
ただ、3段目基底石は端部とつながり裾部を持つが、この高さに合う段は2トレ及び10トレでは存在しない。2段目は2トレ10トレ共に段の高さはほぼ同じであり2段目は水平に築かれているようである。



第17図 第2トレンチ平面図・土層図

第16図 第1トレンチ平面図・土層図

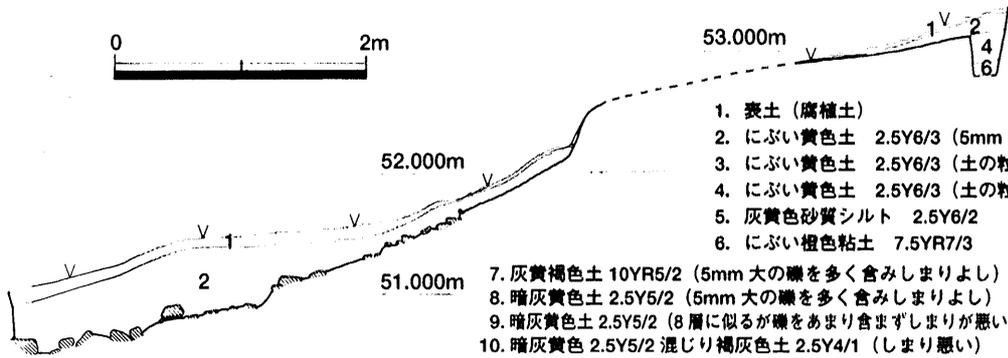
54.000m



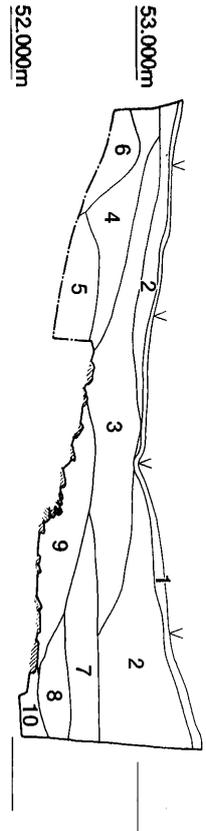
1. 表土 (腐植土)
2. にぶい黄色土 2.5Y6/3
3. 褐灰色土 10YR4/1  
(明黄褐色土をブロック状に含む)

第18図 第3トレンチ平面図・土層図

0 2m



1. 表土 (腐植土)
2. にぶい黄色土 2.5Y6/3 (5mm 大の礫を多く含みしまりよし)
3. にぶい黄色土 2.5Y6/3 (土の粒子が2層より細かい)
4. にぶい黄色土 2.5Y6/3 (土の粒子が3層より細かい)
5. 灰黄色砂質シルト 2.5Y6/2
6. にぶい橙色粘土 7.5YR7/3
7. 灰黄褐色土 10YR5/2 (5mm 大の礫を多く含みしまりよし)
8. 暗灰黄色土 2.5Y5/2 (5mm 大の礫を多く含みしまりよし)
9. 暗灰黄色土 2.5Y5/2 (8層に似るが礫をあまり含まずしまりが悪い)
10. 暗灰黄色 2.5Y5/2 混じり褐灰色土 2.5Y4/1 (しまり悪い)



第19図 第7トレンチ平面図・土層図

葺石基底石の葺き方は2・3段目で違うことも、段が水平な段が想定できない原因と考えられるが、この付近の発掘調査をさらに行なわないと詳細な状況は確認できない。

端部については1段構成であり、端部基底石は転落石があるために上面しか確認できないが51.700～52.200 mに確認でき、長軸50cm大の安山岩の塊石を用いている。上部には20～30cm大の安山岩の塊石と扁平な板石を使い葺いているが、塊石のものを裾付近に板石のものを中央部に使うなど石材の使い分けがなされている。端部の高さについては他のものより大きい40cm大の板石が葺石上部に確認でき、段上部を構成する石と考えられるので段の高さは50cmほどと考えられる。この板石の上部には20cm大の安山岩の塊石が角度を緩やかに変え並んでおりこれについても葺石の可能性がる。

墳端基底石は裾部から主軸に向かうほどレベルが上がり、基底石は水平には築かれず斜めに立ち上がっている。第1トレンチの基底石のレベルが第7トレンチの基底石より高い位置にあるのでこれを裏付けるものと考えている。第8トレンチの基底石は第7トレンチと同じく中央に向かって立ち上がっている状況がうかがえ、断面△形状に墳端部の基底石が並ぶ状況が伺える。これは尾根を掘り切って墳端を形成する際に、厳密に水平に基底石を並べようと考えず、尾根地形に合わせて掘削したために△状になったと考えられる。

#### 第8トレンチ(第21図)

前方部端南側のトレンチである。葺石残存状況は側面においてはあまりよくないが、3段の葺石基底石を確認でき、端部においても葺石基底石などを確認できた。側面部1段目では基底石は確認できなかったが、20cm大の安山岩塊石・板石が葺かれている構築部分が確認できるので、基底石はおよそ50.800 m付近と考えている。2段目は51.400 mに基底石が確認でき、長軸30cm大の塊石を使い、上部には20cm大の安山岩塊石・板石が葺かれている。3段目基底石は52.500 mに確認でき、長軸30cm大の安山岩塊石を使い上部に20cm大の塊石を葺いている。8トレンチ基底石の高さは3トレンチの基底石の高さと同じであり、前方部南側は各段が水平に造られていることが分かる。

墳丘端部の基底石は51.900～52.000 mに確認でき、長軸40cm大の安山岩塊石が使われている。転落石などのために分かりにくいですが、7トレンチと同じように中央に向かって立ち上がっていることが分かる。上部の葺石は20～30cm大の塊石や板石が使われ、全体的に板石を主にして葺いている。

側面から端部の取り付けである裾部分は各段とも葺石が残っておらず、地山の現状面においても明確な角を確認することはできない。さらに端部基底石の高さと、側面各段の基底石の高さはどれも合わないため段の取り付け方・裾部の形状は不明である<sup>(4)</sup>。葺石が認められず側面部と端部の基底石の高さが合わないことは、もともと葺石が無かった可能性も高い。

#### 後円部

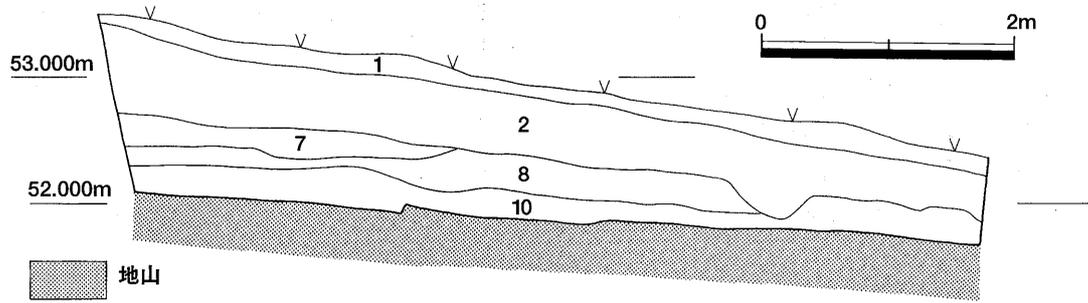
4・5・6・9・10・11トレンチを設定し、後円部の規模・構造を確認した。葺石は流出したり崩れていたりするところもあるが、くびれ部などでは良好に残存する箇所もあり全体の墳丘構造は確認できた。

また5トレンチにおいて埋葬施設を確認でき『木田郡誌』に記載されているとおり石棺を確認することができた。『木田郡誌』によると石棺は墳頂より6.7尺掘った位置にあり、蓋を打ち割って中を確認したところ、北東枕の人骨を確認したとある。棺中には刀剣2、鏢1、直径25cmほどの太さに錆固まった矢の根があり、棺身には石枕のみならず脚の部まで形を彫り付けてあったと記載されている<sup>(5)</sup>。

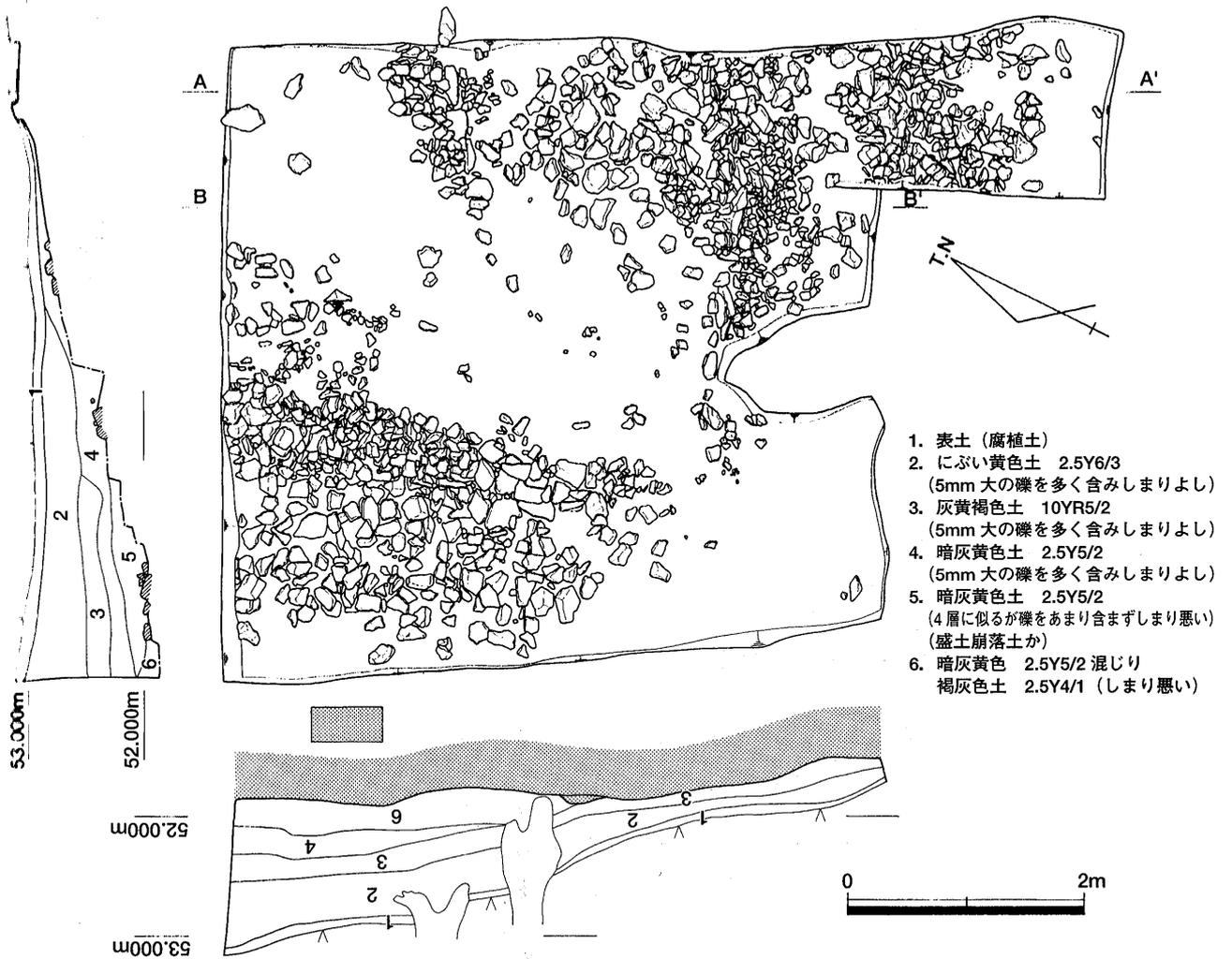
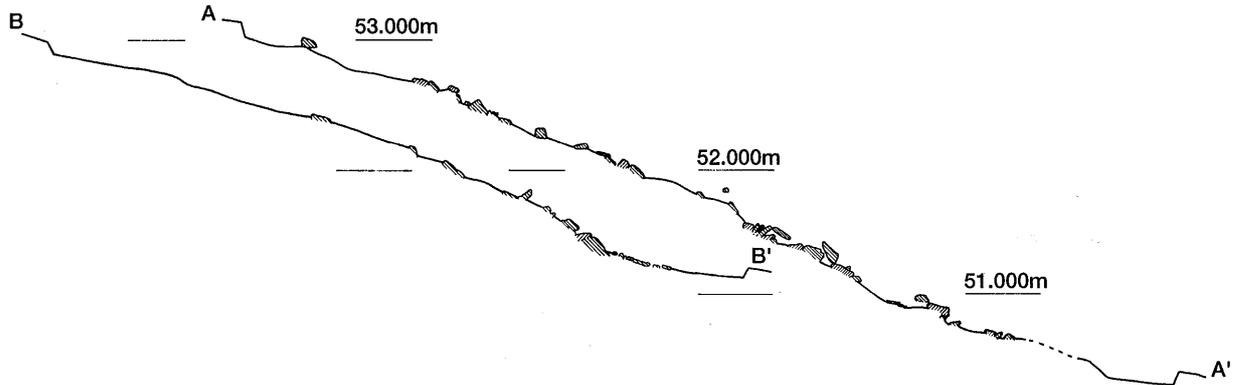
#### 第4トレンチ(第22図)

墳丘主軸から北側側面部に設定した幅1.0m・長さ12.5mのトレンチである。葺石・埋葬施設(石室墓壇と竪穴式石槨天井部の一部)を検出した。葺石の残存状況は悪くトレンチ内に多量の石は残っているが、葺石構築部分や基底石などの検出はできないため段構成については良くわからない。しかし、土層断面や一定のまとまりをもって石が堆積する状況から各段の位置を考えると3段築成と考えられ、葺石1段目の基底部を49.800～49.900 m・2段目基底部を50.700 m・3段目基底石を52.000～51.900 mの位置に想定している。

墳頂部付近において、安山岩板石を使った構築部分が地山を削り込こんだ箇所に確認でき、位置から墓壇と竪穴式石槨の一部と考えられる。墓壇は掘り込みの肩部が確認できたので、地山を削り込んだ後

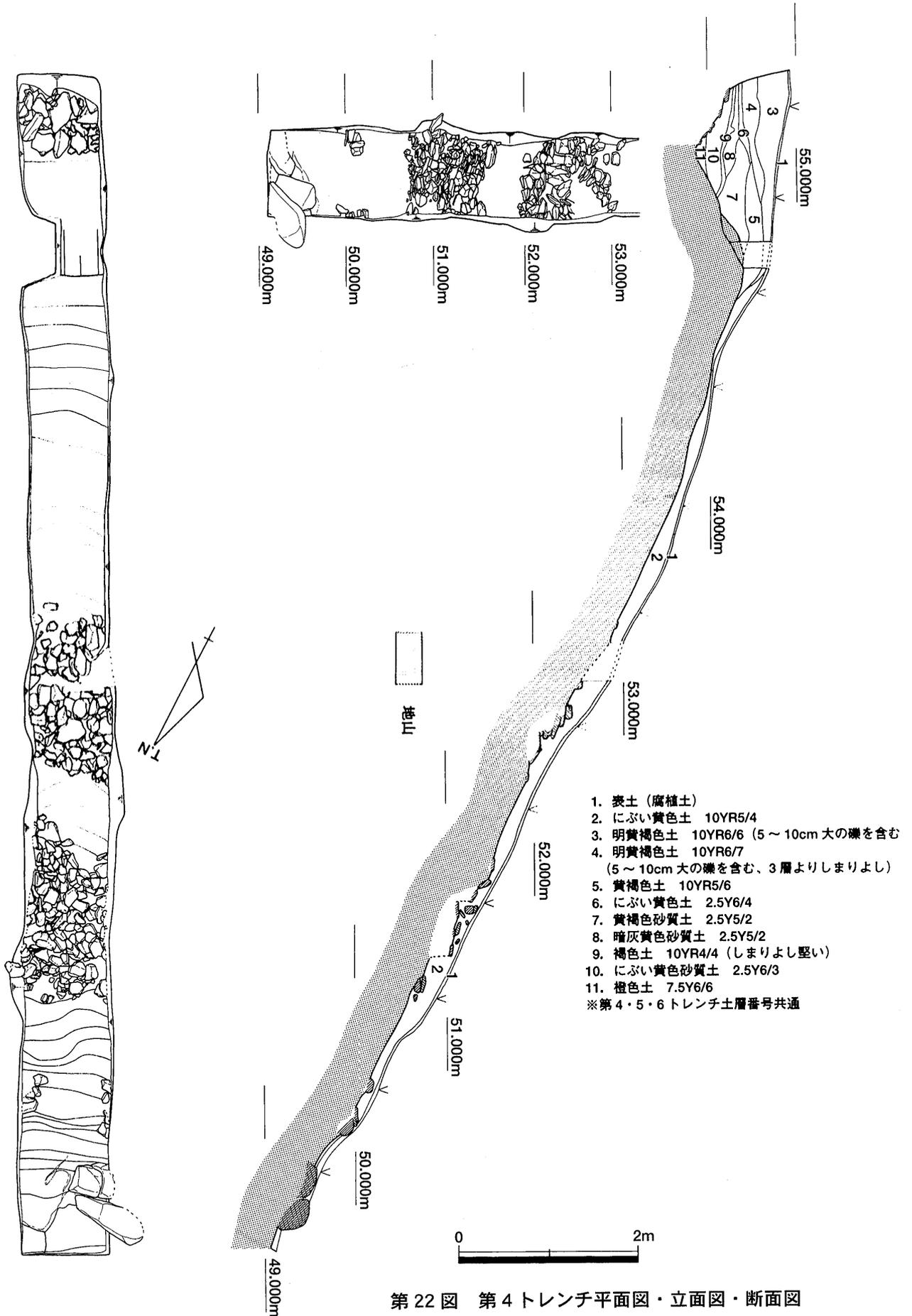


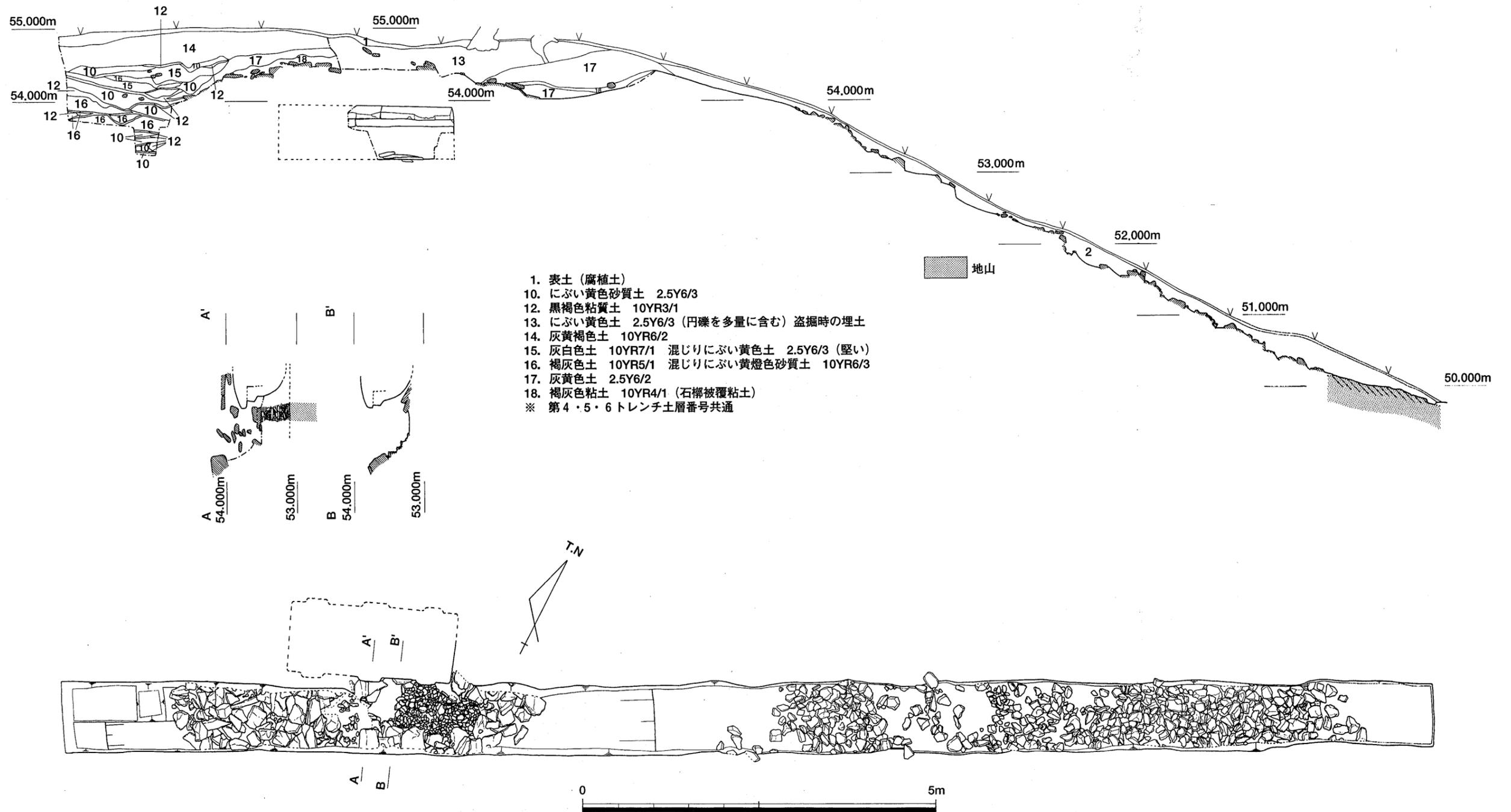
第20図 第7トレンチ西壁土層図



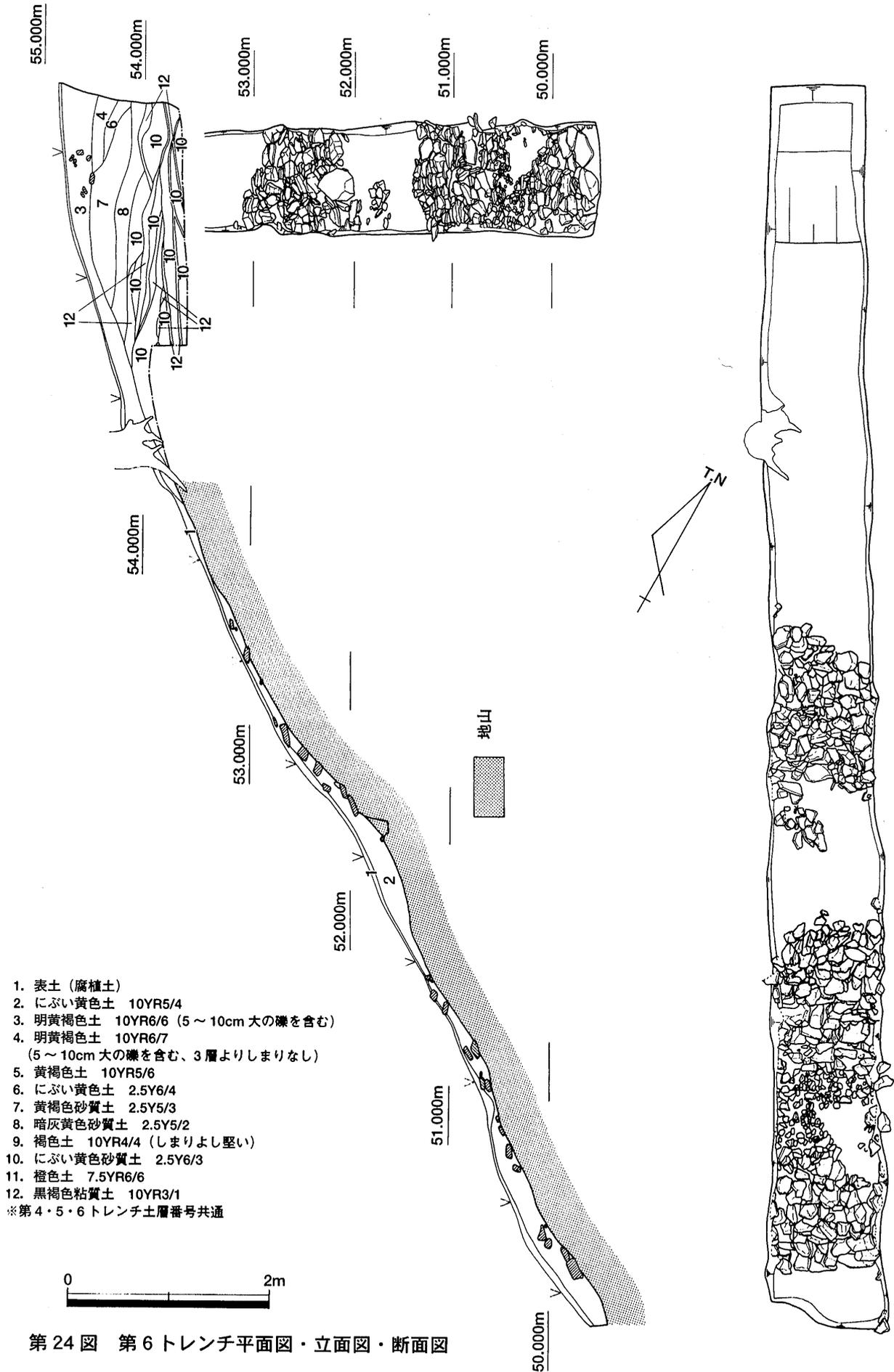
1. 表土 (腐植土)
2. にぶい黄色土 2.5Y6/3  
(5mm 大の礫を多く含みしまりよし)
3. 灰黄褐色土 10YR5/2  
(5mm 大の礫を多く含みしまりよし)
4. 暗灰黄色土 2.5Y5/2  
(5mm 大の礫を多く含みしまりよし)
5. 暗灰黄色土 2.5Y5/2  
(4層に似るが礫をあまり含まずしまり悪い)  
(盛土崩落土か)
6. 暗灰黄色 2.5Y5/2 混じり  
褐色土 2.5Y4/1 (しまり悪い)

第21図 第8トレンチ平面図・断面図・土層図





第23図 第5トレンチ平面図、土層図、石棺断面図



第24図 第6トレンチ平面図・立面図・断面図

に石槨を形成していることが分かる。石槨天上部では長軸 30～40cm の板石を主に使い構築し、長軸 40～50cm 大の板石で最後に石室外周面を覆っている。これは石槨の裏込めなどで乱雑に石を積み上げるだけでなく、最後に外周面を大ぶりの板石を精緻に並べることで、石槨範囲の明確化と化粧的な意味合いを持たせたためと考えられる。

層位を観察すると、地山を掘り込んで墓壙を形成した後に石槨を築いたようで、石槨埋土として 11・10・9・8・7・6・5・4・3 層の順に埋められたことがわかる。石槨を直接覆う層は 10・11 層であり、4・5・6・7・8・9 層は墓壙全体を埋める埋土と考えられ、3 層は最後に墳丘全体を覆う層と考えられる。

#### 第5トレンチ(第23図)

墳丘主軸から東側に設定した幅 1.0 m・長さ 19.5 m のトレンチである。葺石・埋葬施設(竪穴式石槨・石棺・墓壙)を検出できた。

墳丘斜面部については、第4トレンチと同じように葺石の残存状況は悪く、トレンチ内に多量の石は残っているが構築部分はあまり残存せず、基底石の検出もできなかった。しかし、土層断面や石の構築部分の残存状況から3段ほどの段築があったと考えられている。1段目と考える場所に若干構築部分が残っており、葺石として厚さ 5cm ほどの板石と 20cm 大の塊石を組み合わせで葺いている。他の段については流出が激しく構築部分の残存状態も悪く良く分からないが、20cm 大の塊石がトレンチ内に多く残っているので、これらが葺石に使われていたと考えられる。

墳頂部においては埋葬施設を確認でき、東側において地山の掘り込みが認められ、第4トレンチと同じように地山を削り込んで墓壙を形成していることが分かる。トレンチ西側については地山の確認はできず、石槨を覆う 17・18 層の埋土の下層は 53.200 m まで厚い 10 層の砂質土と薄い 12 層の粘質土と厚い 16 層の礫質土(パイラン土)の盛土が認められ、かなり深く広い位置まで墓壙の掘り込みが行われているようである。墓壙の前方部側が石室下部と同じ高さまでは深く掘り込んでいるため、前方部側に開いた平面口状の墓壙形成が考えられる。この前方部側を掘り込んだものは石棺を搬入しやすくするためにこのような形にしたと考えられ、前方部側には石棺搬入路(作業道)があった可能性が指摘できる。第5トレンチ西側及び第6トレンチ頂上部付近においては地山を確認できず、この部分の墳丘は土層断面などからも盛土によって形成されていることが分かる。つまり、厚い 10 層の砂質土と薄い 12 層の粘質土を互層に使い第4トレンチ地山の高さまで一度墳丘を形成し、埋葬施設構築のため墓壙を掘り込んだと考えられる。

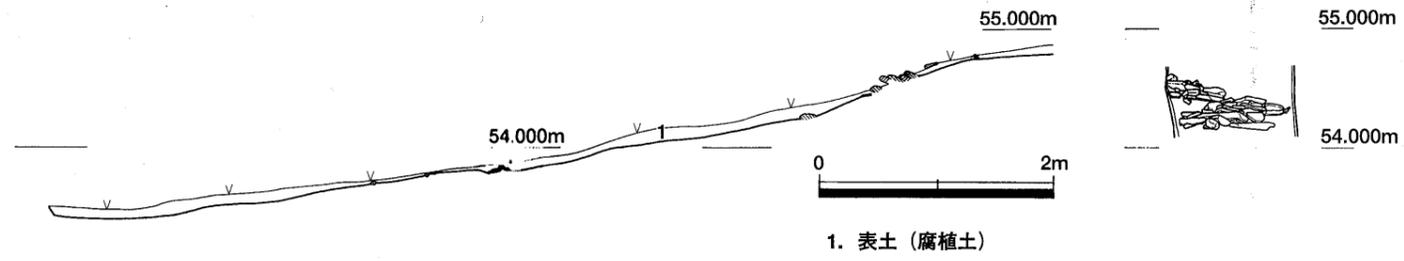
竪穴式石槨については中央から上部付近に盗掘坑が開けられており、盗掘時の埋め戻し土を除去中に黒色土器等の口縁部片や朱塗りの石材片を検出した。盗掘土を完全に除去すると、石槨内には朱塗りの石棺が認められ、石棺は南東角部分を確認できた。朱を塗布した玉砂利敷きの上に厚さ 5cm 程度の安山岩板石を置き、その上に石棺が安置されていた<sup>(6)</sup>。石棺は『木田郡誌』によれば深さ 2.0 m 近いところに安置されていたというが、現状では 1.0m ほど掘った段階で確認できた。このことから、盗掘によって後円部墳丘が 1 m 程度削平されたものと想定される。

石槨は長軸方向の石材が確認でき、第4トレンチとあわせておよそ長軸 5.0 × 4.0 m の規模を計る。竪穴式石槨天部分を 17 層灰黄色土・18 層褐灰色粘土によって覆っている。この土層は第5トレンチ石槨直上でしか確認できず、雨水が染み込まないようにするなど石槨天上部を保護するものだったと考えられる。墓壙下部の埋土としては 10 層の砂質土と 12 層の粘質土を互層積みにして、16 層の礫質土が認められることは前述したが、石槨はその層位からこれらを埋めた後に築かれているようであり、石槨を直接覆う埋土は第4トレンチと違い 17・18 層の粘土によって覆われている。石槨埋土後に 10.12.14.16 層によって埋められており第4トレンチとは埋土状況が異なる。ただ、墳丘上部を 3 層によって覆うことは共通する。

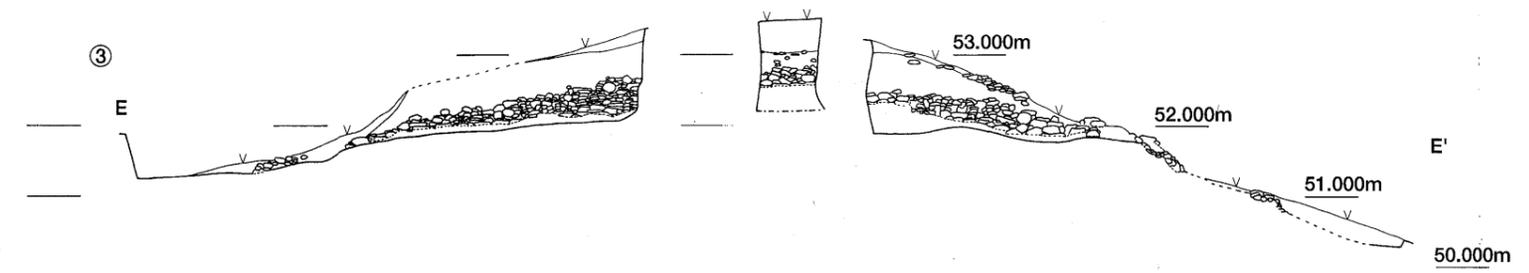
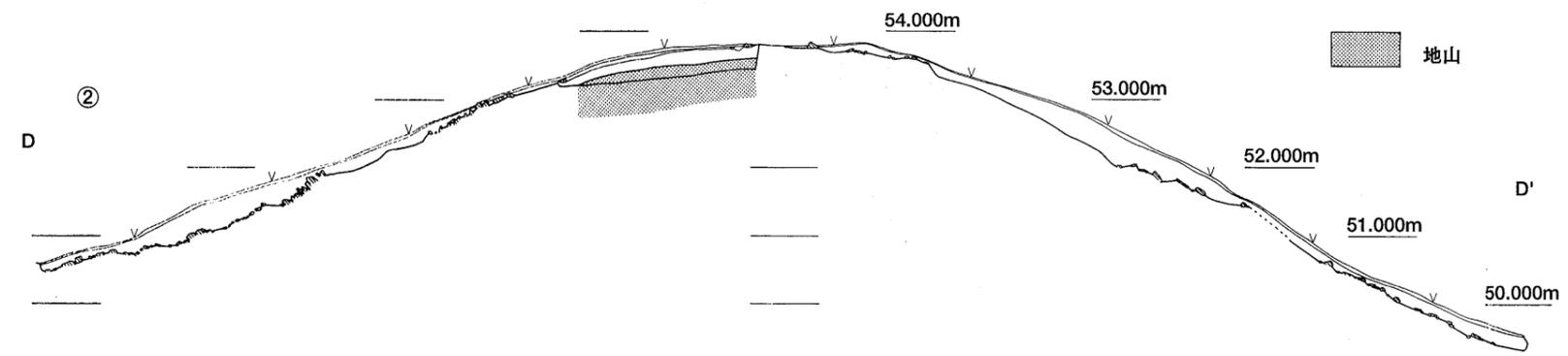
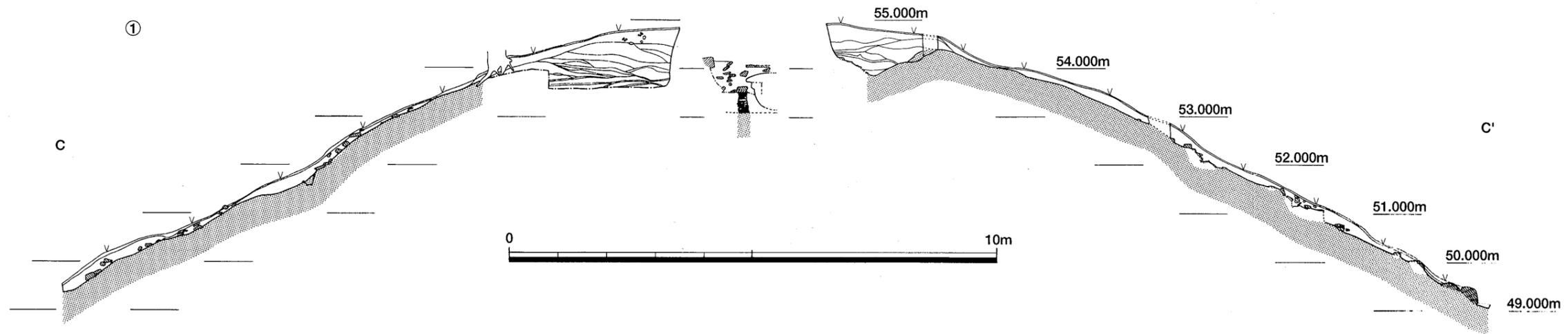
#### 第6トレンチ(第24図)

墳丘主軸から南側に幅 1.0m 長さ 12.5 m のトレンチである。3段の段築と葺石・墓壙が検出できた。葺石の残存状況が良好なため各段の基底石なども確認でき墳丘構成・石材の使用法なども確認できた。

葺石は各段共通して長軸 20～30cm 大の安山岩の塊石を用い、基底石は他の石より大ぶりの長軸 40～50cm 大の塊石が使われている。葺石 1 段目の基底石を 49.700 m・2 段目基底石を 50.700 ～



第25図 第5トレンチ平面図・立面図・土層図



第26図 長崎鼻古墳横断面図 ①後円部 ②前方部 ③前方部端立面図

50.800 m・3段目基底石を52.100～52.200 mの高さに設けている。2段目テラスにおいて小礫が確認できるので、テラスは小礫によって覆われていたと考えられている。墳丘構造については、3段目基底石の上部53.600 mまで地山が確認でき、3段目まで地山を削り込んで各段を形成し葺石を葺いているようである。

墳頂部付近は第4トレンチと同レベルでは地山を確認できず、10層の砂質土と12層の粘質土を互層積みにした盛土であった。この10・12層の上層に第4トレンチと同じく7・8層が認められる。7・8層は石槨を埋める埋土と考えられるため、その下の層は墓壙を形成する層と考えられる。10・12層が7・8層の下層であり墓壙肩部と考えられる緩やかな掘り込みが第4トレンチとほぼ同レベル同位置に確認できるので、第6トレンチ墓壙は地山を掘り込んで築くのではなく盛土掘り込みによって形成されたと考えられる。これは墳丘の形成されている尾根が痩せているために、10・12層の盛土によって墳丘を形成しなければ竪穴式石槨を築くだけの墓壙範囲が取れなかったためと考えられる。

層位について3・4・6・7・8層は第4トレンチで見られた層と同じで、石室を埋め墳丘形成するための埋土である。ただ第6トレンチにおいては石槨を確認できないため、第4トレンチと同じように石槨を10層が覆っていたかは不明であるが3・4・6・7・8層の層位関係は同じであるため、墓壙の埋土は同じ状況である。

#### 第9トレンチ(第25図)

墳丘主軸に平行して西側に延びる幅1.0m・長さ8.5mのトレンチである。斜面部に安山岩の板石を用いた小段と小礫が確認できた。小段の前面にも5cm大の小礫が多量に確認できた。

小段は54.150 mから54.700 mにかけて高さ約50cm積まれており、この小段上部にも若干の小礫を持つので上部にも敷きつめられていた可能性がある。小段下部にも54.150～53.600 m付近まで小礫が確認できる。これについては長さ約4.0 mほどトレンチ内で確認できたので、墳頂部を覆っていたものと考えられるが、前方部まで覆われていたとは考えにくく、後円部から前方部に向かう斜面部のみを覆っていたと考えられる。

小段は現状においてトレンチ以外の部分でも石が露出しており、幅は4 mほどである真中の部分に石がない状態で三角形に築かれている。石は精緻に組み上げられており真中の空白部分も石が抜けたのではなく、あらかじめ空白状態で築かれているようである。小段の位置が石槨搬入路と考えられる場所の上に築かれていることや、石槨方向に向かって築かれていることから単なる葺石ではなく祭祀的な意味合いを持つものかもしれない。

#### 第10トレンチ(第27図)

くびれ部北側のトレンチである。葺石残存状況は非常に良く3段の段築状態が良好に確認できた。各段の基底石を確認でき、1・2段目においてはテラスも確認できる。1段目葺石の斜面とテラスにおいて小形丸底壺の口縁～体部片が出土した。

葺石1段目の基底石は長軸40cmほどの安山岩塊石が49.950～50.100 mに確認できる。上部には20～30cm大の塊石・板石が残り悪いが50.800 mまで葺かれており約80cmの高さを持つ。テラス幅は80cmであり8cm大のほぼ扁平な石などが敷かれている。

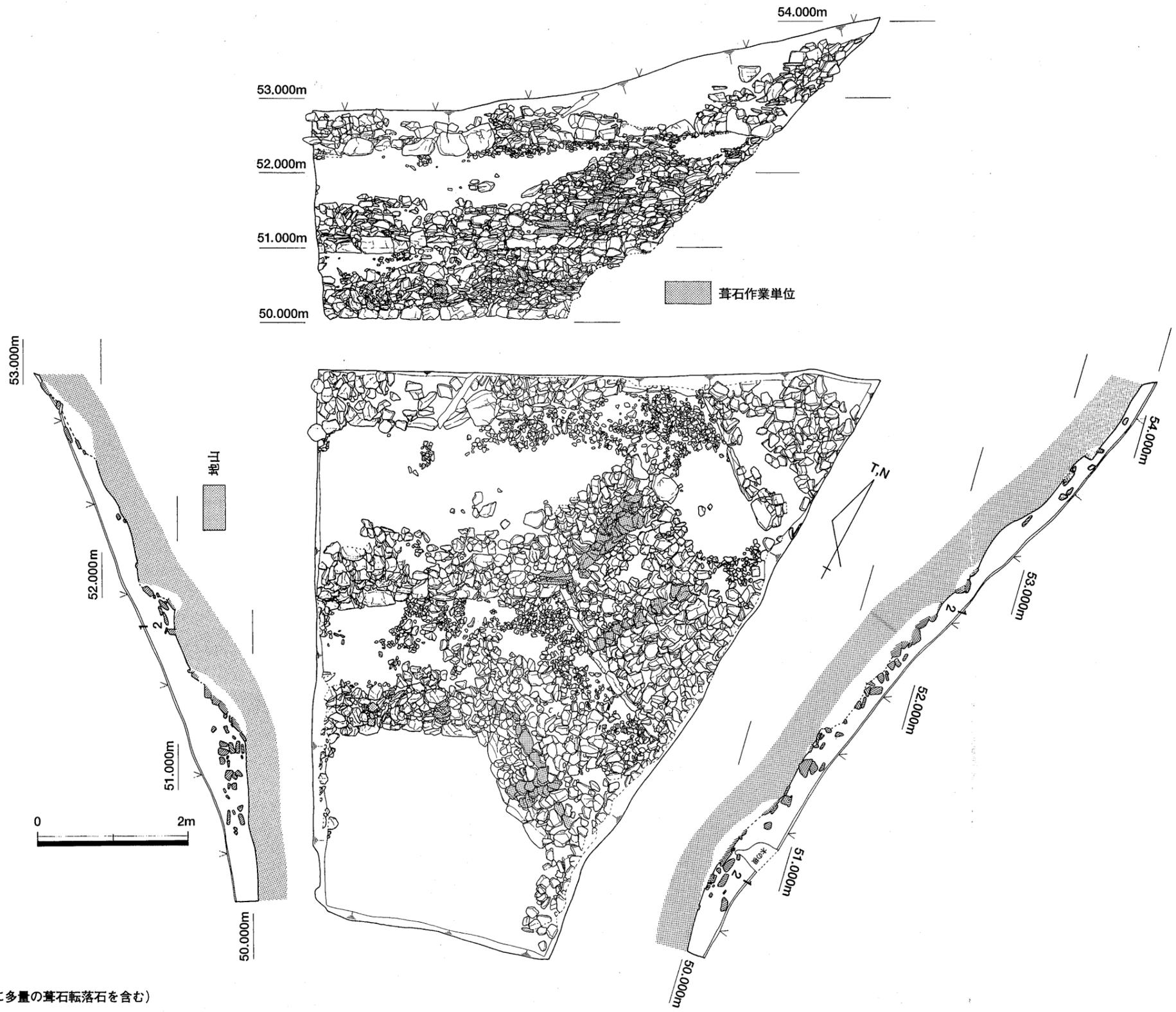
2段目基底石は長軸40cmほどの安山岩塊石が50.800～50.900 mに置かれ上部には20～30cm大の塊石・板石が葺かれている。2段目上部の葺石は流出しているためテラスの残りが悪く判然としないが、テラスと考えている場所に小礫が若干残っているので、2段目上部はおよそ52.400～52.500 mと考えられ約160cmの高さであったと考えている。

3段目基底石は長軸30～40cmほどの安山岩塊石を52.400～52.500 mに確認できる。段の上部はトレンチ内では確認できない。葺石は20cm大の塊石を基本的に用いているが53.200 m付近から長軸20～30cm・厚さ10cmほどの扁平な安山岩を使った葺き方の違う部分が確認でき、3段目の葺石形成時の作業単位か小段(4段目)を設けている可能性もある。

3段目の基底石(52.500 m)まで地山が確認でき、地山整形で段を構築しテラス部分を盛土で整形して葺石を葺いている。各段のテラスには8cm大の扁平な小礫などが確認でき、テラス部分は小礫によって最後に覆われていたと考えられる。



第27図 第10トレンチ平面図・立面図・土層図



第28図 第11トレンチ平面図、立面図、土層図

遺物は小形丸底壺の口縁部がくびれ部付近から破碎した状態で出土した。遺物は1段目テラス直上と1段目葺石斜面部にかけて出土し、出土状況から上部から流れてきたものと考えられるが、流土中ではないことから墳丘上部にあったものが早い段階で破碎し、墳丘が崩壊する前に流れたものと想定される。

第11トレンチ(第28図)

くびれ部南側のトレンチで3段の段築と葺石が確認できた。1・2・3段とも葺石残存状況は良く、1・2段目のテラスの残りも良好である。

葺石1段目は長軸30～40cmほどの安山岩塊石を使った基底石が50.100mに確認でき、上部には20～30cm大の塊石・板石が51.000mまで葺かれ約90cmの高さを持つ。テラス幅は80cmあり8cm大のほぼ扁平な石などを敷いている。

2段目は長軸30～40cmほどの安山岩塊石を基底石に使ったものが50.950～51.000mに確認でき、上部には20～30cm大の塊石・板石が52.100～52.200mまで葺かれ、約120cmの高さを持つ。テラス幅は80cmあり8cm大のほぼ扁平な石などを敷いている。

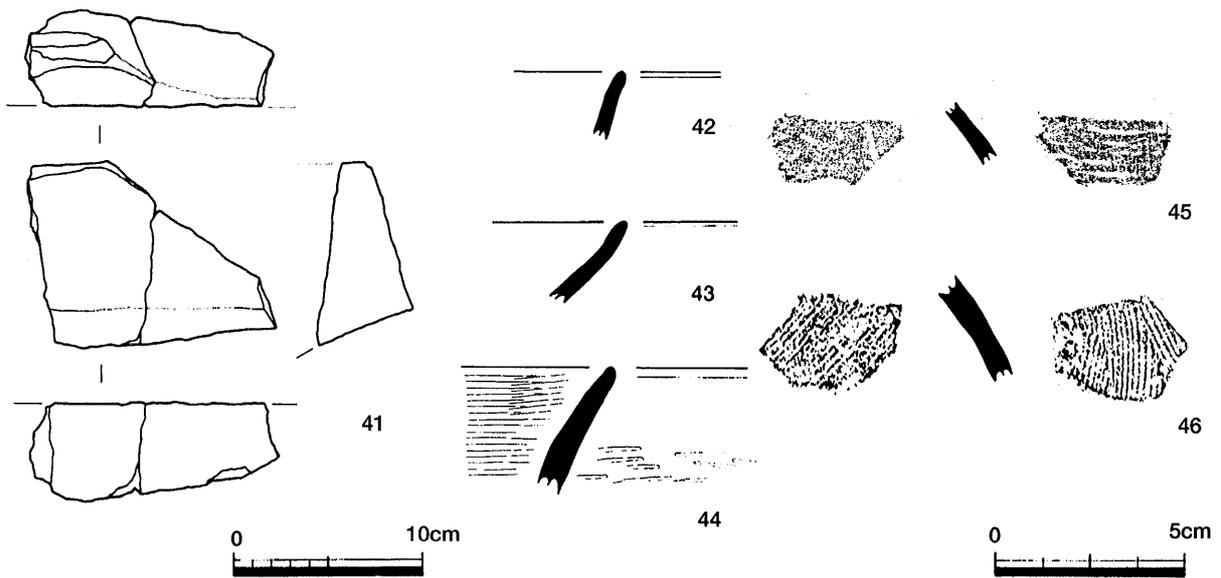
3段目は長軸30～40cmほどの安山岩塊石を基底石に使い52.350～52.500mに確認できる。また後円部側基底石において厚さ15cm・高さ30cm・長さ60cm程の板石を立てて使用しているところもある。上部には20～30cm大の塊石・板石が葺かれているが、トレンチ内では上端まで確認できなかった。

東壁土層断面において52.000mまで地山が確認でき、2段目までは確実に地山を削り、段を構築し葺石を葺いている。葺石の残存状況はくびれ部付近が一番良く、くびれ部から離れるごとに石が抜けるなどの転落石が目立ち、前方部側ではテラス部分自体が流出している箇所もある。第11トレンチの葺石は第10トレンチに比べて残りは良いが、第11トレンチの中だけで比べると残りの良い場所悪い場所があり、やはりくびれ部付近が最も精緻に積み上げているようである。

遺物について(第29図)

41は第5トレンチにおいて盗掘土中より出土した石棺片である。3方向に面を持ち、手鉋痕が良く残っている。3面すべてに朱が付着しているため、この破片は石棺の形状から棺身の舟縁状突帯のものと考えられる。南側において突帯が欠けた状況はうかがえないため北側のものと考えられる。

42は第7トレンチにおいて出土した黒色土器碗の口縁部片である。43は第5トレンチ主体部盗掘坑より出土した杯の口縁部片である。ほかに土師器の体部片が数点出土した。44・45・46は第10トレン



第29図 長崎鼻古墳出土遺物実測図

ちより出土した土器片である。44は小型丸底壺の口縁部片で、45・46は土師器の体部片であり、44は外面にタタキ、内面に刷毛調整を施す。45は内外面刷毛調整である。46は外面にタタキを施している。44は1段目テラスの直上と1段目葺石斜面部にかけて出土した。出土状況から流れてきたものと考えられるが、流土中ではないことから墳丘上部にあったものが破碎し墳丘が崩壊する前に流れたものと想定される。また、11トレンチから土師器の体部片と思われるものが3点、4トレンチからは4点出土したが摩滅が激しく器種等は特定できなかった。

### 埋葬施設の構造

#### 墓壇・石槨構造について

第4・5トレンチにおいて前述したように、地山を掘り込んで墓壇を造っていることが確認でき、第6トレンチ側では盛土を掘り込んで墓壇を形成している。墓壇の形状については第4・5・6トレンチにおいて墓壇の肩部が確認でき、肩部からの緩やかな掘り込み面しか現状で確認できない。石室下端の位置までこの緩やかな角度で続くとは考えられず、石槨範囲ではさらに深く掘り込んでいると考えられるので墓壇は2段掘り込みの可能性が高い。また、第5トレンチ前方部側において石槨外部でも盛土が深い位置まで確認でき、前方部側を深く掘る形で掘られている。これは石槨搬入をし易くするための作業道であったと考えられ、石槨棺身に縄掛突起が無いこともこれを裏付けるものと考えている。

墓壇の平面形態はトレンチ調査のために部分的な範囲や形態しか分からないが南北7.9m・東西8.5m以上の前方部側が深いII状に掘り込んだものである。

#### 床面構造

墓壇床面に5～8cm大の円礫・角礫を全面に40cmの厚さで敷き礫床を形成している。礫床には石室内だけでなく石室外でも朱の付着が確認できる<sup>(7)</sup>。

石槨は棺を安定させて置くためにこの床面でもある礫床をU字底にし、さらに安山岩の板石を2枚重ねるようにして石槨下部に斜めに置いている。棺床部分だけに礫を敷くのではなく、石槨部分全体の床面には礫床を厚く敷き棺床も兼ねているようである。これほど厚く礫床を敷くのは排水だけでなく、石槨・石槨壁体の安定を図るためと考えられる。

#### 壁体構造

壁体は、20～30cm大の安山岩の扁平な石を礫床の上に長辺を内側に向けた形で直接置き垂直に立ち上げ築かれている。礫床面はU字底の棺床を兼ねるために棺身を1/3ほど埋めた状態であり、壁体は礫床直上からはじまるにもかかわらず棺身底よりも高い位置から築かれている。

石室外にも礫床上面に30～40cm安山岩の塊石が1段だけ置かれている<sup>(8)</sup>。石室壁体の裏込めに現状では乱雑に積まれた部分と垂直上に積まれた部分も確認でき、精緻な壁体構築部分と墓壇の間を埋めるように石が乱雑に築かれている状況がうかがえる。

#### 上面構造

トレンチの関係や盗掘を受けているために石室上部構造については確定できないが、石槨壁体は石槨に近接し垂直に積み、棺蓋よりそれほど高くない位置まで築かれる。攪乱土内から長さが1m程の割れた棒状の石材や石槨上部に1mに近い長さを持つ安山岩の板石を確認できることから、石室上部は何枚かの幅広の板石によって蓋をされていたと考えられる。石槨外面は板石で覆われることが全面からうかがえ、第4トレンチなどの状況からこの板石は石室天上部に向かい整地な配列を持ちつつ構築することも考えられる。

石槨外面は第5トレンチで確認できた16・17層の薄い粘土層によって覆われている。これは第4トレンチなどでは確認できないが、石槨内への水の浸水を防ぐなど石槨保護の意味を持つと考える。

#### 石槨

石槨は朱が全面に塗布された状態で出土している。蓋が割れていることや、盗掘時の埋土除去中に石槨片が出土していることから、石槨は盗掘時にかなり打ち欠かれていることが伺える。

石槨の形態については、片側半身部しか正確に分からないが、長さは約2.1m・幅1m・高さ0.8mを測り、棺身横断面形態は半円形をなし、合せ口横には幅・高さ共に8cmほどの高い船縁状突体を持つ。棺蓋は扁平な蒲鉾板状をなし、長側部に長さ30cm高さ4cmほどの横に長い平面台形状の縄掛突起を3

間持つ。短辺部は棺身・蓋共に縄掛突起を持たず垂直に切られている。石材は九州の阿蘇熔結凝灰岩製(黒色系)のものである。菊池川中流域のものと考えられている<sup>(9)</sup>。

#### 墳丘形態の復元(第26図・付図1)

全長45.8mの規模をもち、香川県下でも良好な葺石を残す前方後円墳である。後円部は現状では3段築成と考えられるが、小段もしくは4段目がある可能性もある。直径は1段目径約27m・2段目径22.8m・3段目径17.5m、後円部の残存高は約5.2mである。くびれ部での幅は1段目17.9m・2段目13.8m・3段目は不明である。くびれ部での各段のテラス幅は80cmを測る。前方部は長さ22mの3段築成と考えられている。最大幅は端部の残りが不明瞭であり、第7トレンチにおいて1段目が確認できないため断定はできないが、2段目16.5m・3段目12.5m、前方部残存高は3.050mを測る。葺石は基本的に20cm大の安山岩の塊石を小口積にしたものと厚さ8～15センチの板石積み上げたものによって形成されている。

#### 各段の高さからの墳丘形態の考察(第26図・付図)

後円部からくびれ部の段の高さは、各トレンチでほぼ同レベルに3段を持つため同じような高さになる。1段目は約1m・2段目は約1.3m・3段目は約2.9mであり、後円部はほぼ水平に段が巡っている。ただ、くびれ部の第10トレンチでは段の高さは1段目約0.8m・2段目約1.6m・3段目約2.5m、第11トレンチでは1段目約0.9m・2段目約1.4m・3段目約2.5mと若干段の位置が高くなる。

各トレンチ内では4段目と考えられる場所は確認できないが、3段目が非常に高く第10トレンチ3段目では葺石の葺き方が違う箇所があることから、4段目というほどテラス及び段により構成されたものはないが、現状で3段目より上の位置に葺石列が実見できるので、小段とでも呼ぶべきものが存在する可能性がある。

前方部側面部については、南側において第11・3・8トレンチで良好に3段築成が確認できる。段築はくびれ部から前方部までほぼ水平に築かれ精緻な企画性を見いだせる。北側第10・2・7トレンチにおいて段構成は3段築成と考えられるが、前方部側の残存状況は悪く明確に確認できない。第10トレンチくびれ部においては3段築成を認められるが、前方部側になると第2トレンチでは残存状況が悪く3段築成と考えているが詳細な位置は確認できない。第7トレンチについては2・3段目の葺石しか確認できないが、3段目については端部基底石とつながるなど良好な状態を示す。2段目においては平面形態でも前述したように中央部に向かい裾部が屈曲し、裾部の位置が判り、端部基底石よりも低い位置である。第7トレンチにおいて1段目の葺石が確認できないことについてはトレンチ外に存在する可能性もあるが、南側側面と明らかに葺石の葺き方など異なる状況をなすので、北側については南側と違い端部付近まで1段目が築かれない可能性がある。

前方部の南側では1段目0.6m・2段目1.1m・3段目1.1mであり水平を意識して作られている。しかし、前方部基底石の築かれるレベルは後円部の基底石レベルと合わず若干前方部側が高い。これは地形の影響と考えられる。北側については葺石などの残存状況が非常に悪く段の高さは良くわからないが、第7トレンチについては2段目が約0.7mの高さを持つと考えられる。くびれ部からの各段の状況を見ると水平には築かれず、現状では前方部側に向かって各段の基底ラインは若干立ち上がっているようである。

裾部については現状では葺石がほとんど確認できない。第8トレンチについては北側くびれ部から前方部墳頂を通り第8トレンチ裾部に抜ける山道が通過しており、現状で第8トレンチ裾部に葺石が確認できないのは道使用の際に葺石が壊された可能性もあるが、側面部と端部の基底石の高さが合わないことなどから考えるとともとなかった可能性が高い。第7トレンチについては、前述したように3段目側面基底石は端部基底石につながるが、2段目については裾部に不整な葺石が認められるが、裾部のみであり、1段目については葺石列自体をトレンチ内では確認できない。

前方部端については尾根を掘り割りして墳端を形成しているため、端から中央に向かって△状にせり上がっている。また、1段しか段は確認できず、側面部から端部にかけての取り付け方は左右で残存状

況が違うためによく分からない。墳域を区画するために尾根を掘り割って墳丘を形成するが、墳丘端部を水平に築かない、側面と段が合わないなど区画についてはかなり意識が強いが、前方部の端部形状を重視しているとは言いがたい。

## 葺石

### 葺石の葺き方

各トレンチとも葺石の葺き方は各段基底石に40～50cm大の安山岩の塊石を使い、その上に20～30cm大の安山岩塊石・安山岩板石を使い構築している。くびれ部南側第11トレンチについては1段目後円部側において水平に板石を使い構築する部分があり作業単位を示すものである。後円部と前方部を比べると、後円部の方が大ぶりの石を使い築かれている。また、第10・11トレンチを比べると各段の基底石の大きさは第11トレンチに比べて第10トレンチはやや小ぶりのものを使い、他の石についても若干小ぶりのものを使う。さらに屈曲部の基底石は第11トレンチにおいて2石により明確に屈曲を形成するが、第10トレンチにおいては2石の間に隙間があり、小石を噛ますなど設置の仕方が粗い。基底石以外でも葺石の葺き方は北側が粗く粗雑な造りである。

墳丘形態について南側と北側が違う可能性について述べたが、この葺石の大きさや葺き方の違いは北側が手を抜く、あるいは良く見られる方向ではなかった可能性を示すものではないだろうか。また、後円部と前方部の石材の違いについても、後円部が先に造られたために前方部については小ぶりの石しか使えなかったのではないかと考えられる。

### 葺石目地について(第27・28図)

何箇所かのトレンチで葺石構築手順や作業単位を表す目地を認めることができる。第11トレンチでは1段目において基底石の上に幅20cmほどの厚い板石などを幅1mごとに縦方向に4段ほど積み上げている状況が見受けられ、これは作業単位を表すものと考えられる。また、後円部1段目中ほどにおいて長軸30cmほどの板石を横方向に並べている箇所があり、これについても横方向での作業単位であると考えられる。

この後円部南側は葺石が水平に築かれる部分が良く認められ、かなり精緻に葺石を築こうとした事がうかがえる。第10トレンチにおいても同様に幅1mごとに縦に石列が認められるが、第11トレンチのように横方向の作業単位の石列は見受けられない。第10トレンチの方が葺石の葺き方が基本的には荒いのは、この横方向の作業単位が確認できないことにも起因すると考えられる。

### 墳頂部における三角形の小段について

後円部から前方部に向かう斜面に幅3m・長さ1.5mほどの三角形の小段がある。この三角形の小段は中央部には石がない状態であるが、石の葺かれ方を見ると抜けたり壊されたりしたのではなく、もともと中心の石を抜く形で石を築いていることがわかる<sup>(10)</sup>。この前面に3mほど5センチ大の小礫が多数敷き詰められている。用途は良くわからないが、前方部側から後円部に向かう場所に築かれており古墳祭祀に伴う何らかの施設もしくは古墳装飾と考えられる<sup>(11)</sup>。

## 注

(1) 「長崎鼻古墳」『木田郡誌』1940

(2) 小礫については墳丘頂上部全面を覆っていたとは考えにくく、前方部の一部のみで敷かれた可能性がある。

(3) 前方部裾についてはどの段についても明確に裾を持つとは言いがたく、第7トレンチ3段目しか確認できないことから1・2段目に付いては裾を明確に作り出すことはないのかも知れない。第8トレンチについては裾部が道に利用されていたために石が抜かれたとも考えられるが、第7トレンチにおいても2段目などで裾部に異形の葺石しか確認できず裾部の作り方は良く分からない。第8トレンチも第7トレンチ2段目のような異形葺石であったために流出しやすかったとも考えられる。

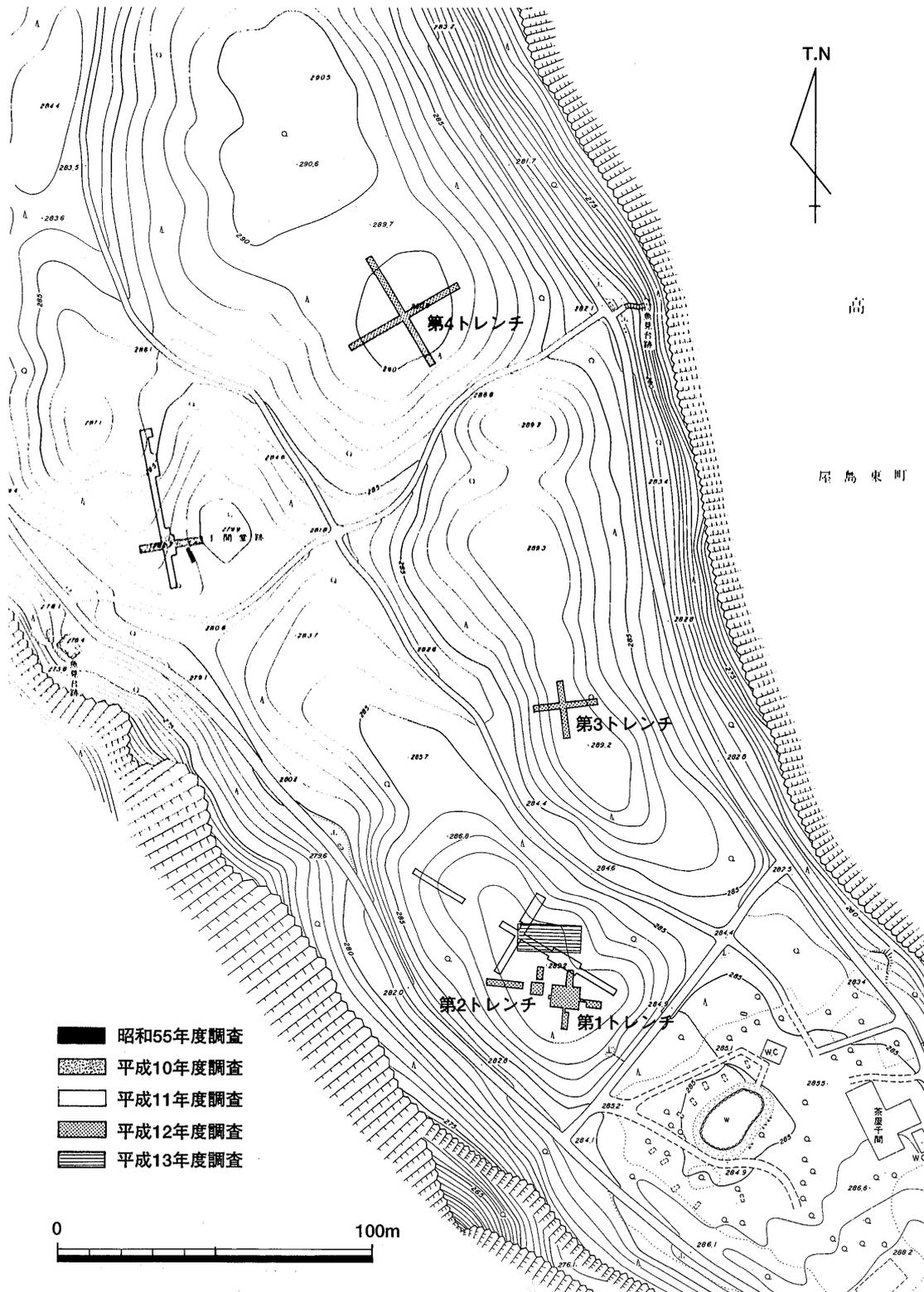
(4) 第7トレンチ3段目においては前方部端と同じ高さに築かれ、裾部がつながることが分かる。第8トレンチについて側面部と端部の高さはどれも一致せず基底石がつながるとは想定しにくい。側面形態は両者で違う可能性がある。

(5) 注(1)と同じ

- (6) 石材片は棺身の船縁状突帯片と考えられ、南側において船縁状突帯は端まで実見できるので北側のものと考えられる。つまり盗掘時に蓋を開ける際に壊れたものと考えられ、石棺蓋が半分に割れているのもこの際の事と考えられる。
- (7) 礫床は石室内だけに置かれているのではなく、石室外にも礫床が確認できることから墓壙床面全体に敷かれていたと考えている。石室の安定だけでなく排水の意味合いも持つのかもしれない。礫床の朱については石棺下部だけでなく離れた位置からも確認でき、礫床を築く際に塗布されていた可能性と、盗掘時の攪乱のために床面に水が浸水し石棺の朱が流れてついた可能性もある。
- (8) 石室外について礫床上面に安山岩塊石が1段築かれるだけでなく、壁体外側は垂直に何列か立ち上がり、その外側は任意に石が放り込まれた状態である。
- (9) 石材については宇上市教育委員会の高木恭二氏のご教示を得た。棺身と蓋の形は菊池川流域で見られる石棺形態であるが、蓋と身のセット関係は菊池川中流域にはみられないものである。また、前述した『木田郡誌』に記載されている通りならば、棺身内面の掘り込みに付いて石枕だけでなく脚部まで掘り込まれているものは類例が知られておらず興味深いものである。
- (10) 埋葬施設の作業道がこの付近まで掘り込まれて入ると考えられ、作業道を埋め戻す際の盛土範囲に築かれて入るとも考えられる。
- (11) 後円部段は3段目が一番高く第9トレンチ三角小段・第10トレンチ小段（補測でも小段がある可能性あり）などから4段目の可能性もある。

### 第4節 北嶺山上部の調査

史跡天然記念物屋島基礎調査事業において、開始当初から屋島に所在する文化財の実体を把握するには北嶺の調査が不可欠であることは十分認識していたが、北嶺山上部は環境庁（現環境省）の所管であり、平成7年度に北嶺での確認調査について協議をもったが、北嶺を含めた屋島は国立公園に含まれることから了解が得られなかった。その後、平成9年度に入り、調査の方法・時期・面積等を明らかにし環境庁の係官と協議を行った結果、了解が得られたことにより、平成10年度から北嶺の確認調査が行えるようになった。この結果、以下のような調査成果を得ることができた。



第30図 北嶺調査地トレンチ配置図

### 北嶺における既往の調査について

#### 昭和 55 年度確認調査（第 30 図）

北嶺山上部を東西に抜ける遊歩道の内、北側の遊歩道を西側から入ったところに湿地がある。調査対象地となっている湿地付近を千間堂と呼び、鑑真和尚がこの付近に屋島寺の前身である堂を建立したとの伝承からこの名前がある。北嶺西側を回る遊歩道から湿地への入口には千間堂跡の説明板が存在する。以前から北嶺山上部で瓦が出土したと言われているが、正確な出土場所は不明である。昭和 55 年度には湿地の最低部にトレンチを設定し確認調査が行われている。その成果によれば、上から第Ⅰ層 表土層、第Ⅱ層 赤褐色土層、第Ⅲ層 黒褐色土層、第Ⅳ層 黄褐色土層（パイラン土層）、第Ⅴ層 黒色土層、第Ⅵ層 赤褐色粘質土層の堆積が認められている。しかし排水施設や当初期待された瓦は確認されていない<sup>(1)</sup>。

#### 平成元年度確認調査（第 30 図）

平成元年には北嶺園地（芝生広場）に存在する既設公衆用便所の老朽化に伴う新築工事に伴い香川県教育委員会が試掘調査を実施している。建設予定地に十字トレンチと北側便槽埋設部に 1 箇所トレンチ調査を行っている。土層堆積はⅠ 園地整備の為の粗砂層（厚 10cm）、Ⅱ 旧表土（2cm）、Ⅲ 黄褐色砂質土（15cm）、Ⅳ 淡紫灰味褐色砂質土（25cm）、Ⅴ 淡青灰味黄色粘質土（38cm）、Ⅵ 灰味黄色粘質土（70cm）、Ⅶ 礫層（15cm 以上）であり、遺構は検出されなかったものの、Ⅲ層から須恵器、土師器の小片が出土している<sup>(2)</sup>。

### 北嶺における調査について

北嶺においては前述のとおり屋島寺の前身である千間堂の地名が残り、瓦を採集したとの話が伝わっていたが、なかなかその実体が判明しなかった。北嶺の調査を行うにあたり、昭和 55 年に調査を行った湿地部分については、その西側が土塁状を呈していることを確認している。この土塁状の高まりが人工的に作られた構造物であると考え、土塁状遺構の内部構造・築造時期を確認する為、確認調査を行った。

### 北側湿地部分の調査

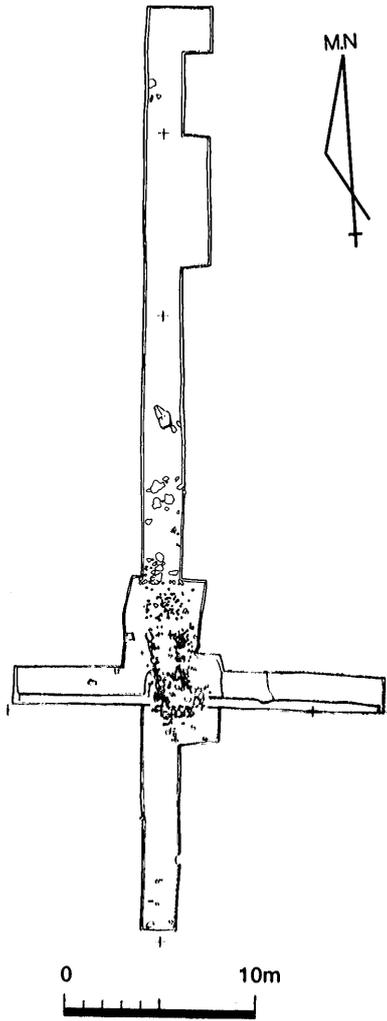
#### －平成 10 年度第 2 調査地点・平成 11 年度第 2 調査地点 第 1 トレンチー（第 31 ～ 33 図）

平成 10 年度は以前から千間堂と呼ばれている湿地の西側にある土塁状の高まりの構造を確認する目的で土塁状の高まりを横断する東西に長いトレンチを設定し下部の状況を確認した。トレンチの規模は長さ 19.5 m、幅 2.0 m である。

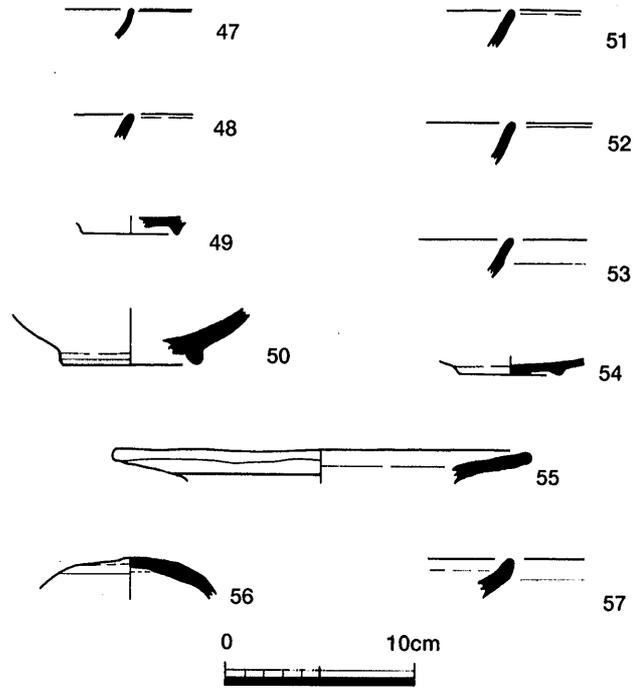
平成 11 年度は第 28 図に示したとおり平成 10 年度に実施した第 2 調査地点に直行する南北 50 m、幅 2m のトレンチを設定した。これは平成 10 年度の確認調査で南北方向に伸びる安山岩を使用した石列を確認し、石列の北端は確認したものの、調査範囲が狭いのに加え調査期間も十分でなかったことから南端は確認できなかったことによる。平成 11 年度の調査では石列の延長およびその性格を確認すること、それ以外に埋没している遺構を確認するのを調査目的とした。

#### 石列（第 33 図）

平成 11 年度の確認調査で石列の全容が判明した。一部石積みの崩落している箇所もあるが、石列の規模は西側で南北 4.80m、東西 1.60m の L 字状に並べられている。石列に使用されている石材は周辺部で採れる安山岩を使用している。西側石列を細かく見てみると平成 10 年度のトレンチと平成 11 年度のトレンチが交差するあたりにおいて地形が緩やかに窪む。石の置き方も他の箇所は使用されている石が一石なのに対してこの窪んだ部分については 2 石積み上げている。この窪みが水の通り道であることからより重点的に石を積んだものと想定される。平成 10 年度の確認調査では、東側にも直線的に石が並んでいるようにみられたことから、湿地を巡る土塁状の高まりの下部遺構（補強材）と想定したが、昭和 55 年度の調査を十分検討していなかったことにより、これらの石列の範囲が確認調査を行ったトレンチ付近に限定されること、石列が確認された箇所が、湿地周辺部における標高の最低部ではないことから一旦は別の用途を考えた。その後、正確さには欠けるものの、昭和 55 年度の調査地測量図面を北嶺 1,000 分の 1 の地形測量図面と合わせるとトレンチは重ならないものの非常に接近した位置に設定していることが判明した（平成 10 年度の確認調査時南壁の土層には攪乱されたような状況は認められ



第31図 北嶺北側湿地部分トレンチ平面図



第32図 北嶺北側湿地部分トレンチ出土遺物実測図

ていない)。湿地最深部は土塁状の高まりの東側に存在し水の流れは土塁の方に向かっていることが当時の地形測量図から読み取れる。このことから湿地に多くの水を溜める場合、最も弱い部分を補強し、高くする必要があったことからこのような地形になったものと想定できる。以上のような調査結果より今回確認した石列は土塁の高まりの芯材（補強材）であると想定される。

#### 北嶺北側湿地部分トレンチ出土遺物（第32図）

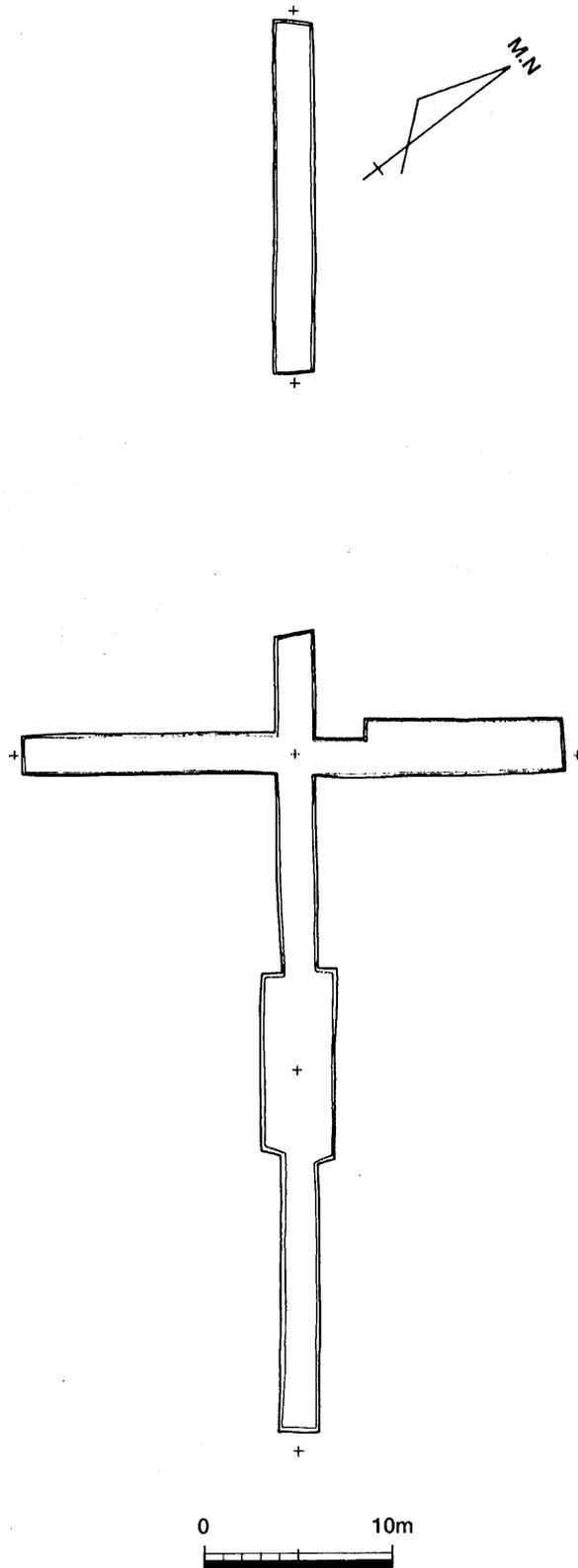
平成10年度のトレンチ調査では石列周辺で遺物が出土している。47～52は土師器である。47は器高が浅いことから杯になるかもしれない。48・51・52は碗の口縁部，49・50は碗底部である。49は高台の退化傾向が著しく，50はしっかりと高台がつく。53は口縁端部外面を強く横ナデをする和泉産瓦器碗の口縁部である。54は黒色土器の底部である。49の土師器碗の底部と同様に高台部の退化傾向が著しい。これらの出土遺物は11世紀代のものもあるが，全般的には12世紀末から13世紀初頭のもものが中心である。調査用基準杭から北へ24mで弥生時代後期末の広口壺の口縁部片55が出土している。口縁部内面には擬凹線が存在することから後期でも終末のものである。調査用基準杭から北へ26.5mでは須恵器杯蓋片56が出土している。平成12年度の概報報告時には須恵器の隙か壺の底部として報告したが，その後，口縁部がないため，細かな時期が押えられないが，天井部の篋削りが明瞭であり，径が小さいことからTK217か新しくなってもTK209段階のものであると考えられる<sup>(3)</sup>。基準ポイントから北へ38mの地点では，土師器甕の口縁部片57が出土している。細片であり，細かな時期の特定は困難であるが古代のものであろう。トレンチ北端では8～10世紀の土器片が出土しているが，細片であり図化できるものはない。当調査区では全般的に遺物の出土量は少ない。

#### 平成11年度第2調査地点 第2トレンチ（第34図）

第1トレンチから南へ120m，芝生広場から北へ15mの位置において南北76m（一部断絶），東西29mの変形十字トレンチを設定し，遺構・遺物の確認を行った。調査の進展に伴い遺物が多く確認された箇所は随時トレンチを拡張し調査を行った。トレンチからは木の根による攪乱のためか明確な遺構は



第33図 石列平面図・土層図・立面図

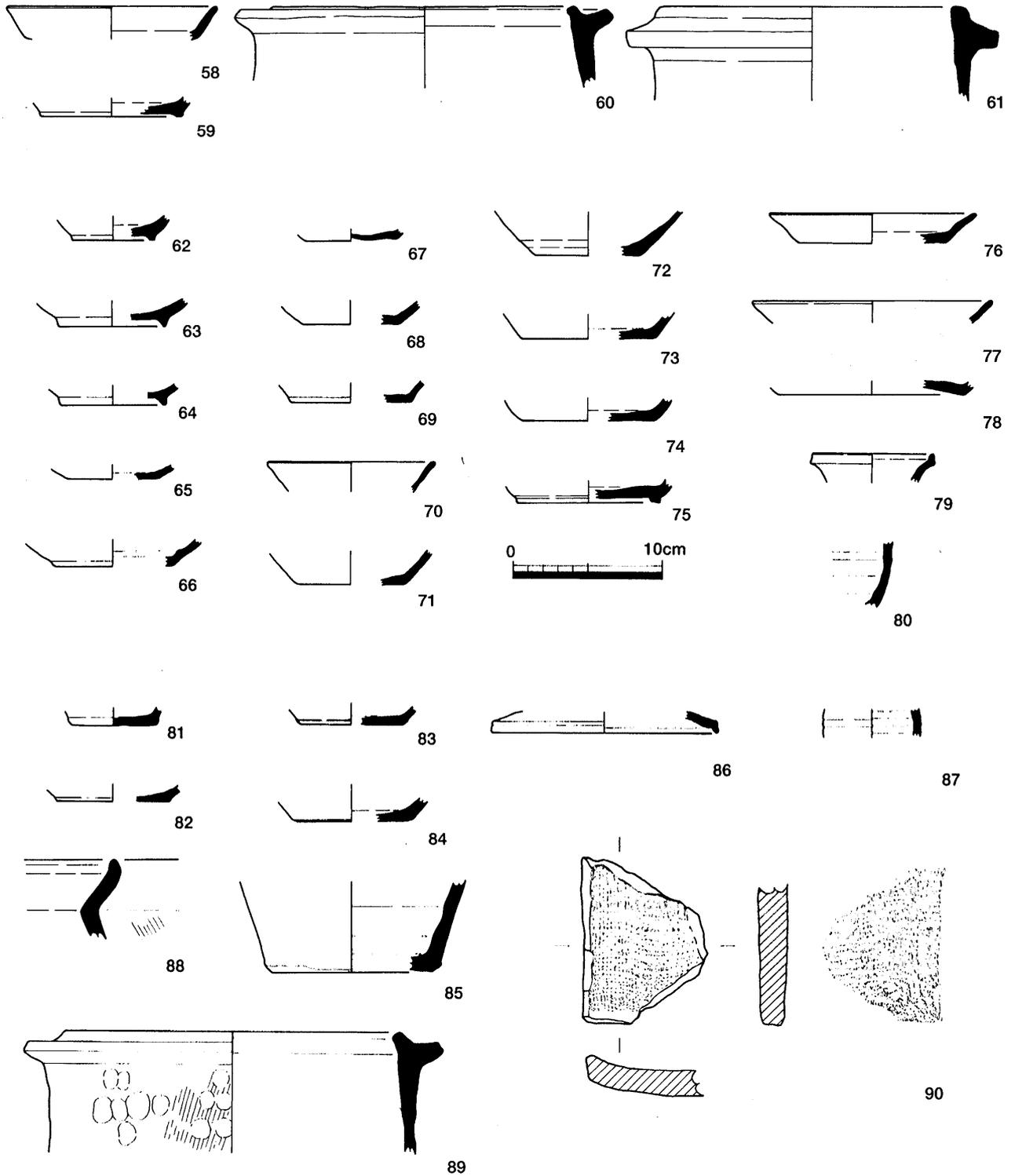


第34図 平成11年度北嶺第2トレンチ平面図

確認できなかったものの、出土遺物量に差はあれ北側トレンチを除くトレンチ全域から遺物の出土がみられた。特筆すべきは9～10世紀と考えられる土器に混じり平瓦が出土したことから、北嶺で瓦を採集したという話の裏付けが取れ、伝承の域からでなかった屋島寺の前身である千間堂が近くに存在した可能性が高いことがこの調査で強くなった。

平成11年度第2調査地点第2トレンチ出土遺物(第35図)

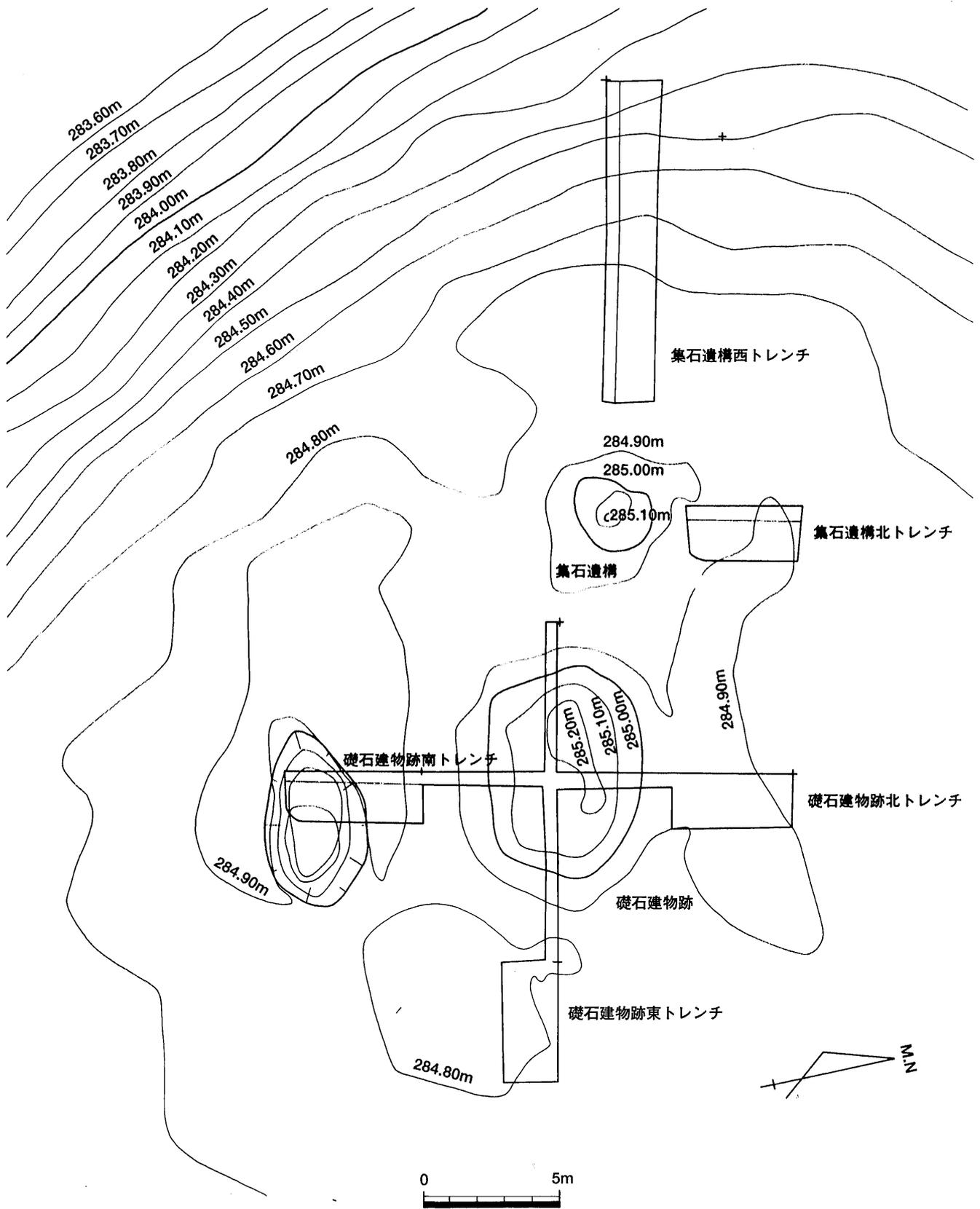
58～61は東西トレンチの西側から出土した遺物である。最も近い遺構は集石遺構である。58は須恵器の皿である。59は杯身の底部である。やや退化した高台部がつく。60・61は土師器羽釜である。62～80までは東西トレンチの東側から出土した遺物である。近くに明確な遺構は存在しないものの比較的多くの遺物が出土した。62～64は黒色土器の椀である。65・66は土師器の杯である。67～74は須恵器の杯である。底径の違いや器壁の違いが時期差を表すものと考えられる。75は高台をもつ杯底部である。76～78は須恵器の皿である。79は長頸壺の口縁部である。口縁部の径が小さいことから多口瓶の口縁部である可能性が考えられる。80は長頸壺の体部片である。内面にロクロ痕が顕著に残る。81～90は南北トレンチから出土した遺物である。遺物はトレンチ中央部の付近で多く認められた。近接する遺構は基壇をもつ礎石建物跡である。81・82は土師器の杯である。81は底部が垂直に立ち上がり、器高が深くなる形態をするものである。83・84は須恵器の杯である。85は長頸壺の底部である。粗いヘラ切りの痕跡を残す。外面には自然釉がかかる。86は須恵器の杯蓋である。9世紀中頃のものか。87は径が小さく内面にロクロ痕が顕著に残ることから壺の体部片であると考えられる。88は土師器の甕片である。89は土師器羽釜である。90は須恵質の平瓦である。凹面には破れた布目痕、凸面にはタタキ痕が認められる。以上の遺物は一部9世紀後半まで遡るものも認められるが、全般的には10世紀の前半を中心とするものが多く認められる。これは周辺部の調査成果と同様の傾向を示す。



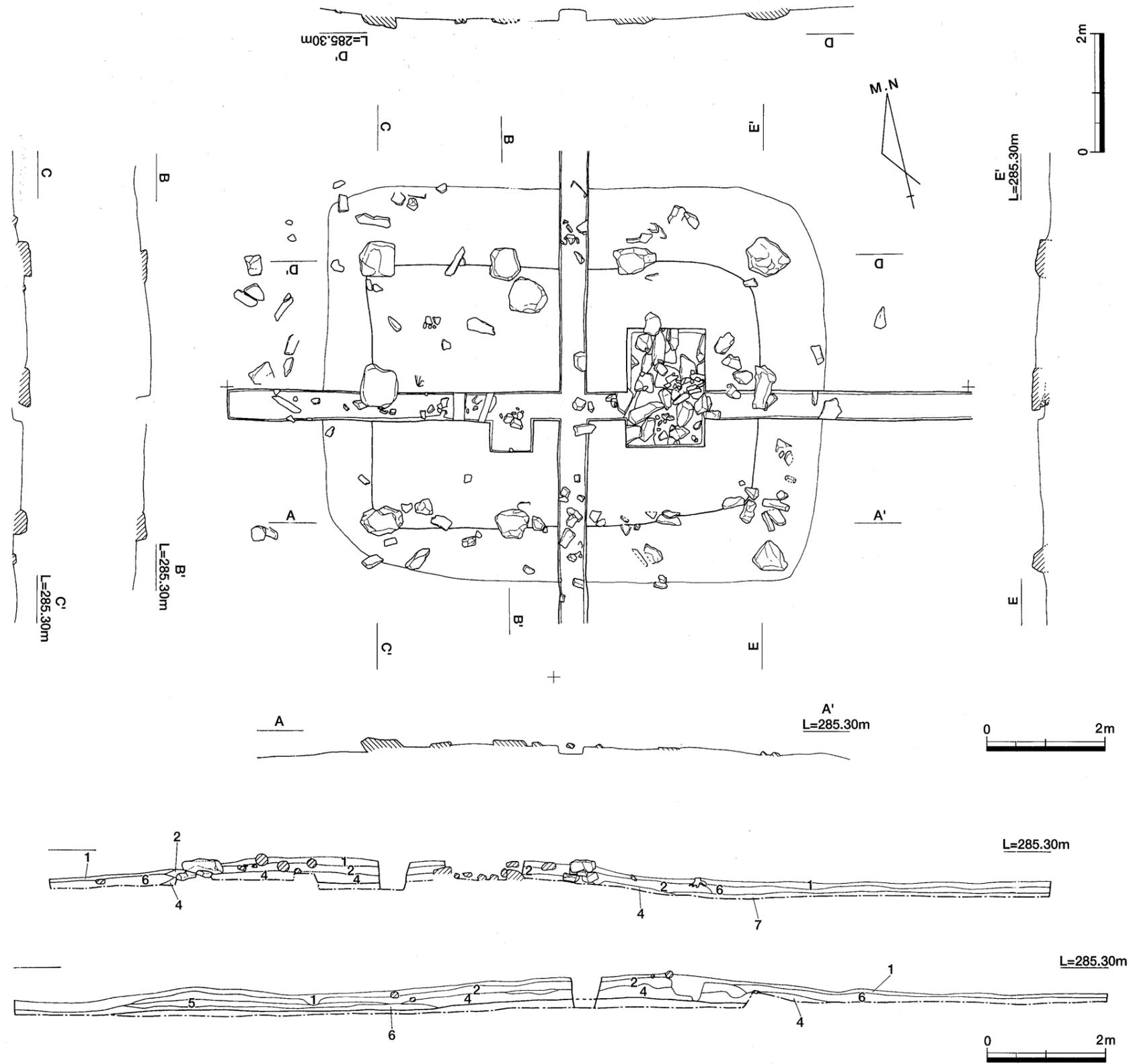
第35図 平成11年度北嶺第2トレンチ出土遺物実測図

礎石建物跡 -平成12年度第1トレンチ- (第37図)

平成11年度の確認調査と併行して行っていた分布調査で確認した遺構である。分布調査では礎石建物跡の基壇上で須恵器多口瓶と考えられる破片を採集したことにより屋島寺の前身で北嶺にあったと



第36図 平成12年度調査地周辺地形測量図



- 1. 表土 (腐植土)
- 2. にぶい黄橙色シルト質極細～細砂 (にぶい黄橙色土を若干含む) 10YR7/4
- 3. にぶい黄橙色シルト質極細砂 10YR7/4
- 4. にぶい黄橙色シルト質極細～細砂 (10YR6/3 黒褐色土のブロックを多量に含む) 10YR7/4
- 5. 灰黄褐色シルト質極細～細砂 (10YR6/2 黒褐色土のブロックを含む)
- 6. 明黄褐色シルト質極細～細砂 10YR7/6

第37図 礎石建物跡平面図・土層図・断面図

される千間堂跡である可能性が高まった。このため、基壇をもつ礎石建物跡の性格を確認するために平成12年度にトレンチ調査を行い下部の状況を確認した。

調査前の状況では基壇は裾が東西8.50m、南北6.60mの範囲、これよりも内側の東西6.50m、南北4.40mの範囲が周囲の地盤より40cm高く平坦に作られている。いずれの礎石も上部の平坦地よりやや外側にあるが、これは長年の風雨によって基壇造成土が崩落したもので、本来の基壇上部平坦地は現在よりもやや広く礎石も平坦地に置かれていたものと想定される。

礎石建物跡の規模は東西3間、南北2間の規模をもつ、南東隅とその西側の2つの礎石が移動しているが他の礎石については原位置を保っている。礎石は周辺で取れる安山岩を使用し平面形に統一性はないが一辺が60cm程度のものが多く厚さは20cm程度である。礎石の下には小振りの安山岩を据え礎石が沈まないようにしていることが、平面および断面で観察できる部分で確認できた。この状況から礎石の下はすべて基礎石を据えているものと想定される。

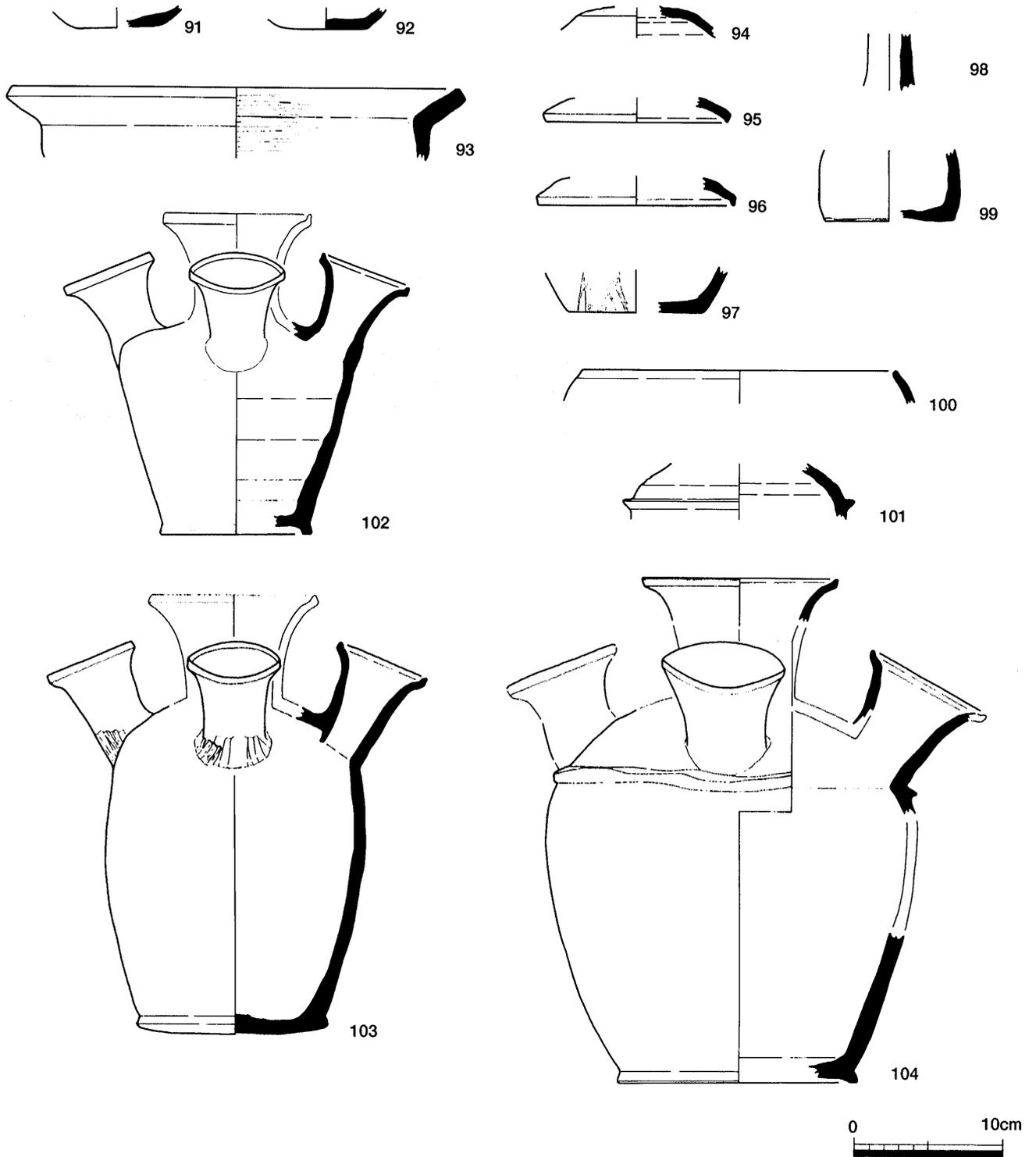
基壇の内部状況を確認するために設定した十字トレンチの東側において基壇の天場から20cmのところから安山岩がまとまってみられたことからトレンチを拡張し安山岩の広がりを確認した。集石は南北2.0m、東西1.5mの範囲に広がっていることが確認された。安山岩の集石上では須恵器多口瓶が破片となって散乱している状況が見られた。

基壇東側で確認した集石については、十字にトレンチを入れた他の箇所では認められないこと、集石の上部で多口瓶の破片が多く認められたことから何らかの意図をもって埋められたものであると考えられる。ただし確認した集石には置き方に企画性は認められず、可能性として仏像を安置するための須弥壇が考えられるが、それならば集石は基壇よりも高くなるはずであり、今後の検討を要する問題である。平安時代半ば（9世紀）に創建された福島県磐梯町慧日寺では寺を造成する際に不必要な石を基壇中に入れる例が認められるという（京都大学上原真人氏御教示）。今回確認された状況はその可能性も考える必要がある。

基壇の土層は基盤層である7層にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）上に4層にぶい黄褐色シルト質極細砂（10YR6/3）がのり、この層を切り込む形で礎石が置かれている。この土層観察により、礎石は基壇が完成した段階で置かれたものではなく、基壇を構築している段階で置かれたことが分かる。この4層の上に2層にぶい黄橙色シルト質極細砂（10YR7/4）をのせ構築している。基壇の周辺には6層明黄褐色シルト質極細砂が認められる。この6層は南北トレンチの南側では2・4層より下で認められるが、他の土層での観察では2層より下には認められないという食い違いが認められる。この原因はこの基壇を作るために使用された土が遠くから運ばれたものではなく、周辺の土を掻き寄せて作られたことによるものであると想定される。

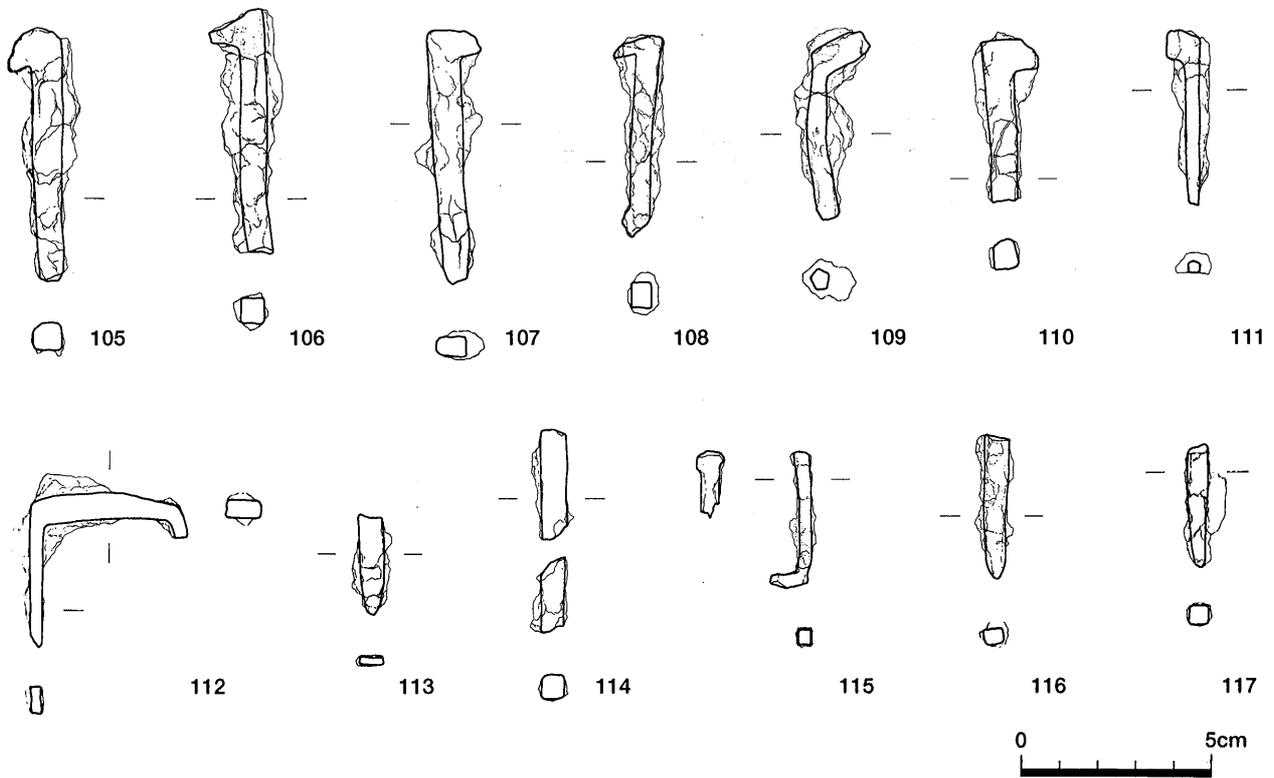
#### 出土遺物（第38・39図）

91～104は礎石建物跡基壇中から出土した遺物である。この内、102～104は上述のとおり基壇南側集石中からまとまって出土したものである。91・92は土師器の杯である。93は土師器の甕である。94～96は須恵器の杯身である。口径が13cm前後と小さい。97は須恵器の杯である。外面には火樨が認められる。98は破片であるが須恵器浄瓶もしくは水瓶の頸部であると考えられる。99は壺の体部である。底径の割に器高が低い形態をするものであると考えられる。100は細片であるが、鉄鉢の口縁部であると考えられる。101は肩部に断面三角形の突帯を巡らせる破片である。径がやや小さいが、多口瓶の肩部ではないかと考えられる。102はしっかりとした高台をもつ多口瓶である。体部の割に大きな注口部をもち、肩部は大きく張る。103は102と104の中間の法量をもつもので平底の底部をもつ。他の多口瓶に比べて細身である。断面観察では肩部の注口は外側から穴を空け、注口部を接合している状況が認められる。接合部外面にも篋状工具によるナデが認められる。104は出土した多口瓶中最大のもので、体部は全体に丸みをもつ。肩部に歪な突帯を1条巡らせる。特に注口部付近では下にさがっている。底部は退化傾向が強い高台が認められる。出土遺物中102の多口瓶の高台部がしっかりとしたものであり、杯蓋についても同様に古い要素をもつが、103の底部は高台をもたない平底であることや91・92の土師器杯などに新しい要素が認められることから、基壇の構築は10世紀前半頃に行われたものと想定される。105～117は鉄製品である。基壇に設定したトレンチの各所から出土した。105～111・114

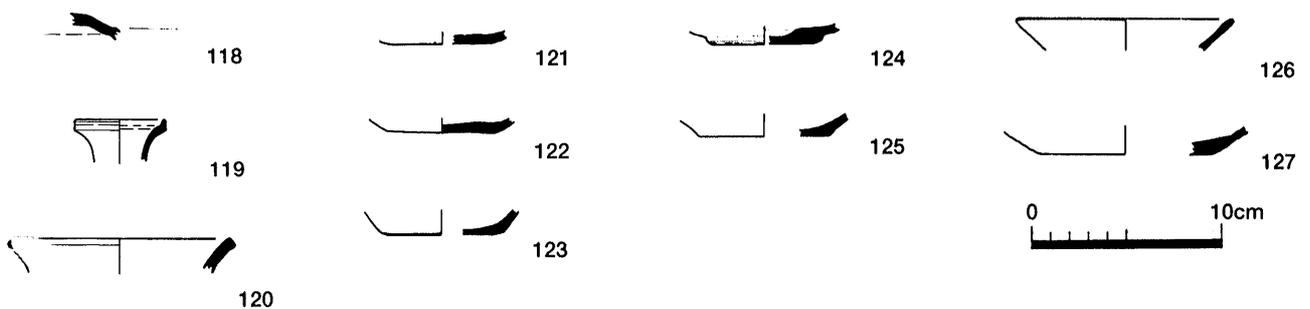


第38図 礎石建物跡基壇中出土遺物実測図1

～117は鉄釘である。いずれも途中で欠損しており完全な形のものはない。錆による腐朽が著しいが、いずれも全体の状況を知ることができる。出土した鉄釘は断面が四角形を呈するもので、頭は潰れている。断面の大きさにより2種類に分かれる。断面の一辺が5mm前後(105～110・114・116・117)のものと3mm前後(111・115)のものがある。112・113は現在別の個体に分かれているが、形状からすれば、本来は同一個体であると考えられる。二股に分かれた先端が扁平であり、小規模な筋交であると考えられる。



第39図 礎石建物跡基壇中出土遺物実測図2



第40図 礎石建物跡南トレンチ出土遺物実測図

礎石建物跡南トレンチ出土遺物 (第40図)

礎石建物跡の南側で他の遺構を確認する為に設定したトレンチである。118は須恵器杯蓋である。119は須恵器長頸壺である。口径が小さなことから多口瓶の注口部である可能性が考えられる。120は須恵器の壺である。121～127は土師器の杯である。底径が6～7cmのものがほとんどであり、124のように粗雑なつくりのものもみられる。127は底径も大きく口縁部も大きく開く形態をするものであると考えられる。

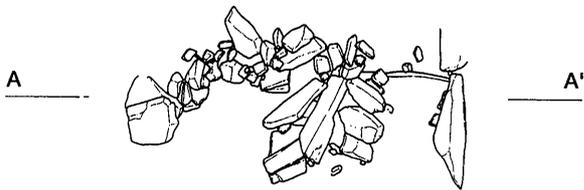
集石遺構 (火葬墓) -平成12年度第2トレンチ- (第41～43図)

前述の礎石建物跡と同様に平成11年度の分布調査で確認した遺構である。確認当初は南北7m、東西8mの範囲において安山岩の集石が認められ、集石の中央部には安山岩の板石を立て石槲状に囲んだ部分も認められた。このため、経塚の可能性が想定されたため、平成12年度に基壇をもつ礎石建物跡と合わせて調査を行った。

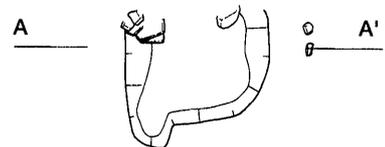
調査は、明らかに移動している石を除去し、元位置を保っていると考えられる石を残しながら集石の状況を確認した。分布調査の時点で集石の中央部に板石を使用した石槲状に囲んだ部分が認められていたことから、精査によって東側の区画石は下部が安定していないため元位置から移動していることが判



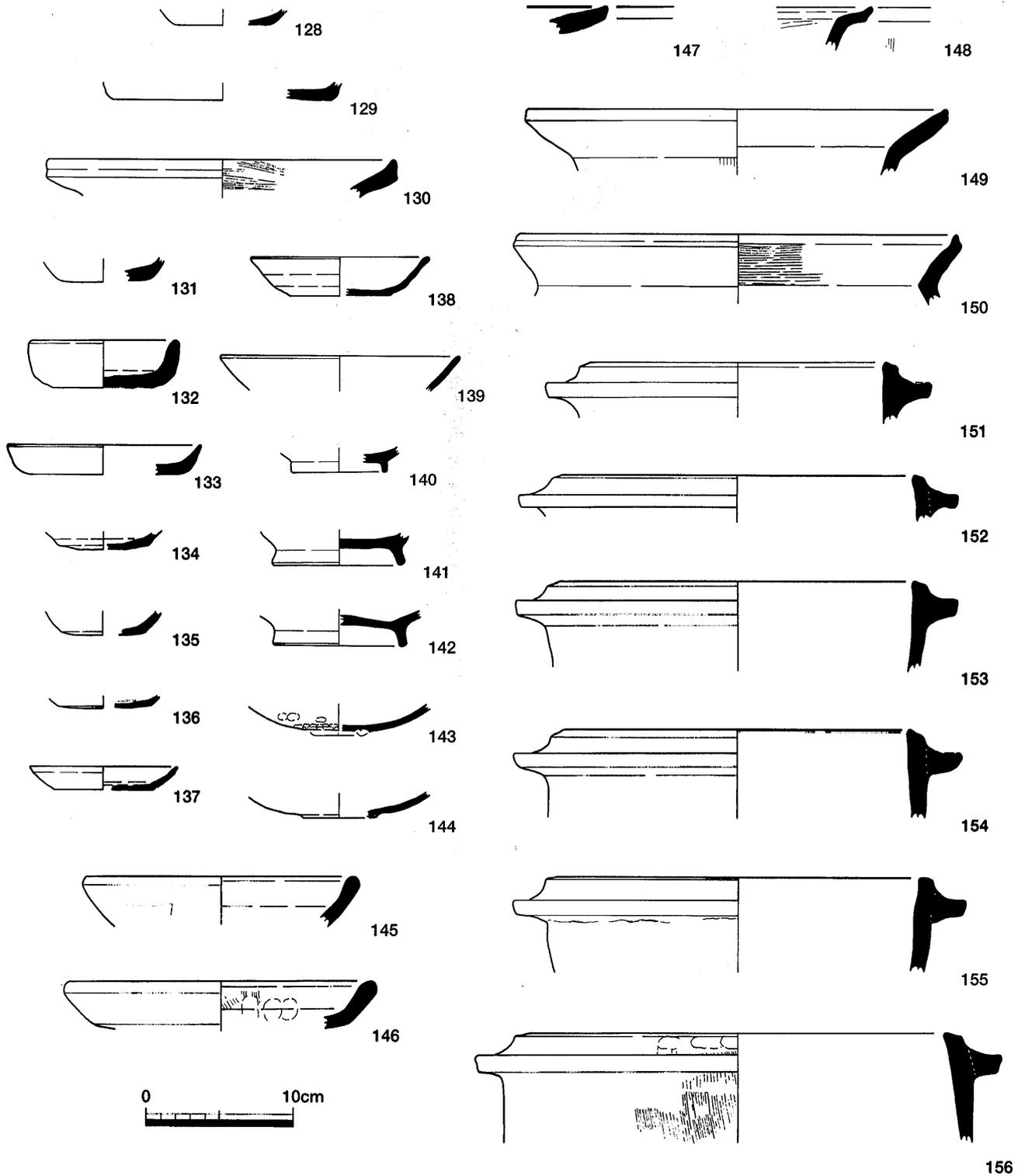
第41図 集石遺構（火葬墓）平面図・断面図



第42図 中央下部集石平面図

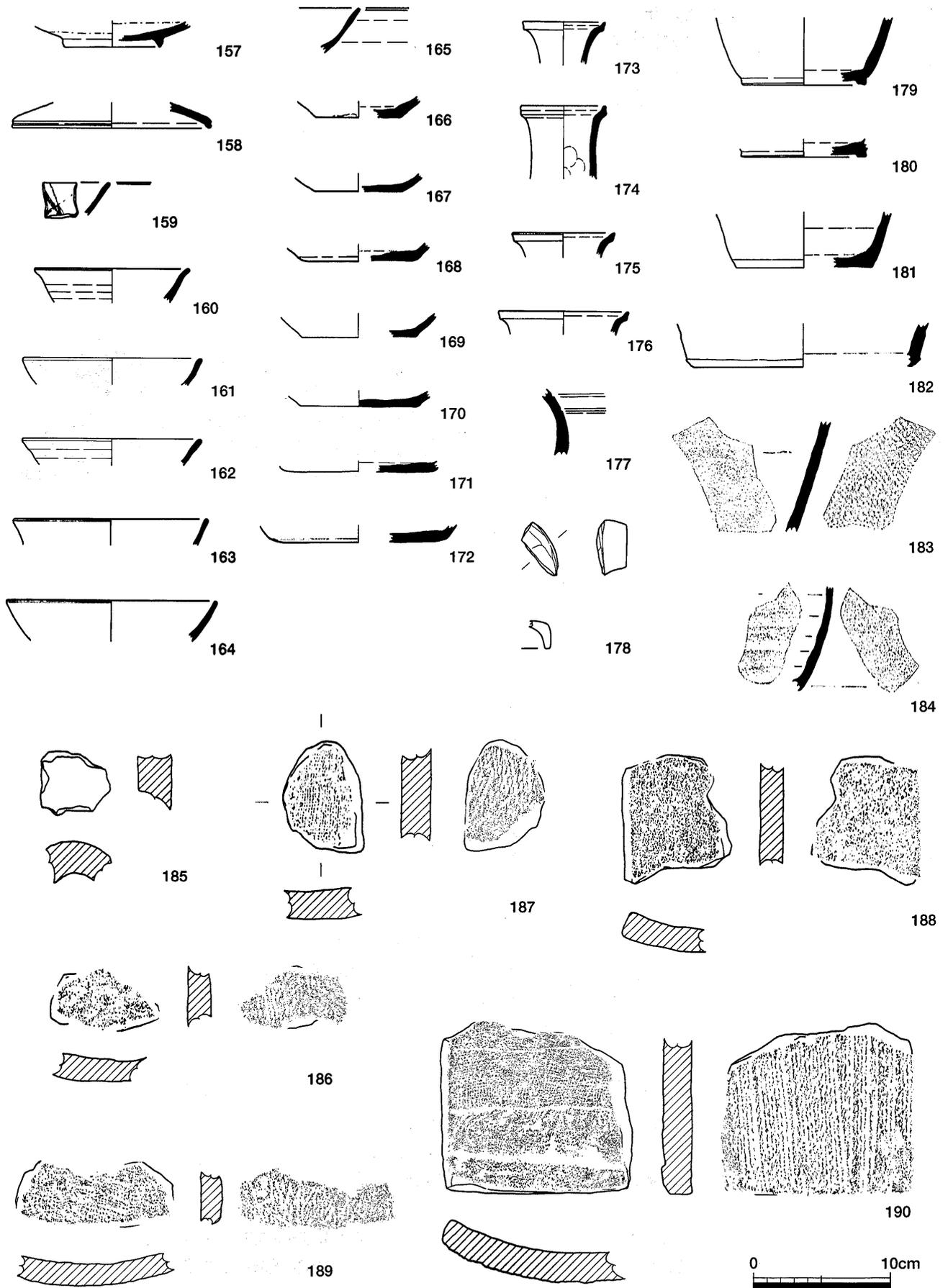


第43図 中央下部土坑平面図



第44図 集石遺構出土遺物実測図1

明した。発見当初から区画石が存在しない南側，下部が安定していない東側の状況が不明であるが，一辺が約2mの距離をおいて方形に区画されていたものと考えられる。北側区画石の30cm北側にも板石が3石並んだ区画列が認められる。その1m北側には元位置を保っていないが，本来は区画石に使用されたであろう直方体の安山岩が2石転がっており，区画石の残骸は東側区画石の外側にも散乱している。元の状態を復元するのは困難であるが本来2～3重に区画されていたものと考えられる。区画石と区画石の間は小ぶりの安山岩が充填されている。集石の散乱状況は南側，次に東側の順に著しく，盗掘を受



第45図 集石遺構出土遺物実測図2

けていることが想定された。集石の精査によって盗掘を受けている可能性が高いことから内側区画石の東側を半裁し下部の状況を確認した。区画石より外側にはトレンチを伸ばしていないため、下部の状況は不明であるが、区画石内側の集石について10～20cmの厚さが認められる。区画石の下部からは南北75cm、東西60cm以上の規模をもつ土坑を確認した。土坑の埋土は褐色粘質土の単層でしまりは良くない。深さは最も深いところで現地表面から40cmの深さをもつ。

出土遺物は土坑上部から土師器の破片が出土している他、集石中からは周辺部よりかき集められたと考えられる多量の遺物が出土した。この中には土師器・須恵器の日常雑器のほか、灰釉陶器皿・甗の羽口・平瓦なども出土している。

#### 集石遺構出土遺物 (第44・45図)

128～156のうち、143・144以外は土師器である。128～130は集石遺構の下部にある土坑上部から出土した遺物である。128は土師器の杯である。129は立ち上がりがきついが皿もしくは杯か。130は甗の口縁部である。口縁部内面にハケ目が認められる。133・137は皿である。137は薄手のつくりであるが、133は器壁が厚い。131・132・134～136・138は杯である。131・132以外は薄手のつくりである。139～142は土師器の椀である。いずれの個体も足高のしっかりとした高台部をもつ。つくりは丁寧である。143・144は瓦器椀である。口縁部を欠損するため、全体の状況は不明であるが、いずれの個体も器高は浅くなるものと考えられ、それに対応するように144の高台も退化が著しい。当地域で出てくる最終段階の瓦器椀であると考えられる。145・146は口径が20cm前後と大きく器高が浅い形態は他に類例をみないことからひとまず盤としておく。148～150は甗である。150～156は羽釜である。口縁部の形態の微妙な差はあるが、形態的にはほぼ同じである。157は灰釉陶器皿である。158は杯蓋である。159～170は杯である。164・165は他の個体に比べて法量が大きい。171・172は底径が大きなことから皿であると考えられる。193～177は壺である。この内、173～176は多口瓶の注口部になる可能性が考えられる。177は壺の肩部と考えられ、肩部には沈線が2条巡るようである。178は破片が小さすぎるため、全容を推定できないが、何かの蓋になるものと考えられる。破片は弧を描かず、円形にはならず、楕円形状を呈するものと想定される。天上部外面には手持ち箆削りの痕跡が認められる。179～184は壺の体部～底部片である。179・180には高台が認められるが、181・182は平底である。183・184は体部片あり、183の外面には格子タタキ、内面はナデ調整が認められる。184は内外面ともナデ調整を行い、内面はロクロ痕が明瞭に残る。185は甗の羽口である。先端部がやや黒色に変色しているが、明瞭に還元している部分は認められない。186～190は平瓦である。いずれも小片であり全容をつかめるものはない。いずれの破片も凹面は布目痕（一部に破れた部分も認められる）、外面にはタタキ板につけられていた縄目が顕著に残る。

以上が集石遺構から出土した土器であるが、古くは9世紀後半頃から10世紀前半頃の時期のものが多く認められるが、これらは東隣の礎石建物跡が機能していた時期のもので、これらの遺物が集石遺構の時期を示すものではない。出土遺物の中には薄手の器壁をもつ杯が認められたり、143・144の瓦器椀など明らかに後出する遺物も出土していることから、集石遺構の構築時期は最も新しい遺物の時期から12世紀末頃と想定される。集石遺構から出土した遺物の多くは、構築する際、周辺からかき集められた土に混じていたものが、集石中に入ったものと想定される。

#### 小結

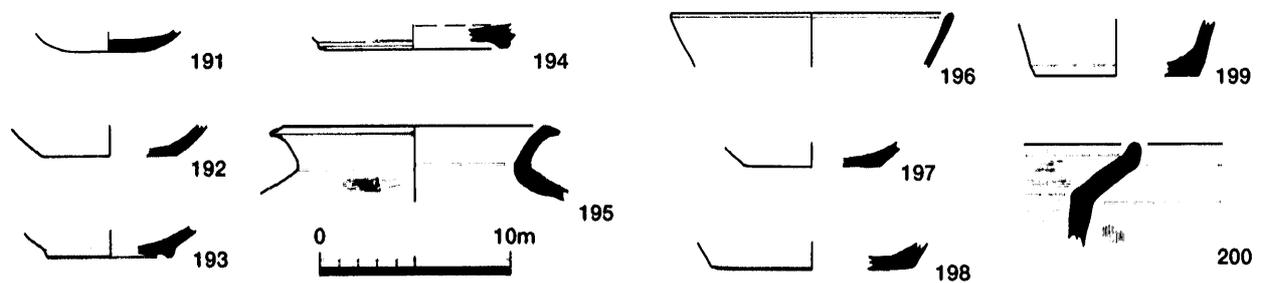
確認された集石遺構は、中心部が安山岩の板石を使用して2～3重に区画しており、集石の下部からは土坑も確認できた。今回確認された集石遺構と同様な遺構は県内では豊浜町大木塚でも確認されている<sup>(4)</sup>。大木塚では集石の下部から土坑も確認されている。大木塚は蔵骨器・人骨の出土はないが副葬品と考えられる完形の青磁碗・白磁皿が出土している他、集石の下部では中央からやや南にずれた場所から火葬の跡である焼土塊も確認されている。このことから大木塚は火葬墓である考えられている。大木塚と本集石遺構を比べると集石の上面状況・規模・集石下で確認した土坑等共通する部分が多いことから判断して北嶺で確認した集石遺構も火葬墓であると考えられる。火葬墓の根拠として焼土・炭・蔵骨器（人骨）・副葬品等の出土が挙げられるが、当遺跡からは出土していない。原因として考えられることは、集石遺構の区画石の東側・南側が大きく乱れていることから盗掘（改葬）にあった可能性が考えられる。実

際、北嶺にあった屋島寺は南嶺に移動しており、盗掘（改葬）の時期は特定できないが、寺の移動に伴い北嶺から南嶺に改葬された可能性はある。焼土・炭が出土しないのは、別の場所で火葬され、人骨だけがこの場所に埋葬されたことも想定される。この場合、人骨が出土しないのは、日本の風土が酸性土壌であり、長年の雨水等により人骨が溶け出している可能性が想定される。

火葬墓と想定される集石遺構は、前述のように集石中から灰釉陶器・土師器羽釜・須恵器杯など10世紀を中心とする遺物が多量に出土しているが、10世紀代の火葬墓の類例は現在のところ京城周辺でしか確認されていないこと<sup>(6)</sup>を考慮すると、集石中から出土した遺物は、集石を構築する際に周辺から集められた土に包含されていたものが混在したものであり、遺構本来の構築時期を示すものではないと考えられる。出土遺物の中には12世紀末頃と考えられる瓦器碗の破片や高台の退化した土師器碗など後出する遺物が若干出土している。今回確認した集石遺構の構築年代は新しい時期の遺物の年代より12世紀後半から13世紀初頭頃の遺構と考えるのが妥当であろう。

#### 集石遺構西トレンチ（第36図）

集石遺構の西側に、礎石建物跡南・東・北側に設定したトレンチと同様に遺構を確認する目的で長さ12.0m・幅2.0mのトレンチを設定し、遺構の確認を行った。トレンチからは遺物が出土したのみで、遺構は認められなかった。



第46図 集石遺構西トレンチ出土遺物実測図

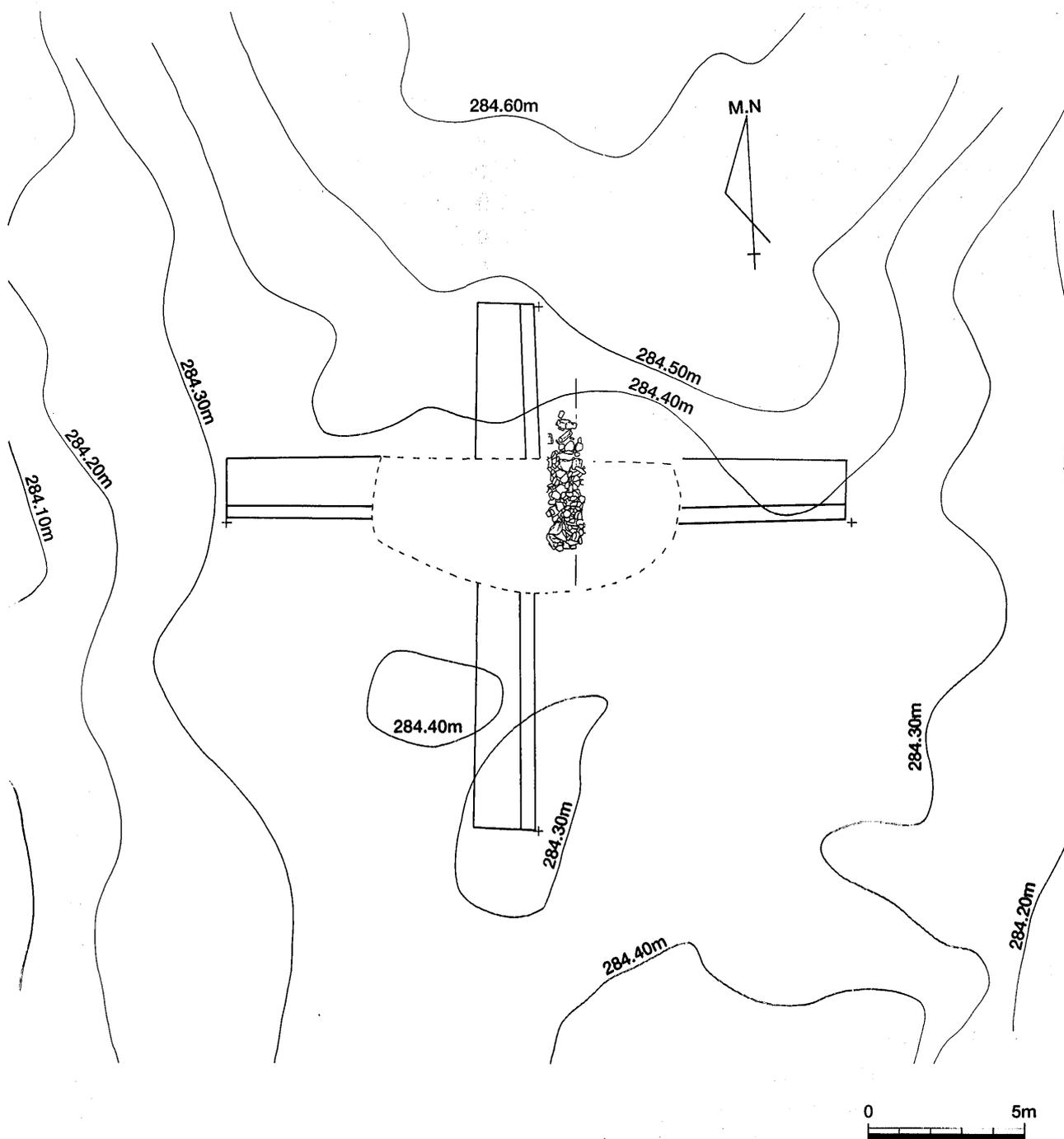
#### 集石遺構西トレンチ出土遺物（第46図）

191は弥生土器壺の底部である。丸底に近く弥生時代後期末頃の時期のものである。192は土師器の杯である。193は黒色土器の碗底部である。高台は丸く退化している。194は須恵器の杯身底部である。底部には高台が認められる。195は須恵器の壺である。口縁端部は外側に肥厚するもので、体部外面には格子タタキが認められる。196は須恵器の杯口縁部である。197・198は須恵器の杯底部である。199は須恵器壺の底部である。200は土師器の甕片である。内面にはハケ目が認められる。

#### 長方形石積基壇 —平成12年度第3トレンチ—（第47・48図）

前述の礎石建物跡・集石遺構と同様に平成11年度の分布調査で礎石建物跡の北方約90mにおいて確認した。確認時、基壇は樹木と叢林に覆われており、一箇所に安山岩が散乱している状況は確認できたが、全体の状況は不明であった。樹木と叢林を除去した段階で、石積みの崩落は認められるものの、長方形に安山岩を積み上げている状況が確認できた。基壇の規模は長さ10.0m・幅2.0mであり、基壇の高さは残りの良い北側部分で0.4mを測る。基壇はすべて石積みで主軸をほぼ東西に向けており、現在確認されている範囲で完結し、東西には広がらない。調査前の状況を詳しくみていくと基壇北側の石は面を揃え数段積み上げているが、南側については東から中央部にかけて崩落が著しく基壇を確認できない状況にある。唯一、基壇南西隅の一部について石を2段に積んだ状況が確認できる。

内部状況を確認するため基壇に直行するトレンチを設定した結果、判明した基壇の構築状況は、基盤層である灰赤色粘質土上に基壇の外周石を1石積み、その内側を大ぶりの石材を敷き、石材の隙間をしまりの弱い赤褐色粘質土で充填している。基底石の上に1石積み上げ人頭大から拳大の石材をしまりの強い灰褐色粘質土を充填している。基壇の石はそれよりも3段上に積み上げられているが、内部の充填材である粘質土は長年の風雨により流失したものか残っていない。基壇内部の土層状況から一石積み上げる毎に内部の土を充填して基壇を構築していることが認められる。



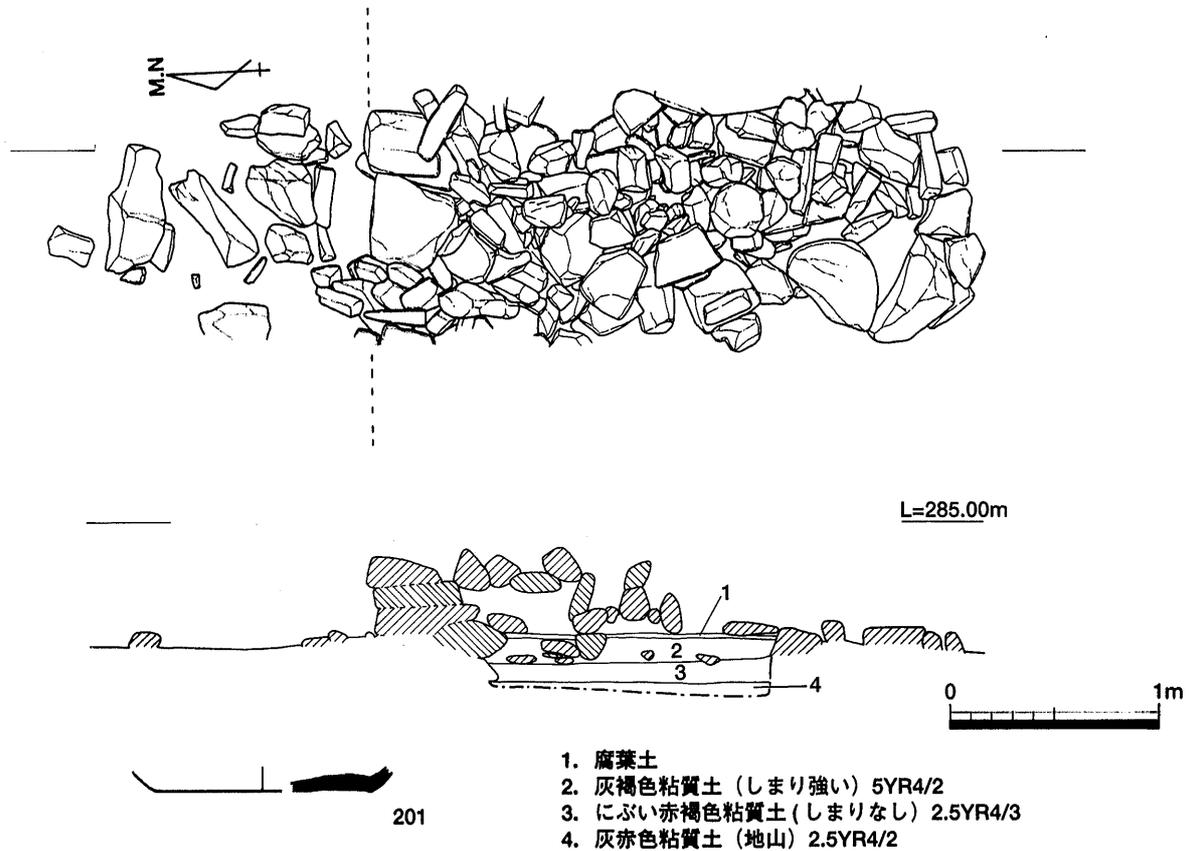
第47図 長方形石積基壇周辺地形図

出土遺物 (49 図)

基壇埋土中からは 202 の土師器移動式竈片と、南北トレンチの南端で出土した 201 の須恵器皿がある。土師器竈は破片のため、時期は不明であるが、須恵器の皿は 10 世紀を前後する時期のものであろう。

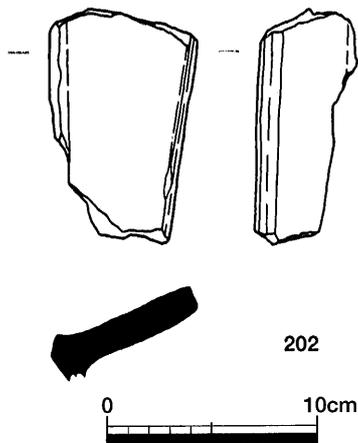
小結

遺構の性格を把握する最低限のトレンチ調査であったことから、調査範囲が狭くなり、結果として得られる情報も限られてしまった。基壇の構築状況は判明したものの、遺構の性格・時期を把握するには十分な資料が得られたわけではない。数少ない資料を使い遺構の性格・時期を考えてみたい。



1. 腐葉土
2. 灰褐色粘質土 (しまり強い) 5YR4/2
3. にぶい赤褐色粘質土 (しまりなし) 2.5YR4/3
4. 灰赤色粘質土 (地山) 2.5YR4/2

第48図 長方形石積基壇平面図・断面図

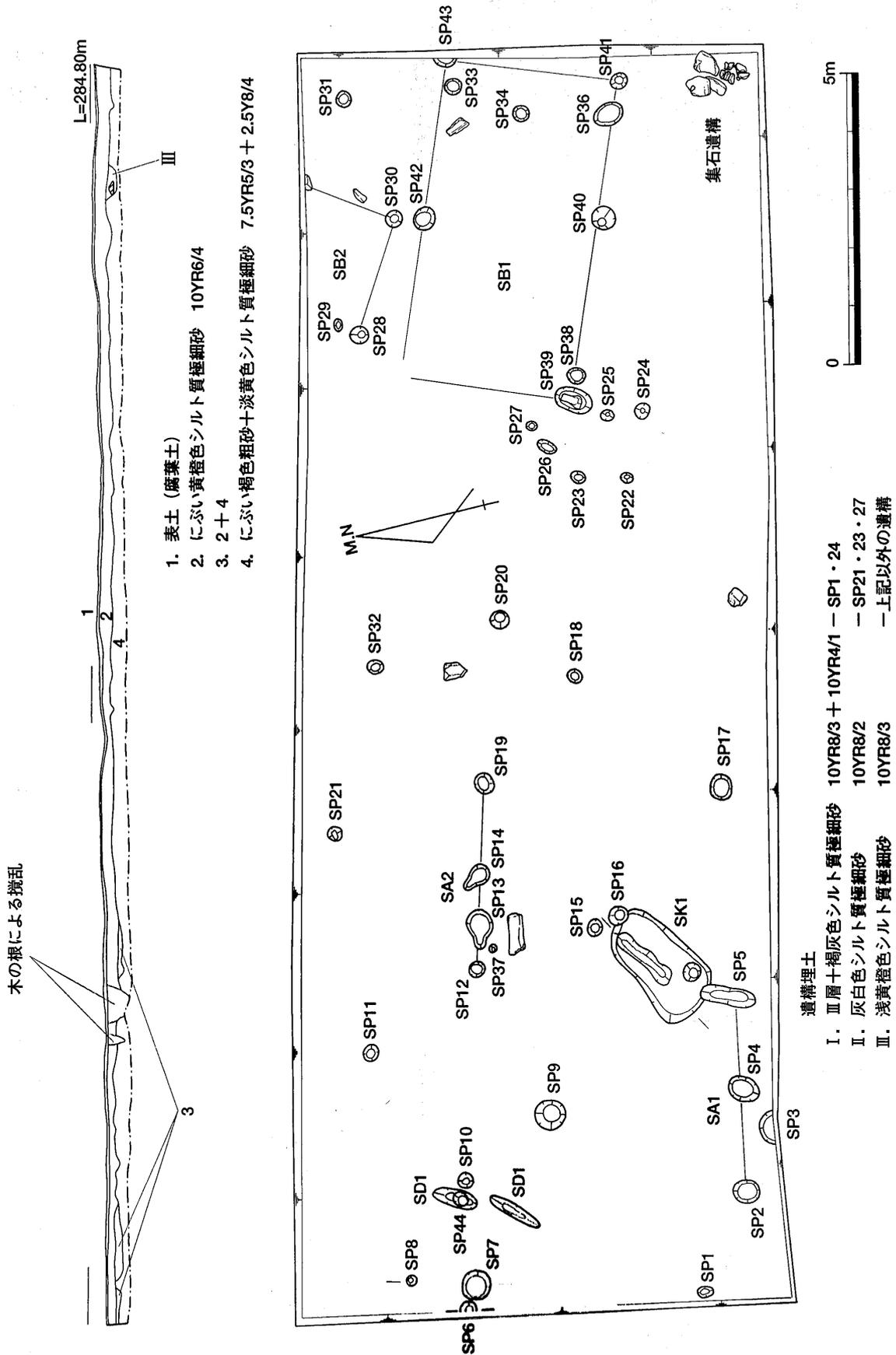


遺構の時期については、採集品も含めて2点の出土遺物で構築時期等を決定するには非常に困難である。調査前に採集した須恵器の皿については10世紀を前後する頃の時期が想定され、移動式竈については土器の破片が小さく時期決定に誤差が多いと考えられるが、古代の範疇には収まるものであると考えられる。

基壇の外部構造は、北側の面が揃っていることから本来の基壇の基礎に近いと考えられ、西側についても南側に回り込んだ部分まで面が揃っており、角をもっていることから、この部分についても基礎部分は残存しているものと考えられる。それ以外の部分については崩落および木の根による攪乱が著しく判然としない。基壇周辺に

崩落していた安山岩を含めて基壇の規模を復元すると、東西10m、南北2m、高さは現在よりも10cm程度高い、約50cm程の規模になるものと想定される。現在、基壇上部は平坦ではないが、作られた当初は平坦であったものと想定される。

遺構の性格としては石積みの幅の状況から建物遺構の基壇とは想定しにくく、基壇の主軸が東西方向を向くこと、同様に東西方向を意識して構築された、南約90mにおいて確認されている基壇をもつ礎石建物跡が9～10世紀頃であることから、山岳寺院の寺域を示す境界石(傍示石)の可能性も考えられなくはないが、他の境界石の類例に比べて今回確認された基壇が大きすぎるため、可能性は非常に低いものと考えられる。このため、最も可能性が考えられるのは、築造当初、基壇上部に石仏などの石造遺物が置かれていたが、後に何らかの理由により他の場所に移動し、上部のものが現在は認められないのかもしれない。



第50図 平成13年度第2調査地点平面図・土層図

#### 平成12年度第1調査地点 -第4トレンチ- (第27図)

昭和55年度に調査を行った湿地の遊歩道を挟んだ東側が、このあたりでの標高が最高所であり、平坦地が広がっていることから、遺構の存在が想定された。このため、この箇所十字の確認トレンチを設定し、遺構の確認を行った。調査の結果、遺構は確認できず、遺物も弥生土器と考えられる土器の小片が出土したのみであり、細かな時期の特定は不明である。

#### 平成13年度第2調査地点 (第50図)

基壇をもつ礎石建物跡の北側に東西26.75m、南北8.5mのトレンチを設定し遺構の確認を行った。調査地の南西部分は平成11年度の調査地と重なる。前述のとおり平成11年度の調査地は山上部の調査としては多くの遺物が出土したが、木の根による攪乱と木漏れ日による光の関係で遺構をうまく確認することができなかった。この為、再度平成13年度は平成11年度に第2トレンチとして実施した調査区のうち、遺物が多く出土した箇所に調査区を重ねて設定し遺構確認を行った。

調査区内の基本層序は確認した遺構は掘立柱建物跡2棟、柵列2条、土坑1基、集石遺構1基、ピット44(掘立柱建物柱穴を含む)である。

##### S B 1 (第51図)

東西2間、南北1間に復元した東西建物である。調査中数回検出に努めたが北西隅の柱穴が検出できなかった。柱穴は直径30～40cm、深さは5～10cmであり、残存状況は非常に悪い。検出できなかった北西隅の柱穴は木の根による攪乱で破壊されたか、遺構検出時に削り過ぎてしまった可能性が考えられる。柱穴内の状況では、南西隅の柱穴SP39には根石と考えられる石が置かれている。柱穴の埋土はすべて浅黄橙色シルト質極細砂である。掘立柱建物を構成する各柱穴において遺物は出土していない。

##### S B 2 (第52図)

東西1間、南北1間以上の建物である。柱穴は直径25～30cm、深さ12～18cmであり、他の遺構に比べて残存状況は良い。北側壁面にかかった柱穴は根石と考えられる石をもつ。柱穴の埋土はすべて浅黄橙色シルト質極細砂である。遺物は出土していない。

##### S A 1 (第53図)

SP2・SP4・SP5の3穴で構成する柵列である。柱穴は直径40～50cm、深さは4～18cmであり、残存状況は非常に悪い。柱穴の距離は芯心間で西から1.80m、1.60mを測り、柱穴の埋土はすべて浅黄橙色シルト質極細砂である。遺物はSP4から凹基式の石鏃(第54図207)が1点出土している。

##### S A 2 (第54図)

SP12・SP14・SP19の3穴で構成される柵列である。柱穴は直径25～30cm、深さはいずれも6cmであり、残存状況は非常に悪い。柱穴の距離は芯心間でいずれも1.60mである。柱穴の埋土はすべて浅黄橙色シルト質極細砂である。遺物はSP19から須恵器の皿(第54図204)が1点出土している。

##### S K 1 (第56図)

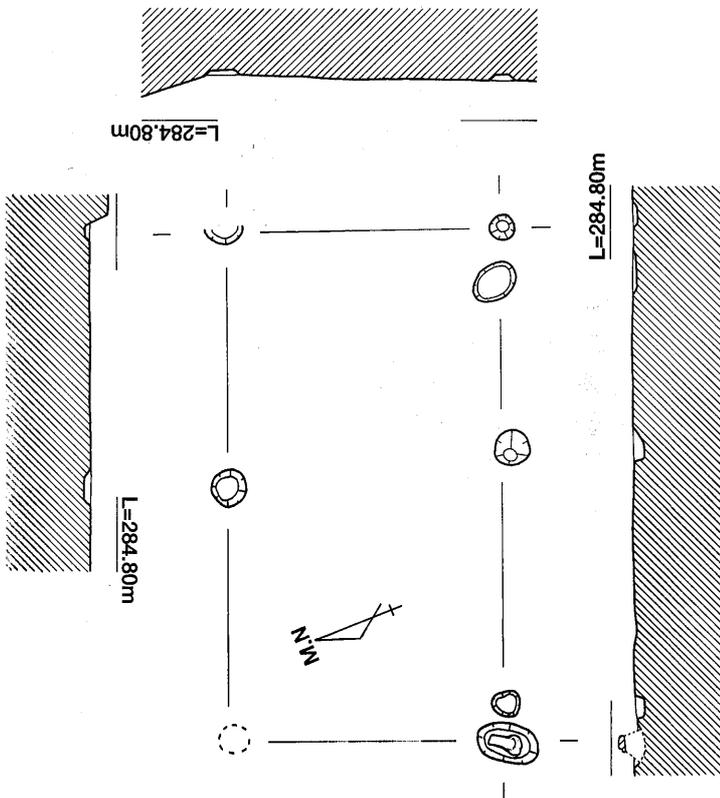
調査区西側中央部で確認した平面は不整な楕円形を呈する土坑である。土坑内部は長軸方向に2段の掘方をもつ。規模は長軸2.05m、短軸1.02m、深さ0.18mである。遺物は出土していない。

##### 集石遺構 (第55図)

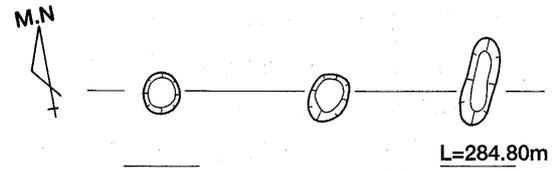
調査区南東隅で確認した遺構である。北側に一辺40cm大の板石が3石斜めに倒れた(置かれた?)状態で、南側には10～20cm大の小ぶりの石7石が認められる。集石の下部について土坑などの遺構の存在が想定されたため、集石を除去し下部を精査したが、何も認められなかった。遺物は集石の下部で瓦器椀(第57図206)が1点出土している。出土した瓦器椀は口縁部を欠損するものの、内面の暗文は散漫なことから器高は高くならないものと考えられる。暗文や器高の状況と対応するように高台部の退化も著しい。

##### S P 7 (第50図)

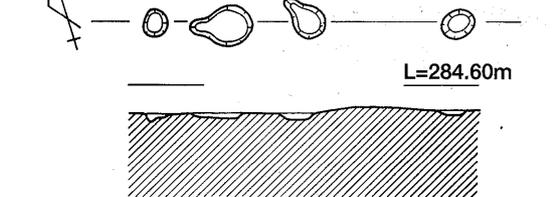
調査区の西北部で確認したピットである。調査区内で確認されているピットの中では大きな規模に属する。ピットの規模は直径50cm、深さ9.6cmである。埋土は浅黄橙色シルト質極細砂(10YR8/3)である。SP7からは203の土師器杯が出土している。



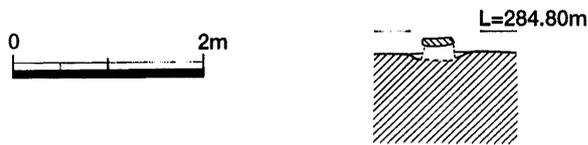
第51図 SB01平面図・断面図



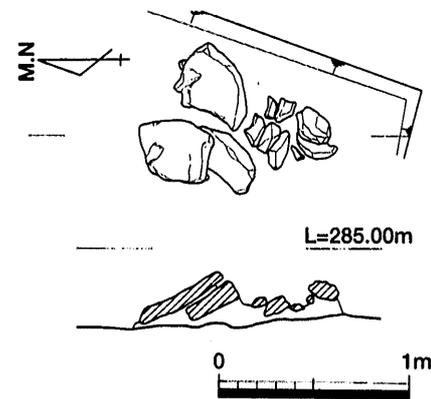
第53図 SA01平面図・断面図



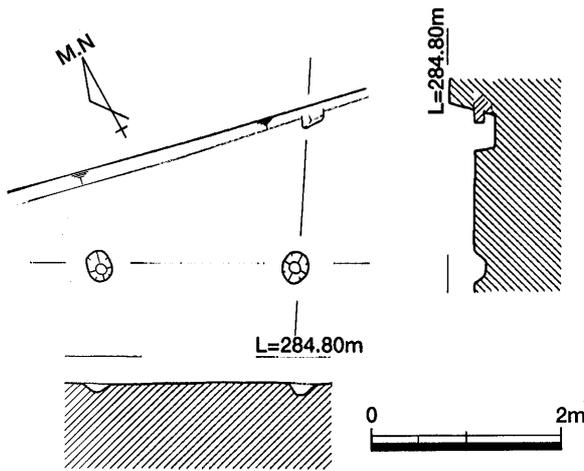
第54図 SA02平面図・断面図



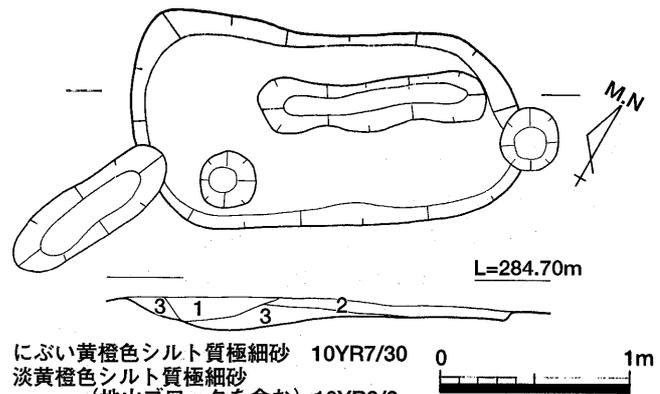
第52図 SB02平面図・断面図



第55図 集石遺構平面図・断面図

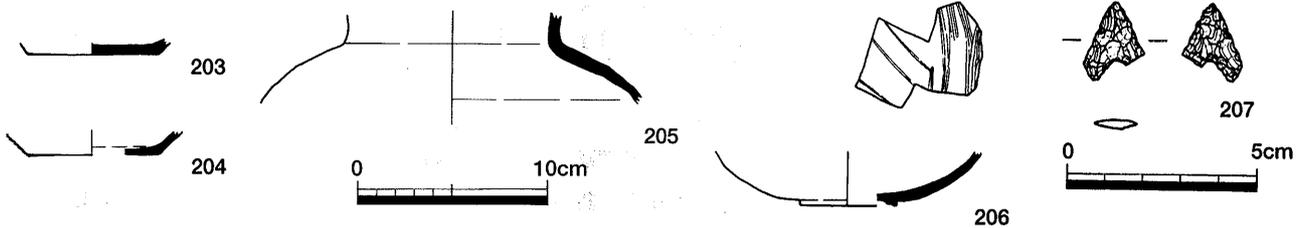


第52図 SB02平面図・断面図



1. にぶい黄橙色シルト質極細砂 10YR7/30
2. 淡黄橙色シルト質極細砂  
(地山ブロックを含む) 10YR8/3
3. 淡黄橙色シルト質極細砂 10YR8/3

第56図 SK01平面図・断面図



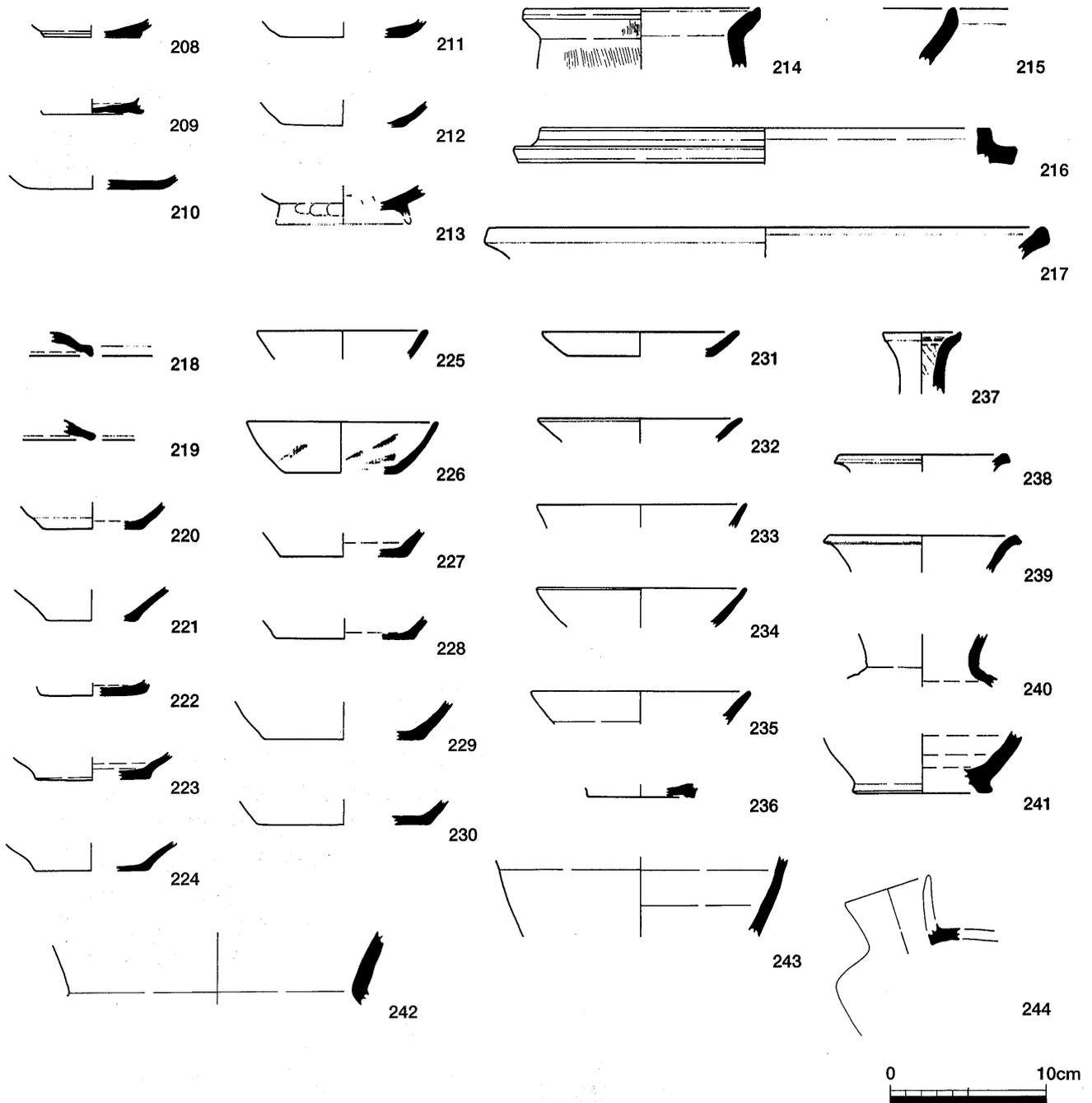
第57図 平成13年度北嶺遺構出土遺物実測図

S P 33 (第50図)

調査区の北東隅近くで確認したピットである。掘立柱建物の柱穴になる可能性も考えられるが、調査区の隅で確認されたことから確認はできていない。調査区の中で確認されているピットの中では小さな方に属する。ピットの規模は直径24cm、深さ4.8cmである。埋土は浅黄橙色シルト質極細砂(10YR8/3)である。S P 33からは壺の頸部から体部にかけての破片205が出土している。焼成は良好で、外面には自然釉が付着する。

平成13年度第2調査地点遺構外出土遺物(第58図)

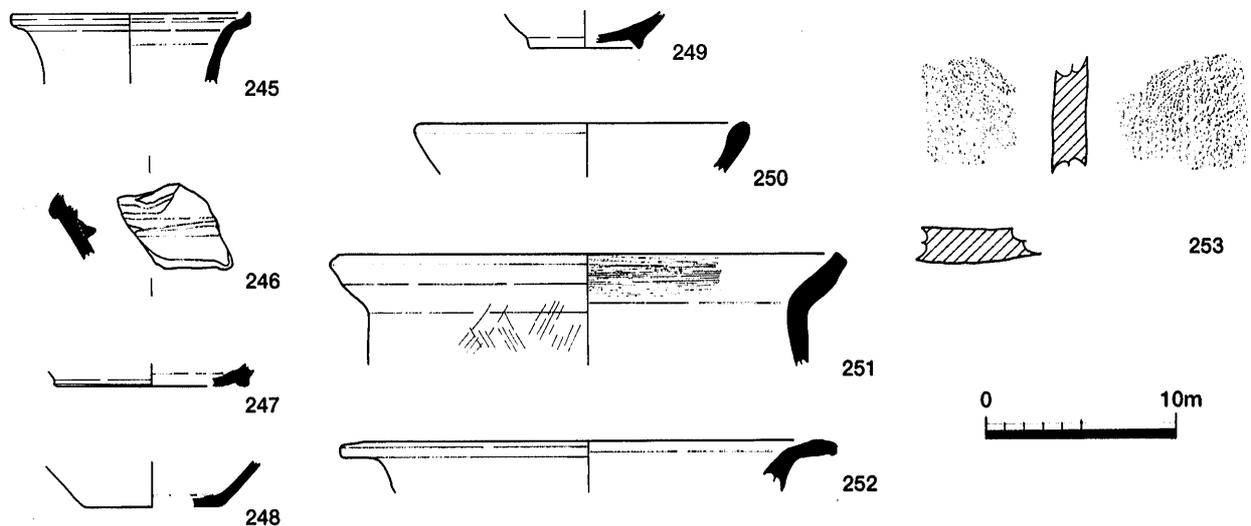
平成12・13年度に行った調査と同様に遺構外から多くの遺物が出土している。この中には緑釉陶器碗片や須恵器多口瓶の口縁部と考えられる破片も出土している。208は緑釉陶器の碗底部である。底部は削出し高台である。京都洛北産のものと考えられ9世紀後半の時期が考えられる。209～217は土師器である。209～212は杯である。209のみ底径が小さいが、その他は8cm前後と法量が揃っている



第58図 平成13年度第2調査地点遺構外出土遺物実測図

る。213は椀である。高台の端部を欠損するがしっかりした高台をもつ底部になるものと想定される。214・215・217は甕である。214は小型の甕で口縁端部は上方に摘み上げる。体部外面にはハケ目が認められる。216は羽釜である。218～245は須恵器である。218・219は杯蓋である。小片のため、詳細は不明であるが、偏平な天上部をもつ形態をするものと想定される。220～230は杯である。この内、220～224は体部が開き底部が突出気味になる形態をする。225以下の杯に比べ器高が深く古相を呈する。225～230は前者に比べ底径が大きく器高は浅くなる形態である。231～235は皿である。口径の直径は13cm前後と法量は揃っている。236は高台をもつ杯の底部である。底径は7cmを切ることから器高の深い杯になるものと考えられる。237～243は壺である。237は口径が小さく頸部内面にシボリ目を残す口縁部片である。形態の特徴から多口瓶の注口部である可能性が考えられる。238・239は口縁部である。240は頸部片である。241は長頸壺の底部である。底部には高台が認められる。242はやや大型の頸部片である。243は体部片である。破片が小さいが、円盤充填の接合部が確認できたことから、平瓶の体部片と考えられる。

## 平成11年度分布調査採集遺物（第59図）



第59図 平成11年度分布調査表採遺物実測図

平成11年度にはトレンチによる確認調査と平行して北嶺山上部の分布調査を実施した。その際に採集した遺物である。245・246は多口瓶の口縁部および注口部の破片である。245は口径の大きさ・胎土中にみられる砂粒の状況から礎石建物跡基壇中より出土した104と同一個体の破片である。246も注口部の基部片であるが、注口部の下にある断面三角形の突帯の形態等から104と同一個体の破片である。247は高台をもつ杯の底部片である。高台は退化傾向が著しい。248は形態から器高が深くなる杯の底部である。底部に突出は見られず、口縁部は外方に開く。249は黒色土器の底部である。252は広口壺の口縁部である。形態・胎土等から十瓶山古窯跡群の製品である<sup>(6)</sup>。250は土師器の盤である。表面が剥落したのか胎土は粗い。この時期には、このような形態の土師器の皿は認められないことから、寺院で使われる特殊な器形になるのかもしれない。集石遺構中からも同様な形態の盤(145・146)が出土している。251は土師器の甕である。直立する体部をもち、口縁部外面は強いナデを施し、内面には横方向のハケが認められる。253は平瓦片である。凹面は摩滅のため不明であるが、凸面にはタタキによる縄目が残る。

## 注

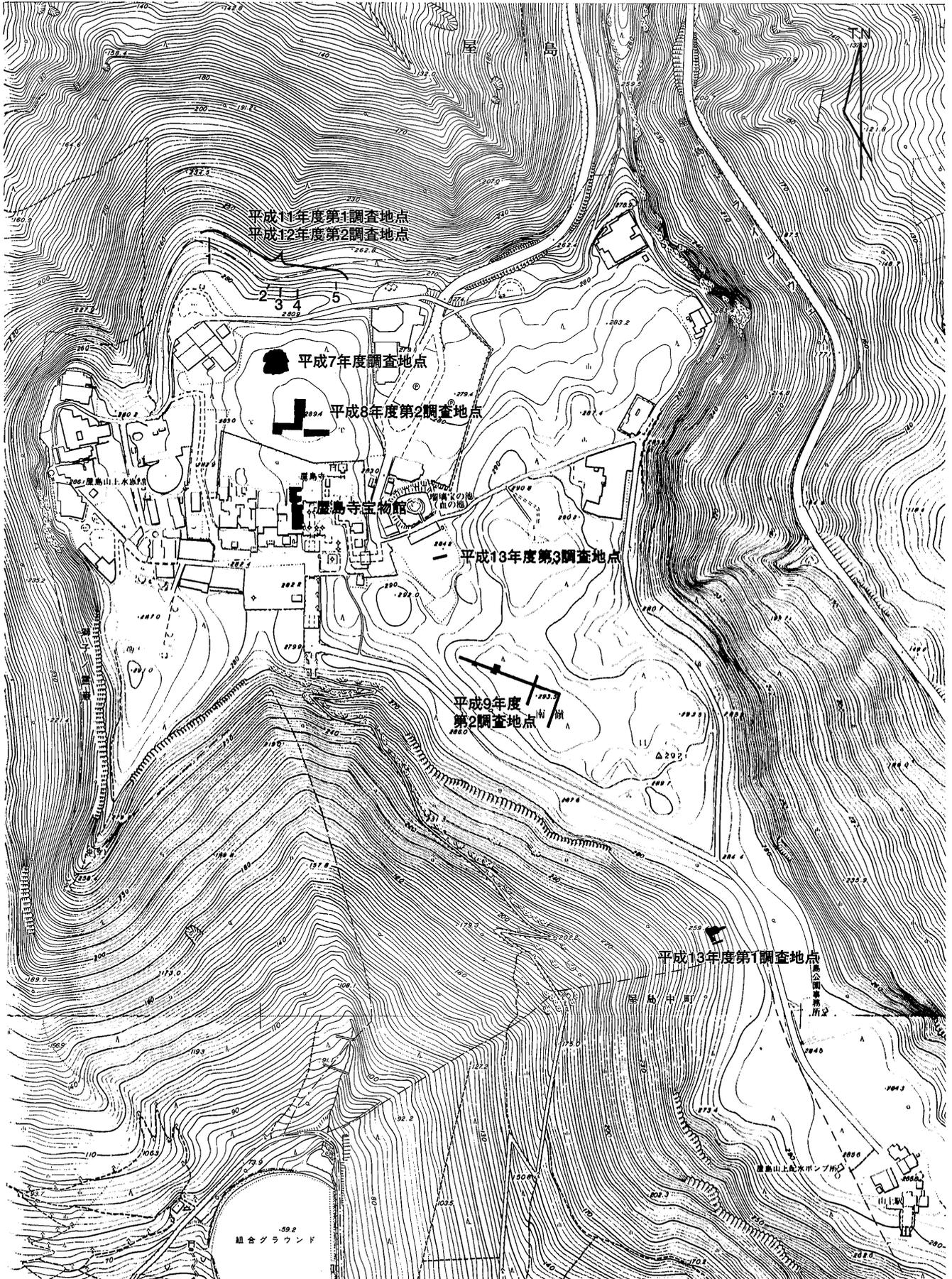
(1) 藤井雄三「第Ⅱ調査区」『屋島城跡』高松市教育委員会 1981.3

(2) 岩橋 孝「屋島城跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成元年度』香川県教育委員会 1990.3

### 第3章 調査の成果

- (3) 土器の年代決定には松本敏三氏，佐藤龍馬氏の御教示による。
- (4) 『大木塚遺跡調査概報』豊浜町教育委員会 1985
- (5) 京都大学 上原真人氏の御教示による
- (6) 平成 11 年度に北嶺山上部における分布調査で採集した遺物については(財)香川県埋蔵文化財調査センター(当時)現香川県教育委員会文化行政課佐藤龍馬氏に多くの御教示を頂いた。特に仏具である多口瓶については特殊な遺物であり，この特殊な遺物を早い段階で理解することができたことは，その後の北嶺における調査に大きく役立った。記して謝意を表したい。

第5節 南嶺山上部の調査



第60図 南嶺調査地位置図 (1/5,000)

### 南嶺山上部における既往の調査について

南嶺山上部における最初の確認調査は、屋島山上水族館建設に伴うもので、高松市文化財保護委員会が屋島寺西側の水田において、昭和43年1月20日から3月31日の主に日曜日を中心に実施している。調査地は、かつての池跡と推定されるが、明確な遺構は確認されなかったようである。調査によって弥生時代の石鏃の他、土器片、須恵器片、布目瓦（平瓦）等が出土している<sup>(1)</sup>。

平成2年には屋島寺宝物館建設に伴い事前の発掘調査が行われている<sup>(2)</sup>。確認された遺構の大半は江戸時代の屋島寺に伴う遺構であったが、中には性格は不明であるが、竪穴状を呈する遺構から7世紀代中葉頃の遺物が出土した。この他、調査区内からは江戸時代から室町時代にかけての遺物が多く出土している。

平成6年度に屋島南嶺園地事業に伴う試掘調査が行われている（4箇所）。遺構等は認められなかったが、第3トレンチの客土層から弥生土器の小片が出土している<sup>(3)</sup>。

平成11年度に屋島寺庫裏改築に伴い確認調査を実施したが、近世の遺構・遺物が出土したのみである<sup>(4)</sup>。

### 基礎調査事業による確認調査（第60図）

南嶺山上部の調査のうち平成7～9年度は、平成2年度に行った屋島寺宝物館建設に伴う事前の発掘調査で中・近世の遺物に混じり7～8世紀の遺物が出土していたことから、屋島寺周辺部には古代山城屋嶋城に関係する当該期の遺構・遺物の存在が想定された。このことからまず、屋嶋城の城内部分の遺構を確認する目的で調査を開始した。確認調査を行う場所として屋島寺境内が有望であったが、四国霊場84番札所としてお遍路さん・観光客等人の出入りが多いことから確認調査は困難であると考え、屋島寺周辺部から調査を行うこととなった。調査結果の詳細については各年度の調査成果に詳しいが、各調査地点では14世紀を中心とする遺構・遺物が確認され、予想以上に屋島寺に関係すると考えられる遺構・遺物が山上部平坦地に広がっていることが判明した。このような状況の中、平成10年2月に南嶺西南斜面から屋嶋城の外郭線の一部と考えられる石塁が発見されたのを契機として、山上部平坦地から斜面への傾斜変換点を中心にこれまでに確認されている遺構の見直しを行ったところ、南嶺北斜面や南斜面にも同様な地形で遺構が存在していることが判明した。古代屋嶋城のものと考えられる外郭線が自然地形を取り込みながら山上近くの斜面を巡っていることが判明した。これらの遺構について有識者に現地での確認を頂いたが、新たに確認された石塁遺構については安山岩の割石を使用して作られていること、遺物が認められないことなどから古代のものとの確定には至らなかったが、この石塁発見はこれまで詳細が不明であった古代屋嶋城の構造解明には重要な発見であることから、平成10年6月に記者発表を行い、広く一般に周知を行った。この石塁の発見を契機として、屋嶋城の確認調査の主体を城内部分から外郭線部分に変更したものである。

南嶺の確認調査は屋嶋城の調査が主であるが、南嶺山上における人々の活動の多さを物語るように、各時代の遺構・遺物が重複して確認され、一部混乱を招いている。この件に関しては、確認された各遺構の性格の違いにより第4章で整理してまとめを行っている。

### 城内部分の調査

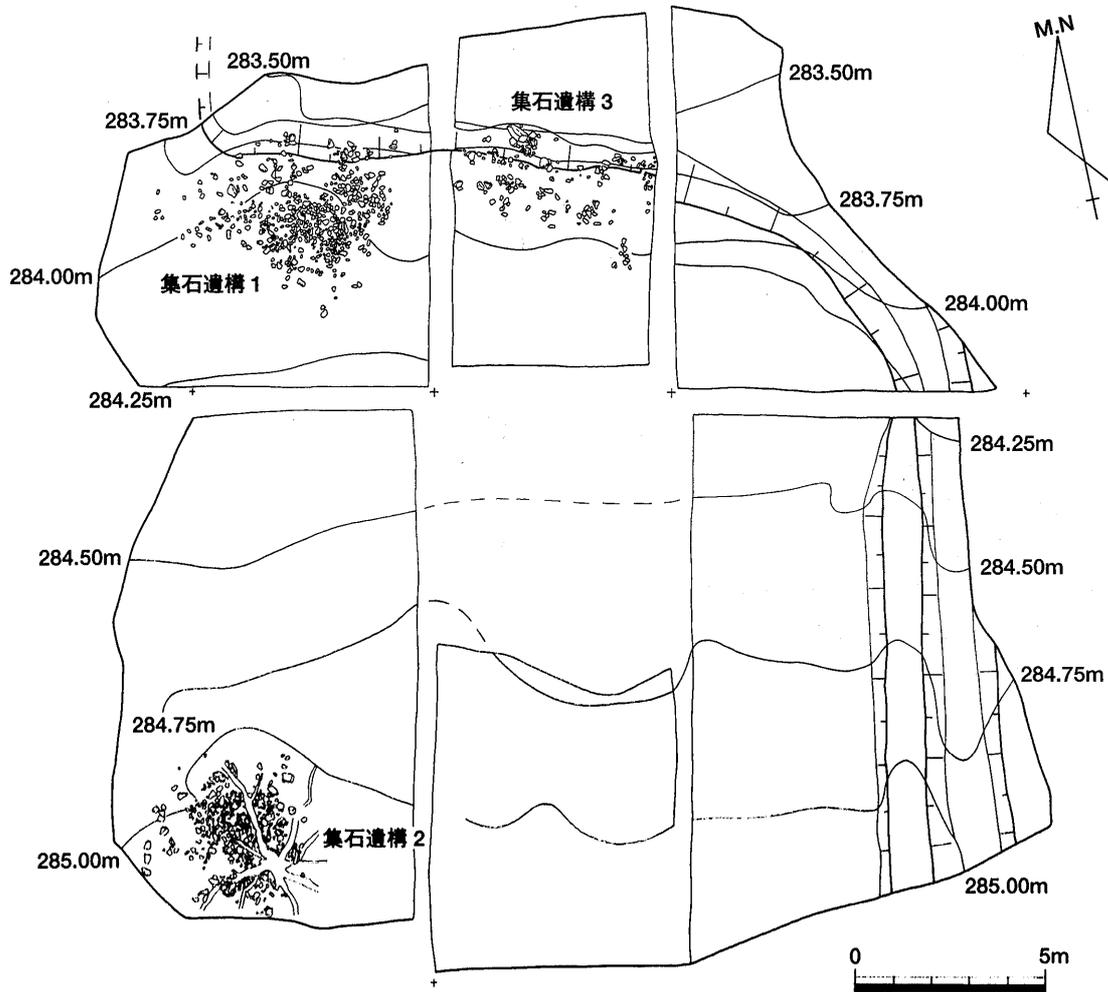
#### ①平成7年度調査（第60・61図）

南嶺北遊歩道から南へ約40m入った部分において確認調査を実施した。調査の結果、3箇所集石を確認した。この他、確認調査は行っていないが、調査中に調査地の南東で集石を1基（集石4）確認した。集石1（第62図）

調査地の北西で東西6.0m、南北5.0mの範囲に一辺が10～15cmの小礫が散乱しており、その内、東西2.50m、南北2.20m部分に円形状にまとまっている状況が認められた。集石の最も高い部分では高さ0.25mである。東西および南にトレンチを設定し下部の状況を確認した。トレンチ内の土層観察では小礫は集石の下部まで認められるが、密集した状況ではなく、安山岩の風化土と混在する状況が認められた。集石中からの出土遺物は土師器足釜の脚部片が1点出土したのみである。

#### 集石2（第63図）

調査地の南西で東西4.2m、南北4.5mの範囲に集石1と同様に一辺が10～15cmの小礫が散乱して



第 61 図 平成 7 年度調査遺構配置図

おり、その内、東西 2.0m、南北 2.0 m 部分に円形状にまとまっている状況が認められた。ただし集石 2 の上部には山桜の大木が大きく根を張っており、木の根による集石の改変を想定せねばならない。使用している石材のうち、中心部に認められる石は小ぶりであるのに対して、外側には一辺が 30 × 20cm の大きな石も認められることから、これらの石は外側の区画石であった可能性も想定される。

#### 集石 2 出土遺物 (第 65 図)

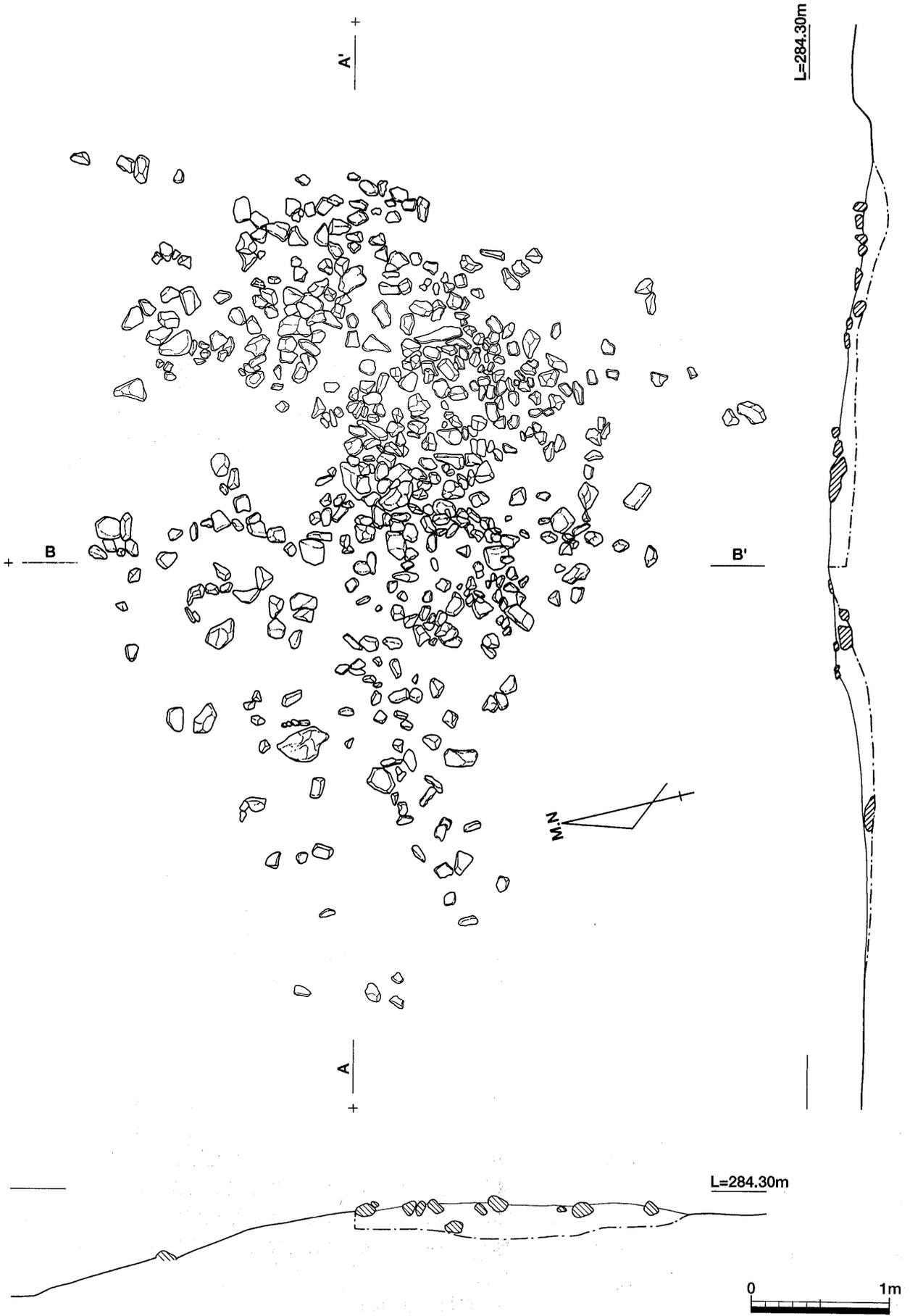
遺物は集石上から備前焼播鉢 254 ~ 257・260・261, 東播系こね鉢 259, 土師器杯 262 を採集した。出土した備前焼播鉢は個体により多少の形態差は認められるが、口縁部の平坦面が幅広くなっていること、内面の条溝も櫛描きで放射線状に描かれていることから、間壁編年 IV 期の 15 世紀を中心とする時期のものであると考えられる。259 の東播系こね鉢は口縁部を欠損することから細かな時期は不明であるが、体部の形態から 12 世紀中葉～後半の時期が考えられる。

#### 集石 3 (第 64 図)

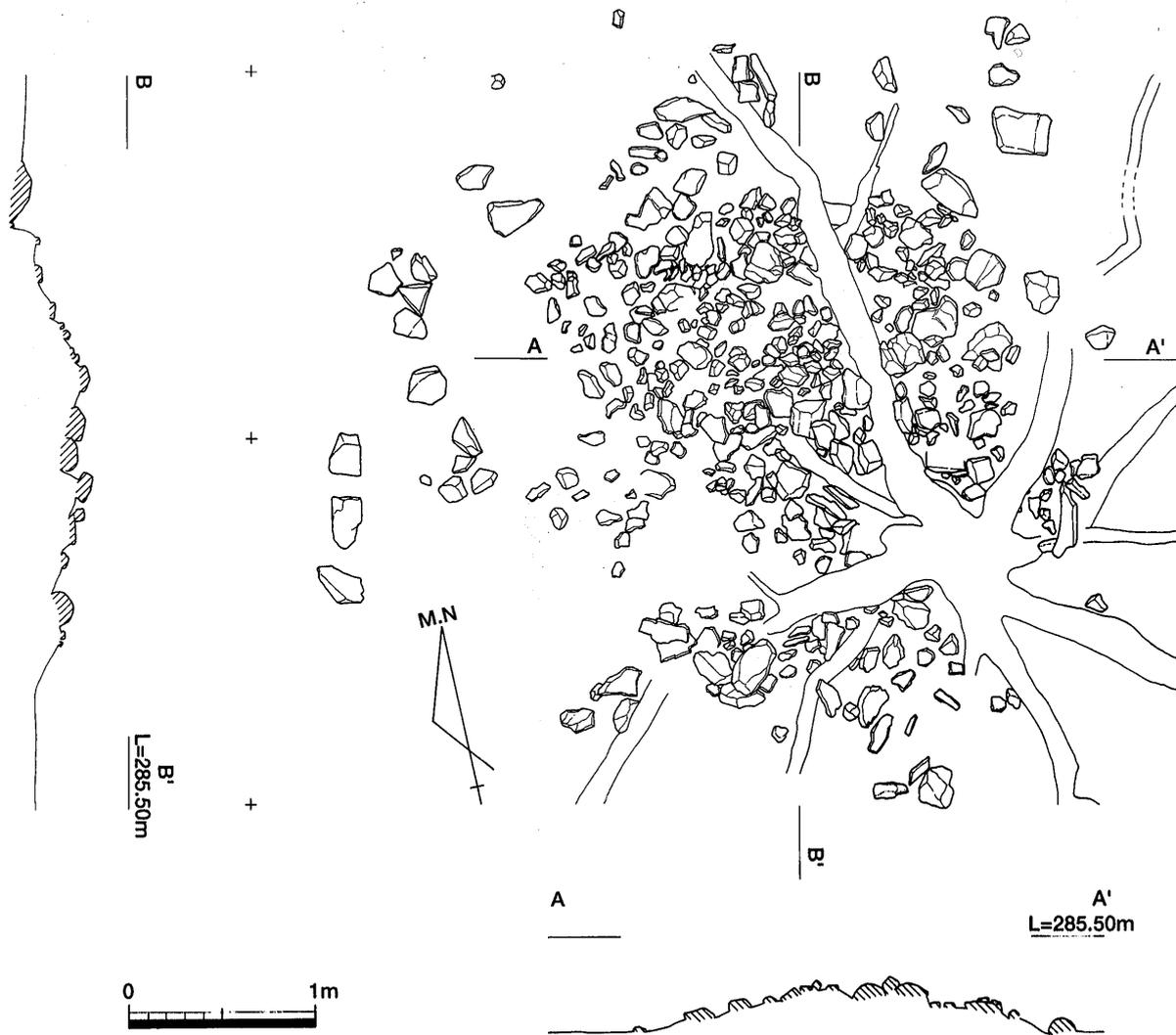
調査地北部中央で確認したもので上記の 2 つの集石とは異なりまとまりはもたないものの、他の調査箇所と比べて小礫が多く散乱していることから集石として報告する。集石は東西 5.5m、南北 2.5m の範囲で散乱し、石の規模は一辺が 15 ~ 20cm のものが多くを占める。出土遺物はない。

#### 集石 4 (図版 28 - 8)

調査地の南東約 25.0 m で確認した集石である。集石の規模は直径が約 2.0m、高さは約 0.5 m である。



第62図 集石遺構1平面図・断面図



第63図 集石遺構2 平面図・断面図

上記集石1・2と同様に一辺が15～20cmの小礫により構築されている。

#### 遺構外出土遺物（第65図）

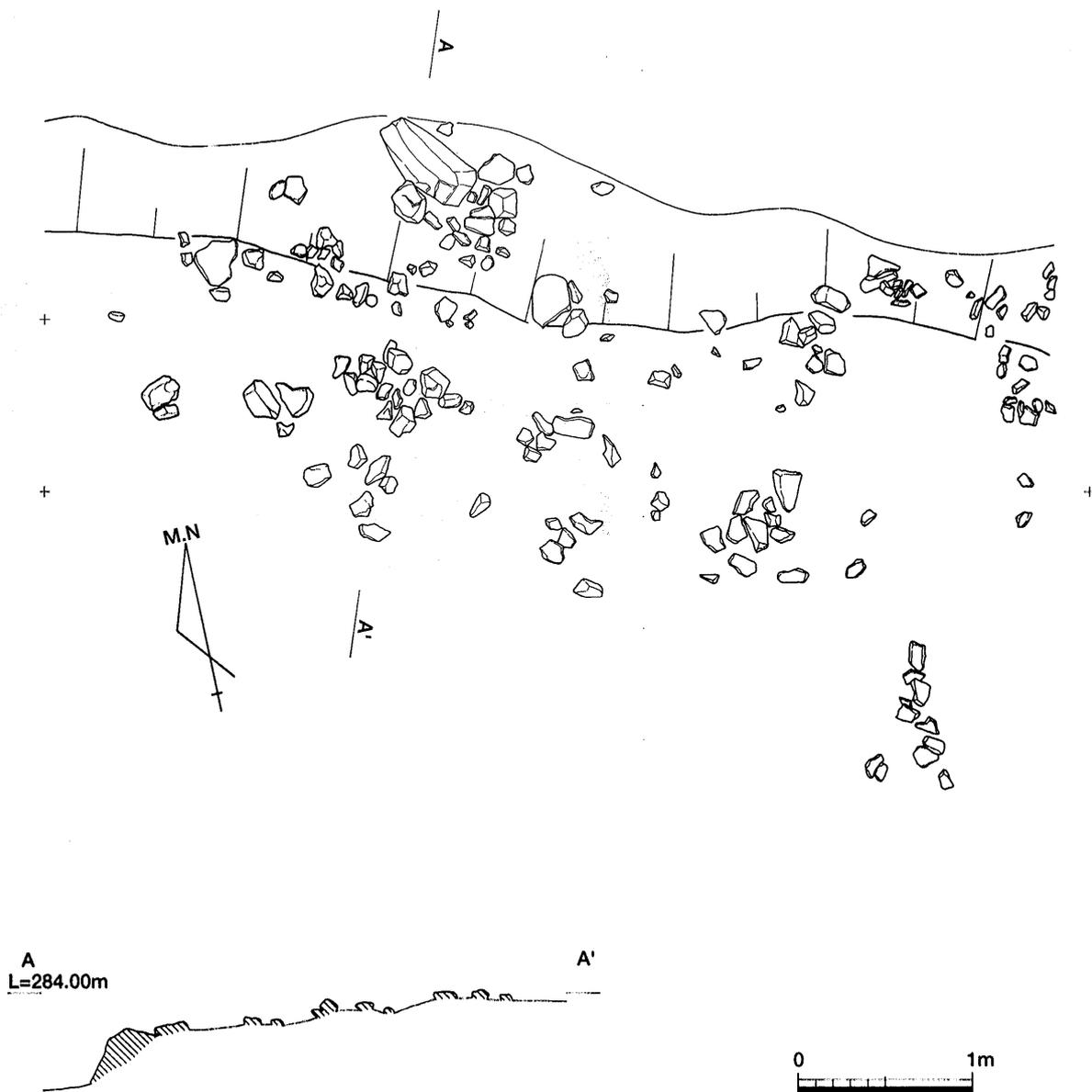
遺構に伴うものではないが、1区の集石1の周辺から平瓦片263、弥生土器高杯もしくは鉢片258が出土している。3区からサヌカイト製のスクレイパー264が出土した。263は平瓦片である。凹面はナデ調整、凸面はハケ調整をする。264のスクレイパーは刃部である下縁部のみが残り両側は裁断面が残る。下縁部は両側からの敲打により刃部を作る。

#### 小結

確認した遺構は集石遺構である。集石上などから採集した遺物より室町時代のものと考えられる。遺構の性格を把握するため、集石1にトレンチを設定したが、将来的に残るものであるため、トレンチの幅は極力狭くしたため、トレンチ調査で断面の状況は確認できたが、遺構の性格を判断する材料は認められなかった。このため、発掘調査による遺構の性格は現段階では不明である。しかし集石がまとまってみられる直径2m前後の大きさは、当該期にみられる集石墓と規模等が非常に似ており、その可能性は高いものと考えられる。確認された場所が屋島寺のすぐ北側に位置しており、寺に関係するものと想定される。

#### ②平成8年度調査—平成8年度第2調査地点—（第60・67図）

調査地は屋島寺本堂の北側、平成7年度調査地点の南側に位置している。調査前は竹が生い茂り、辛



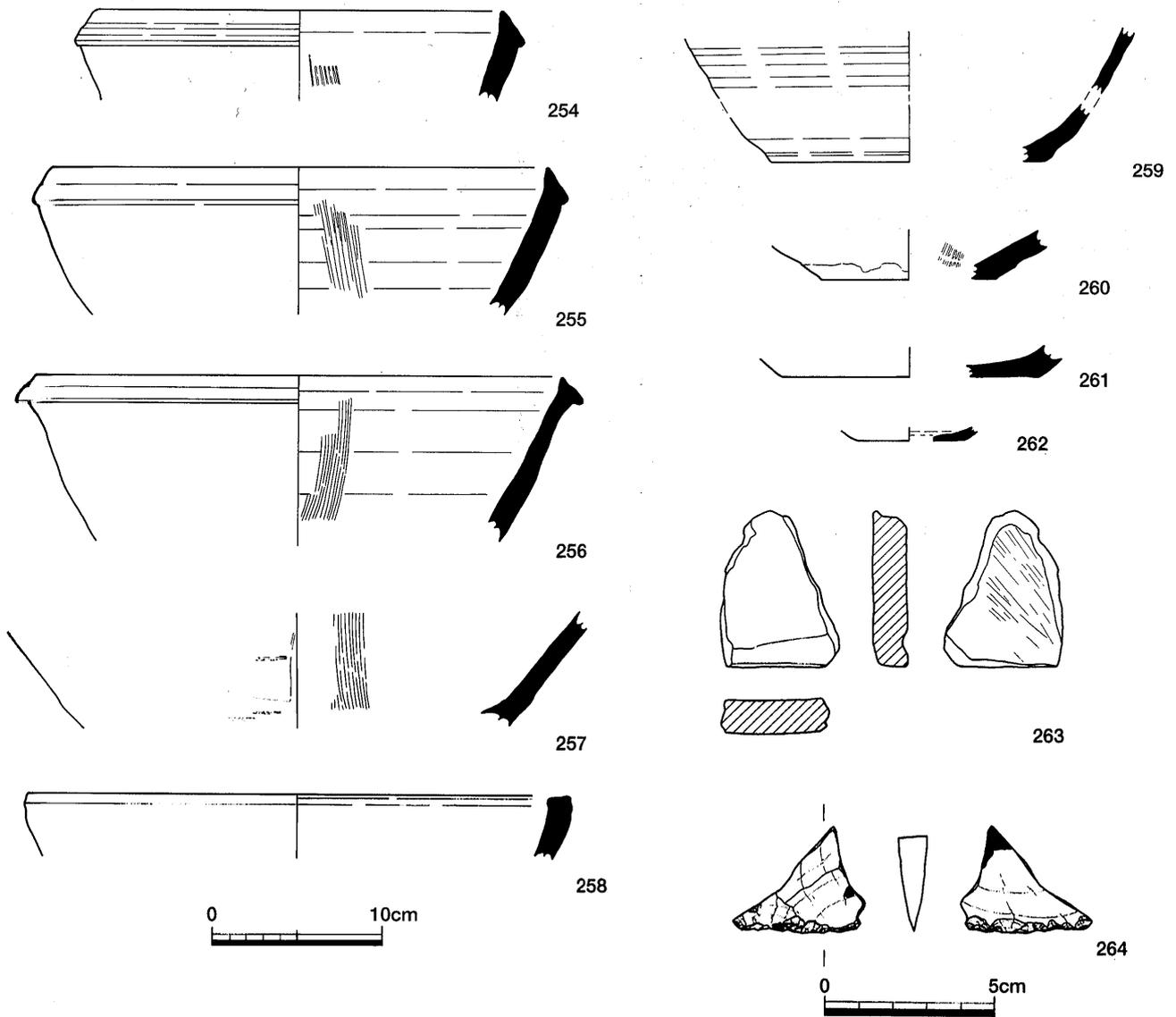
第64図 集石遺構3 平面図・断面図

うじて西側・北側に土塁状遺構が存在し、北側土塁状遺構の北側に東西方向に広がる幅 8.0 m の平坦地が存在していることが判明していた。今回の調査はこれらの遺構の性格を把握するとともに、調査地に埋没している遺構を確認するのが目的である。調査区の設定は西側・北側の土塁状遺構の状況を確認するために逆L字形のトレンチ（西・北トレンチ）を設定し、西トレンチの南辺に北側のラインを合わせるように東トレンチを設定し確認調査に入った。調査はこの竹を除去することから始めたが、竹の根が予想以上に繁茂し遺構面を大きく攪乱していた。このため、当初予定していたトレンチ調査を行うには竹の根の除去等が必要であるが、調査予定地全域を行うだけの調査期間が確保できないことから、南北のトレンチのうち、東端に下部遺構を確認するための幅 1 m のトレンチを設定し、遺構の確認を行った。同様に西トレンチの南側、東トレンチの北側に幅 1 m のトレンチを設定し遺構の確認を行った。この結果、西および北トレンチでは現地盤から 10cm 程度で、東のトレンチについては現地盤から 20cm で凝灰岩の岩盤に到達した。

西側・北側両土塁については、本来は連続した同一のものであるが、内部の構造を確認するために行ったトレンチ調査では、各調査地点により、内部状況に多少の違いが見られることから、それぞれに報告する。

#### 西トレンチ（第67・68図）

土塁は両裾に安山岩を積み基礎としている。西側の基礎石は一辺が 30cm 程の安山岩をまとまりよ

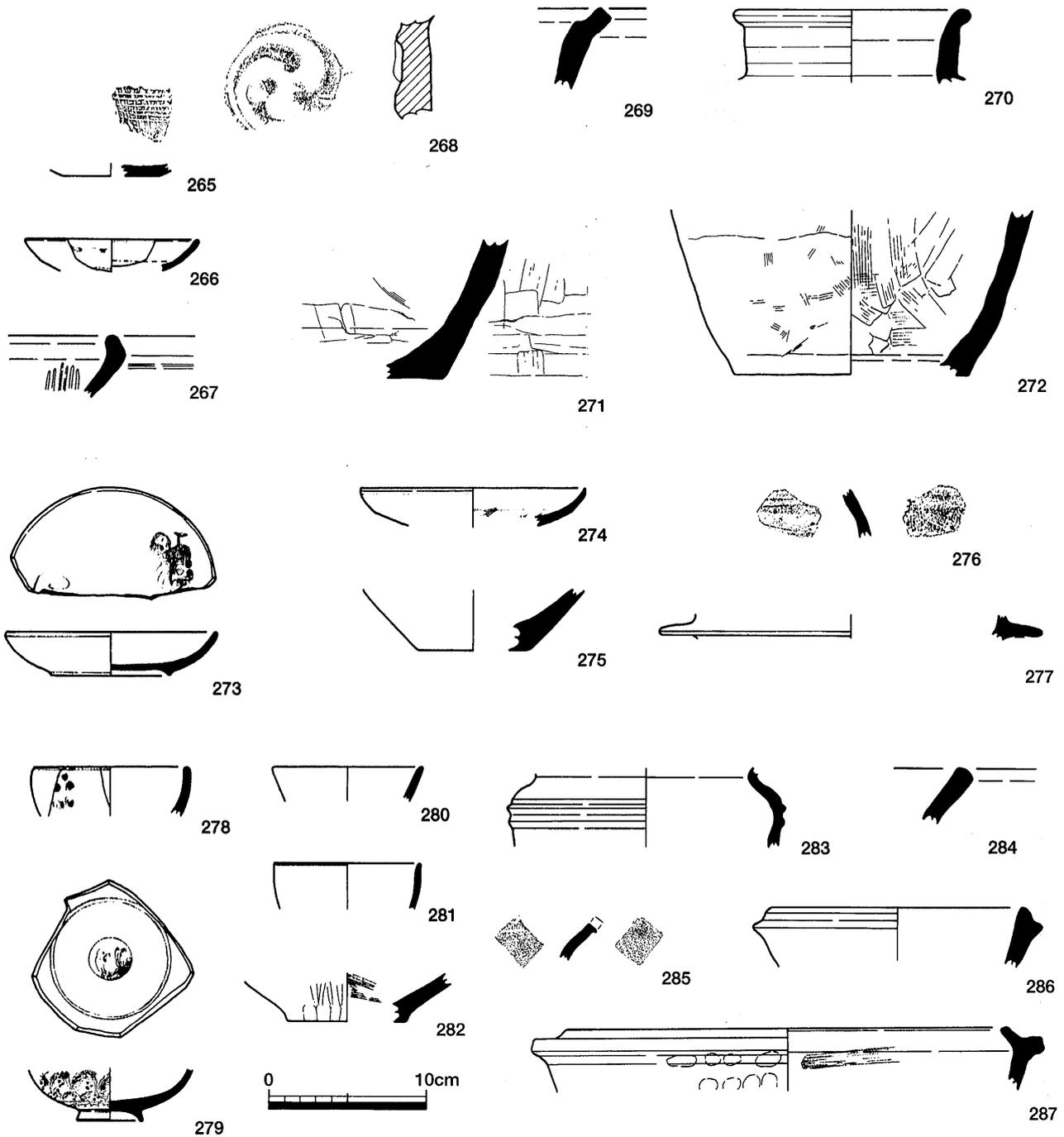


第65図 平成7年度調査地出土遺物実測図

く積み上げている。東側の基礎石は一辺が30cm程の安山岩を基本とするが、一辺が10cmのものから1m近くのものまであり、使用している石材の規模にまとまりがない。一度積んだものが崩落したようにも観察できる。元は西側基礎石と同様な積方をしていたものと想定される。東側の基礎石の裾が不明確であるが、最も大きな基礎石を東端と考え、現況での土塁の規模は、基礎石の両裾からの距離で底辺3.70m、高さ0.70mである。西側の基礎石から西側については更に0.50m下がることから、西側から見た場合、実際の規模よりも立派な土塁に見える。埋土について版築は認められず、赤褐色安山岩風化土の単層である。

西トレンチ出土遺物 (第66図)

265～272は土塁中から出土した遺物である。265は陶器のおろし皿である。内面には摺り目が認められる。266は陶胎染付の皿である。267は土師器の挿鉢である。口縁部は内傾し、内面には櫛描による条溝が認められる。268は巴文軒丸瓦である。269は土師器の鍋である。口縁部内面には段と孔が認められる。270～272は備前焼である。270は壺口縁部である。口縁端部は外側に折り曲げて丸い帯状突帯の玉縁を作る。271は壺底部である。底部内外面は篋状工具によるナデが認められる。272も同様に壺の底部である。内面には篋状工具によるナデが認められる。273～277は土塁表土から出土したものである。273・274は染付の皿である。275は弥生土器の壺底部である。276は須恵質土器の体部である。

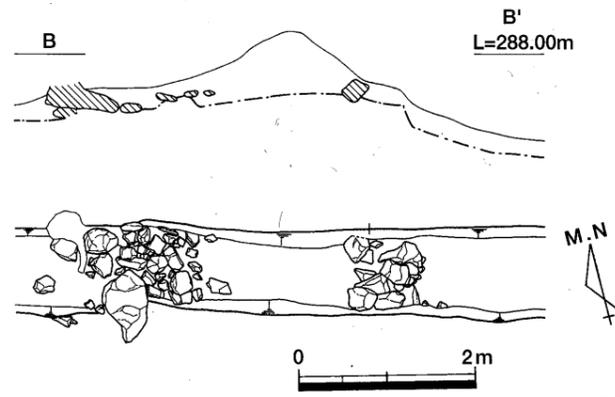


第66図 平成8年度第2調査地点出土遺物実測図1

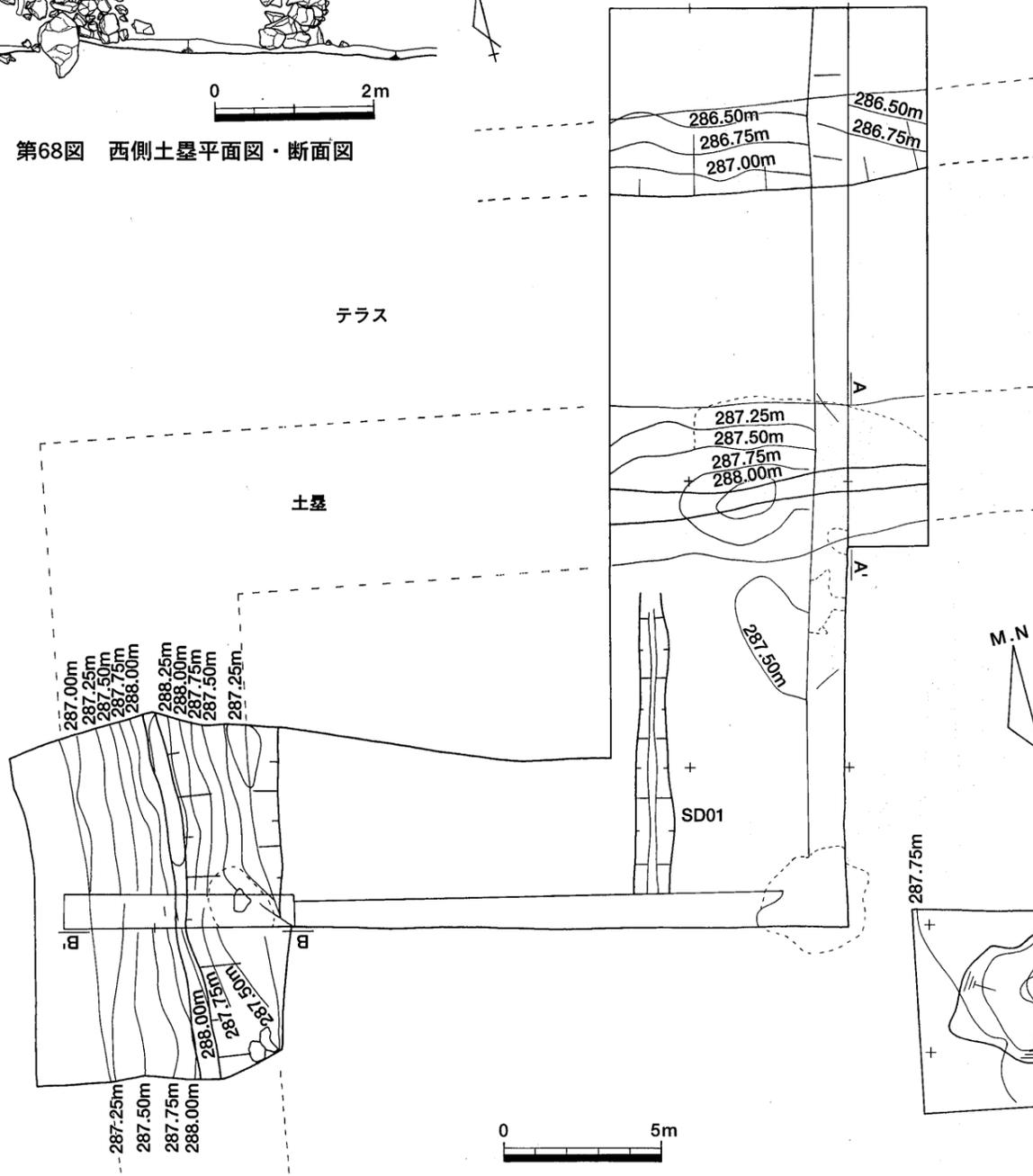
277は土師器の羽釜片である。278～287はトレンチの南端に設定した深掘りトレンチの出土遺物である。278・279は染付の椀である。282は弥生土器壺の底部である。283は陶器の壺体部片である。284は土師器甕の口縁部片である。285は須恵器片である。破片である為、全容は不明であるが、破片の端には孔が穿たれている。286・287は土師器の羽釜である。286は小型で鏝の退化が著しい。287は口縁部が内傾する。

北トレンチ (第67・69図)

西側土塁と同様に両裾に基礎石を置く構造である。南側基礎石は一辺が30cmの安山岩を一列に並べている。一方、北側の基礎石は南側基礎石の倍近くもある一辺が50～60cmの安山岩を南北2列に並べている。それよりも北側の安山岩は安山岩風化土中に浮いた状態にあることから、崩落した基礎石と想定される。土塁の規模は両裾からの距離では底辺2.20m、高さ0.50mである。土塁の埋土については西側土塁と同様、版築は認められず、赤褐色安山岩風化土の単層である。

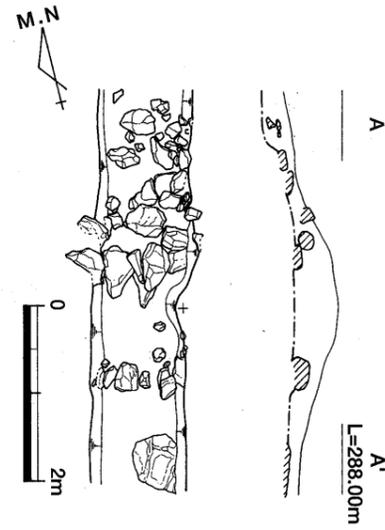


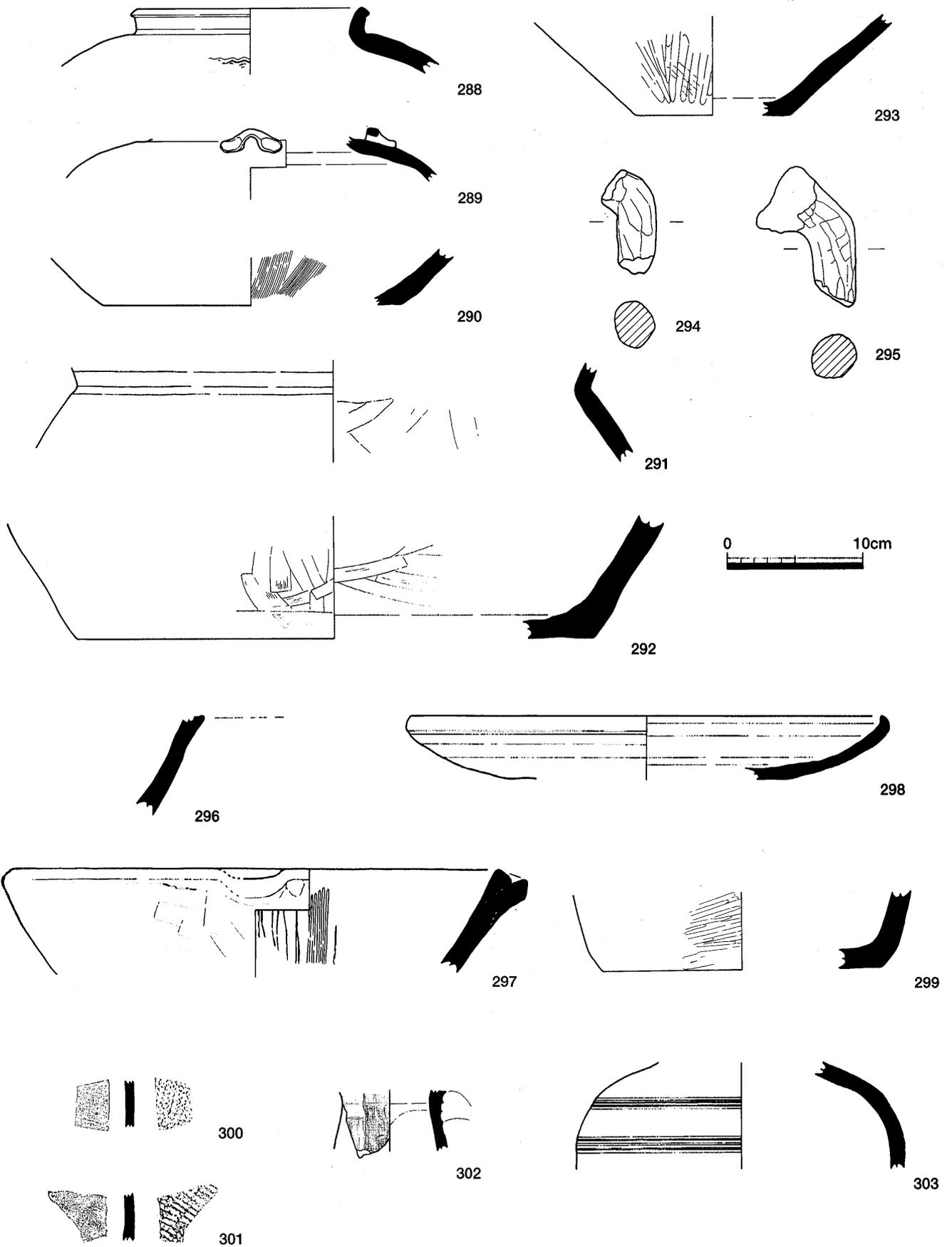
第68図 西側土塁平面図・断面図



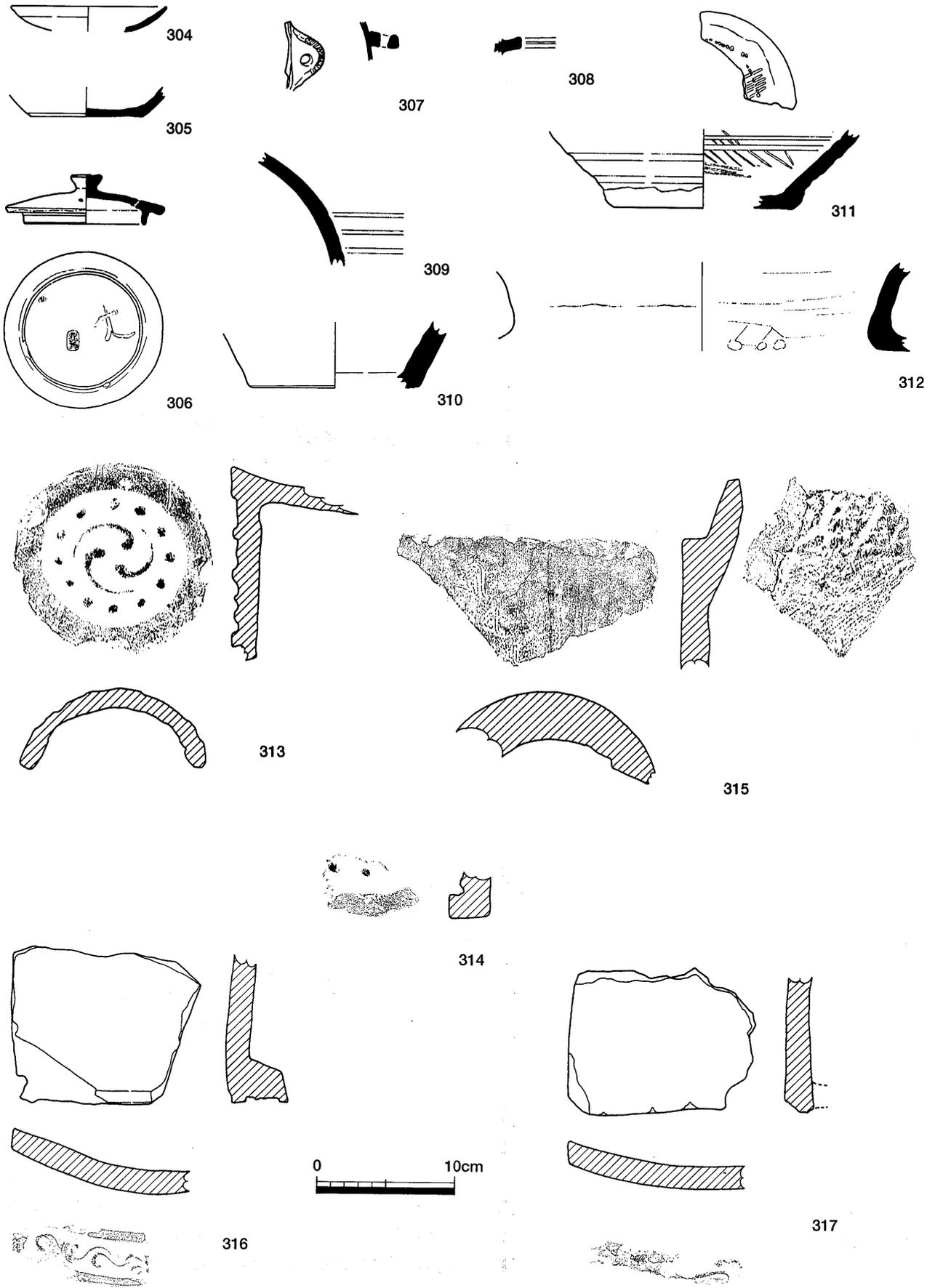
第67図 平成8年度第2調査地点調査地周辺地形測量図

第69図 北側土塁平面図・断面図





第70図 平成8年度第2調査地点出土遺物実測図2



第71図 平成8年度第2調査地点出土遺物実測図3

## 北トレンチ出土遺物（第70図）

288～292は土壘中から出土した。288・290～292は備前焼である。288・289は壺である。288は口縁端部を外側に折り曲げる。頸部は短く体部は大きく張り、外面に櫛描の波状文を描く。289は陶器である。肩部には粘土紐を貼り付けた横耳をつけていることから四耳壺か三耳壺になるものと想定される。291は甕の頸部である。292は甕の底部である。内外面には篋状工具によるナデが認められる。283は弥生土器の壺底部である。外面にはヘラミガキがみられる。284・285は土師器足釜の脚部である。296～300は土壘表土中から出土したものである。296は陶器のこね鉢と想定される。297は陶器の搗鉢である。口縁端部は肥厚せず、面をもつ。口縁部には片口が付き、内面の条溝は櫛描ではなく、溝を1条毎に描いている。298は平鉢で口縁端部は直立する。299は土師器の底部である。底部のみであることから器種は特定できないが甕の底部である。器壁が厚く外面にはヘラミガキが認められる。300・301は須恵器の体部片である。外面は格子タタキ、内面はナデである。302は陶器の壺頸部である。外面には把手の接合痕が残る。303は備前焼壺体部である。肩部には上下2段の櫛描が認められる。

## 東トレンチ（第67図）

西トレンチの南辺の延長線に北側のラインを合せてトレンチを設定した。調査区内ではトレンチ西端から6mで25cmの段差があり、最終的にはトレンチの西端からトレンチ東端まででは1m下がる。トレンチの西側とトレンチ東端の北東に直径4m前後の不定形の窪みが存在する。遺物は表土に散乱していた。

## 東トレンチ出土遺物（第71図）

304は陶器の皿である。灯明皿の可能性が考えられる。305は土瓶の底部である。外面は煤が付着している。306は陶器の蓋である。蓋の裏側には屋島の刻印がある。307は陶器の把手である。把手の中央部には孔を穿つ。308は羽釜の鏝である。309は陶器の壺体部片か。肩部に3条の沈線を施す。310は陶器の壺底部か。311は備前焼の搗鉢の底部である。体部内外面にはロクロ整形による凹凸が認められる。口縁部を欠損するが条溝の状況等から間壁編年のV期に相当するものと考えられる。312は備前焼の壺頸部片であろう。313・314は巴文軒丸瓦である。315は丸瓦片である。残存している凸面には3文字の梵字が書かれている。玉縁側から阿弥陀如来（無量寿如来）の種子のキリークであるが、次に観音の種子である（サ sa）が、次は光明真言の第4音である（ギャ, ガ, gha）が篋によって書かれている。調整は凸面がナデ、凹面には布目が認められる。細かな時期は不明であるが、瓦のつくりなどから中世のものであろうと考えられる。316・317は軒平瓦である。

## SD 01（第67図）

南北トレンチの西側で確認した南北溝である。竹を除去した段階で確認したもので検出長は11mある。北にいくほど幅を狭め、北側土壘手前で消滅する。溝の規模は幅1.10m、深さ0.20mである。遺物は出土していない。

## 小結

ここでは平成8年度の確認調査で判明したことを整理しておく。この調査では、土壘西側と北側の2箇所を断ち割り、構造・時期の確認を行った他、土壘で囲まれた内部についても一部確認調査を実施することができた。調査の結果、土壘の構造が判明した他、出土遺物から室町時代の構築であることが判明した。また、地形的には、東トレンチで段差を確認し、西トレンチでは南東隅で岩盤が露出したことから、西側が高く、東に向かい地形が傾斜していることが分かった。

『讃岐國名勝図会』（嘉永4年）に屋島寺が描かれているが、この図絵に見られる本堂西側の築地塀の延長に西側の土壘が該当するようであるが、北側築地塀と北側土壘とは同様のものとは認めにくく、位置関係からすれば、北側土壘は同図会が描かれた当時、松林の中に存在していることになる。また、描かれている築地塀には瓦が葺かれているように見えるが、調査区周辺では瓦は少量の散布しか認められなかった。同図会に描かれた屋島寺の遺構の位置関係が正しければ、室町時代には寺域であったものが、江戸時代になると土壘（築地塀）は何らかの理由で使用されなくなった可能性があり、築地塀に使用されていた瓦も他の場所に再利用された可能性も考えられる。

③平成9年度調査—平成9年度第2調査地点—（第60・72図）

調査地前の状況

調査地は屋島寺南西部の三角点（標高 292.1 m）と瑠璃宝池（血の池）に挟まれた北西から南東に長軸をとる幅 50 m，長さ約 120 mの長方形を呈する平坦部である。地形は調査地東端が最も高く，標高は 290 m 余りで緩やかに北西方向に下る。

土層（第72図）

土層は上から最大で 10cm 程度の腐葉土，10～20cm 程度の均質な黄褐色シルト，赤褐色集塊岩風化層に大別できる。各土層を詳しくみてみると，植物性腐蝕物の混入によると思われる灰褐色シルト層＝I 層があり，腐葉土に覆われる。これと一連のシルト層で土壌化を受けていない部分と考えられる灰黄色の I' 層がこれに続いて，遺物はこの I～I' 層から出土している。その下層は I' 層と同一とみえるシルトを主体として，讃岐岩質安山岩／集塊岩の風化物と考えられる赤褐色の細礫が斑状に混入する層があり，黄白色または暗灰色を呈する礫も含みつつ，礫の径と量を増しながら下部へと移行している。トレンチ内では未確認であるが，調査地点から南数 10 m の遊歩道崖面にみる地層から類推して，以下は讃岐岩質安山岩が，幾層かの集塊岩を挟んで続くものとみられる。

黄褐色シルト層上半部には，弥生土器・石鏃などのサヌカイト片を主とする包含層がみられる。

調査内容

トレンチは東西方向に長さ 100m の主トレンチを設定し，西から 75 m の地点に北と南に分岐するトレンチと 100 m の地点から南に屈曲する 2 本の支トレンチを設定し遺構の確認を行った（第72図）。主トレンチでは 35 m 付近では弥生時代の包含層を確認したことから，遺構の広がりを確認するためトレンチを南北に拡張したが，北側でピットを確認した以外は明確な遺構は確認できなかった。

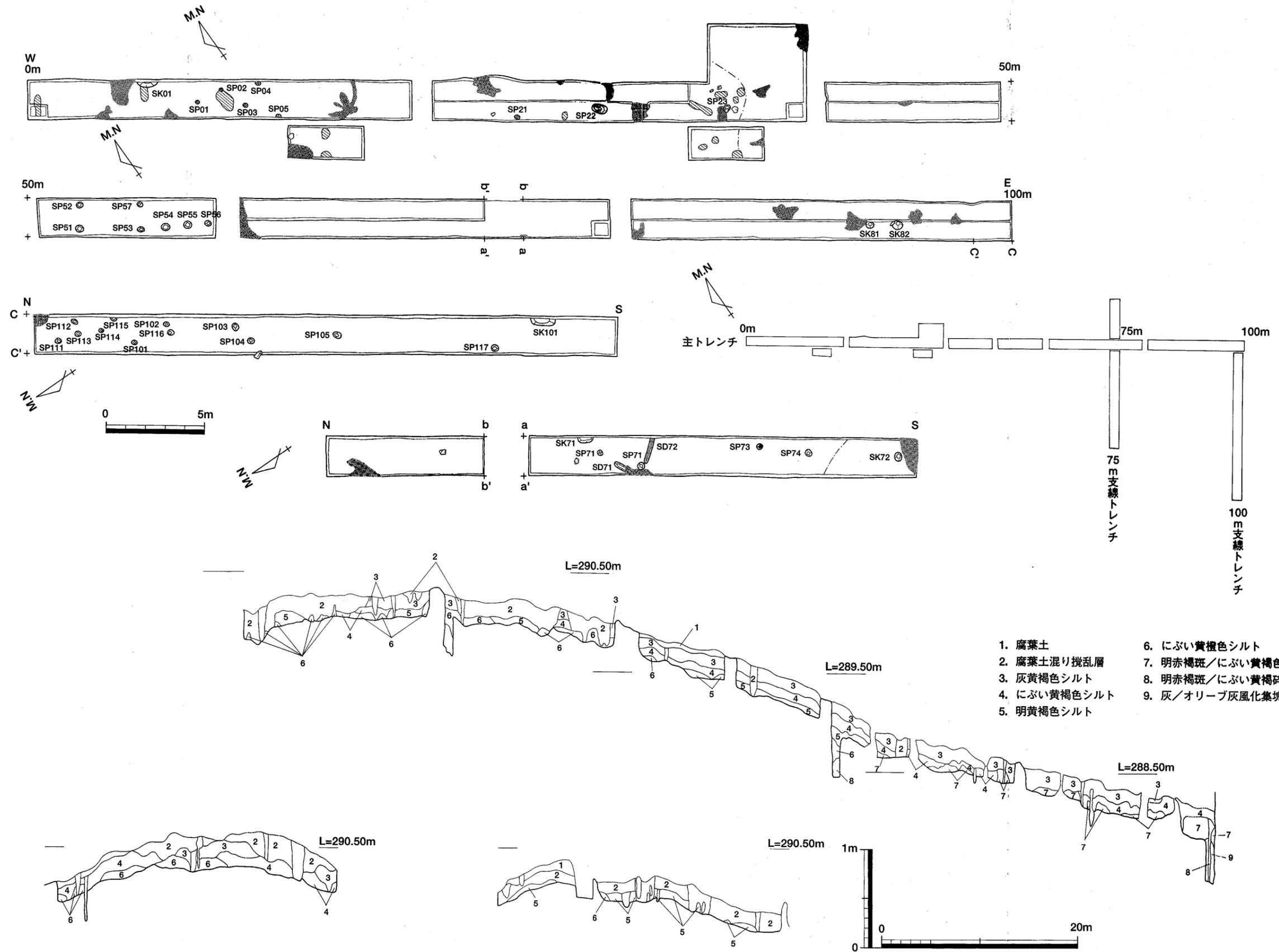
確認した包含層からは少量の石鏃，弥生土器片，土師質土器碗片などが出土している。また，100m 支トレンチ区では近代以降と考えられるピット，土坑を確認している。

遺構について

平成9年度の調査トレンチからは柱穴と考えられるピット，土坑，溝（木の根か）等が確認されている。主トレンチ 50 m 付近ではおよび 100 m 支線トレンチ北側ではピットが数個並ぶ部分も確認したが，トレンチの幅が狭かったこともあり，掘立柱建物として成り立つかどうか不明である。

各遺構の規模については第3表にまとめた。

調査区 遺構名	径 長軸	短軸	深さ	備考	調査区 遺構名	径 長軸	短軸	深さ	備考
0～20m 区					SP54	33		39	
SP01	16		19		SP55	39		34	
SP02	19		19		SP56	28		23	
SP03	22		13		SP57	28		36	掘り方 2 段
SP04	20		13		80～100m 区				
SP05	24		14		SK81	40		55	
SK01	96	36	16		SK82	20		33	
20～40m 区					支線 75m 区				
SP21	24		25	掘方 2 段	SP71	22		50	
SP22	70	50	20.5	礎石?	SP72	31		25	
SP23	34		17	礎石?	SP73	28		33	
50～60m 区					SP74	34		26	
SP51	35		50	礎石 2	SK71	70	30	8	炭
SP52	29		50	掘方 2 段	SK72	30	38	9	炭
SP53	28		38						



第72図 平成9年度第2調査地点平面図、土層図（折込）

調査区 遺構名	径 長軸	短軸	深さ	備考	調査区 遺構名	径 長軸	短軸	深さ	備考
SP101	23		17		SP108	25		33	
SP102	30		12		SP109	20		24	
SP103	40		14		SP110	27		29	
SP104	28		17		SP111	30		30	
SP105	40		11		SP112	30		17	
SP106	28		17		SK101	120	37	7	
SP107	40		11						

第3表 遺構一覧表 (単位 cm)

## 平成9年度 第2調査地点出土遺物 (第73図)

318～336は弥生土器である。318は鉢の口縁部である。319は壺の頸部である。320～322は壺の体部片である。320・321には櫛描波状文、322には篋状工具による列点文が描かれている。323は甕の口縁部である。口縁端部が若干肥厚する。324～330は甕の底部である。326・327・328の外面上にはヘラミガキが認められる。331～335は壺の底部である。333には外面上にヘラミガキが認められる。335の底部は他の底部に比べて器壁が肉厚であることから前期に遡る可能性が考えられる。336は高杯の脚部である。外面上はヘラミガキ、内面上は篋状工具によるナデが認められる。337は土器片を使用した紡錘車の未製品である。穿孔の途中で止めている。338～341は石鏃である。338は凹基式、339・340は凸基式である。下辺部に調整が認められないことから未製品である可能性が考えられる。341は扁平な縦長剥片を使用した石匙であると考えられる。342は亀山焼の壺体部片である。外面上は格子タタキ、内面上は篋状工具によるナデが認められる。343は須恵器壺の体部片である。外面上はタタキ、内面上は同心円の当て具痕が顕著に残る。344・345は土師器の杯である。つくりは粗雑である。底部が突出していることから11世紀頃のものであると考えられる。346は黒色土器の椀底部である。高台の大半を欠損するが、あまり高くない形態になるものと考えられる。347は須恵質の甕の底部である。色調は青灰を呈することから、初期備前焼の甕の底部である可能性が考えられる。外面上はヘラケズリ、内面上は篋状工具によるナデが認められる。

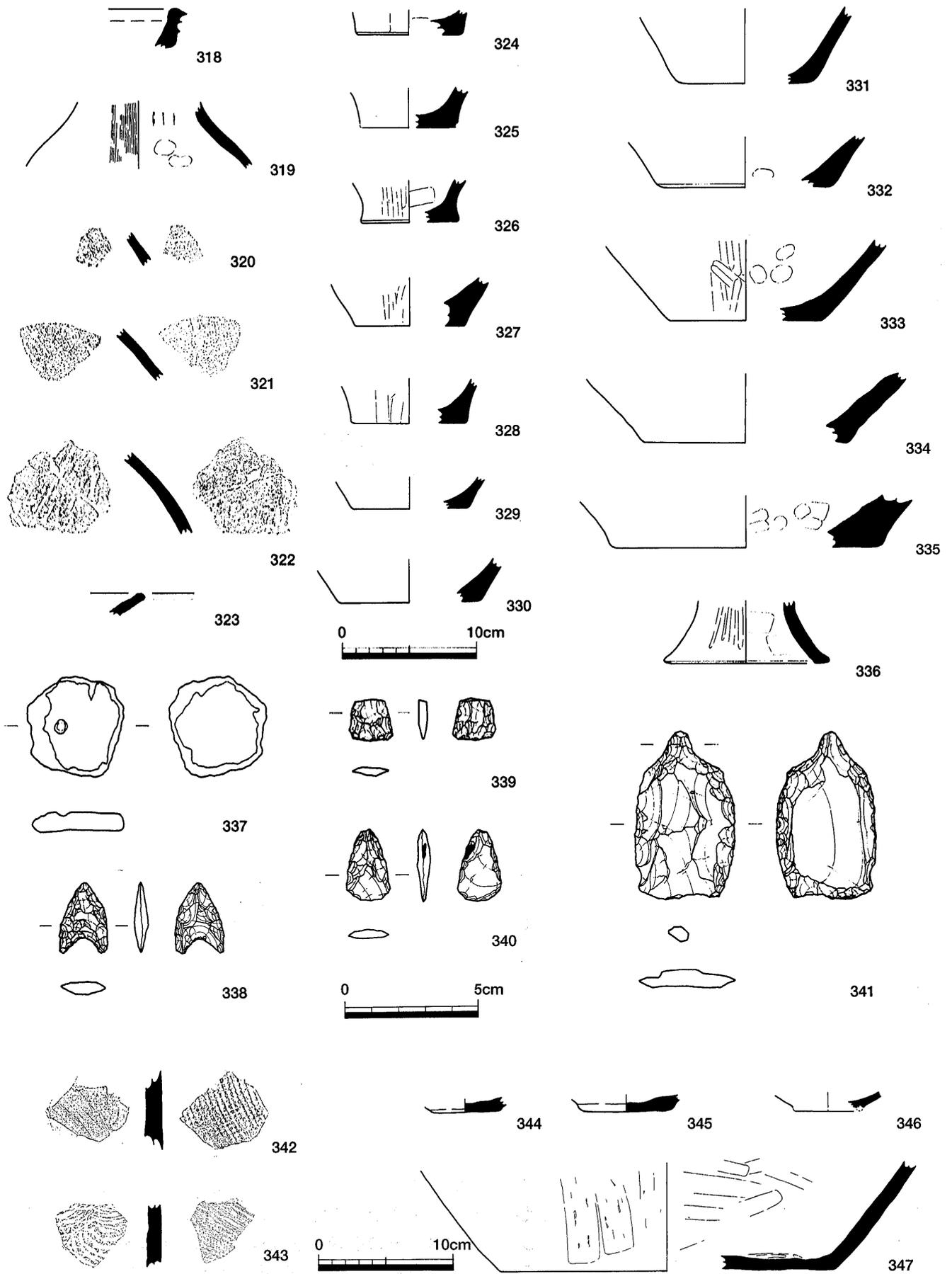
## 小結

前述した遺構・遺物などによる所見を概括すると、調査区一帯の平坦部は、弥生土器片を中心として一部に須恵器、土師器、須恵質土器片(初期備前焼?)を含む包含層が点綴しており、遺物量が必ずしも濃密といえない区域もあるが、それらに伴う掘立柱建物跡等が点在するものと判断される。

狭長な範囲内の知見であり厳密さに欠けるが、遺構の分布とその時期としては、弥生中期と考えられる時期の遺物包含層が、不連続であるもののほぼ全域にかけてみられ、主トレンチ35m点付近、同50m付近、75m支トレンチ付近、100m支トレンチ付近でみられるピット群は、当該時期の建物遺構の一部である可能性が指摘できる。また、75m支トレンチ、100m支トレンチで、各1点ではあるが11～12世紀のものと思われる土師器椀高台部が出土しており、主トレンチ15～35m地点にかけては、須恵器甕片とそれを伴うピット群がみられ、古代末から中世前半頃になんらかの生活が営まれたことを示唆するものと考えられる。

なお、屋島の地質層序は、中腹の標高200mあたりまでが領家花崗岩類の基盤岩で、その上に、讃岐層群に属しての不規則な浸食面をもつ、厚さ50m内外の塩基性凝灰角礫岩が重なる。さらに讃岐層群のうちで上位の部分にあてられ、湖水性の火山性堆積層である讃岐岩質安山岩(=含む輝石讃岐岩質安山岩)熔岩が何層かの角閃安山岩質(角閃～斜方輝石安山岩質)集塊岩を挟みながらほぼ水平に発達し、船底形の台地形(Mesa)を形づくる。五色台熔岩とはほぼ同一高度で、同時期の火山活動によると考えられる(五色台13Ma/屋島11Ma)。これが風化し赤褐色粘土状となる。さらに、南嶺山頂三角点付近に、ほぼ水平で厚さ約2～5m、1～2cm幅の縞模様を示す湖成層らしい屋島礫層がみえる。層理・偽層の発達した粗粒砂層で標高や讃岐平野の地質から、県南部の標高150～300m付近の丘陵に発達する三豊層群上部の礫層に対比されて、そのRelicと見られている。下位の讃岐層群集塊岩とは著しい不整合を

第3章 調査の成果



第73図 平成9年度第2調査地点出土遺物実測図

示している。

また、この讃岐礫層を覆う厚さ 10 数 cm の灰褐色シルト層は、肉眼で見える限り、トレンチ土層Ⅰ乃至Ⅰ'層に類似しており、屋島礫層の堆積以降に生成した讃岐岩質安山岩の風化層により被覆されたかと思われる状況を示している。なお、本層から採取したサンプル中に火山ガラスが確認され<sup>(5)</sup>、その堆積の過程の一時期に火山灰の降下があったことを示す。因みに、トレンチ最高位置の標高は、水平距離で 100m 余にあたる屋島礫層上面の標高と大差がない。

#### ④貯水池推定地の調査 —平成 13 年度第 3 調査地点— (第 74 図)

調査地は屋島寺の東、瑠璃宝池(通称血の池)の南側に位置し、現在仮設の駐車場になっている部分について確認調査を行った。調査地設定の理由は調査地の北側には瑠璃宝池が存在し、南側にも池が存在することから 2 つの池に挟まれた調査地もかつて池であったことが容易に想像できたからである。近年古代山城である鞠智城では池跡の調査を行い、当該期の土器・瓦・木簡などが出土し大きな成果を上げている<sup>(6)</sup>。

日本の古代山城の手本となった朝鮮半島の古代山城では水を確保するために城内に池を構築している。屋嶋城で、築城当時機能していた可能性が高いのは今回の調査地を含む一連の池である。平成 11 年度から屋嶋城に関係する調査として外郭線の調査を実施しているが、調査結果として古代山城における土塁構造の特徴の一つである版築技法が認められないこと、時期を限定できるだけの出土遺物が皆無であることなど、文献における古代山城屋嶋城は存在するが、遺跡としての古代山城屋嶋城を特定する材料には非常に乏しい状況にあった。池の構築時期が屋嶋城の機能していた時期まで遡るのであれば、調査によって堆積物を確認することにより屋嶋城に該当する遺物も認められるのではないかとの想定のもと、確認調査は池の中央部に東西 10 m、南北 2 m のトレンチを設定し層毎に遺物の採集を行った。

#### 層位 (第 74 図)

調査地の層位については、トレンチ西側の壁が南側からの流水により調査途中で崩落したため、トレンチ西半分は最終的な土層の確認が行えなかった。残った東側の土層を見る限りにおいて、どの層もほぼ水平堆積をしている。土質についてはシルト質細砂～シルトであることから、急激に堆積をしたものではなく、徐々に堆積していったことが想定される。トレンチにおける各土層を上位から見ていくと、現地盤から下は 90cm の厚さで仮設駐車場造成時による花崗土やコンクリートブロックで充填されており、堅く締まっている。それより下が本来の堆積層である。上から 1a 層は褐灰色シルト質細砂で駐車場造成前まで使用されていた水田耕作土である。1b 層はにぶい黄橙色シルト質細砂で旧床土である。2a 層は灰褐色シルト質細砂で水田土壌層である。2b 層はにぶい黄橙色シルト質細砂である。3 層はにぶい褐色シルト質細砂であり、下面に Fe の集積が若干認められる。4a 層は黄灰色シルトで水田土壌層である。5 層は黄灰色シルトで Fe の集積が認められる。5' 層は黄灰色シルトで 4a 層よりは若干粒子が粗い。6 層は黄灰色シルトである。6' 層は黄灰色シルトであり、炭・焼土・瓦・土器を多量に含み他の層に比べ遺物の量が格段に多い。7 層は灰白色細～粗砂である。基盤層である黄灰色シルト層は中央部が最も深く東にいくにしたがい緩やかに上がる。

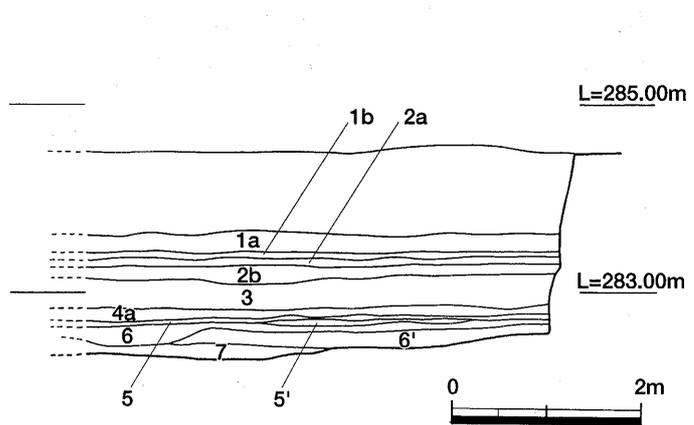
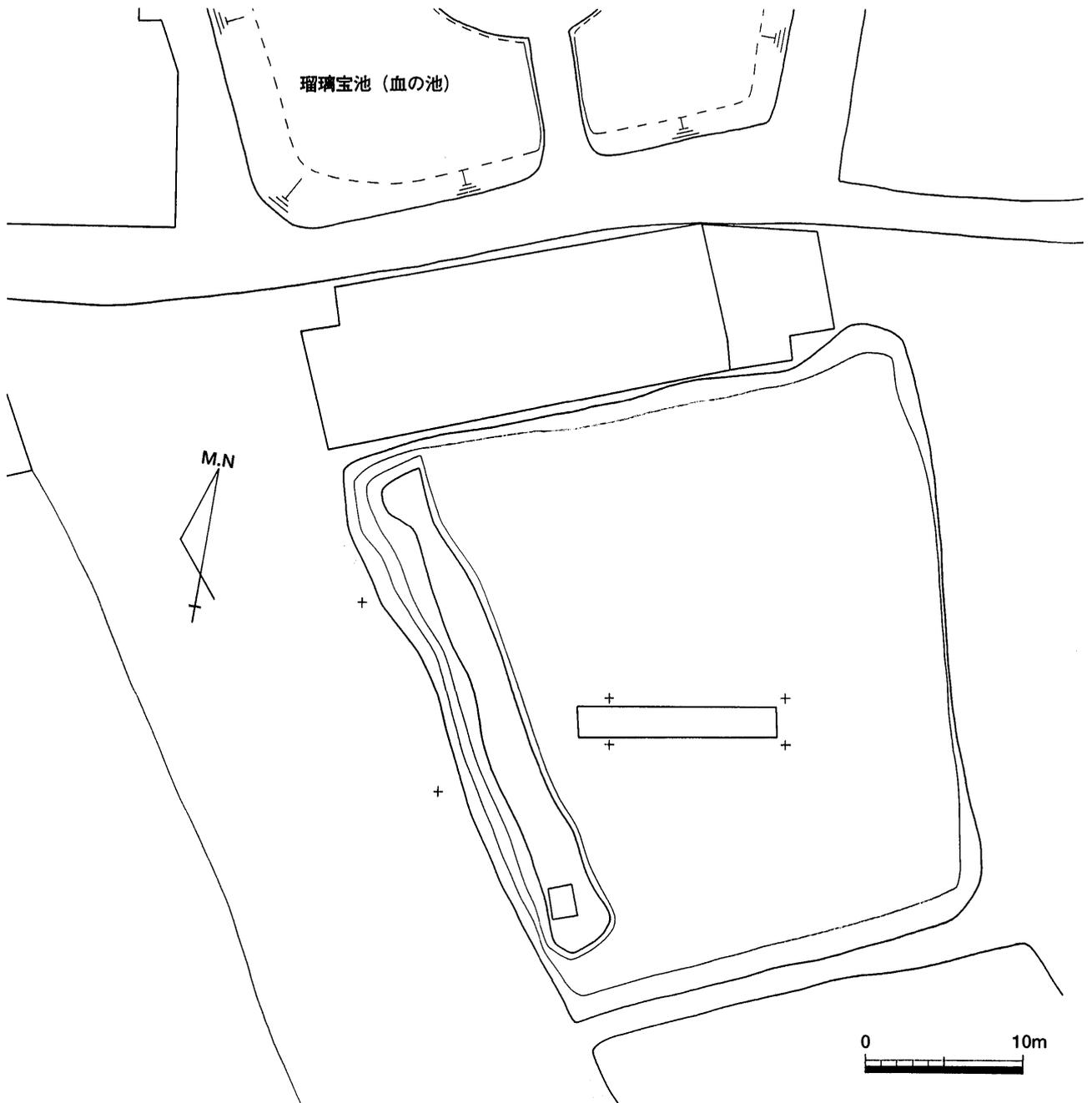
#### 出土遺物 (第 75 ～ 79 図)

出土遺物は第 1 層、第 3 層、4 ～ 5 層、6 層から出土している。

348 ～ 354 は第 1 層からの出土遺物である。348 は土師器の小皿である。口径 5cm と非常に小さなことから、実用品とは考えにくい。349 は染付の小椀である。350 ・ 351 は青磁の椀である。350 は高台の高い器形である。352 は陶器の灯明皿である。353 は不明土製品である。「嶋」の文字の上は欠損してよく分からないが部首の「はらい」が認められることから屋嶋と刻印しているものと考えられる。354 は土師器足釜の脚部である。

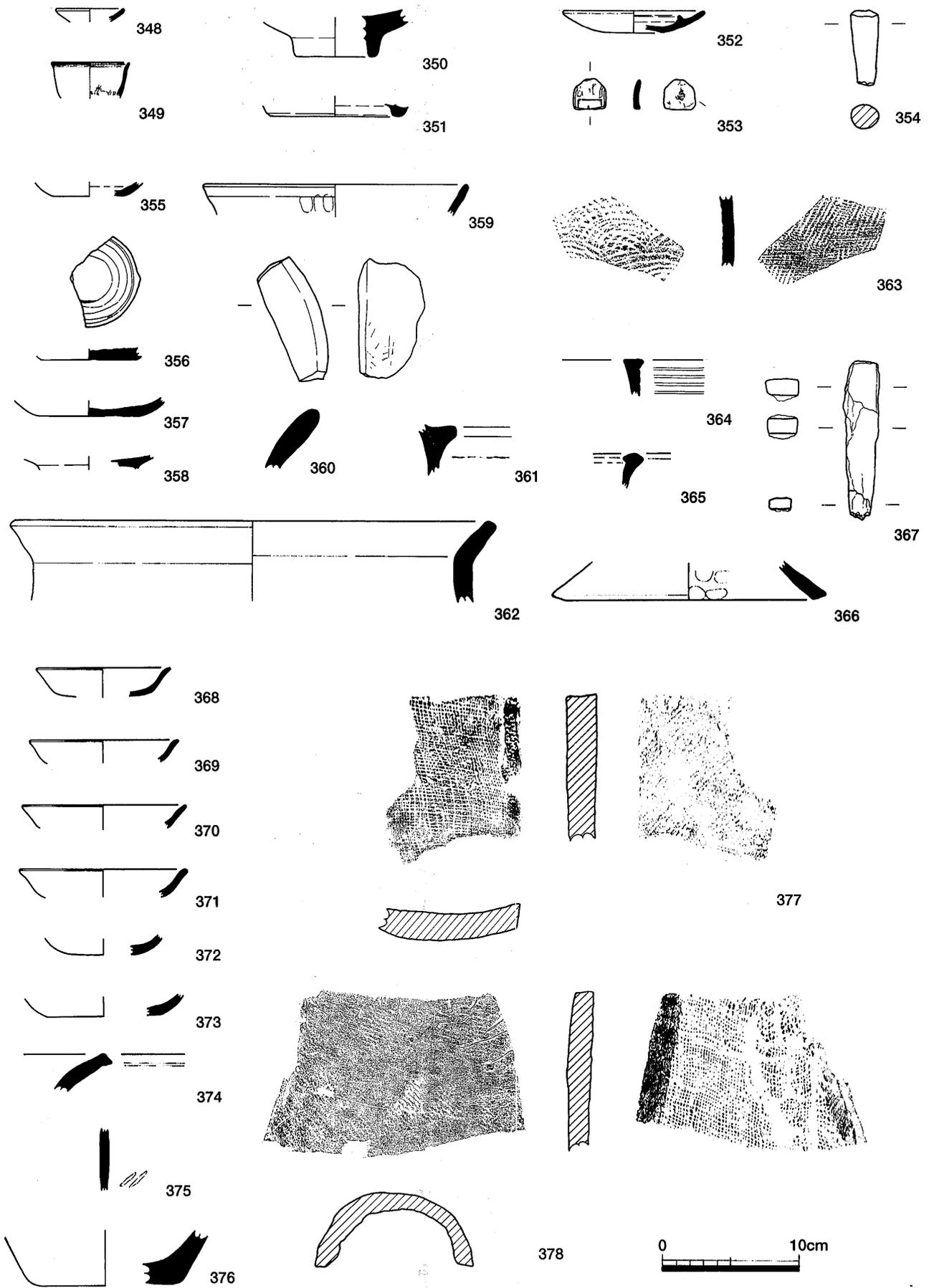
355 ～ 366 は 3 層出土遺物である。355 ～ 357 は土師器である。356 ・ 357 は杯である。356 の内面見込みにロクロ痕が顕著に残る。357 は前者に比べて法量が大きなものなので底部の角が丸い。358 は黒色土器の底部である。高台端を欠損するが、退化した高台になるものと考えられる。359 は土師器の椀である。口縁部外面にはナデによる指頭痕が認められる。360 は移動式竈の鏝である。361 は土師器羽釜の口縁部である。362 は土師器の甕である。胴部は膨らまないようである。363 は須恵器壺の体部片である。

第3章 調査の成果

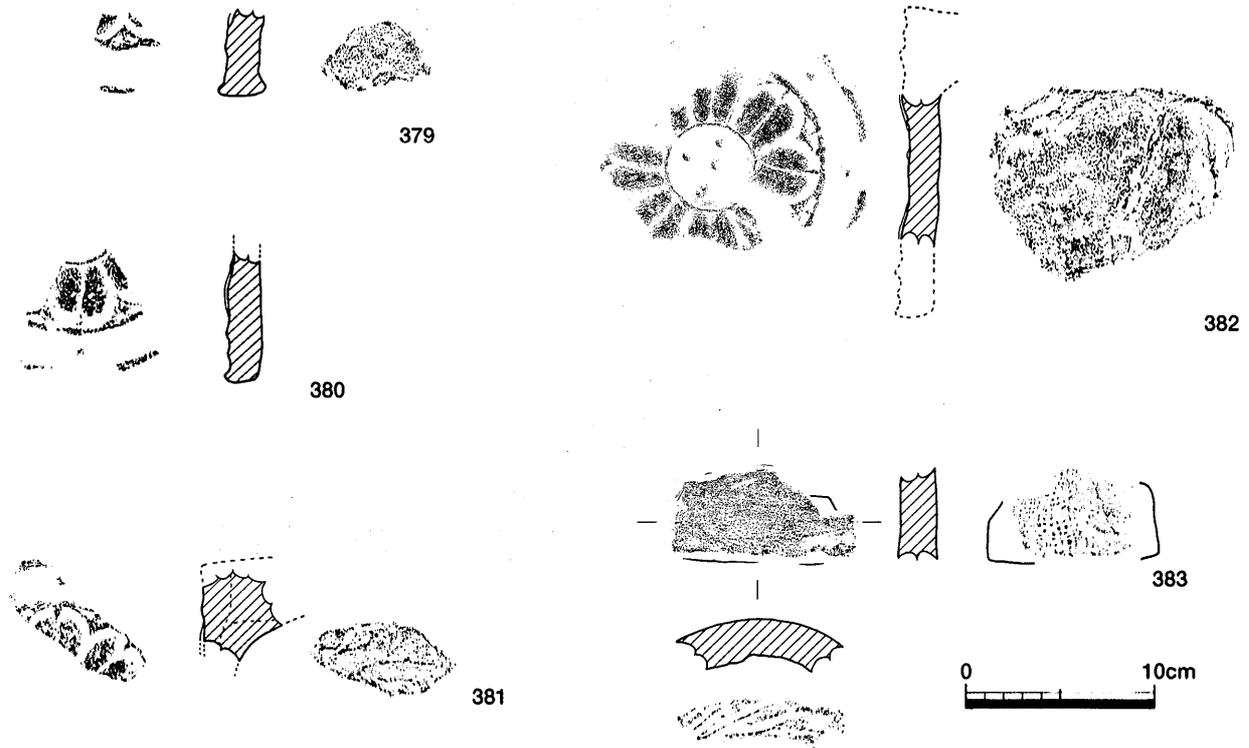


- |                    |          |
|--------------------|----------|
| 1a. 褐灰色シルト質細砂      | 10YR6/1  |
| 1b. にぶい黄橙色シルト質細砂   | 10YR6/3  |
| 2a. 灰褐色シルト質細砂      | 7.5YR6/2 |
| 2b. にぶい黄橙色シルト質細砂   | 10YR6/3  |
| 3. にぶい褐色シルト質細砂     | 7.5YR6/3 |
| 4a. 黄灰色シルト         | 2.5Y6/1  |
| 5. 4aと同じ Fe集積      | 2.5Y6/1  |
| 5'. " (粒子が若干粗い)    | 2.5Y6/1  |
| 6. 4aと同じ           | 2.5Y6/1  |
| 6'. " (炭・焼土を多量に含む) | 2.5Y6/1  |
| 7. 灰白色細~粗砂         | 10YR7/1  |

第74図 貯水池推定地トレンチ配置図・土層図



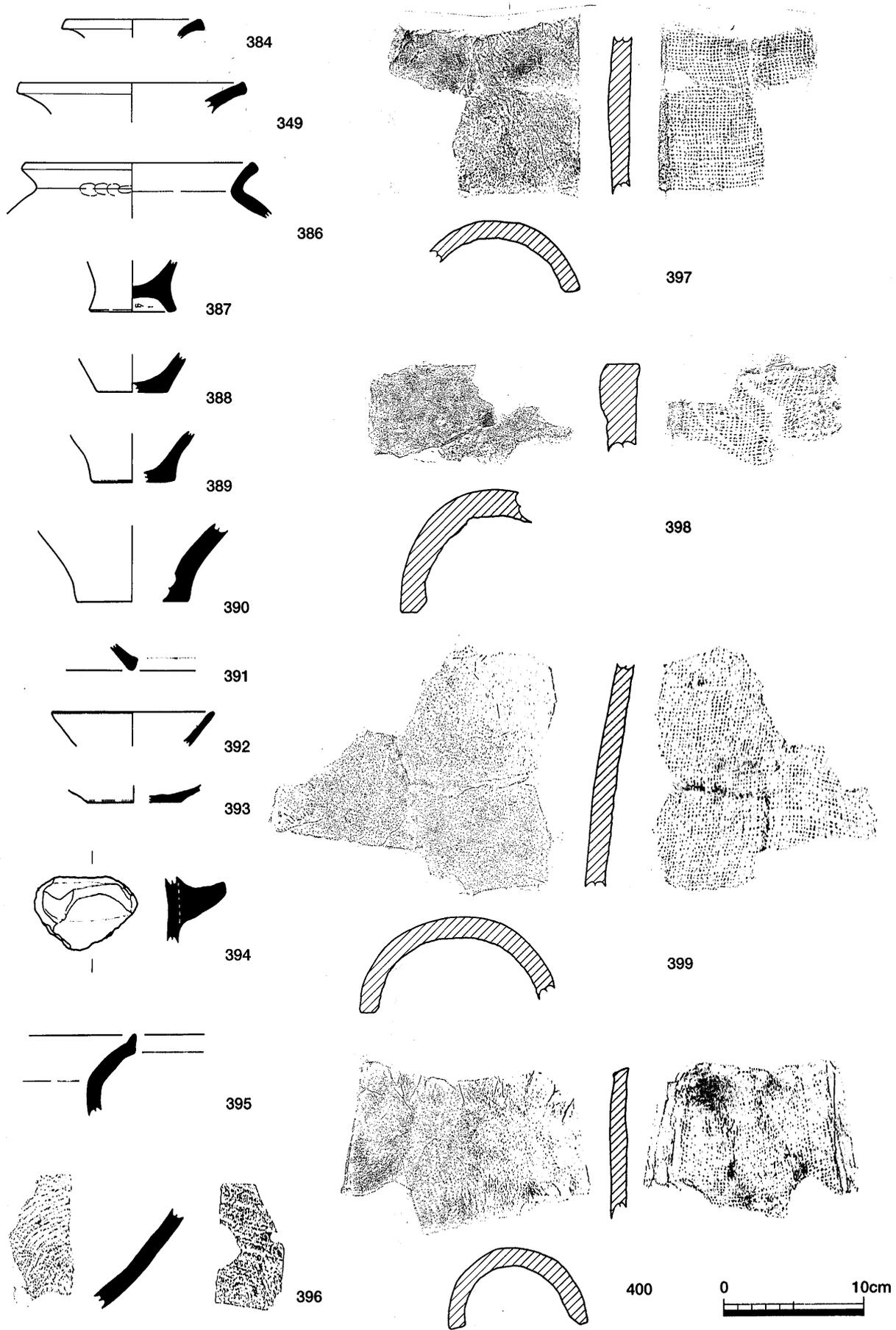
第75図 貯水池推定地出土遺物実測図1



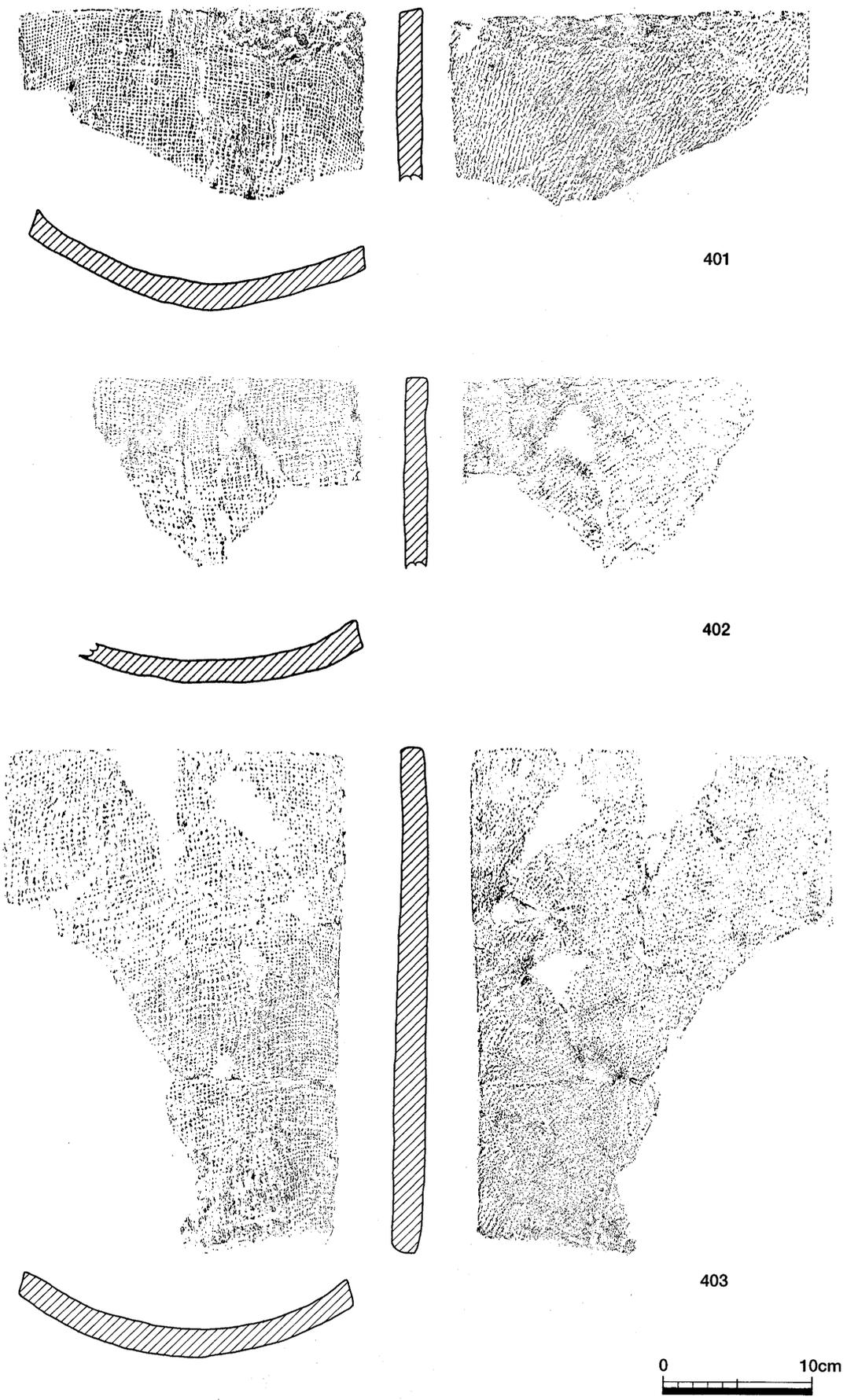
第76図 貯水池推定地出土遺物実測図2

外面はタタキ、内面は同心円状の当て具痕が顕著に残る。364～366は弥生土器である。364は逆し字状を呈する甕である。口縁部外面には現状で4条の篋描沈線が認められる。弥生時代前期末頃のものである。365鉢もしくは高杯の口縁部である。口縁部は左右に拡張している。366は高杯の脚部である。脚端部はあまり肥厚しない。367は鉄釘である。断面は長形状を呈する。

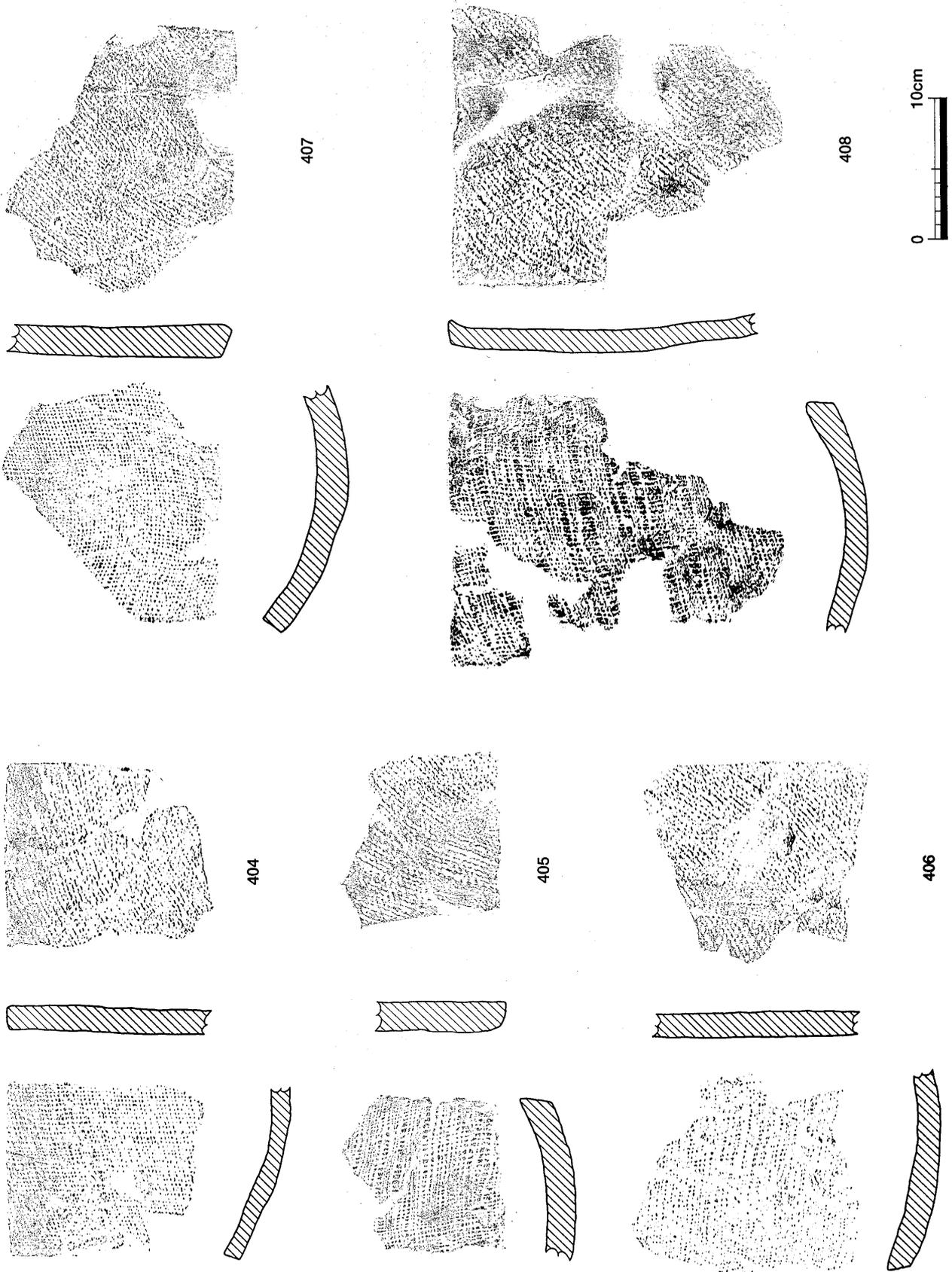
368～378は4～6層出土遺物である。368～373は土師器の杯である。いずれの口縁端部も外反し器高が浅い。374は土師器甕の口縁部である。口縁端部は下方に若干拡張する。375は弥生土器壺の頸部片である。直立すると考えられる頸部の外面には篋状工具による列点が認められる。376は弥生土器の甕底部である。377は平瓦である。凹面は布目が認められ、凸面はタタキによる縄目が認められる。378は行基式の丸瓦である。凸面にはタタキ目、凹面は布目が認められる。焼成は須恵質である。379～408は6層出土の遺物である。379～382は八葉複弁蓮華文軒丸瓦である。いずれも破片で全容が推定できる破片は382のみである。382の破片から全体の様相を観察すると中房内の蓮子数は1+4と簡略化され、複弁中央の境界線が消えて、子葉も平坦なものとなっているだけでなく、蓮弁頂部や間弁が弁区をまわる圏線と一体化している他、外区は外縁と内縁の境がなくなり、珠文を8しか配さないなどの形骸化要素が随所に見られる。383は瓦当と丸瓦部の接合面が残る丸瓦である。接合面には篋状工具による斜めの刻みが残る。凸面は摩滅の為不明であるが、凹面は布目が残る。384～399は弥生土器である。384・385は広口壺である。384は口縁端部が肥厚する。386は甕である。口縁部は肥厚し、体部は丸みをもつものと考えられる。387～390は甕の底部である。387の底部は上げ底を呈する。392は高杯の脚部である。392・393土師器の杯である。394は土師器鍋の把手である。舌状の把手が短いことから同器種の中にあっては後出する資料である。395は須恵器壺の口縁部である。口縁端部を大きく摘み上げる。396は須恵器壺の底部である。外面はタタキ、内面は同心円状の当て具痕が顕著に残る。397～400は行基式の丸瓦である。瓦の器壁は薄く、調整は凸面にはタタキ痕が凹面には布目痕が顕著に残る。401～408は平瓦である。調整は凹面が布目痕、凸面がタタキによる縄目痕が認められる。



第77図 貯水池推定地出土遺物実測図3



第78図 貯水池推定地出土遺物実測図4



第79図 貯水池推定地出土遺物実測図5

### 小結

ここでは貯水池推定地のトレンチ調査で出土した遺物の内、6層から出土した遺物を中心に若干述べておきたい。調査範囲は狭かったものの、6層から出土した遺物は屋島南嶺山上部の人々の活動を示す遺物が多く出土した。この内、屋島城に関係する遺物は1層から出土した373の須恵器壺体部片、6層から出土した403の土師器甕把手片、406の須恵器壺片がある。時期が特定できる口縁部片でない為、細かな時期の特定はできないが、須恵器壺の体部内面には同心円の当て具痕が明瞭に残ることから当該期のものとして考えてもよさそうである。土師器甕把手の時代変化が、古いものは長く、新しくなるに従い短くなることから、他の須恵器に比べ、時期的に新しい要素をもつと考えられるが、新しくなっても8世紀の中では収まるであろう。数少ない遺物からではあるが、当調査区は屋嶋城貯水池の可能性を考えてもよさそうである。ただ細かな時期を決定する遺物に恵まれなかったことから、池の機能した時期を特定するため、機会があれば調査区を広く取り調査を実施したい。

屋嶋城関係遺物と同じ6層からは焼土・炭・焼けた木片に混じり多量の瓦が出土した。この中には八葉複弁蓮華文軒丸瓦も出土した。この軒丸瓦については類例に乏しくいつの時期に属するのか不明であるが、6層から出土した遺物をみた場合、13世紀頃のもものが出土していることから同じ時期のものと考えられる。6層の遺物の出土状態や土層の状況からすれば、屋嶋寺が13世紀頃に火災に会い、破損した多量の瓦や建築材などを池に投棄した可能性が考えられる。

### 外郭線の調査

#### ①北側外郭線の調査—平成11年度第1調査地点・平成12年度第2調査地点—（第60・80図）

屋嶋城北側外郭線は南嶺駐車場北西側にある展望台の西側、水族館方向へ行く北側遊歩道から北へ約10m斜面を下った地形が緩斜面から急斜面に変化する場所に所在する（第60図）。この場所は昭和59年に当時全容が不明であった屋嶋城の探索に訪れた奈良女子大学（当時）の村田修三氏が発見した外郭線遺構の一部である<sup>(7)</sup>。

北側外郭線の調査は、平成11年度第1調査地点と平成12年度第2調査地点の2ヶ年にわたり合計5箇所にトレンチを設定し、土段内部の状況を確認するため、調査を行った。

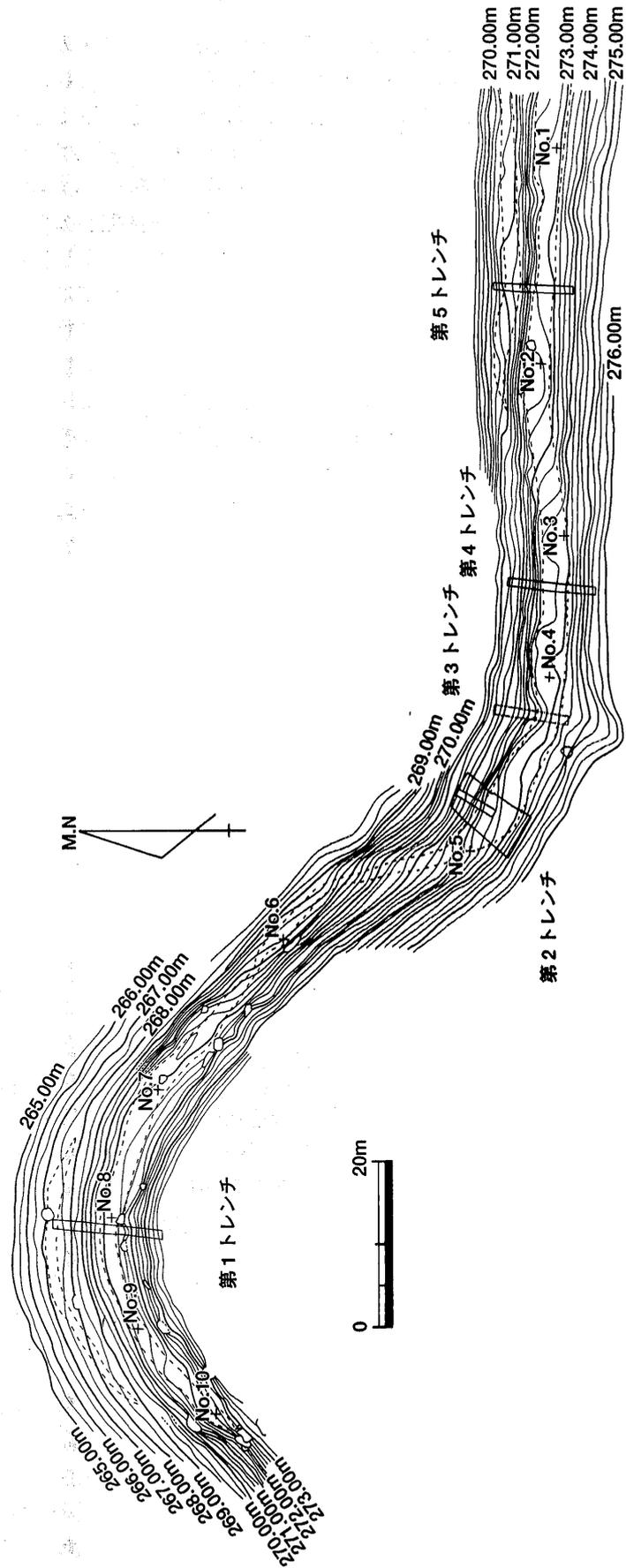
#### ②外郭線構造（第80図）

外郭線の構造は内托土段（土塁）で、場所によって多少異なるが、幅1～3mの平坦地と前面に斜面が存在する。前面斜面の高さは場所によって1～4mの差がある。外郭線確認範囲の東端は展望台の基礎によって埋没して不明であるが、ドライブウェイの駐車場入口付近では土塁状の構造が認められないことから展望台の範囲で収束するものと想定できる。北側外郭線は大半が土築であることから折れ構造が明確ではないが、緩いながらも基準杭No.2の北西・No.3の北・第3トレンチ部分・第2トレンチ部分・No.6の南東部分などでは明確に角度をもって折れていることが認められる。

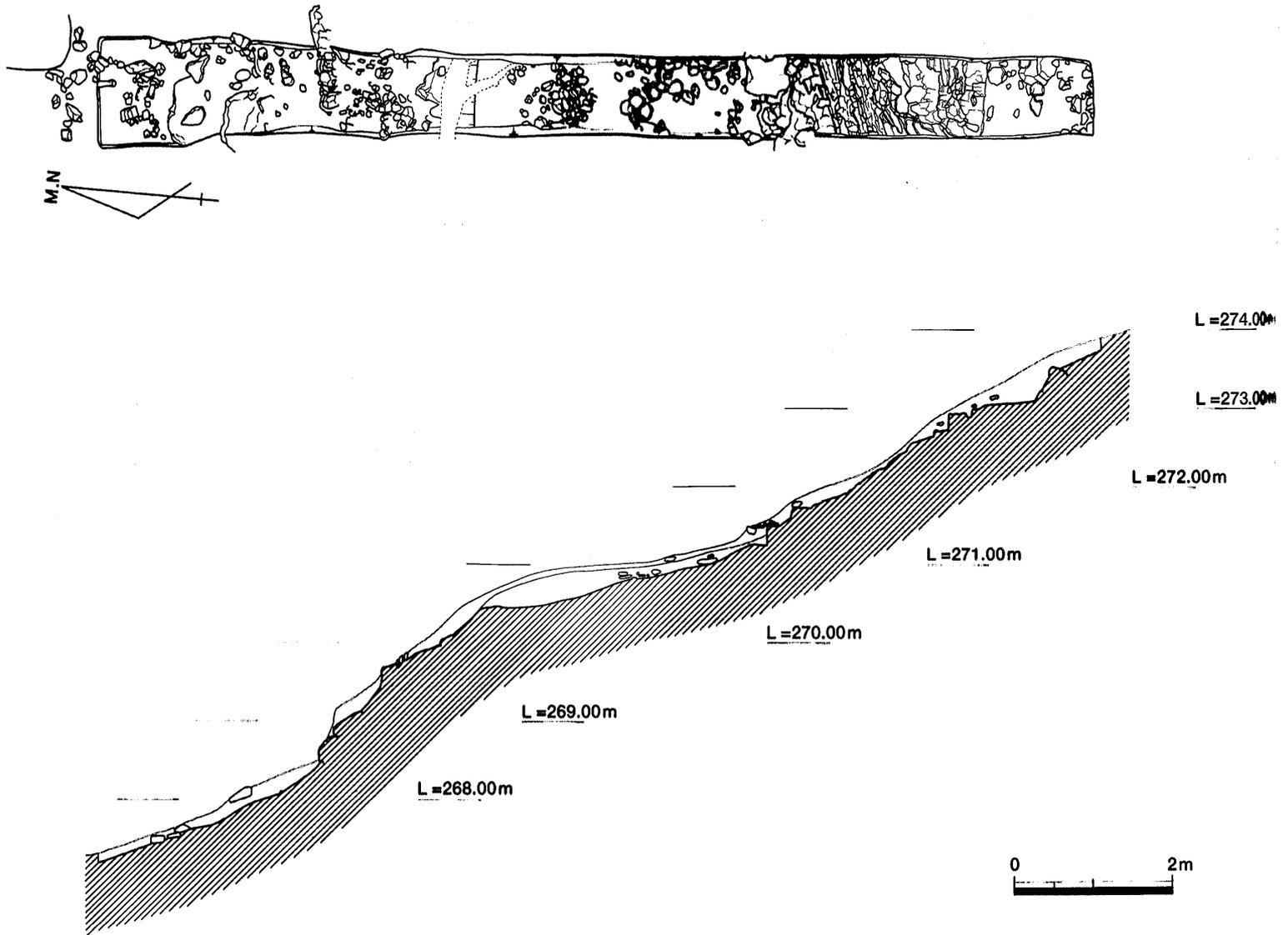
一方西端は旅館桃太郎北側にある尾根を西側へ回り込んだあたりで収束する。土段の延長は約200mである。西側尾根周辺および展望台西側周辺に車道状の平坦地が2段存在する。西側尾根周辺の外郭線に存在する上下の平坦地の比高差は4mと落差があり、展望台西側周辺に存在する外郭線に存在する上下の平坦地の比高差は2mと西側尾根のものに比べて半分の比高差である。上段部車道状平坦地の標高は最も高い部分で標高274m、最も低い尾根稜線上で271mを測り、標高の最も高い部分の斜面には幅25m、高さ1mの石塁が存在する。

#### 第1トレンチ（第81図）

旅館桃太郎北側展望台から降った尾根稜線上に設定したトレンチである。先述のとおり車道状の平坦地が2段に認められる部分であり、土塁の内部状況を確認するために確認調査を行った。トレンチは上段平坦地よりも上の斜面部から下段の平坦地にかけて長さ12.6m、幅1mのトレンチを設定し内部状況を確認した。上段の斜面は深さ10～30センチで安山岩の岩盤に到達する。上部の平坦地の下部は深さ40cmで岩盤に到達する。平坦地の下部は多少の起伏はあるものの、平坦地の幅で岩盤を平坦化している状況が確認できる。平坦地の下部の埋土は赤褐色安山岩風化土であるが、斜面部と違い堅く締っていた。下部斜面について本来は岩盤が露出していたものと考えられ、深さ20cmで岩盤に到達し、一部に



第80図 北側外郭線地形測量図



第81図 第1トレンチ平面図・土層図

は岩盤が露出している部分がある。下部の平坦地は幾分傾斜が認められるが、深さ 10cm で岩盤に到達し埋土は締まりがないことから、下部の平坦地についても本来は岩盤が露出していたものと想定される。出土遺物はない。

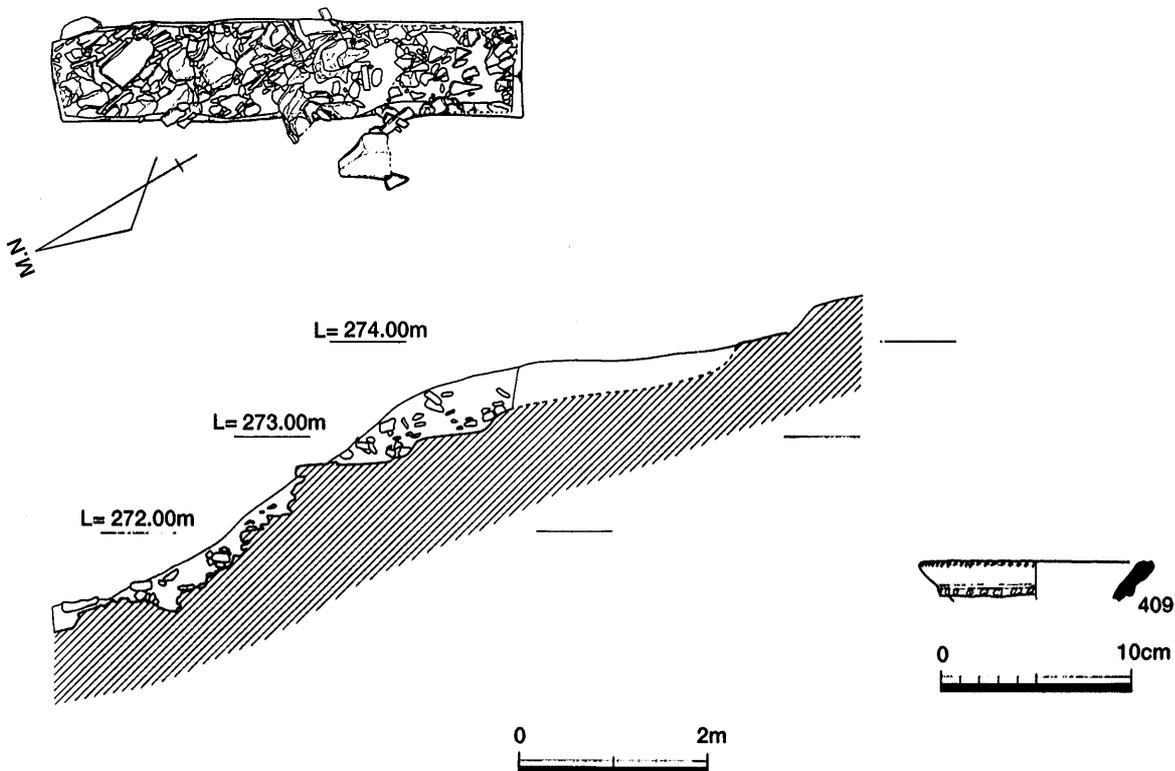
#### 第2トレンチ (第82図)

外郭線の内折れ部分に設定したトレンチである。調査前には斜面部に同一のレベルで石積みと考えられる石が3石程露出しており、調査成果が期待される箇所であった。この箇所に全長5m、幅1mのトレンチを設定し、下部の状況を確認した。調査の結果、上部平坦地の下部は、斜面近くが崩れてはいるものの深さ60cmで岩盤に到達することが判明した。トレンチ内では崩れたために岩盤の上に1石しか残存していなかったが、調査前に認められた石のレベルと比較した場合、築造当初は、岩盤の上に数石置かれていた可能性が極めて高く、その高さを復元すると1.5mは立ち上がっていたものと考えられる。トレンチ山側の延長部分には大木が存在し、土層が攪乱されている恐れがあったためにトレンチの延長は行っていないが、平坦地の下部については、トレンチを入れた部分と同様の深さで岩盤に到達するものと想定される。一方、谷側は20~30cmで岩盤に到達し、傾斜は緩いことから斜面の下部は、築造

当初は岩盤が露出しており、上部に積み上げられた土段を構成する埋土が石積みの崩落とともに斜面部に堆積したものと想定される。土層の埋土は安山岩の小礫を多量に含む赤褐色安山岩風化土である。一度に土段の高さまでの積み上げは困難であるが、同一の埋土を使用しているため、作業単位は確認できない。このトレンチからは弥生土器壺の口縁部片（第83図409）が出土している。口縁端部に刻目、口縁部外面に刻目突帯文が1条認められる。形態の特徴から弥生時代中期のものと考えられる。

### 第3トレンチ（第84・87図）

外郭線の緩い内折れ部分に設定したトレンチである。調査前は土塁部分の前面が緩く窪んでおり、石が露出している部分が認められた。他の箇所は土塁上部の平坦地の裏側が斜面になるのに比べて、山側に奥行があること、北側外郭線の最高所であることから城門を想定していた。トレンチは全長8.8m、幅1mで確認調査を行った。トレンチ調査の結果、深さ20cm程度で岩盤に到達した。この状況から城



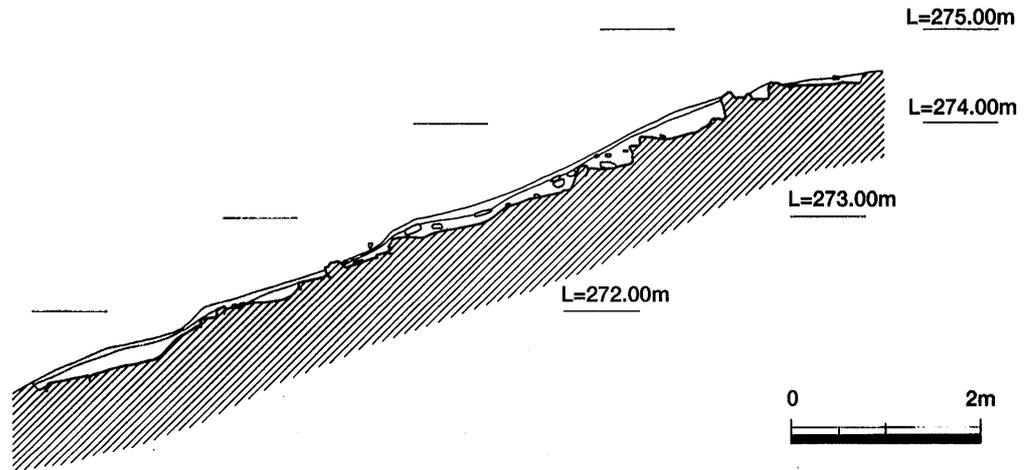
第82図 第2トレンチ平面図・土層図

第83図 第2トレンチ出土遺物実測図

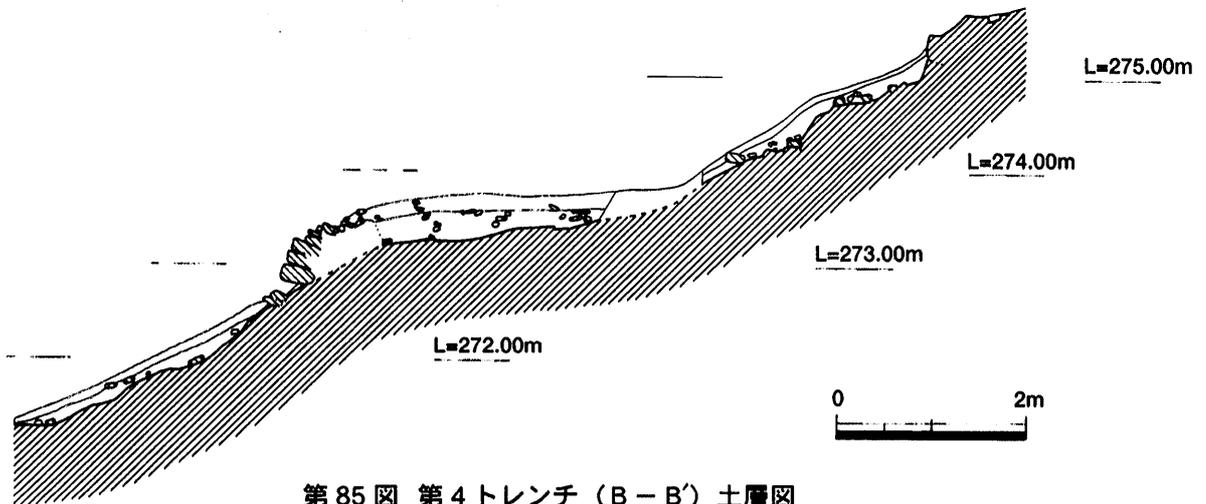
門ではないことが判明した。確認した地山である岩盤は大きく見れば階段状になっている。これらが自然のものか、人工的なものかは現状では判断できない。しかし、トレンチ南端部分はこの土段上部と高さが同じであることから、ある程度は手を加えているものと想定される。このトレンチでは第2トレンチや第4トレンチで見られた石塁は認められない。トレンチ下部には安山岩の塊石が散乱していたことから築造当初はこの部分にも石塁が存在したが、後世に上部からの雨水や土砂によって流された可能性が考えられる。

### 第4トレンチ（第85・87図）

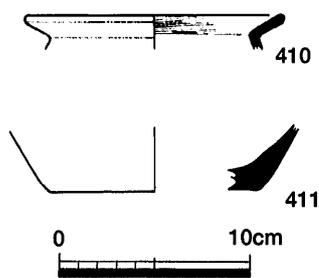
石塁部分に設定したトレンチである。土段部分における確認調査の結果、版築によって構築されていないことが各トレンチの調査結果から判明していたが、北側外郭線の内、石塁が認められる裏側については確認調査を実施していなかったため、全長10.4m、幅1mのトレンチを設定した。トレンチによる土層観察では、土塁上部平坦面から安山岩の岩盤までの深さは50cmであり、土塁平坦部の下部は上面と同様に安山岩の岩盤をカットしている状況が認められる。石塁は岩盤をカットした平坦面より下っ



第84図 第3トレンチ (A-A') 土層図



第85図 第4トレンチ (B-B') 土層図

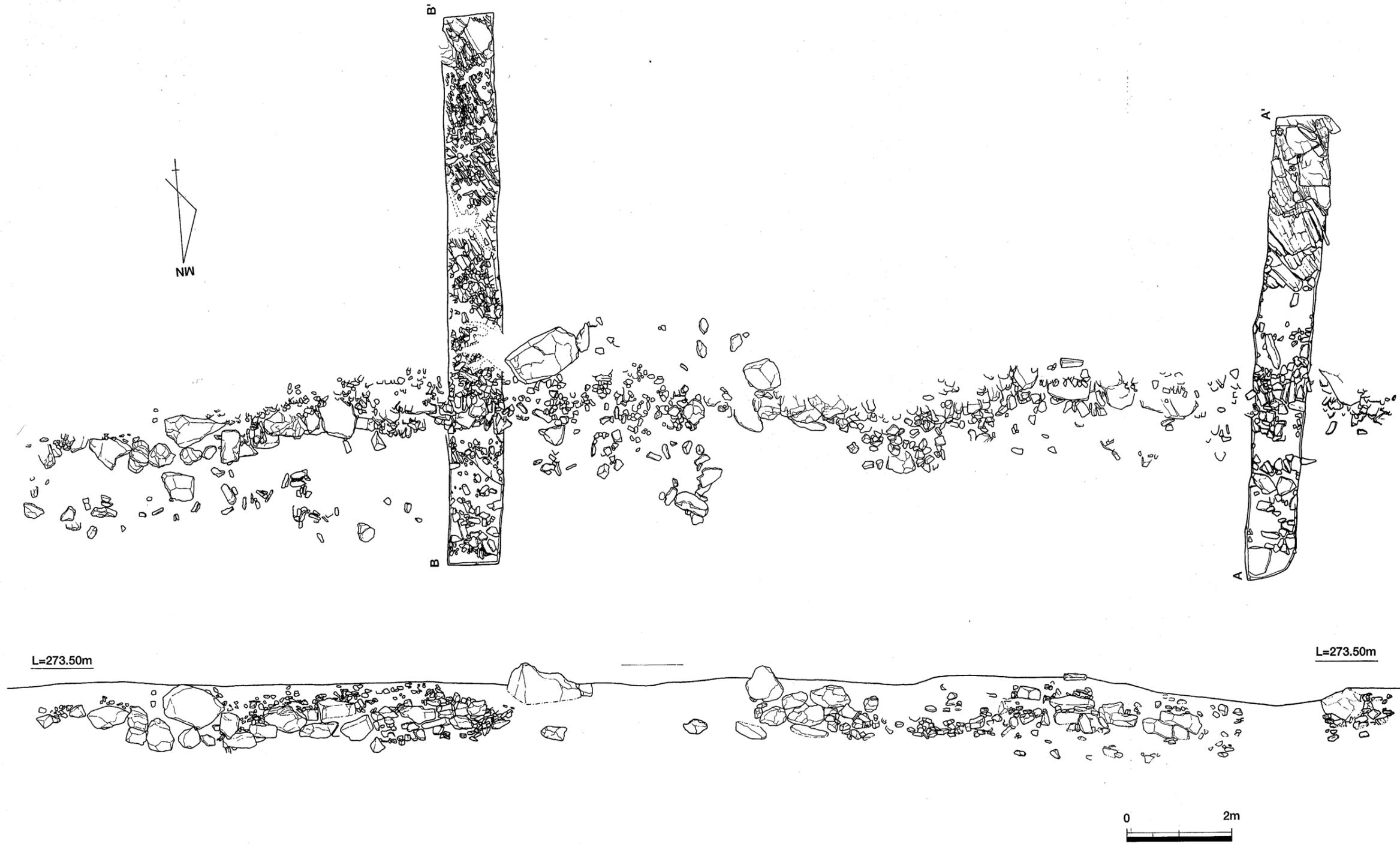


第86図 第3・4トレンチ出土遺物実測図

た部分から築いており、現存での高さは70cmである。第2トレンチで確認した石塁に使用している石材の奥行は30～40cmあり、石塁の裏側は奥行50cm程度が安山岩の小礫で裏込めされていた。その奥は安山岩の小礫と安山岩の風化土が混在して埋められている状況が確認できたが、これまでと同様に版築技法は認められなかった。このトレンチからは遺物の出土はないが、第3トレンチと当トレンチ間の石塁を精査中、弥生土器の甕口縁部（第86図410）が出土した。「く」の字状口縁形態を呈するもので、口縁端部は上方に摘み上げない。調整は口縁部内面に刷毛目を、外面はナデ調整を施す。このような特徴をもった土器は讃岐東部に多く見られ、弥生時代後期後半以降の時期のものと考えられる。この他、弥生土器の甕底部（第86図411）も出土しているが、摩滅が激しく調整等は不明である。

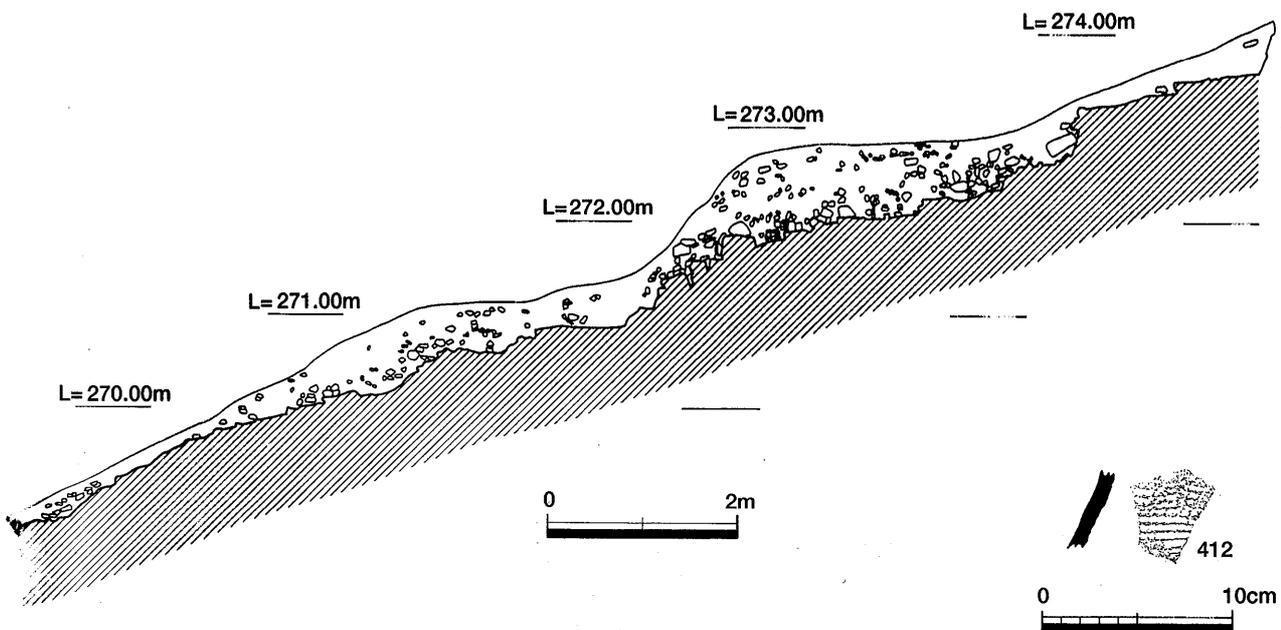
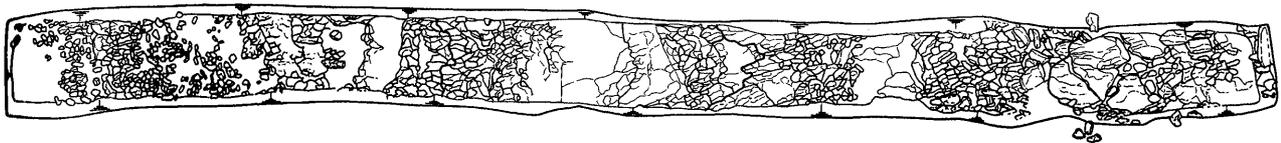
#### 第5トレンチ（第88図）

北側外郭線の東側で車道状の平坦地が2段に認められる部分である。全長13.30m、幅1mのトレンチを設定し、下部の状況を確認した。調査前から上段平坦地の斜面が下段平坦地の斜面に比べ急傾斜に作られていることが想定されていたが、トレンチによる下部の調査でも同様な状況を確認することができ



第87図 第3・4トレンチ平面図・立面図

た。上段の平坦地の下部は、深さ80cmで安山岩の岩盤に到達する。多少の起伏はあるものの、平坦地の下部は、上部平坦地の幅の分だけ人工的に削平しているようである。一方、下部平坦地の下部の状況は約50cmで上段と同様に安山岩の岩盤に到達する。下段も平坦地の幅の分だけ人工的に削平しているものと想定される。土段の埋土は安山岩の小礫を多量に含む赤褐色安山岩風化土である。土層埋土については、幾層かの作業単位が想定されるが、このトレンチにおいても作業単位は確認できなかった。出土遺物について、このトレンチからは掘削土を埋め戻す際に須恵器の甕体部（第89図412）が出土している。掘削土の埋め戻しの際に出土したことから、正確な包含状況は不明である。上部からの流れ込みによるものかもしれない。須恵器片の外面は格子のタタキが顕著で自然釉がかかる。内面はナデである。焼成は良好で胎土は堅緻である。



第88図 第5トレンチ平面図・土層図

第89図 第5トレンチ出土遺物実測図

### ③北側外郭線段状遺構

調査の対象としなかったが、北側外郭線の比高差にして約10m下に岩盤を利用したと考えられる数段の段状遺構が存在する。確認調査を行っていないので人工構造物か自然のものか即断できないが、坂出市の城山でも城門遺構の下部で数段の段状遺構がかつて認められたという<sup>(8)</sup>。

### ④西南外郭線の調査 —平成12年度第3調査地点・平成13年度第1調査地点—（第60・90～97図）

平成10年1月に市内高松町在住の平岡岩夫氏によって発見された石塁を中心とする外郭線である<sup>(9)</sup>。発見を受け、平成10年2月以降、専門職員の現地確認、高松市文化財保護審議会委員の現地視察、有識者による現地調査を得た結果、確認された遺構は発見された位置・構造などから古代山城屋嶋城を検証する上で重要であるとの認識はなされたものの、外郭線前面の石塁に使用されている安山岩割石の積

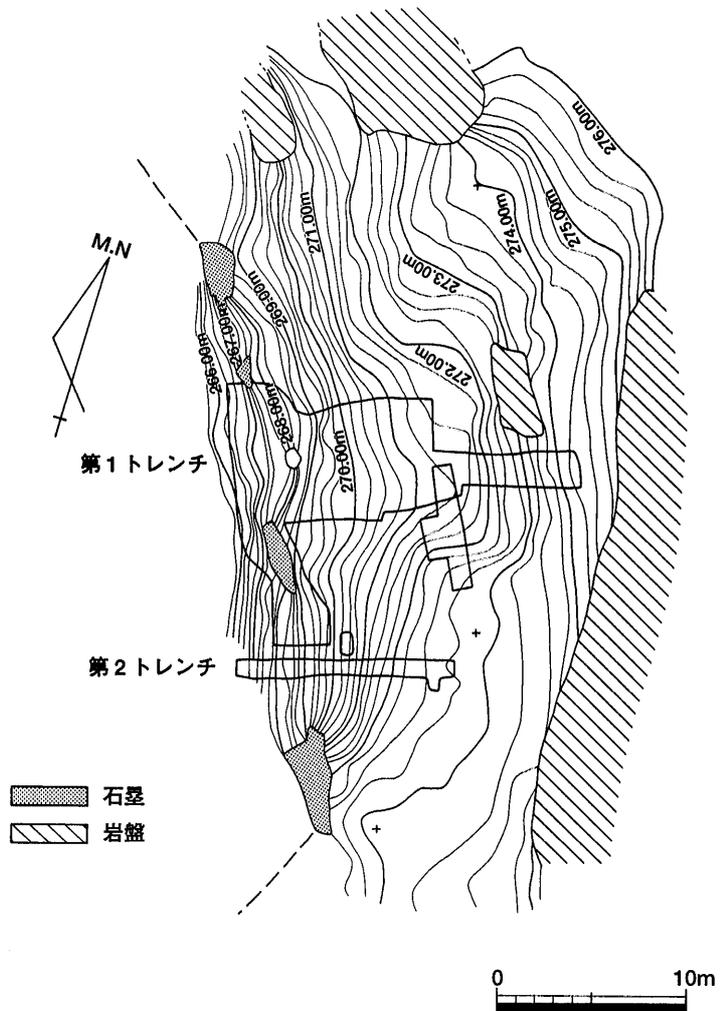
方が非常に粗いことから、確認された遺構が古代に属するものとの断定には至らなかった。一方、西南斜面の外郭線発見を受け、以前から確認されていた北側外郭線を再度確認した結果、土塁の一部に石塁の存在する部分を確認したことから、この部分についても有識者による現地調査を依頼した。その結果、北側斜面の外郭線については、古代山城にみられる外郭線構造に似ており、石塁に使用されている石の規模も揃っており、北側外郭線について高い評価を得たことから平成10年6月に行われた記者発表についても同様な評価で資料提供を行った。その後、基礎調査事業の調査に平行して数回の現地踏査を行った結果、外郭線である石塁の内、北端近くの途切れた部分については、発見当初、本来あった石塁が上部からの土砂により押し流され崩落したものと考えていたが、石塁が途切れた部分が崩落したにしては不自然であること、石塁が途切れた南端の石塁が重箱積みであること（第90図、図版41-1・42-2・3・4）、石塁が途切れた部分の裏側が窪んでいること及び石塁裏側の平坦地（車道）が他の箇所を確認されている車道の幅に比べて広いこと（奥行約10m）などから、西南斜面に認められる外郭線については、他の箇所とは別の構造物（城門）が存在する可能性が高まった<sup>(10)</sup>。

平成12年度には西南斜面の確認調査を実施するため、調査予定地の樹木を伐採したところ、樹木が繁茂していた段階では確認できなかった外郭線裏側の窪みが、途中で北東方向に向きを変え山上部に向かって続いている状況を確認することができた。このため、一部確認調査を行う前に現況での地形測量を行った。その後、平坦地から窪みにかかる部分について確認調査を実施した結果、人工的な石積みを確認した。しかし、確認した石積みの広がりを追跡するだけの調査期間が確保できないことから写真撮影の後、埋め戻しを行った。

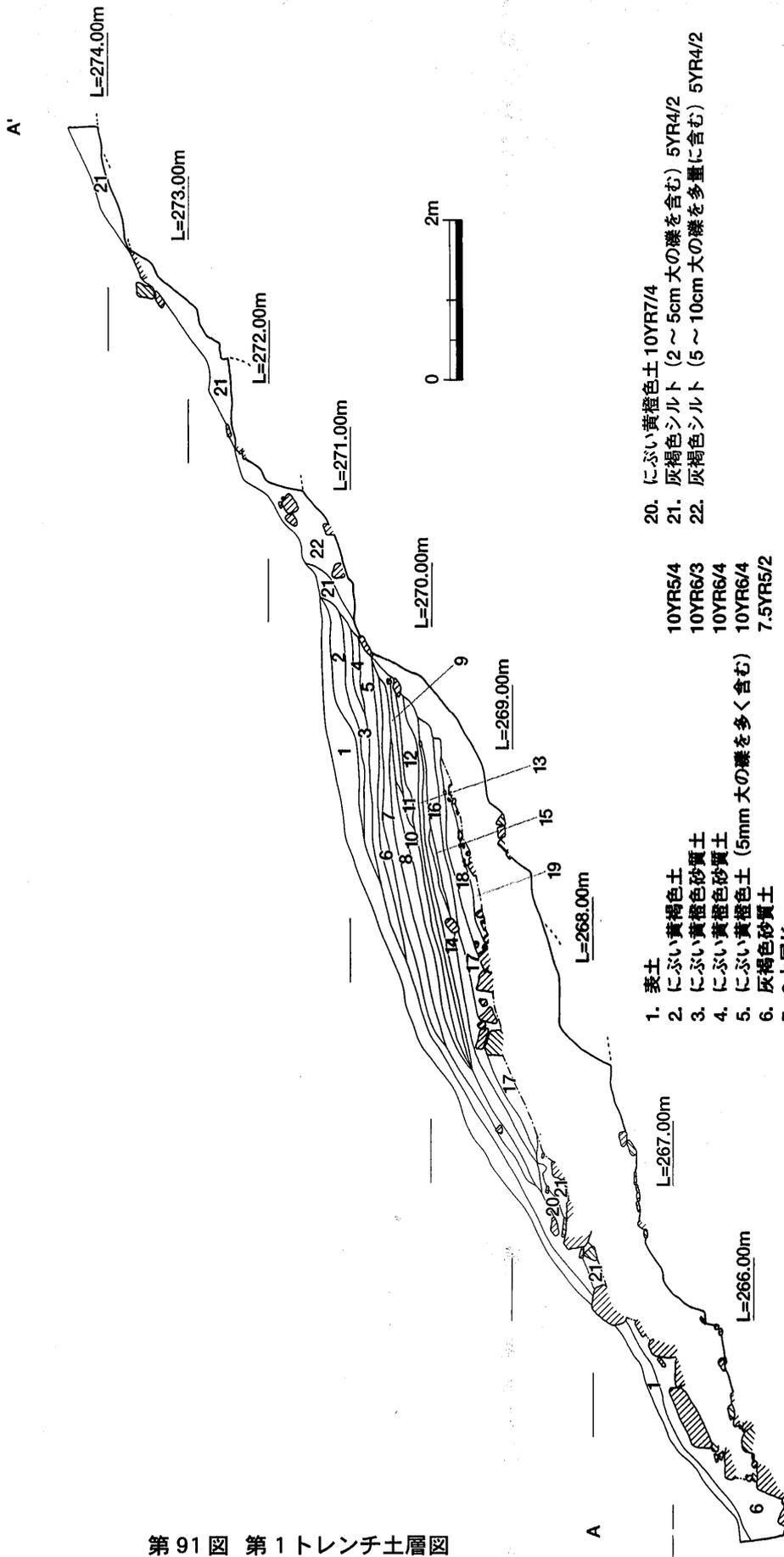
本格的な西南斜面の確認調査は平成13年度に入ってから行った。まず8月末より地形測量を行い、第3調査地点が終了した10月末から確認調査を開始した。確認トレンチは当初、外郭線の北側で城門を推定している部分に長さ10m、幅2mの東西方向のトレンチを設定し下部の状況を確認した。深さ約1m程は山側からの堆積土が認められ（第91図）、その下には安山岩の塊石と小礫が散乱していた。予想以上に上部からの堆積が厚かったため、当初設定していたトレンチでは下部の確認が行えない状況になったので、トレンチを順次拡張し城門遺構の確認に努めた。崩落した側壁等により調査は困難であったが、目的である城門遺構を確認することができた。

**外郭線構造**（第90図、図版41・42）

西南斜面に存在する外郭線の構造は、緩い谷を中心に作られており、他で確認されている外郭線構造

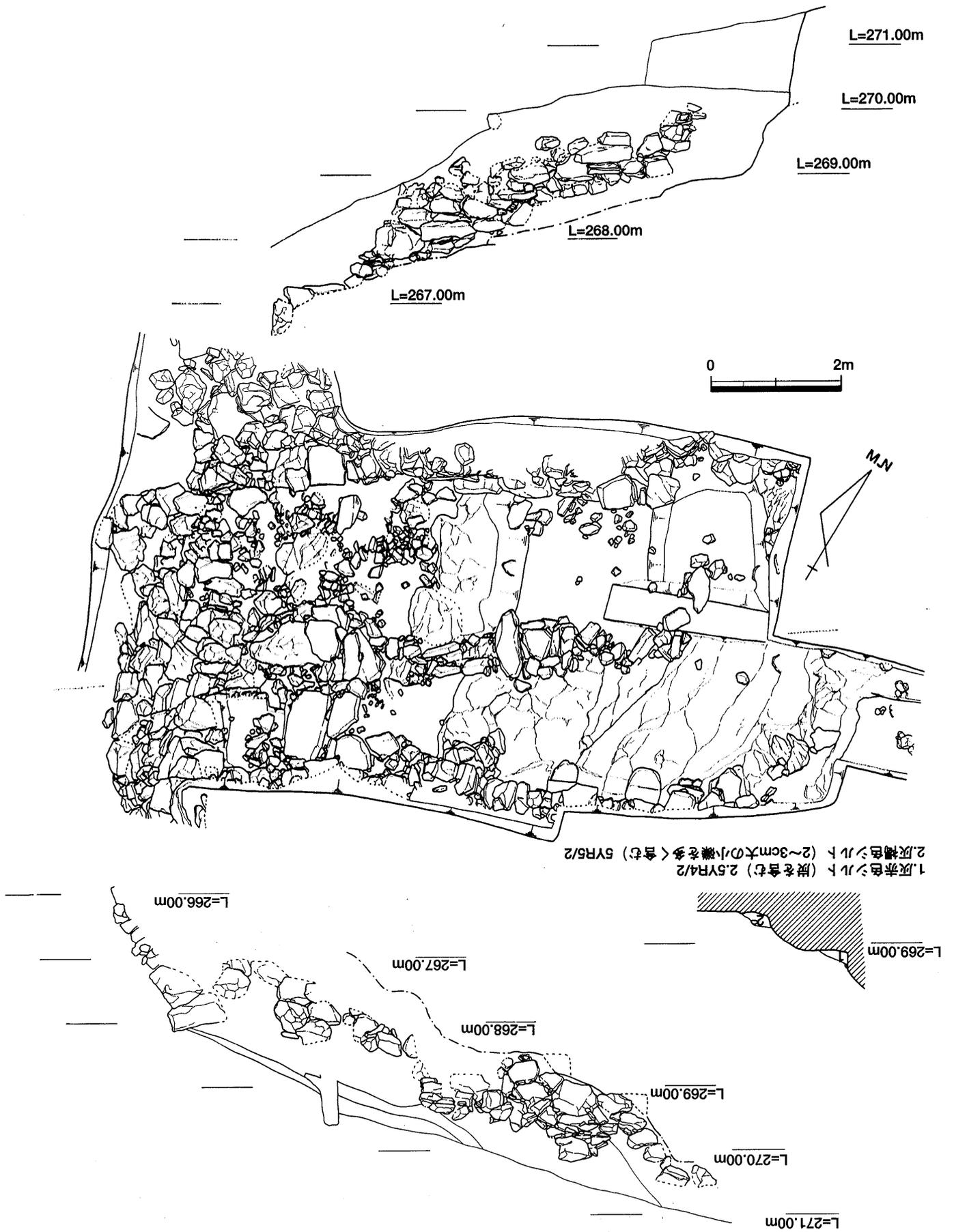


第90図 西南外郭線地形測量図

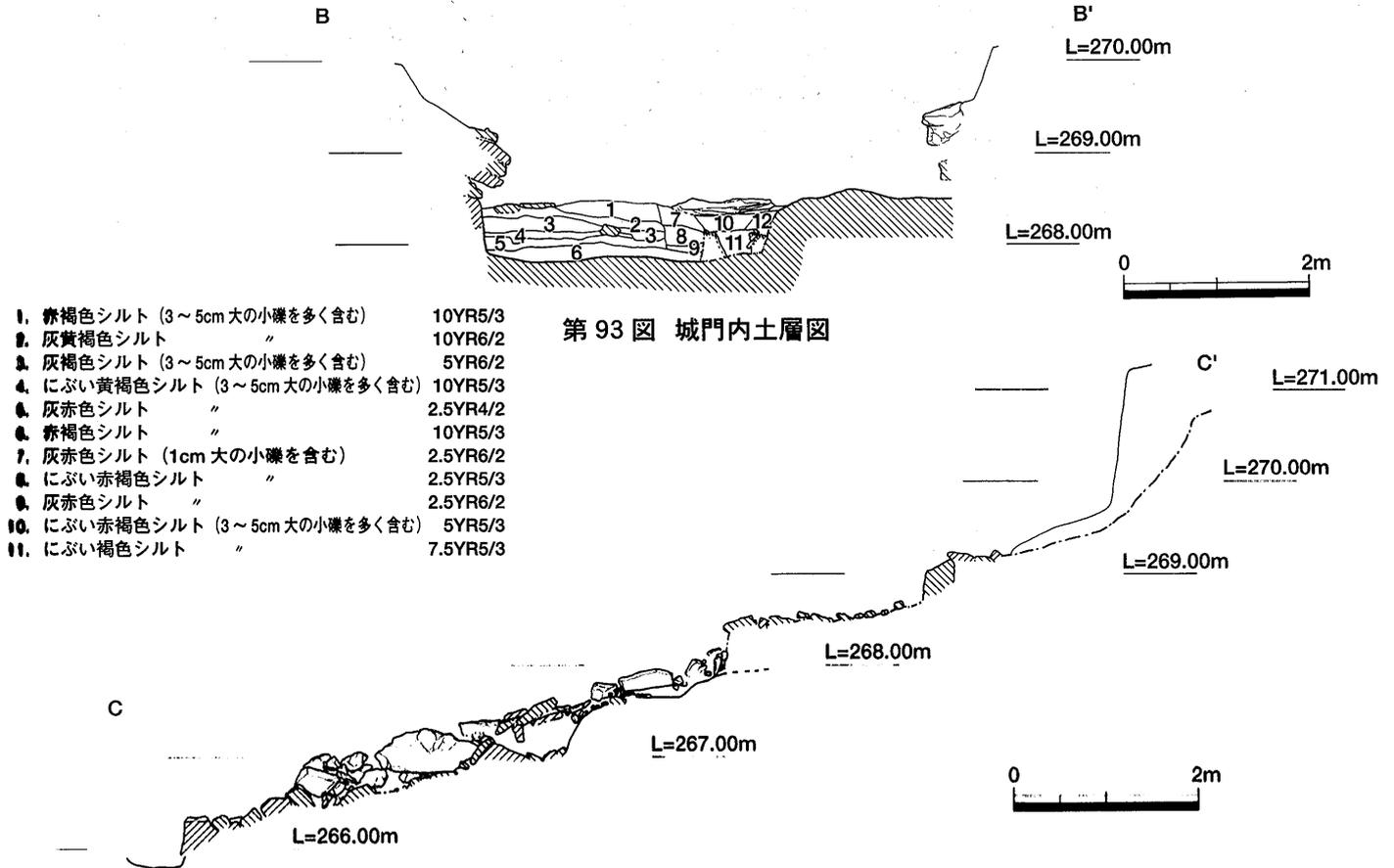


第91図 第1トレンチ土層図

- |                                      |          |
|--------------------------------------|----------|
| 20. にぶい黄橙色土 (2~5cm 大の礫を含む) 5YR4/2    | 10YR5/4  |
| 21. 灰褐色シルト (5~10cm 大の礫を多量に含む) 5YR4/2 | 10YR6/3  |
| 22. 灰褐色シルト (5~10cm 大の礫を多量に含む) 5YR4/2 | 10YR6/4  |
|                                      | 10YR6/4  |
|                                      | 7.5YR5/2 |
| 1. 表土                                | 10YR6/4  |
| 2. にぶい黄褐色土                           | 10YR7/4  |
| 3. にぶい黄橙色砂質土                         | 10YR6/3  |
| 4. にぶい黄橙色砂質土                         | 10YR6/3  |
| 5. にぶい黄橙色土 (5mm 大の礫を多く含む)            |          |
| 6. 灰褐色砂質土                            |          |
| 7. 3と同じ                              |          |
| 8. 5と同じ                              |          |
| 9. 4と同じ                              |          |
| 10. にぶい黄橙色土 (5mm 大の礫を含む)             |          |
| 11. にぶい黄橙色砂質土                        |          |
| 12. にぶい黄橙色砂質土                        |          |
| 13. 5と同じ                             |          |
| 14. 12と同じ                            |          |
| 15. 5と同じ                             |          |
| 16. 4と同じ                             |          |
| 17. 3と同じ                             |          |
| 18. にぶい黄褐色土 10YR7/4                  |          |
| 19. 灰褐色シルトまじりにぶい黄橙色砂質土               | 10YR6/4  |



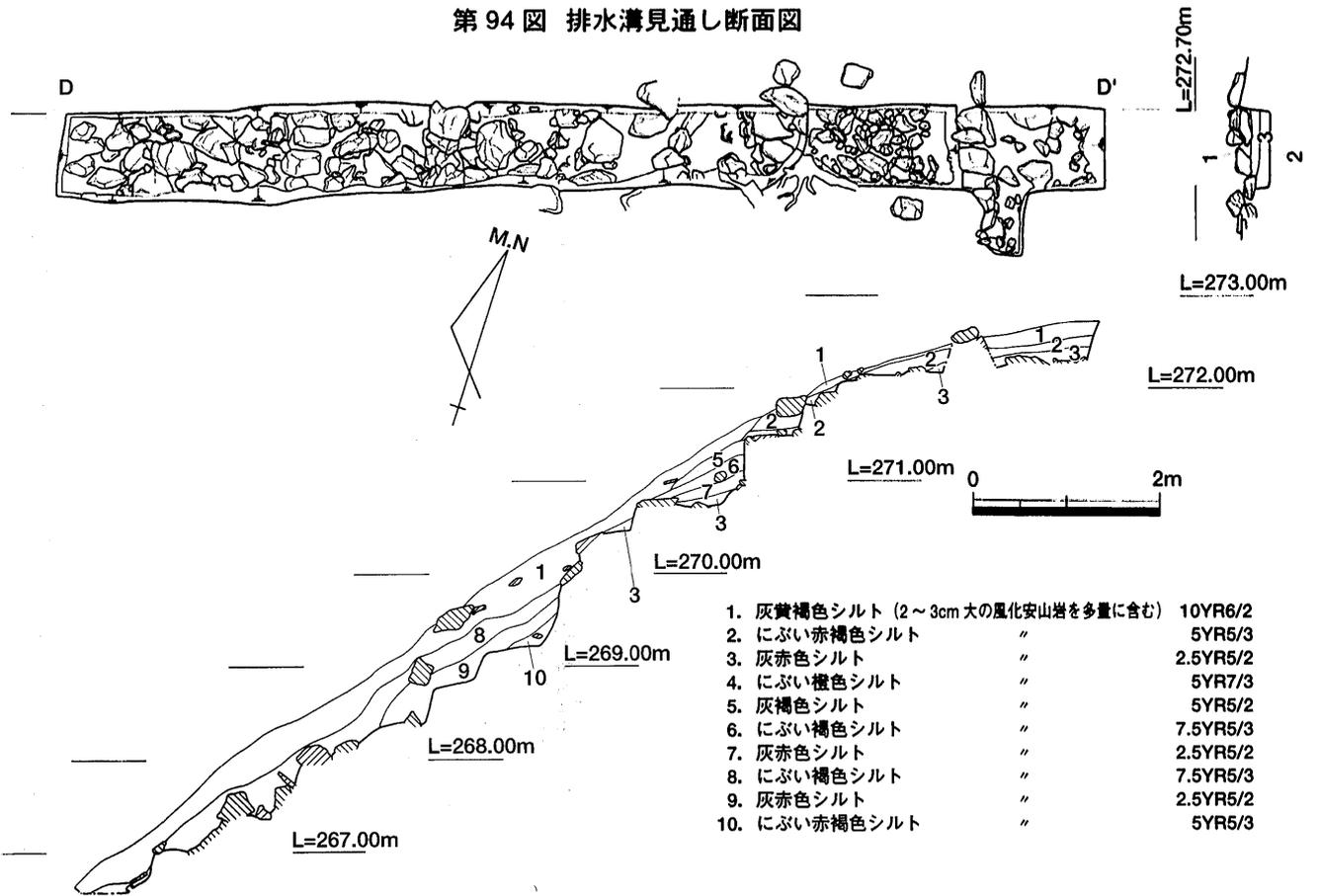
第92図 城門遺構平面図・立面図・柱穴土層図



第93図 城門内土層図

- |                                 |          |
|---------------------------------|----------|
| 1. 赤褐色シルト (3~5cm 大の小礫を多く含む)     | 10YR5/3  |
| 2. 灰黄褐色シルト                      | 10YR6/2  |
| 3. 灰褐色シルト (3~5cm 大の小礫を多く含む)     | 5YR6/2   |
| 4. にぶい黄褐色シルト (3~5cm 大の小礫を多く含む)  | 10YR5/3  |
| 5. 灰赤色シルト                       | 2.5YR4/2 |
| 6. 赤褐色シルト                       | 10YR5/3  |
| 7. 灰赤色シルト (1cm 大の小礫を含む)         | 2.5YR6/2 |
| 8. にぶい赤褐色シルト                    | 2.5YR5/3 |
| 9. 灰赤色シルト                       | 2.5YR6/2 |
| 10. にぶい赤褐色シルト (3~5cm 大の小礫を多く含む) | 5YR5/3   |
| 11. にぶい褐色シルト                    | 7.5YR5/3 |

第94図 排水溝見通し断面図



- |                                  |          |
|----------------------------------|----------|
| 1. 灰黄褐色シルト (2~3cm 大の風化安山岩を多量に含む) | 10YR6/2  |
| 2. にぶい赤褐色シルト                     | 5YR5/3   |
| 3. 灰赤色シルト                        | 2.5YR5/2 |
| 4. にぶい橙色シルト                      | 5YR7/3   |
| 5. 灰褐色シルト                        | 5YR5/2   |
| 6. にぶい褐色シルト                      | 7.5YR5/3 |
| 7. 灰赤色シルト                        | 2.5YR5/2 |
| 8. にぶい褐色シルト                      | 7.5YR5/3 |
| 9. 灰赤色シルト                        | 2.5YR5/2 |
| 10. にぶい赤褐色シルト                    | 5YR5/3   |

第93図 第2トレンチ平面図・土層図

と同様に北端・南端とも断崖に取り付き収束する。周辺部の地形測量が十分でないことから、修正の余地を残すが、外郭線の北端近くでは雉城と考えられる張り出しが存在し、その南側には城門が存在する。前面の石塁は城門付近で張り出し、多少山側に入り込み、最も残りの良い石塁に到達する。外郭線は、この石塁から南西方向に大きく折れをもつが、他の箇所は石塁であるのに対して、この部分は明確な石積み認められない。崩れたと考えるには最も残りの良い石塁との接合部が不自然であることから、この区間に関しては土塁である可能性が考えられる。20 m程度南西方向に伸びた外郭線は大きく折れ、南方向に約40 m伸び、多少の折れをもちながら断崖に取り付き収束する。この部分は石積みの崩落や埋没が著しいが、現状を見る限り石塁があったものと考えられる。

#### 城門遺構 (第91～93図)

確認した城門遺構は、門道の入口部分が幅4.5 m、奥側が幅5.4 mと奥にいくに従い徐々にその幅を広げる形態をなす。南側壁隅石から門道奥にある高さ1 mの岩盤裾までの奥行は10.0 mあり、さらにその奥には岩盤が落差のある階段状を呈しており、奥には直進できない構造になっている<sup>(11)</sup>。これを裏付けるものとして、北側壁は入口部分について直線に造られているが、入口より7.5 mの地点から25°北側に折れる。調査区内では折れ部分から、側壁の延長を2石分確認したが、それより先は調査区域外であり、未確認である。側壁の延長部分については、北東方向の山上部に向かって窪みが続いており、この部分が城内へつながる通路であり、この延長部分においても側壁は続くものと想定され、今後の調査が待たれる。

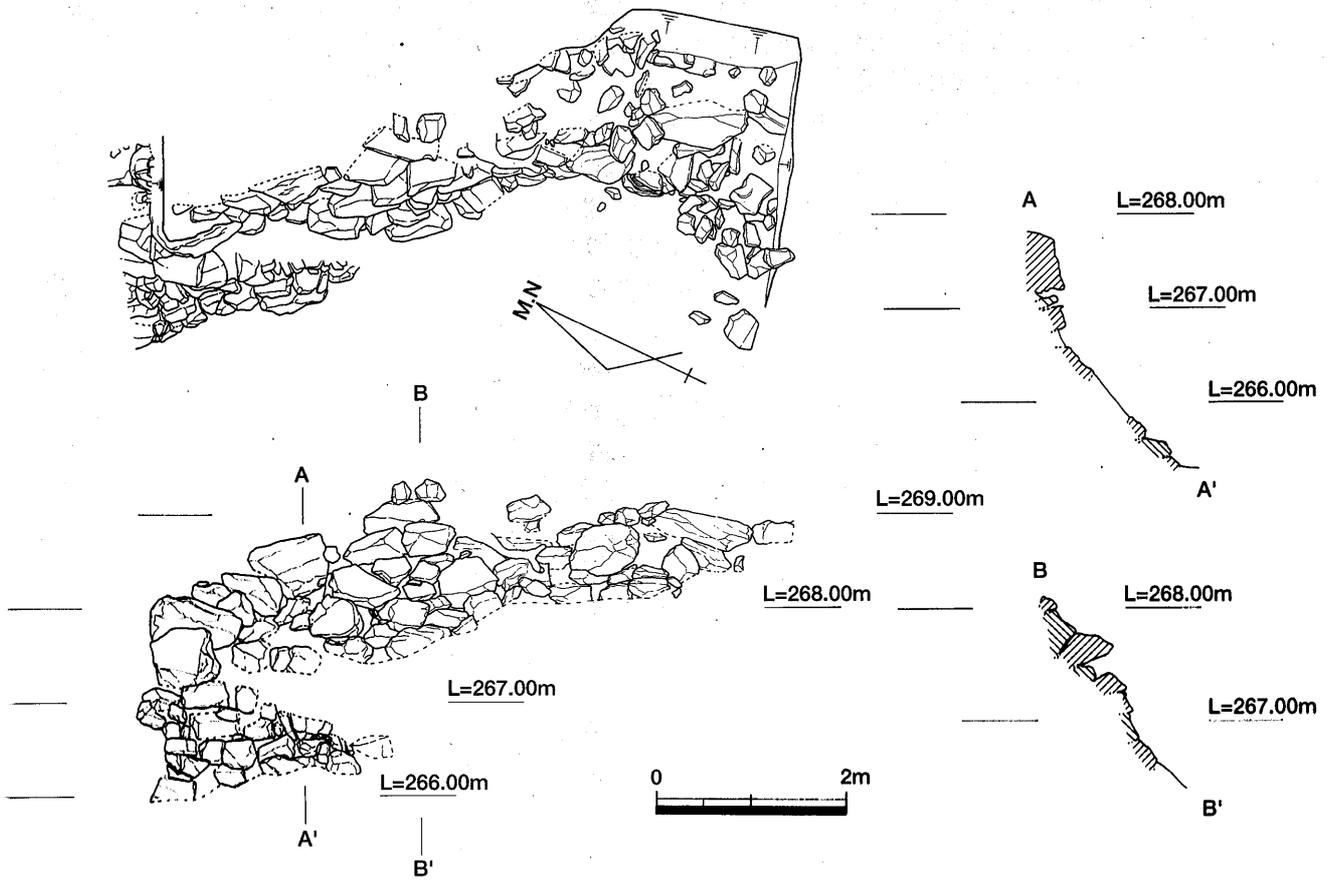
#### 排水溝 (第92・94図)

検出した床面は、大きく3段に分かれており、上段の床面には排水溝の蓋石である安山岩の板石が露出している。中段の床面には排水溝の側壁は認められるが、蓋石は認められない。中段から下段にかけては排水溝の蓋石が一部残存するが、下段の排水溝の蓋石は中段同様認められない。

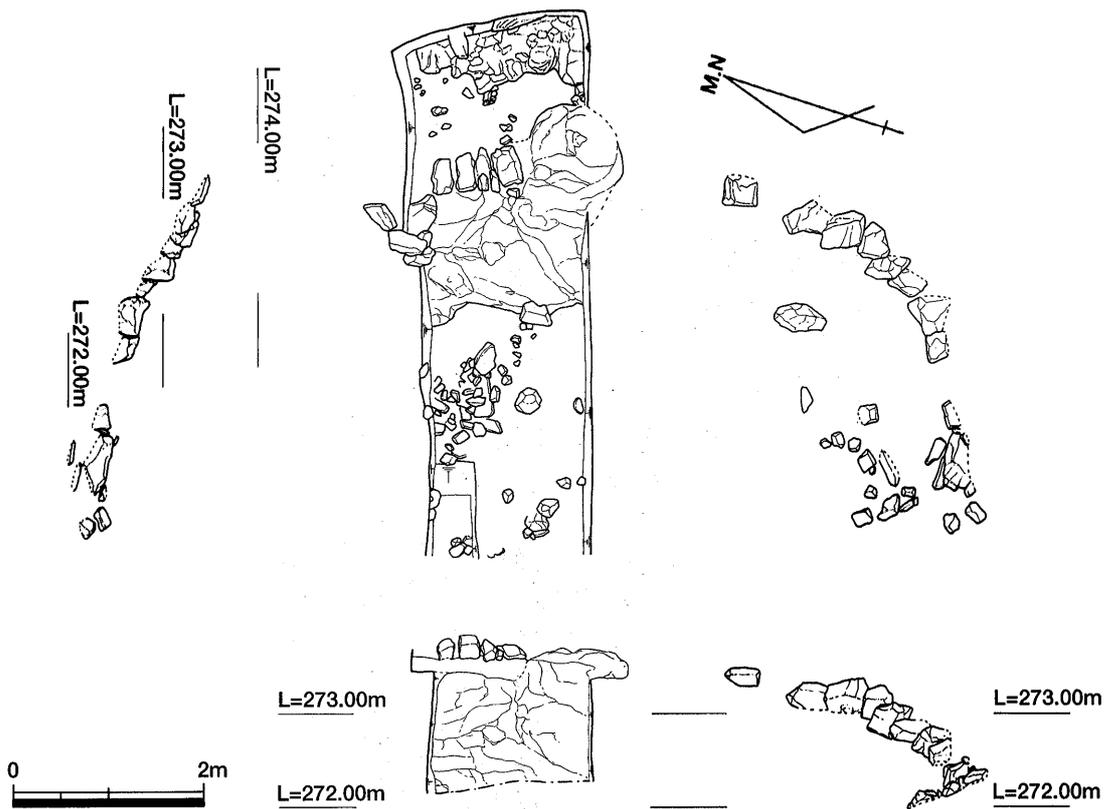
排水溝の検出状況から、現在検出している床面は城門遺構の下部構造(基礎部分)が谷側部は壊れ、山側部は残存している状態を示すものであると想定される。現在の検出状態から下部構造の構築状況をみると、城門部分の旧地形は岩盤の露出が城門内の南半分に集中し、北半分については土によって埋め立てられていることから容易に想定でき、北東方向から南西方向に向かって降りる緩い谷状地形であったものと想定され、排水溝はその地形を最大限に利用して造られている。排水溝上段の南側は岩盤を南側壁として利用している。南側に比べて岩盤が深い北側は60cm程埋め土がなされており、約10cm単位で土を積み上げている状況が床面上段斜面部の土層断面から観察できる。排水溝中段の床面は岩盤であり、多少の移動はあるものの安山岩の板石を両側に側壁として配置している。排水溝下部では北側に存在する岩盤を北側壁の一部として使用している。排水溝の規模は全長7 m、幅50cm、深さは上段と中段の境が最も深く40cm、最も浅いところで中段の側壁の高さである20cmである。調査で排水口は判明したが、排水溝の上部には集水桝などの取水口の存在が考えられるが、現況では未確認である<sup>(12)</sup>。排水溝に関連するものとして、排水口前面付近の石積みは、下方向に縦長の石を埋め込んでいる状況が認められる。この積方をするのは排水口周辺のみで、城門以外の石塁の石積みは横長の石を積んでいる場合が多いが、排水口付近では多量の水が排出されることを想定し、排水で下部の石積みが崩落しない工夫がなされているものと考えられる<sup>(13)</sup>。

#### 側壁 (第92図)

城門内部の側壁については崩落が著しく、本来の高さが残っている部分はないものと考えられる。北側壁は前面の2m程が崩壊していて不明であるが、床面(基礎面)の平坦地に合せて側壁を構築している状況が認められる。最も残りの良い部分では、岩盤からの高さが1.60 mである。使用している安山岩が、石の性質上一定の大きさに加工することができないことから形も一定ではないが、側壁最下部の基礎石には上部に比べて小ぶりのものが使われているようである。一方、南側壁は斜面前面石塁との境にある隅石や奥側の一部が比較的残存しているが、他の部分は崩落が著しく側壁の基礎石が確認できない箇所が多い。南側壁で最も残りが良い部分は、岩盤からの高さが1.50 mと北側壁に比べて残存状況が悪い。側壁の積方は下部の基礎石に小ぶりのものを使い、上部に大き目の石を使用する北側壁と同様である。北側壁との違いは、山側で岩盤にあてて斜めに積み上げ、岩盤上にも現状では一段の側壁の石を置いて



第96図 城門南側石壘平面図・立面図・断面図



第97図 背面列石平面図・立面図

いる。今回の城門遺構に関する成果の一つとして、床面上段南側壁寄りで直径が50cmの柱穴を2基確認した。両柱穴とも山側を20cm削り、谷側は数cm削る程度であるが、柱穴の床面はほぼ平坦に作られている。柱穴の埋土はいずれも単層であり、柱痕等は認められなかった。

#### 列石（第95～97図・付図2）

城門背部と城門南側の平坦地で背面列石を確認した。城門の北側については、背面列石の想定場所が早い段階で廃土置き場となったことから確認できていない。城門背部の列石は岩盤上に存在し、城門背部が最も深く（奥）に存在し、弧を描くように谷側に面を揃え一石ずつ置かれている。城門背部から前面までは1.50mの落差をもち谷側に下がる。城門背部の列石は上部からの土砂に埋没したものか、途中で消滅しており、延長部分は現在のところ確認できていない。この背面列石につながると考えられる背面列石が城門南側の石塁の背面に存在する。背面列石は確認した範囲で3箇所に分れが認められる。斜面側にある石塁の正確な実測図が作成できておらず細かな検討はできないが、石塁背部の列石の折れと斜面石塁の折れが同じ位置関係で対応するものと考えられる。背面列石の確認によって、斜面部石塁の上部に更に夾築土塁が載る可能性が出てきたため、城門南側に石塁に直交するトレンチを設定し、下部の状況を確認した（第2トレンチ）。斜面側のトレンチ前半部は石塁の崩落が著しく、本来の石積みを確認できなかった。一方、山側のトレンチ後半部では、背面列石の下部の状況を確認した他、背面列石の4m50cm前面に板石が背面列石に平行して南北に並んでいる状況が認められた。トレンチ内で確認した板石（前面列石）は3石であるが、ピンポールによる確認では、同様な板石が同じ深さで南側に存在する最も残りの良い石塁の上部近くに続いていることが判明した。前面列石と斜面石塁上部との間には幅1m程の平坦面が認められるが、確認した範囲が狭いことから、この平坦面の性格を明らかにすることはできなかった。第2トレンチ内の土層では版築は認められなかったものの、10～15cm単位で積み上げられていることが判明した。これは城門内部の土の積み上げ方と同様であり、屋島城の他の土塁構造に比べて丁寧な作りである。城門南側の特徴として、石塁が城門に向かって前に張り出している。反対側の北側石塁が崩落していることから確認できないが、城門を前面に張り出すことにより、南の高石垣からも横矢がかけられるように造られているものと考えられる。城門より南の石塁は使用されている石の性質上、城門側壁と同様に石の規模にまともではないが、下部に小ぶりの石を5～6段積み、上部にはその数倍の大きさの石を5～6段積み上げる。これは城門側壁の石の積方と共通性がある。

#### 北側張り出し一雉城一（図版51-5・52-1～3）

正確な図面の作成を行っていないことから、計測値に誤差があり、早い段階で正確な数値に置き換えなければならないが、城門北側石塁の一部には雉城と考えられる長さ約5m、幅約2m程度の張り出しを確認している。張り出しの斜面中央部には上部から下部にかけては柱溝と呼ばれる方柱状に幅50cm、高さ約2m50cmの石積みのない部分が存在する。同様なものは、総社市鬼ノ城角楼に類例がある<sup>(14)</sup>。平成15年度にはこの部分の確認調査も予定しており、確認調査により更に構造が判明してくるものと考えられる。

#### 分布調査確認遺構

##### ①東側外郭線（図版54-1～4）

分布調査にて確認した外郭線である。調査期間の関係から本調査には至らず、遺構確認のみで地形測量図等は作成していない。本来は第3章第2節の分布調査の項で説明すべきであるが、屋嶋城の外郭線構造を考える上で重要であることから、この章でまとめて報告する。

外郭線を確認した場所は、旧瀬戸内海国立公園屋島管理事務所敷地東側の標高274m前後に存在する狭い谷部を中心に作られており、斜面部に幅2～3mの平坦地とその前面に斜面が存在する。外郭線の構造は北側外郭線と同様で内托土段（土塁）である。外郭線遺構発見当初は斜面部に石が見えていたことから石塁を想定していたが、数度の踏査により、土塁中に含まれる石が風雨にさらされて露出したものとされる。また、この状況からすれば、北側外郭線と同様に版築構造は採らないものと想定される。外郭線の両延長部については、北側は谷を離れるに従い平坦地の幅を減じやがて消滅する。一方南側は谷を回り込んだ部分で急斜面となり、その先に遺構は認められない。外郭線の延長は約50m程度であり、確認されている外郭線では最も短い。この外郭線の発見は、ただ外郭線が発見されただけでなく、屋

嶋城の構造を考える上で大きな成果をもつ。それは今回確認された外郭線は屋島南嶺の東側にあり、瀬戸内海を東進する敵に対しては防御の背面にあたる。これまで屋嶋城の外郭線の確認が防御正面部分に限られており、また東側の斜面は急傾斜地が多く人工的な外郭線は必要ないと考えていたため、張りぼての城の印象が強かったが、今回背面側の外郭線確認によって敵が背面に回り込むことをも想定して築かれていることが判明したことは、屋嶋城の構造論の上からも大きな意義を持つものと考えられる。

外郭線遺構は山上部から少し下がった地点で確認したが、外郭線が存在する谷の下部の状況も確認する必要がある。谷を下ろうとしたが急斜面のため、上部からの確認は困難であると判断し、山麓から確認することとし、山麓からこの外郭線を目指して谷を登ると外郭線近くで登ってきた谷は南側に外れ、急斜面になり登るのが不可能となった。そこで小さな尾根を北側に回り込み、そこから山上部近くに辿りつき、目指す外郭線が目の前にあった。つまり、目指す外郭線には、小さな尾根を一つ北側に迂回しないと辿り着けないのである。また、この踏査の結果、外郭線が築かれている谷は山麓まで続いている谷ではないことも判明した。東側外郭線周辺の地形状況が7世紀の築城当時と同じであるとは断言できないが、仮に長年の風雨で斜面の岩盤等が崩落したとしても、谷の位置が大きく変わるとは考えにくく、こういった構造は、敵の襲来を意識して造られたことが推定される。

南嶺の東側で確認した外郭線は、この遺構のみである。屋島の外郭線は自然の断崖（要崖）を基本とし、谷部や傾斜の緩い部分について外郭線を築いていることがこれまでの分布調査による観察で判明している。南嶺東側の谷は今回遺構が確認された部分を含み2箇所存在するが、そのうちの1箇所である屋島寺墓所南側の谷では遺構は認められていない。

なお、確認した外郭線のうち、東側谷部において、構造は他の箇所と同様に内托土段でありながら、水が集まり、湿り気が多い箇所があった。特に雨の後は多くの水が流れ込み非常に足場が悪い。この原因として考えられるのは、外郭線の上部に貯水池と想定される池が存在し、その水がこの外郭線の存在する狭い谷にしみ出している可能性が想定できる。外郭線の中央部平坦地には大き目の石が一部顔を出しており、これらの石が水門を構成する石材である可能性も想定される。この場所が水門であるとするならば、長年の土砂等により水門の通水口が詰まった結果、逃げ場を失った水がしみ出しているとも考えられる。同様な状況は屋島寺山門西側の谷部付近や、水門を想定している山上水族館北側の谷にも認められる。ただし両遺構とも正式な調査は行っておらず、想定はされるものの現段階では結論は出ない。この点については、更なる地形分析や調査が必要である。

### ②ケーブル山上駅北側池 - 貯水池？ -

屋島登山鉄道（屋島ケーブル）山上駅から遊歩道を北へ約200m行った遊歩道の東側にL字状を呈する形で水溜まりが存在する。池の北東側に旧国立公園屋島管理事務所の敷地があること、遊歩道の下側も本来は池であったと想定すると、現在よりはもう一回り大きな池であったものと想定される。周辺には山上駅周辺に売店（民家）は存在するが、池は民家からやや離れたところにあり、民家の水を得る為に作られたものではないと考えられる。基礎調査の折に観察していたが、一年を通して水は枯れることはない。正式な調査は行っていないが、古代の貯水池である可能性は十分にあるものと考えられる。この部分についても更なる検討が必要である。

### ③屋島寺山門西側外郭線・水門（南水門）（図版54-6・7）

1984年（昭和59年）に前述の当時奈良女子大学に在職されていた村田修三氏が北側外郭線と同様に発見した外郭線である。当時の報告に従い屋島寺山門の階段西側には外郭線が続いていることを確認したが、東側は確認できなかった。その後、分布調査等を実施した結果、村田氏が確認した外郭線を西に辿ると谷部に到達し、谷部上部には湿地状を呈する南北15m、東西15m程の窪みが認められることが判明した。この湿地は斜面側において、土塁状の若干の高まりが認められることから小規模ながら人工的な貯水池である可能性が考えられる。東側から続いている外郭線は湿地を挟み、やや標高を下げながら西側へ伸びる。谷部から西へ約20m程度での距離でL字状の平坦地をもつ岩盤に到達し、その先は平坦地の幅を狭め消滅する。

この他、谷部で確認された水門と想定される石積みは、内托土段の外郭線から約5m程度下がった谷部を中心に認められる。谷を挟んで東側は一辺が70cm程度の安山岩を同じ高さに4つ並べているのが

観察できる。それより東側については上部からの土砂の堆積により埋没したものか現状では確認できない。一方、谷を挟んで西側は東ほど明瞭ではないが、斜面側に面を持つ安山岩が断続的ながら認められることから、東側と同様に並んでいるものと考えられる。水門と考えられる石積みの方の谷部は岩盤であるが、両側が垂直に落ちて水路状になっているが、自然にできたものとは考えられず人工的にカットしたものと考えられる。

#### ④水族館北側水門（北水門）（図版 54 - 8）

現在は南嶺北側周遊の遊歩道となっているため、詳細は不明であるが、谷部を中心に安山岩の塊石が散乱している状況が認められる。この北側にある谷の規模は山門西側にある谷の2倍程である。

分布調査の折、現地を踏査した時点では、北側外郭線が旅館桃太郎北側の尾根稜線を西側に回り込んだ部分で岩盤に到達し平坦地は消滅している状況が確認された。この東側の外郭線が一部途切れて谷部近くに続いているものとも考えられるが、岩盤の状況をみる限り本来あった外郭線が後に崩落したとは考えられず、外郭線が途切れている部分は、当初からなかったものとするのが妥当であろう。

谷部の東側には内托土段の平坦地が2段認められ、その延長は約20mに及ぶ（北側外郭線にも同様な箇所が認められる）。上部の平坦地は谷部の石組み上部にも続き、その西側は水族館方面からの廃土によって大半が埋没しているが、廃土の西側では一部土段の残存している部分を確認した。このことから、水門を挟んで西側でも同様な土段があることが判明した。それから先については土段状の痕跡は認められない。水門の通水口が想定される部分には、屋島山上水族館の排水用の土管が埋設されたことによるものか、現状では通水口（排水口）は確認できない。

注

- (1) 『屋島山上発掘調査報告書』高松市文化財保護委員会 1968
- (2) 本書第3章第6節 参照
- (3) 國本健司「史跡天然記念物屋島」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』香川県教育委員会 1995
- (4) 平成10年度高松市教育委員会調査 未報告
- (5) 火山ガラスの種別は特定できていない。
- (6) 園村辰夫 西住欣一郎 古関敬士『鞠智城跡—第19次調査報告—』熊本県教育委員会 1998年  
園村辰夫 西住欣一郎 古関敬士『鞠智城跡—第20次調査報告—』熊本県教育委員会 1999年  
西住欣一郎 矢野裕介『鞠智城跡—第21次調査報告—』熊本県教育委員会 2000年
- (7) 村田修三「研究室こぼれ話—屋島城—」『寧楽史苑』第30号 奈良女子大学史学会 1985
- (8) 向井一雄 工藤茂博 今井和彦「讃岐城山城跡の研究」『溝瀆』第6号 所収 1996  
川畑 迪「城山城」『香川叢書 考古編』1983
- (9) 平岡岩夫「屋嶋城跡の新発見の石塁に関して」『溝瀆』第7号 1998
- (10) 古代山城の城門部分が他の外郭線の箇所に比べて窪んでいる状況は、実際に古代山城の城門部分を発掘調査した経験のある鬼ノ城を担当している総社市教育委員会埋蔵文化財学習の館館長村上幸雄氏、御所ヶ谷神籠石を担当している行橋市教育委員会小川秀樹氏から調査に関する多大なる御教示をいただき、今回の城門発掘に生かすことができた。
- (11) 城門の奥が岩盤によって遮断され、直進できない構造をもつ門は鬼ノ城東門に共通する。鬼ノ城東門は城内に入ると両側に迂回することになるが、屋嶋城の城門の場合は右側が遮断され左側に迂回する構造をもつ。
- (12) 一般に朝鮮半島などで確認された城門遺構に付随する排水溝の最上部は枳形の集水施設が認められるようである。集水施設がない場合、上部から流下した水が、門道の床面全体を洗うことになり、床面を壊してしまうだけでなく、排水施設の機能も果たせなくなる。排水溝の上部については未調査の部分が多くあることから、平成15年度に予定している調査の中で集水施設の確認を行いたい。
- (13) 排水口前面にある石積みの構築方法（処理方法）については、北垣聰一郎氏に御教示頂いた。
- (14) 村上幸雄 松尾洋平「鬼ノ城 角楼及び西門の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報 7（平成8年度）』1997  
調査を担当している村上幸雄氏、松尾洋平氏より御教示を頂いたほか、韓国の古代山城にみられる柱溝を研究している檀原考古学研究所山田隆文氏から韓国の類例などを御教示頂いた。

山田隆文「丹陽独楽山城踏査記―石築城壁面の垂直遺構について―」『溝漣』第7号 古代山城研究会 1998年

山田隆文「韓国における城壁築造技法の一類型―石築城壁面にみえる垂直方向の「柱溝」について―」『東洋史苑』第56号 龍谷大学史学科東洋史学生会 2000年

## 第6節 屋島寺宝物館建設予定地内の調査

### はじめに

屋島寺宝物館建設予定地は香川県高松市屋島東町に所在し、重要文化財に指定されている屋島寺本堂の西に隣接する。屋島寺は鑑真の創建と伝えられ、建設予定地には古代～中世の遺構の存在が予想された。また、この屋島には『日本書紀』に天智6年(667)11月に山城築城の記述がみえ、これに関連する遺構の存在も予想できる地域にある。

平成元年7月14日、屋島寺から宝物館改築について市教育委員会に史跡天然記念物の現状変更の打診があった。さっそく県教育委員会を通じて文化庁に報告したところ、地下遺構の確認のため、調査の必要があるとの判断が示された。このため屋島寺、県教育委員会、市教育委員会の三者協議の結果、詳しい状況を把握するために試掘調査を実施することになった。

試掘調査は市教育委員会が担当し、平成2年2月13日～28日にかけて行われ、弥生時代から近現代にかけての遺物および時期不明の遺構が確認され、宝物館建設予定地全域の本格的な発掘調査が必要となったため、再度三者の間で協議がもたれ、市教育委員会が発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成2年4月5日から5月31日にかけて、県教育委員会の調査員の派遣を得て市教育委員会が主体となって行った。

### 調査区の設定と方法

調査の対象地は屋島寺本堂の西側にあたる。調査は宝物館建設予定地を対象にしたが、実際は既存の建物、埋設管等の制約により調査面積は約300m<sup>2</sup>となり、調査区の形状も変形したものとなった。また調査区南側中央においては土層観察用の断面を幅1mで南北方向に残した。

調査の方法としては、表土を機械掘削により剥ぎ、その後人力掘削により包含層を除去した。調査区北および南側ではそれぞれ3面の遺構面が確認されたので、上面の遺構を検出・掘削した後、さらに掘り下げ下面の遺構を検出した。調査終了後は人力により埋め戻した。

### 調査の概要

#### 【基本層位(第98図)】

調査区内における層位は、北と南では大きく異なる。

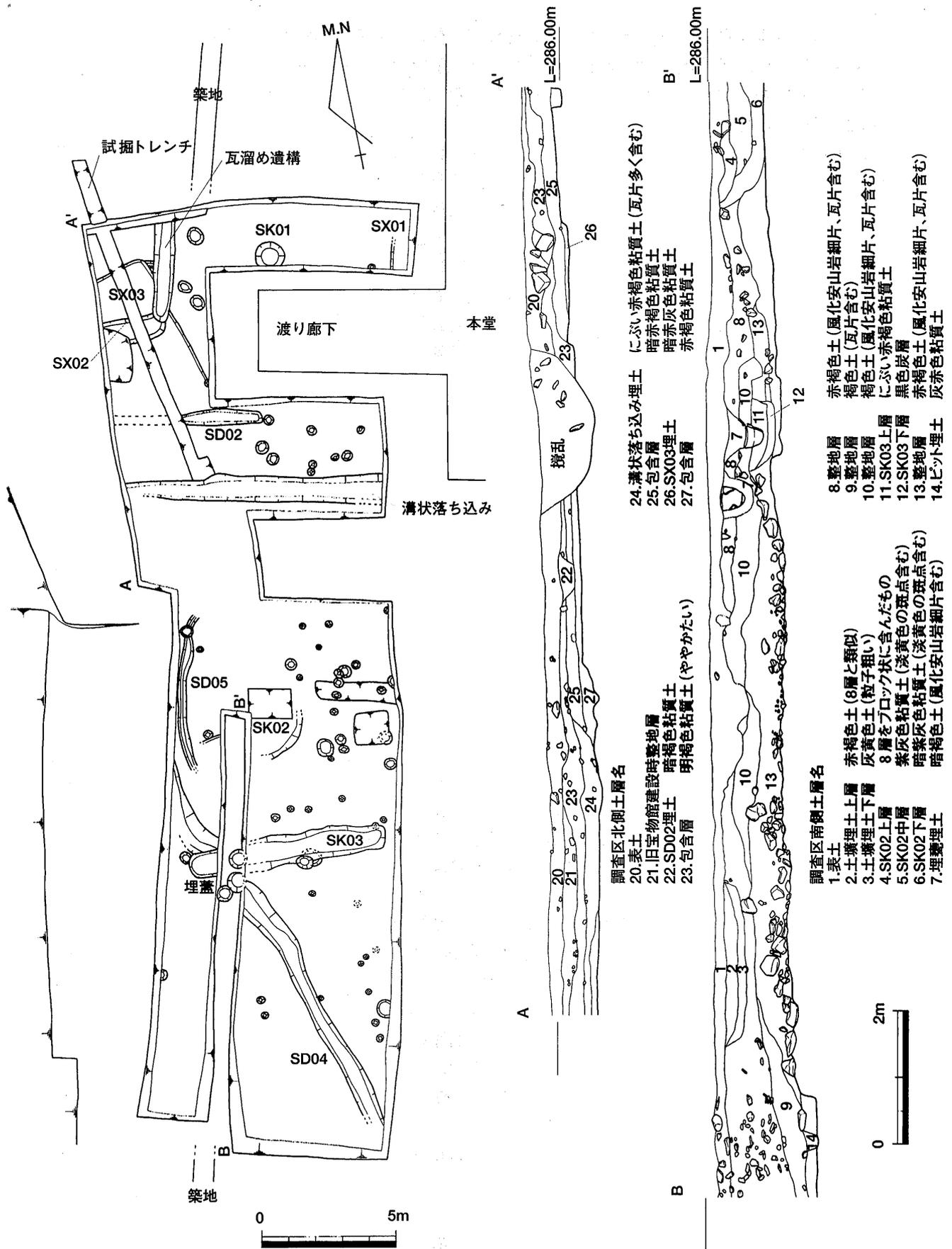
まず調査区北側においては、東半分では表土を除去すると地山に切り込む遺構を検出できた。しかし西半分では遺物包含層が存在し、3層に分かれる。この遺物包含層の上層は明褐色粘質土層で、いぶし瓦、土師・須恵質布目瓦を含み、厚さ20cm前後を測る。中層は暗赤褐色粘質土層で、土師・須恵質布目瓦、中世土器を含み、厚さ15cmを測る。下層は赤褐色粘質土層で摩滅した弥生土器を含む層で、地山との区別は困難である。おそらく長期にわたる自然堆積の間に、北の標高の高い場所から弥生土器が流れてきて2次堆積したものと考えられる。厚さ10cm。遺構は上層、中層、下層を切り込む形で各時代のものが存在する。

一方調査区南側においては、北東部分では表土を除去するとすぐに地山が現れこれを切り込む遺構を検出できるが、南西に行くにしたがって厚い遺物包含層が存在する。包含層は大きく4層に分かれる。最上層は赤褐色土層で風化安山岩細片、瓦片を多く含み、厚さは調査区南端で最も厚く1mを測る。上層は調査区南端においてみられ、褐色土層で瓦片を含む。厚さ10～20cmを測る。中層は調査区南側の中央においてみられ、褐色土層で風化安山岩細片、瓦片を含む。厚さは30cmを測る。下層は調査区南側の中央においてみられ、赤褐色土層で風化安山岩細片・瓦片を多く含み、下部に後述べる集石が存在する。厚さは50cmを測る。4層ともいわゆる整地層で、境内を拡幅する際に盛られたものである。最上層、下層、地山を切り込む形で遺構が存在する。

ただし、調査区北側と南側におけるそれぞれの層位の相互関係は途中、攪乱等があり明らかにすることができなかった。

#### 【遺構(第98図)】

主要遺構についても調査区北側と南側に分け、さらに層位別に説明する。但しピットについては最後にまとめて述べる。



第98図 屋島寺宝物館遺構配置図・土層図

《調査区北側》

(1) 上層を切り込む遺構

S D 0 2 幅 70cm・深さ 20cm, 検出した長さは 5.5m を測る溝で, 東西方向にまっすぐのびる。断面は浅い U 字形である。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。染付破片, いぶし瓦破片等が出土。性格は不明である。時代は出土した染付から, 江戸時代後期から明治時代と考えられる。

(2) 中層を切り込む遺構

溝状落ち込み 調査区北側の南端において検出された, 調査区内を東西に横断する溝状の落ち込みである。東端で幅 1m10cm, 深さ 25cm の U 字形の断面を呈するが, 西端では南の肩が不鮮明となる。埋土はにぶい赤褐色粘質土の単一層である。いぶし瓦破片が多数出土。軒丸瓦の巴の尾が比較的長いことから江戸時代前半と考えられる。この落ち込みの延長上と本堂の軒先が合致し, また落ち込みの傾斜が西ほど低いことから, 本堂の雨落ちを西方向へ流す目的で掘られたものと推定される。

(3) 下層を切り込む遺構

S X 0 3 調査区内では一つの隅しか残っていないが, 一辺 5m 以上の方形の落ち込みと推定されるものである。深さは 20cm ほど残っている。埋土は暗赤褐色粘質土で, 須恵器杯身, 杯蓋が出土。形状より竪穴住居の可能性も考えられるが, 柱穴が存在せず, 積極的に肯定できない。時代は出土した須恵器から 7 世紀中頃と考えられる。

(4) 表土下で検出し地山を切り込む遺構

瓦溜め 調査区北端で検出した幅 1.0m, 深さ 30cm の細長い土壌で, 検出した長さは 3m50cm を測る。南北方向にまっすぐのびる。断面は U 字形を呈する。埋土はにぶい黄褐色土である。いぶし瓦破片が多数出土。時期は江戸時代以降と推定される。

S K 0 1 調査区北端近くで検出した直径 1.0m ほどの円形の土壌である。上部が削平されているが深さ 25cm を測る。底は平底で, 径は 70cm。埋土は 2 層に分かれ, 上層は赤橙色粘質土, 下層は灰色粘質土である。両層からいぶし瓦が出土。性格・時期は不明。

《調査区南側》

(1) 最上層を切り込む遺構

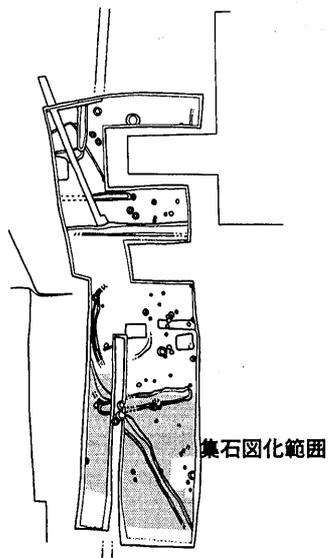
埋甕 調査区南側の中央付近で 3 個体を検出した。上部はおそらく旧宝物館建設時に壊され, 全体の 1/2 から 2/3 しか遺存していない。埋甕は発掘時の計測では, 3 つとも同じ規格で最大径 60cm, 高さ 50cm 以上と推定され, 底は丸みをおびた平底である。径 80cm の円形の掘方を有し, 埋甕の設置には規則性が見られない。埋甕内外よりいぶし瓦破片が, また埋甕 1 つの底近くより寛永通宝が 2 枚出土した。埋甕内の瓦については, これらの甕が壊された時に落ち込んだものと推定されるが, 寛永通宝については埋甕に伴う可能性がある。性格は不明。時期は江戸時代後期から明治時代にかけてと推定される。

(2) 下層を切り込む遺構

S K 0 3 調査区南側の中央付近で検出した, 東西方向に溝状にのびる土壌である。長さ 7m50cm, 幅 1m15cm, 深さ 40cm を測る。断面は逆台形を呈し, 側壁の立ち上がりは垂直に近い箇所もある。埋土は大きく 2 層に分かれ, 上層はにぶい赤褐色粘質土だが, 下層は厚さ 10cm 前後の黒色炭層が全体を覆っている。側壁にも焼けた痕跡が確認された。上層よりいぶし瓦・土師質布目瓦破片が出土。また下の集石を除去してまでこの土壌を掘っていることから, 単なるごみ捨て場とは考えられないが, 性格については不明である。時期は江戸時代と考えられる。

(3) 下層下部の遺構

集石 調査区南側の南半分全域で検出した。直径 5 ~ 80cm の礫を不規則に配置している。一部数段に積んでいる部分も見られるが, 規則性は全くない。高さは最も高いところで 40cm を測る。旧地形が斜面であることから, 境内を整地・拡幅する際に基礎石として置かれたものであろう。この集石はそれを覆っている赤褐色土層(下層)の下部にあたり, 赤褐色土層と集石とは同一の整地層である。陶器, いぶし瓦, 土師・須恵質布目瓦が出土している。集石下部から 17 世紀後半に比定できる肥前系京焼風陶器碗が出土したことから, この時期に当集石の上限を求めることができる。



第99図 集石平面図

## (4) 下層下, 地山を切り込む遺構

S D 0 4 調査区南側で、北西から南東へやや蛇行しながら走る溝である。調査区内での長さは16.0m。幅50cm～1m、深さ10cmを測り、浅いU字形を呈する。いぶし瓦、土師・須恵質布目瓦が出土。性格は不明。時期は層位関係から先の集石より古い時期が考えられる。

さらに調査区全域において約60個のピットを検出した。調査区北側では表土を除去するとすぐに地山を切り込む形で検出したものと、中層を除去して検出したものがある。また調査区南側では表土を除去するとすぐに地山を切り込む形で検出したものと、下層を除去して検出したものがある。形状はすべて円形だが、直径は15cmから50cm、深さは5cm～30cmと多様である。建物柱穴として復元できるものはなかった。

## 遺物

出土した遺物は総量にしてコンテナ20余箱である。大半を瓦片が占め、他には弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器、陶磁器、古銭等があり、わずかながら石器、鉄製品も出土している。

瓦にはいぶし瓦といぶしていない布目瓦(土師質、須恵質)が半々ほどの割合であり、種類別に分けると大部分を平瓦の破片が占める。軒丸瓦の中には12世紀後半に比定できる蓮華文のものが1点存在する。巴文は8点出土している。巴文には江戸時代の古い時期と思われるものから近代のものまでである。他の文様には菊文、卍字、梵字が1点ずつ出土している。また軒平瓦には10～11世紀の唐草文のものが1点存在する。他の文様には連珠文、波模様のものがある。

弥生土器は、壺・甕などの破片が出土している。どれも摩滅が著しい。県内の紫雲出遺跡、矢ノ塚遺跡の例から考えると、中期後半でも古い時期が与えられる。

土師器・土師質土器には鍋、椀、皿がある。時期は古代に属すると考えられるものから、中世のものがある。

また瓦質土器は小皿が1点出土している。

須恵器には、S X 0 3から出土した、かえりの逆転前後の坏身、坏蓋(宝珠つまみ部分)が1点ずつある。他には古代から中世の坏、壺、甕などの破片が出土している。

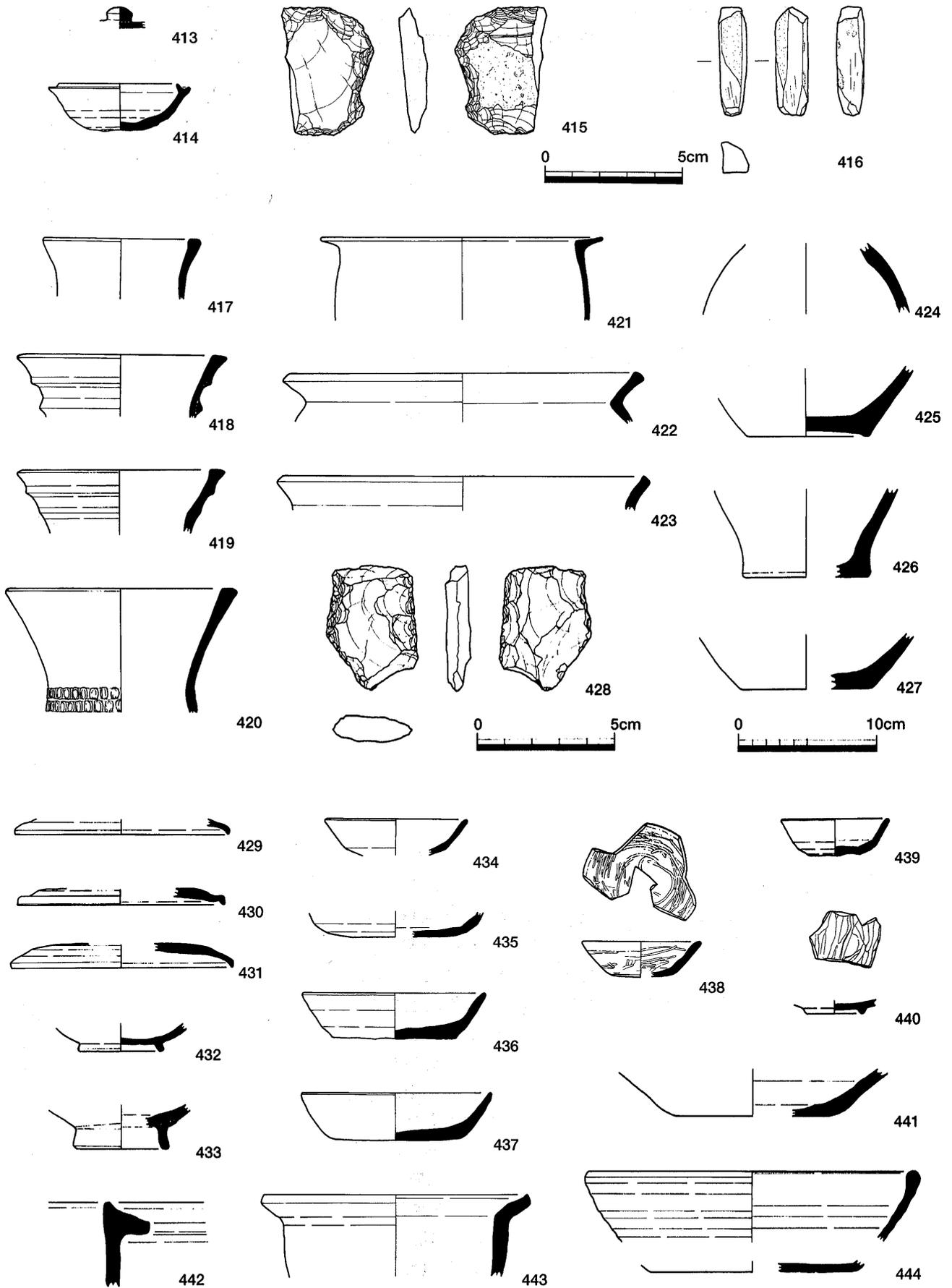
陶磁器は17世紀～19世紀のものが多く出土している。陶器には肥前系京焼風陶器碗(17世紀後半)・皿、瀬戸美濃系陶器鉄釉灰釉掛分碗(18世紀後半～19世紀前半)、唐津系陶器刷毛目碗(18世紀～)等がある。磁器には伊万里系染付碗(18世紀)、広東型染付碗(18世紀末～19世紀中頃)、端反り染付碗(19世紀)等がある。包含層、遺構出土のものは少ない。

古銭は寛永通宝が5枚、一銭銅貨が1枚出土した。寛永通宝は大きさ、形状から数種類に分かれる。

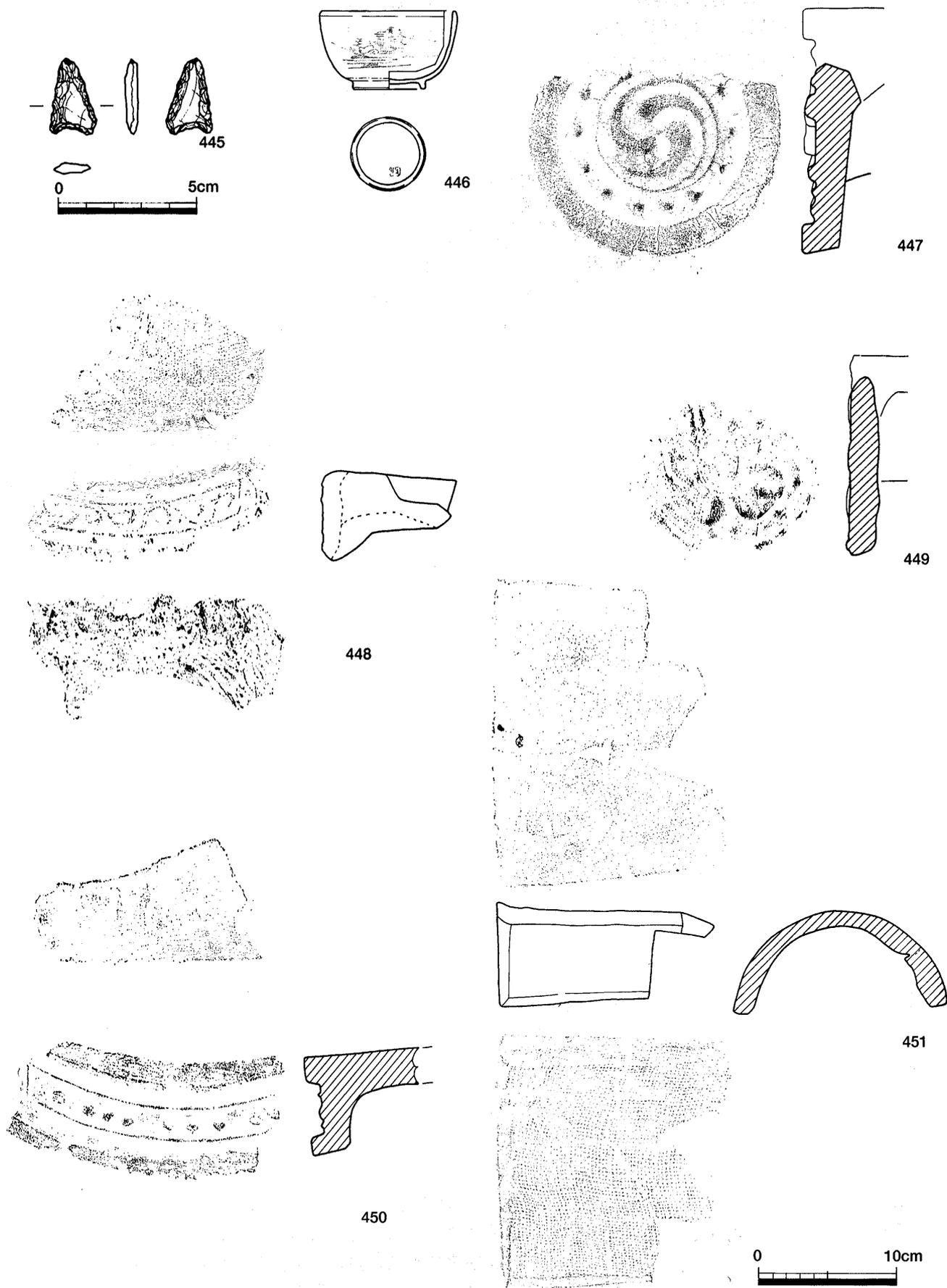
石器には、石鏃・打製石庖丁・刃器がある。すべてサヌカイト製である。

鉄製品は2cm大のものが5点ある。円形、棒状のものがあるが錆化が著しく種類の判別はできない。

以上のとおり多くの遺物を出土したが、そのすべてを図示することは現状では困難である。今回報告する遺物は、出土遺物の一部であり、今後本格的な整理作業によって変更される部分も多いと考えられる。413～415はS X 0 3から出土した遺物である。413は宝珠のつまみをもつ須恵器杯蓋である。414は杯身である。口縁端部の立ち上がり内傾した短いものであり、口径が小さい。外面の調整もナデである。415は打製石庖丁である。上辺部は敲打により背潰しが認められる。一方、下辺部は両側からの調整により刃部をつくる。416はS D 0 3出土の扁平片刃石斧である。大半を欠損するため、全体の形状は不明である。417～428調査区北側下層出土の弥生土器、石器である。417～420・425は壺である。417～420は広口壺の口縁部で、417は直立気味に立ち上がり口縁端部がやや肥厚する。418・419は外反する口縁部をもち、端部を肥厚させる。口縁部外面には断面三角形の張付突帯を2条巡らせる。420は外反する口縁部をもち、端部を肥厚させる。頸部には押圧突帯を2条巡らせる。424壺の体部である。421～423は甕である。「く」の字を呈する口縁部をもつ。422は口縁端部を肥厚させる。425～427は底部で、体部の傾き具合から425・427は壺、426は甕の底部であると考えられる。428は上下を欠損するが、上方への幅の狭まり具合から石槍の破片であると考えられる。両側辺部は敲打による背潰しが認められる。429～444は調査区北側中層出土遺物である。429～431は須恵器の杯蓋である。9世紀前半を中心とする時期のものであろう。432は吉備系土師器椀である。433



第 100 図 屋島寺宝物館出土遺物実測図 1



第101図 屋島寺宝物館出土遺物実測図2

は土師器の椀である。高台は足高であり前者に比べると器壁も厚い。434～437は土師器の杯である。436・437は形態等から13世紀第2四半期～第3四半期にかけてのものであろうと考えられる。434は法量より13世紀末～14世紀初頭の時期が考えられる。438・439は瓦器の小杯である。形態等から11世紀後半～12世紀前半の時期が考えられる。438の内面には篋状工具による暗文が認められる。440は瓦器の椀である。高台は非常に華奢である。441・444は須恵質土器のこね鉢である。444の口縁部は玉縁状を呈する。442は土師器の羽釜である。鏝は口縁端部から張付けている。

443は土師器の甕である。体部は膨らまない形態をし、口縁端部は上方に摘み上げる。445は集石中から出土した凹基式の石鉢である。切り込みは浅い。446は集石下部から出土した肥前系京焼風陶器碗である。外面には山水文を描く17世紀後半頃のものである。447は溝状落ち込みから出土した巴文軒丸瓦である。448は集石間より出土した唐草文軒丸瓦である。凹面は布目、凸面はタタキによる縄目が認められる。449も集石間より出土した蓮華文軒丸瓦である。瓦当面には縄目がついている。450は連珠文軒平瓦である。瓦当は大振りで器壁も厚い。451は須恵質の丸瓦である。凹面には細かな布目が認められる。

### 調査結果

屋島寺宝物館建設予定地内の発掘調査は、遺構の残存状況は後世の度重なる削平・攪乱等により必ずしも良好とは言えず、遺物は瓦が大半を占め具体的な年代決定が難しい。しかしながら今回の調査により屋島南嶺の状況、特に屋島寺境内の歴史の変遷の一端を知ることができたことは貴重な成果であった。それらを簡条書きに並べると、次のようになる。

- (1) 調査区北側で弥生土器包含層が存在することから、近くに弥生時代の集落があることが想定される。このことは紫雲出と同様な高地性集落が屋島南嶺にも存在したことを示唆する。出土土器から中期後半でも古い時期が考えられる。
- (2) 調査区北側で7世紀の須恵器が出土したことから、この時期に屋島山上での人間の活動が明らかになった。ただし屋嶋城、屋島寺との関連については、今後の調査が必要である。
- (3) 調査区南側から出土した軒平瓦・軒丸瓦より、南嶺における屋島寺の建立が平安時代後期まで遡れる可能性が判明した。
- (4) 調査区北側の暗赤褐色粘質土から中世土器・布目瓦が出土することから、中世において屋島寺の存続が認められる。
- (5) 調査区南側で4層ほどの整地層を確認した。この内、下層の整地には数多くの礫を使用しており、大規模なものであったと想定できる。時期は17世紀後半の染付が出ていることから、それ以降から現在に至るまで数回の整地がなされていることが判明した。
- (6) 検出した遺構の内、江戸時代に属するものに特徴的なものがある。本堂軒先の雨落ち溝と思われる溝状落ち込み、厚い炭層のあるSK03等があり、屋島寺の江戸時代における活動の一端が明らかになった。
- (7) 今回の調査範囲の旧地形は、北東から南西に傾斜する斜面であった。また本堂北東における試掘調査では、西から東への傾斜が確認されている。これらのことから、本堂は北から南に派生する尾根を削平して建てられたと想定できる。

### 屋島寺の変遷について

今回の発掘調査より得た資料をもとに、屋島寺の変遷について検討を試みた。なお『角川日本地名大辞典』37香川県(角川書店1985年)を記述にあたっては参考にさせていただいた。

屋島寺の創建は、慶長16年(1611)の屋島寺龍巖勧進帳によれば、唐僧鑑真が都に向かう途中に一宇を建立し、その後弘仁元年に空海が千手院を建立したという。承応2年(1653)、澄禅による『四国遍路日記』では寺の来歴がより具体的になり、鑑真創建の寺は北嶺にあり、弘法大師が再興した折に南嶺に移したという記載が見える。また元禄15年(1702)成立の『本朝高僧伝』では、鑑真の弟子慧雲が東大寺戒壇院から屋島寺に移り第一世となり、少年期の空海に伝授したとある。このように屋島寺創

建については江戸時代の史料に具体的な記述が見えるが、古代の史料には屋島寺に関する記載は見られない。

中世の史料では、明徳21年(1391)の西大寺末寺帳などに「屋嶋普賢寺」、「屋嶋寺」という寺名が見え、14世紀に寺が所在したことは確認できるが、位置や規模等については不明である。

一方、現在屋島寺に残る建造物等を見てみると、本堂は昭和33年の解体修理により鎌倉末期の建造であることが確かめられている。また本尊の木造千手観音坐像は、10世紀の作といわれる。次いで梵鐘は貞応2年(1223)の銘があり、讃岐国住人蓮阿弥陀仏の勧進によって铸造されたという。

そして平成元年度の調査や平成13年度第3調査地点では、11世紀の年代が与えられる軒丸瓦や軒平瓦が出土している。建造物、瓦等から南嶺における屋島寺の建立を推定した場合、最も古く考えれば11世紀まで遡れる可能性が指摘でき、今後この時期の遺構の検出が大きな課題の1つとなる。

本調査では12世紀後半に位置付けられる軒丸瓦や、11～13世紀の瓦器片、土師器等が出土している。量的には少ないが、この時期に活動があったことが判明したが、これが寺に関するものか、所謂源平屋島合戦に関するものか等についてはわからない。この後、15～16世紀の遺物は少ない。

大永4年(1524)に先述の貞応2年銘の梵鐘が金倉寺(善通寺市)に一時的に移されていることや、「龍巖勧進帳」の記述を信頼するとすれば、16世紀頃には屋島寺は衰退していたことが推測できる。

しかし、江戸時代になると屋島寺は勢いを盛り返す。それは先の龍巖の勧進活動等によるところが大きいと思われる。寛永11年(1634)書写になる「讃岐國中寺社領高書上寫」によると讃岐に封じられた生駒氏から寺領43石3斗余の加増をうけ、年代は不明であるが屋島寺所蔵の「生駒一正寄進状」によると米・人・資材等の提供を受けている。また天保4年(1833)高松藩士香西義賢の書写になる「寺社記」によると松平氏からも千体仏堂の施入、54石3斗余の安堵等を受けている。江戸時代前期にあたる17世紀に屋島寺の復興が急速に進んだことをうかがうことができる。

今回の調査結果では、調査区南側で確認された集石をはじめとする整地層があり、年代的には集石下部から出土した陶器から17世紀後半とみてよく、この地業が文献史料から読み取れる17世紀の復興と関係があると推測される。そして江戸時代末の『讃岐國名勝図会』『金毘羅參詣名所図会』によれば、ほぼ現在の屋島寺に近い配置になっている。

(平成2年6月脱稿、平成15年1月修正)

## 第7節 高松市長崎鼻古墳で確認された赤色顔料付着遺物の蛍光X線分析について

徳島県立博物館 魚 島 純 一

高松市教育委員会の依頼を受けて、長崎鼻古墳出土の遺物の表面に付着した赤色顔料の同定を目的とした定性分析を行ったのでその結果を報告する。

### 1. 試料

- ①長崎鼻古墳出土 土師器破片 1点  
口縁部の内面にわずかではあるが赤色顔料付着の痕跡が認められる。
- ②長崎鼻古墳出土 石棺破片 1点  
肉眼による観察でも明らかに赤色顔料の付着が認められる。

### 2. 方法

蛍光X線分析装置を使って試料表面の非破壊定性分析を行い、試料に含まれる元素の種類を調べ、用いられた赤色顔料を推測することとした。

分析には徳島県立博物館に設置されたテクノス社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置TREX 630Lを用いた。

測定条件はつぎのとおり。

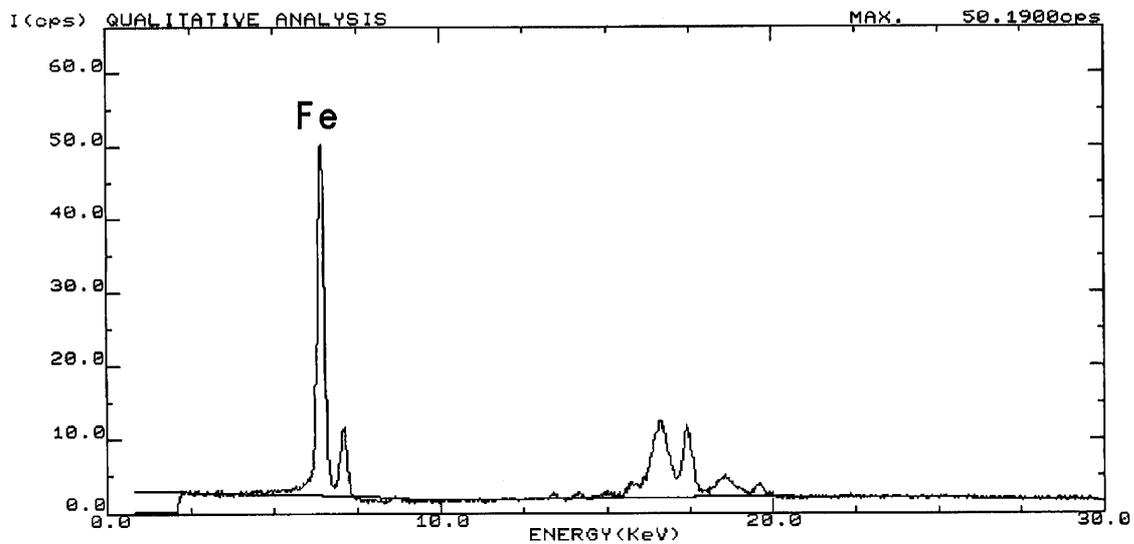
X線管	:	Mo	X線管電圧	:	50kV
X線管電流	:	0.2mA	検出器	:	Si (Li)
測定時間	:	100秒	測定雰囲気	:	大気

### 3. 結果と考察

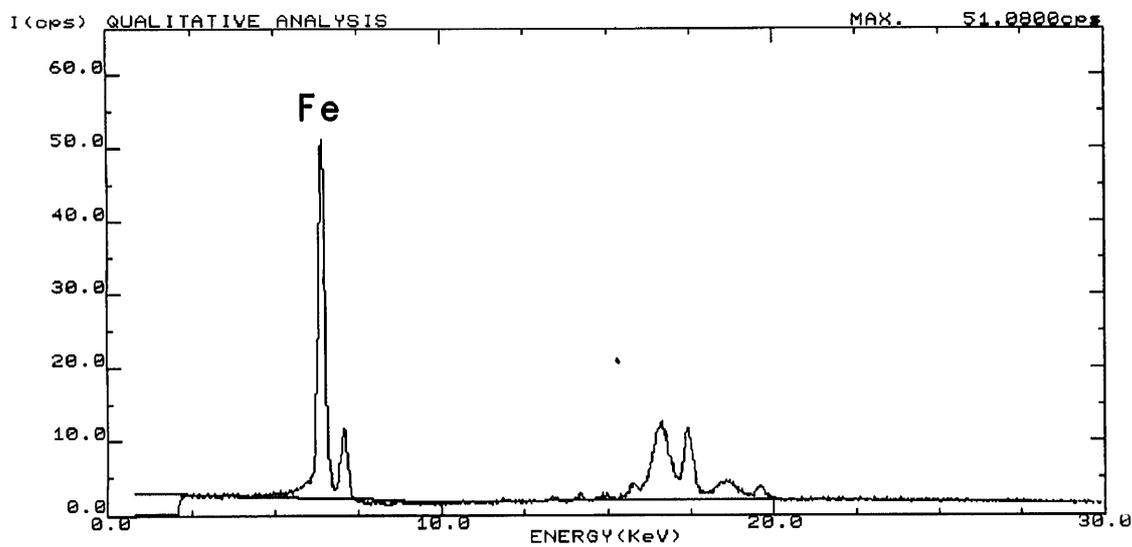
分析結果は図1から図5のとおりである。

試料①の土師器破片では、2ヶ所の測定を行ったが、いずれの部位からもHg（水銀）は検出できなかった（図1・2）。検出された元素のうち赤色顔料に関連する元素はFe（鉄）のみである。Feは土壌中にも多く含まれ、土器表面に付着した土壌はもとより、胎土そのものにも含まれることから、検出されたFeのピークがすべて赤色顔料に起因するものとは考えられない。ただし観察の結果、わずかではあるが表面に赤色顔料が付着していることが確認されていることから、この遺物に付着する赤色顔料はFe（鉄）を主成分とするベンガラ（酸化第二鉄  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）であると推定される。

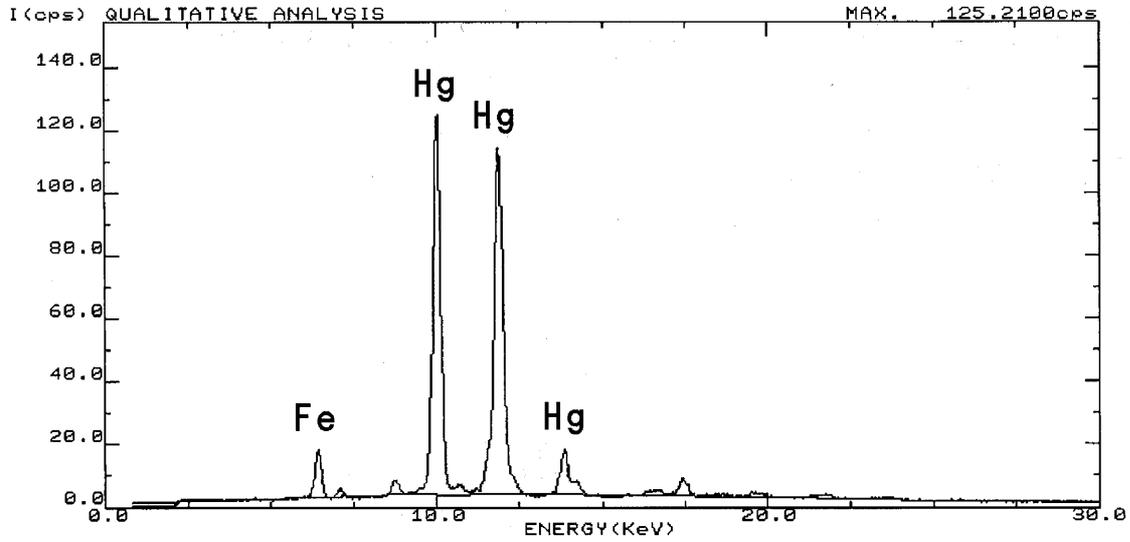
一方、試料②の石棺破片では、3ヶ所の測定部すべてからHg（水銀）が検出された（図3・4・5）。このことから、石棺の破片に付着した赤色顔料はHg（水銀）を主成分とする水銀朱（辰砂  $\text{HgS}$ ）であると考えられる。



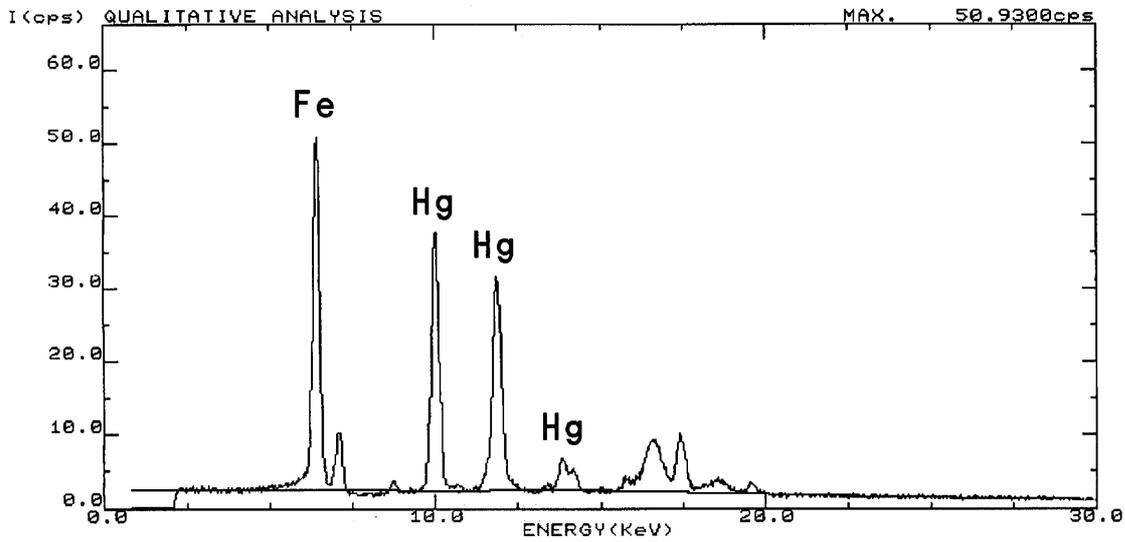
第 102 図 土師器破片蛍光 X 線分析結果



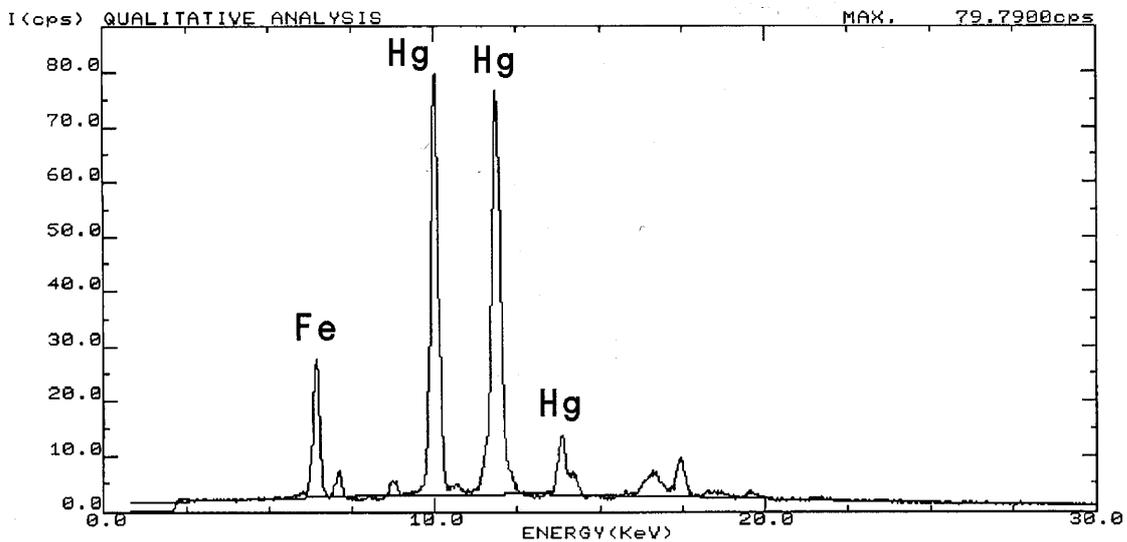
第 103 図 土師器破片蛍光 X 線分析結果



第104図 石棺破片蛍光X線分析結果



第105図 石棺破片蛍光X線分析結果



第106図 石棺破片蛍光X線分析結果

## 第4章 まとめ

### 第1節 長崎鼻古墳について

#### 1 はじめに

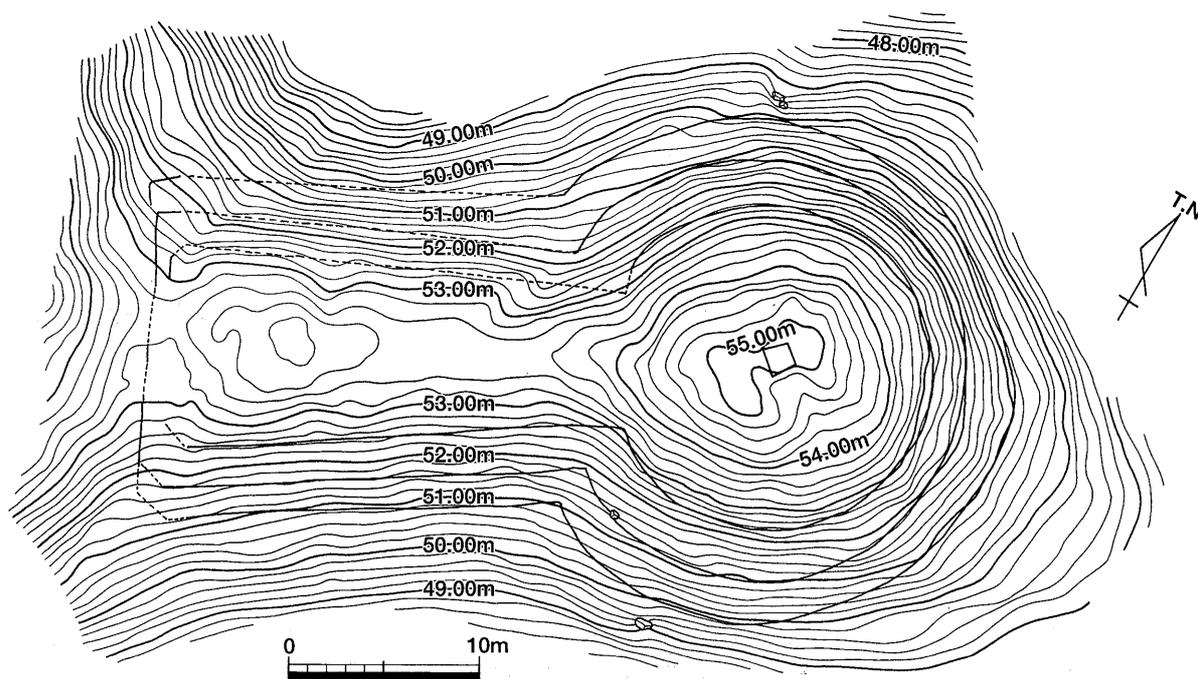
長崎鼻古墳は、阿蘇熔結凝灰岩製の石棺を持つ前方後円墳とともに3段築成の前方後円墳である。50 mに近い規模をもち、精緻な葺石が施されている古墳は、県内では例を見ないものである。その築造時期については、石棺型式などから前方後円墳集成編年で5期初頭(近藤 1991・大久保 2000)と考えられており、5世紀初頭に位置する。これまで、香川県において確実に阿蘇石製の石棺が搬入されている例は、観音寺市の丸山古墳・青塚古墳が知られていた。これらは7期(5世紀中葉)の築造年代が考えられており、長崎鼻古墳の発掘調査によってこれまでより早い段階で香川県に阿蘇石製の石棺が搬入されてきていたことが分かった(1)。

#### 2 墳丘について

長崎鼻古墳のように、海に近接する低い丘陵上に立地する前方後円墳は香川県ではあまり例がなく、ほとんどは内陸部の丘陵上に後円部を平野側に向けた形で造られている。長崎鼻古墳は後円部を海側に向けるなど海上を強く意識しており、県内でよく見られる立地形態を示さない(2)。

香川県では、古墳時代前期の前方後円墳が多数見られるが、それらは40 m以下の小規模なものであり、丘陵上に後円部を斜面下方に向けて造られ、後円部径に比べ狭長で低い前方部をもつ特徴がある(蔵本 1995・1999)。しかし、中期に近づくにつれ首長層の統廃合が起ったようで、前述したような小規模な前方後円墳はあまり見られなくなり、地元産の石棺を持つ100 mに近い大規模な前方後円墳が造られ始めた。これらは、狭長な前方部ではなく、幅や高さのある前方部をもっている。立地についても、丘陵斜面ではなく丘陵頂部など平坦な場所に造られており、立地の変化が前方部の形態変化を起こしたと考えられる。香川県の前方後円墳について、蔵本晋司・大久保徹也両氏が築造企画案を唱えており(蔵本 1999・大久保 2001)、それを参考にすると、長崎鼻古墳は、他の古墳がまだ狭長な前方部形態で築造されていた時期にもかかわらず、幅のある短い前方部形態をなすことから、他とは一線を画する。

また、長崎鼻古墳のように、前方部後円部ともに3段築成の上に精緻な葺石を残す古墳は県内では確認できない。埋葬施設として石棺を持つものは、石清尾山石船塚古墳等があり、葺石を持つものとしては、快天山古墳があるが、長崎鼻古墳のような厚く精緻な葺石の状況はうかがえず、長崎鼻古墳は、その意味で香川県では異質といえる。



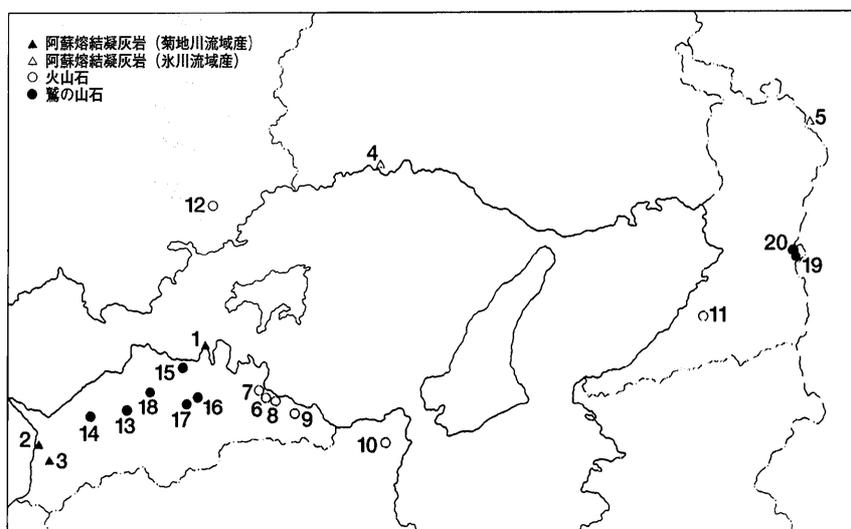
第107図 長崎鼻古墳墳丘形態復元図

さて、長崎鼻古墳の築造企画については、幅のある短い前方部形態を呈すると前述したが、もう一つの特徴として、前方部が緩く八の字状に開くだけでなく両コーナーが若干墳丘主軸方向に屈曲する。いわゆる剣菱型前方後円墳のような形態ではないが、前方部北西コーナーの1段目裾の葺石は屈曲し、更にその箇所については葺き方を変えて前端基底石より外側に周る。一方、南西コーナーの裾においては、全く葺石が確認できず、各3段の基底石はどれも前端基底石とは高さが違い、前端につながる段は存在しない。明らかに意識して側面裾を前端につなげない築造企画がうかがえ、墳丘裾部は北西と同じように若干墳丘主軸方向に屈曲すると考えられる。これまで県内では、前方部コーナーが開く撥形は多く知られているが、このように前方部コーナーが中に屈曲する形態は知られていない。

この前方部形態は、新たな築造企画とも解釈できるが、実際は地形による制約の可能性が高い。長崎鼻古墳は、尾根を掘り切り前方部前端を形成しており、前方部側面の高さは約3mを測るにも関わらず、前端の高さは1mもない。このことは、尾根を深く掘り切ることができなかつたため、側面の段と同じ高さに前端部の段を築けなかつたことを示していると考えられる。この不整合を解消するため、前方部両コーナーを若干中に屈曲させる手法を採つたものと考えたと辻褄が合うのである。事実、北西コーナー2段目裾と考えられる葺石は、くびれ部側面段とは高さが全く合わないが、前端基底石とはつながっており、ここではコーナーは全く屈曲せず明瞭な角を持つ。以上のことから、この屈曲は地形上の制約の中で側面と前端とのつながりをもたせるための工夫と考えるのが合理的である。

### 3 石棺について

香川産の石棺石材は、綾歌郡国分寺町で産出する鷲の山石（石英安山岩質凝灰岩）と、さぬき市津田で産出する火山石（非晶結凝灰岩）の2種類がある。これらは県内のみならず、鷲の山石製のものは大阪府柏原市（旧国単位の河内）松丘山古墳・安福寺石棺に、火山石製のものは大阪府岸和田市（和泉）久米田貝吹山古墳・徳島県鳴門市（阿波）大代古墳・岡山県備前市（備前）鶴山丸山古墳で使用されている。一方、



第108図 阿蘇石・火山石・鷲の山石製石棺分布図

県外産石棺の流入については、長崎鼻古墳他2例に見られる。これら香川県に関連する石棺の数は、地元産として県外5例を含め15例、阿蘇石製として3例の石棺が確認されており、出土は伝えられるが不明の物が2例存在する<sup>(3)</sup>。また、熊本県氷川流域産の石棺については、石棺製作初期段階において近畿圏の古墳に搬入されているものが、京都府（山城）・兵庫県（播磨）に確認できるので併せて図示した（第108図）。香川県の石棺分布状況を見ると、火山石製が東部域、鷲の山石製が中部域、阿蘇石製が西部域を中心に分布していることが指摘されている<sup>(藤田1976)</sup>。顕著に分布域に差が表われ異なった状況を示すために、これまで長崎鼻古墳はその立地から鷲の山石製石棺と考えられてきたが、今回の調査で阿蘇石製の石棺であることが判明したことは意義深い。

これにより詳しく分布を考えて見ると火山石製石棺が東部域の海岸部、鷲の山石製石棺が中部域の内陸部、阿蘇石製石棺が中・西部の海岸部に分布しており、一部分布域が重複するように見えるが、鷲の山石製は海岸部の古墳には使用されておらず、詳細な観点からは長崎鼻古墳は鷲の山石製石棺の分布域には重ならないことが分かる。

阿蘇石製石棺は西部と中部という点的な分布を示すが、前述したように阿蘇石製の搬入時期は2段階あり、その搬入時期差は分布域の差も顕わしているようである。

No	古墳名	所在地	墳形・規模	立地	後円部の位置	段築	葺石	埴輪	埋葬施設	埋葬方向	石材	棺型式	備考	突起形式	時期
1	長崎鼻古墳	高松市屋島西町	前方後円・45	丘陵後縁鞍部	斜面下方海側	3・3	○	×	竪穴式石槨	平行ほぼ東枕	阿蘇石	北肥後 I	菊池川流域	0・0・3・3?	5期
2	丸山古墳	観音寺市壱本町	円墳・35	丘陵鞍部		?	○	○	横穴式石室	南北	阿蘇石	北肥後 I		1・1・1・1	7期
3	青塚古墳	観音寺市市原町	前方後円・45	台地上	斜面上方	2・2	○	○	不明	不明	阿蘇石	北肥後 I		蓋1・?	7期
4	御津町石棺	兵庫県播磨郡御津町	不明						竪穴式石槨?	不明	阿蘇石	南肥後	水川流域	蓋1・0	3期
5	八幡茶臼山古墳	京都府八幡市	前方後方・50	丘陵頂部	斜面上部	?	○	○	竪穴式石槨	平行北西	阿蘇石	南肥後	水川流域	1・0・0・0	3期
6	赤山古墳-1								直葬	直交東枕	火山石		割竹形	不明	3期
6	赤山古墳-2	さぬき市津田町	前方後円・50	丘陵鞍部	斜面下方平野側	?	○	○	直葬	平行北枕	火山石		割竹形	1・1・1・1	3期
6	赤山古墳-3								竪穴式石槨?	直交?	不明			1・1・1・1	
7	岩崎山4号墳	さぬき市津田町	前方後円・49	丘陵頂部先端	斜面上方	2・2	○	○	竪穴式石槨	直交南枕北枕	火山石			1・1・1・1	4期
8	けぼ山古墳	さぬき市津田町	前方後円・57	丘陵頂部先端	斜面上方	2・2	○	○	竪穴式石槨	直交南北	火山石?			不明	4期
9	大日山古墳	大川郡大内町	前方後円・38	丘陵頂部の平坦面	平野側	1・1			竪穴式石槨?	不明	火山石?			不明	4期
10	大代古墳	徳島県鳴門市	前方後円・54	丘陵鞍部	平野側	2・2	○	○	竪穴式石槨	平行北西枕	火山石			身1・1	4~5期
11	久米田具吹山古墳	大阪府岸和田市	前方後円・130	丘陵頂部の平坦面	斜面上方	3・?	○	○	竪穴式石槨	平行北東位	火山石			蓋1・1	4期
12	鶴山丸山古墳	岡山県備前市	円墳・60	丘陵頂部			○	○	竪穴式石槨	北西位	火山石			1・1・1・0	4~5期
	快天山古墳-1								竪穴式石槨(粘土含む)	平行北枕	鶯の山石			1・1・1・1	
13	快天山古墳-2	綾歌郡綾歌町	前方後円・100	丘陵頂部先端	斜面下方平野側	3・2	○	○	竪穴式石槨(粘土含む)	平行北枕	鶯の山石			1・1・0・0	3期
	快天山古墳-3								粘土槨	平行北枕	鶯の山石			1・1・1?・1	
14	磨臼山古墳	善通寺市生野町	前方後円・50	丘陵頂部先端	斜面下方平野側	1・1			竪穴式石槨	平行西枕	鶯の山石			蓋1・1	4期
15	石船塚古墳	高松市峰山町	前方後円・57	丘陵頂部の平坦面	斜面上部	3・2	積石	○	竪穴式石槨	直交西枕	鶯の山石			1・1・1・1	4期
16	三谷石船古墳	高松市三谷町	前方後円・88	微高地(丘陵状)	斜面下方平野側	2・1	○		竪穴式石槨	斜交西枕	鶯の山石			身0・1	4期
17	船岡石棺	香川県香川町							不明	不明	鶯の山石			身不明	4期
18	石船天神社石棺	綾歌郡国分寺町	不明						不明	不明	鶯の山石			身1・1	不明
19	安福寺石棺	大阪府柏原市	前方後円・106	丘陵頂部	斜面上方		○	○	竪穴式石槨?	不明	鶯の山石			蓋1・1	3期
20	松岳山古墳	大阪府柏原市	前方後円・130	丘陵頂部	斜面上部	4・2	○	○	竪穴式石槨	斜交北西枕	鶯の山石			長持形石棺	3期

第 4 表 香川県の割竹形・船形石棺地名表(阿蘇石・県外に運ばれたものを含む)

#### 4 長崎鼻古墳の位置付け

長崎鼻古墳を評価するために香川県内の前方後円形の首長墳について分析し、地元産の石棺をもつ前方後円墳がどのように位置づけられるか考えてみたい。

現在、四国における前方後円墳は126基が判明している(近藤1991・2000)。その内、香川県内に築造されている前方後円墳は87基と全体の約7割を占め、不均等な分布をなしている(大久保1997)。香川県に前方後円墳が多く存在するのは前期段階だけであり、しかも全長40m以下のものが57基あるなど小規模なものが多い。これらは、各地域にまとまりをもって分布しており、継続して小規模な前方後円墳が多く築造されたことがうかがえる。ただ、中期に近づくにつれ、小規模な前方後円墳の築造は減少する。快天山古墳・三谷石船古墳などの巨大な前方後円墳が造られ始めると、それまで小地域の首長層でも造られていた前方後円墳が、大規模な地域首長層しか造られなくなるのである。これは、香川県における首長層の序列化・階層化が進んだためと考えられている(國木1997・蔵本1999)。ただし、大規模な前方後円墳の築造は各地で始まるが、それが継続した地域はほとんどない。そして、四国最大規模でもあるさぬき市の富田茶臼山古墳の築造以後、前方後円墳はある一定地域以外には築造されず、円墳が主体となる。この古墳の築造状況における極端な変化は、何か強い規制力が働いたかのような状況を示す。

香川県において古墳築造の前期段階には、多数の小規模な前方後円墳が造られると述べたが、それらを全国的に見ると次のような特徴がある。それは、①石のみで墳丘を構成する積石墳の造営、②主体部が墳丘主軸に斜交し東西を向く主軸斜交主体部(玉城1985・堀本1990)、③撥形の前方部、④尾根や丘陵上に築かれた場合は丘陵に平行して後円部を下方に向ける(蔵本1995)などである。これらの特徴は、大規模な前方後円墳が造られ始めるにつれ認められなくなる。例えば積石墳の造営が減り、さらに主体部の主軸も変化する。磨臼山古墳・石船塚古墳では西枕である一方、快天山古墳では北枕であり、伝統的な東西方向への埋葬方位の嗜好をもつものと、そうでないものが出現する。ただ、主体部主軸は墳丘に直交あるいは平行し始めるなど、これまでもっていた伝統的な特徴は暫時変化していくようである。しかし、鷺の山石製石棺をもつ前方後円墳の中で最も新しい三谷石船古墳は、撥形の前方部をもち、丘陵に平行して後円部を尾根下方に向けて築かれ、石棺は墳丘主軸に斜交し西枕であるなど、前期初頭から特徴的にみられた古墳の築造・埋葬方法を認めることができる。大規模な前方後円墳の造営開始は、基本的にこれら各地域で見られた小地域首長の独自の古墳の造営を停止させ、伝統的な造墓方法の廃止を意味するが、突然変化するのではなく、暫時変化していくようである。ただ先述したように、富田茶臼山古墳の築造以後は、明らかに前方後円墳の築造が途絶えたと言えるほど極端に減少する。ただ、富田茶臼山古墳の墳形は、香川県の伝統的な墳形ではなく、奈良県五社神古墳に相似し(國木1997)、墳丘の構築方法や立地条件など伝統的な特徴が明らかに見られない(寺田・國木1990)。四国最大規模の古墳が、他地域の造墓方法のもとに築造され、それ以後は大規模な古墳造営が行われないことから、外的な要因での前方後円墳築造規制が考えられる(國木2000・蔵本1999・堀本・吉瀬2002)。

地元産の石棺製作は、この大規模な前方後円墳の造営と連動しているようであり、地元産石棺が大規模な前方後円墳のみに採用され、円墳には全く採用されていないことから、明らかにその使用に秩序だった傾向がうかがえる。火山石製石棺は、赤山古墳・岩崎山4号墳など一定地域内の前方後円墳に継続して使用されているが、鷺の山石製石棺についてはそのような規則性は認められず、各地域での大規模首長墳1基にのみ使用されているのである。つまり大規模鷺の山石製石棺の使用は、各時期において広範な地域に影響をもった有力首長のみには許されなかったものと考えられる。このように地元産石棺の使用は、大規模な前方後円墳の造営と同じように首長層の序列による秩序の一つであったものと想定される。また、香川県において特徴的な積石墳などの伝統的な墓制をもつ古墳の分布範囲は地元産の石棺分布範囲と重なり、石棺の製作使用は大規模な前方後円墳の造営とともに新たな共通墓制の側面を有している。そして鷺の山石と火山石を持ち得た首長層は、両者の墓制に見られる共通性から、地域として結合し連合体を形成しているかの様相がうかがえる。しかし、それ以後は、その墓制、分布範囲、他地域への搬出先からみる交流圏の違ひなどから前期段階に見られた広域に及ぶ強固な地域間の結合の様相はあまり認められず、結合は薄れていたものと考えられる。

以上のような傾向が、香川県で地元産石棺を使用している古墳に見られた。これを踏まえた上で考え

てみると、長崎鼻古墳については主体部に石棺が採用されており、一定以上の首長であったことがうかがえる。長崎鼻古墳には、地元の前方後円墳には見られない精緻な葺石が施されているが、埴輪などは認めらず、くびれ部から少量の小型丸底壺が確認されているのみである。埋葬施設については墳丘主軸に平行させ構築することが目的のようであり、香川県の地域的な特徴の一つである東西方位への嗜好は認められない。

香川県で地元産石棺を使用している古墳は、墳形・規模から首長層の序列化と共通する墓制の様相がうかがえることから、地域的な結合を高めるためのものであると考えられる。長崎鼻古墳では、それらの古墳と共通した様相はうかがえず、その特徴から在地的な古墳ではないことが色濃く読み取れる。今後、広域な範囲での検討が必要であると考えており、長崎鼻古墳で確認された特徴のうち、香川県内で類例を探すならば、石棺が納められる石槨構造がさぬき市岩崎山4号墳(樋口・古瀬2002)・徳島県鳴門市大代古墳(幸泉2001)など火山石製石棺を持つ古墳の石槨構造と類似している<sup>(4)</sup>。主体部に使用されている石棺に阿蘇石・火山石と石材が違うなどの点はあるが、火山石製石棺と九州の石棺との形態上での類似性(藤田1976・高木1994)や、地域的な近接性を考え併せると、現段階では長崎鼻古墳の被葬者は火山石製石棺を持つ古墳の被葬者とより密接した関係を持っていたものと考えられる<sup>(5)</sup>。

長崎鼻古墳は、香川県という初期刳抜式石棺製作の主要地の一つであり、地元産の石棺を頂点にした古墳造営秩序を確立した地域に立地しながら、石棺製作の最終段階では、他地域の石棺を搬入するという奇妙な状況を示している。長崎鼻古墳の位置付けが、このことを読み解く鍵であると考えられるが、資料に乏しく現在のところ判然としない。資料の増加を待ちたい。

注

- (1) 坂出市田尾茶臼山古墳の後円部に置かれている手水鉢が、阿蘇石製石棺の蓋の可能性があると指摘されているが(香川県1983)、現存する手水鉢の石材は長崎鼻古墳出土石棺とは明らかに異なる。側面に残る加工痕の状況や石材も面取り及び列り込みが施されており、何らかの転用物であることは明らかであるが、その形状から想定される石棺形は類例が考えにくく、積極的に石棺だとする根拠は現状では乏しい。
- (2) 長崎鼻古墳の位置する屋島には、その西側斜面に墳長30mほどの前方後円墳である浜北1号墳が知られている。時期差もあるが低平なマウンドであるなどその形態や立地から、系譜的につながるものではないと考えられる。
- (3) 松岳山古墳の例のみ、組合式長持形石棺の側石に鷲の山石が使われている。他のものは刳抜式の割竹形・船形石棺のみである。出土が伝えられるものとして、火山石製石棺と推定されているさぬき市津田けぼ山古墳と大川郡大内町大日山古墳がある。奈良県奈良市佐紀陵山古墳の例も、その形態から火山石製の可能性が指摘されている(間壁1994)が、実証性に乏しいため今回は除外した。
- (4) 香川県下では石棺の埋納方法が確実なものは少ないが、鷲の山石製石棺を持つ古墳と火山石製石棺を持つ古墳の石槨構造は明らかな違いがあり、長崎鼻古墳は火山石製石棺を持つものに類似した形態を示す。
- (5) 長崎鼻古墳の位置する高松平野東縁部は、これまで鷲の山石製石棺を持つ古墳の勢力範囲と考えられてきたが火山石製石棺を持つ古墳との関係性が強い。長崎鼻古墳は地元産石材を使っておらず、火山石製石棺の勢力範囲と同列に取り扱うべきではないが、これまで考えられていたよりも火山石製石棺を持つ古墳の首長の影響範囲を考え直す必要があるだろう。

また、先述した田尾茶臼山古墳は、明確に鷲の山石製石棺の分布範囲とは言えないが、その様相からは在地的な古墳であり76mという巨大な前方後円墳でもある。この古墳は長崎鼻古墳に近い時期が想定されていることから、この古墳の評価が非常に重要である。

参考引用文献

岩崎卓也(1976)「舟形石棺をめぐる2・3の問題」『史潮』第1号 弘文堂  
 上田哲也・増田重信(1959)「播磨郡御津町中島出土の特殊家型石棺」『古代学研究』第26号 古代学研究会

- 上原敏伸 (2000)「讃岐の刳抜式石棺」『古事』第5冊 天理大学研究室  
 (2001)「香川県香川町船岡山古墳および周辺遺跡」『墳丘のない墓の探査研究』天理大学遺跡探査チーム
- 梅原末治 (1933)「讃岐高松石清尾山石塚の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第12冊臨川書店  
 (1938)「備前和気郡鶴山丸山古墳」『近畿地方古墳墓の調査三』臨川書店
- 大久保徹也 (1995)「讃岐」『全国古墳編年集成』石野博信編 雄山閣  
 (1997)「四国における前方後円墳の不均等分布—古墳時代前期の様相—」  
 『中四研だより』第4号 中・四国前方後円墳研究会  
 (2000)「四国北東部地域における首長層の政治的集結」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部  
 (2001)「首長墓から見た讃岐地域の動向」『古墳時代における日向の地域性』宮崎県埋蔵文化財センター
- 香川県教育委員会 (1983)『香川叢書』考古編
- 香川県史跡名勝天然記念物調査会編 (1928)「赤山古墳」『史跡名勝天然記念物調査報告』第3 香川県  
 香川県史跡名勝天然記念物調査会編 (1930)「岩崎山古墳」『史跡名勝天然記念物調査報告』第5 香川県
- 久保田昇三 (1999)「丸山古墳」『観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書』観音寺市教育委員会  
 (2000)「丸山古墳Ⅱ」『観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書』観音寺市教育委員会
- 國木健司 (1997)「香川県」『古代学協会四国支部第11回大会発表資料 瀬戸内中期社会の変動と要因』古代学協会  
 四国支部
- 蔵本晋司 (1995)「香川県高松市三谷石船古墳の再検討」『香川考古』第4号 香川考古刊行会  
 (1999)「香川県における帆立貝形古墳をめぐる諸問題」『中国・四国前方後円墳研究会 第5回研究会資  
 料集帆立貝形古墳をめぐる諸問題』中国・四国前方後円墳研究会
- 蔵本晋司 (2000)「四国北東部における前方後円墳創出期の諸様相」『古代学協会四国支部第14回大会 前方後円  
 墳を考える』古代学協会四国支部
- 幸泉満夫 (2001)「大代古墳」『阿讃山脈東南縁の古墳群—四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報—』徳  
 島県埋蔵文化財センター
- 近藤義郎編 (1991)『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版  
 (1992)『前方後円墳集成』近畿編 山川出版  
 (2000)『前方後円墳集成』補遺編 山川出版
- 高木恭二 (1994)「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』第46巻5号 古代学協会
- 玉城一枝 (1985)「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾 末永先生米寿  
 記念会
- 寺田文久・國木健司 (1990)『富田茶臼山古墳発掘調査報告書』大川町教育委員会
- 長町 彰 (1919 a)「讃岐の岡に於ける石枕ある2・3の石棺に就て」『考古学雑誌』第9巻1号 衆精堂  
 長町 彰 (1919 b)「讃岐に於ける石枕ある2・3の石棺に就て(補遺)」『考古学雑誌』第9巻10号 衆精堂
- 樋口隆康・古瀬清秀 (2002)『香川県大川郡津田町岩崎山第4号古墳発掘調査報告書・香川県綾歌郡綾歌町快天山  
 古墳発掘調査報告書』津田町教育委員会・綾歌町教育委員会
- 廣瀬常雄 (1980)『香川町・船岡山古墳調査概報』香川県教育委員会
- 福永伸哉 (1990)「主軸斜行主体部考」『鳥居前古墳—総括編』大阪大学文学部考古学研究室
- 藤田憲司 (1976)「石棺研究ノート(4)Ⅱ讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報』第12号 倉敷考古館
- 間壁忠彦 (1994)『石棺から古墳時代を考える』同朋舎
- 間壁忠彦・間壁菫子 (1974 a)「石棺研究ノート(1)石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研  
 究集報』第9号 倉敷考古館
- 間壁忠彦・間壁菫子 (1974 b)「石棺研究ノート(2)岡山県丸山古墳ほか長持形・古式家形石棺の石材同定」  
 『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館
- 間壁忠彦・間壁菫子・山本雅靖 (1976)「石棺研究ノート(4)」『倉敷考古館研究集報』第12号 倉敷考古館
- 渡部明夫 (1994)「四国の刳抜式石棺」『古代文化』第46巻6号 古代学協会  
 (1995)「香川の刳抜式石棺—石棺の創出と移動—」『古代王権と交流 瀬戸内海地域における交流の展開』  
 6名著出版

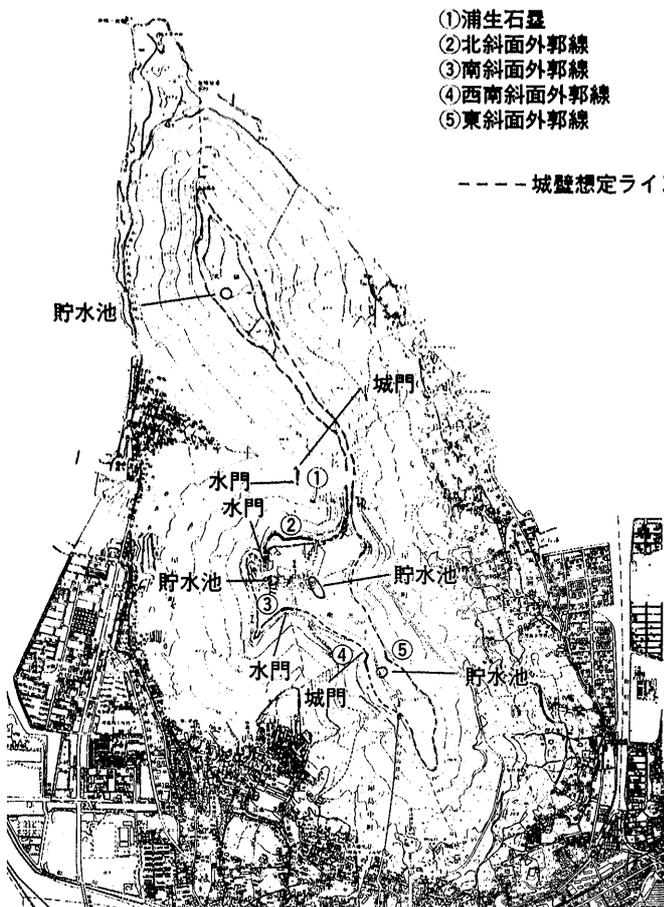
第2節 屋嶋城について 一構造・機能に関する現状把握と今後の課題について一

1 はじめに

屋嶋城は『日本書紀』天智天皇6年(667年)11月の条に築城の記述がありながら、近年まで実態がほとんど不明であった。というのも、大正8年に関野貞氏が、大正11年には岡田唯吉氏によって浦生集落の奥の谷合、標高100m程に所在する石塁が報告<sup>(1)</sup>された以外、屋嶋城に関連する重要な遺構が発見されず、特に、古代山城の特徴である山頂近くを取り囲む外郭線が発見されなかったためである<sup>(2)</sup>。

それから60数年を経た昭和60年、奈良女子大学(当時)の村田修三氏が、同大学史学会誌<sup>(3)</sup>に、「屋嶋南嶺北斜面等に古代山城の防御ラインの可能性のある帯状平坦地が存在する。」との内容を発表した。さらに、平成10年2月に高松市在住の平岡岩夫氏から、「南嶺南西斜面で、石組及び石組ラインと車道を発見した。」との報告が高松市教育委員会にもたらされた<sup>(4)</sup>。

しかし、それらの遺構が古代山城のものであるとの決め手を欠いたことから、市教委では、その後綿密な分布調査に取り組み、防御背面にあたる東側斜面では外郭線を、谷部2箇所では水門と考えられる遺構の所在を確認した。また、平成14年年頭には、前述石組近くの発掘調査で城門遺構を確認し、これで屋嶋城の存在が初めて確固たるものとなったところである。これらの成果については、第3章他で詳述した。構造解明には、まだ多くの時間を要すると考えられるが、以前に比べれば、資料内容は豊富になってきており、この中には、古代山城の構造を検討していく上で重要なものも含まれていると考えられる。なお、平成15年度からは城門周辺部でのさらなる調査を予定していることから、現段階で判明していることについてのみ本節で整理をしておきたい。



第109図 屋嶋城関係遺構位置図 (S = 1/40,000)

ほぼ同じ高さをもつ。平成10年度以降、北嶺において行った分布調査の結果では、山上部付近は比高差約30m程の断崖が連続して連なっており、この断崖は人が容易に登れる状況にはない。これまでのところ南嶺でも断崖の部分には人工物が認められておらず、南嶺で人工物が認められるのは傾斜の緩い部分や谷部を中心とした箇所のみである。そして、北嶺においては傾斜の緩い部分や南嶺のような谷部

2 城の構造

外郭線構造(縄張り)について

屋嶋城の外郭線構造は先学諸氏による多くの分析がある。これら外郭線の検討は、浦生に所在する石塁を中心とした遺構のみを取り扱った検討であり、前述した村田氏の成果は反映されず、十分な検討とは言い難いものであった。その後、南嶺南西斜面における石塁の確認や防御背面となる東側斜面での上段状土塁の確認等によって、山上部近くの緩斜面から急斜面に地形が変化する部分には遺構が存在していることが判明している。最近では、城門をはじめ確認された遺構が南嶺に限定されることから、南嶺のみを外郭線として捉える考え方も出されている<sup>(5)</sup>。

このような見解が出される原因は、屋嶋城の人工的な構造物は浦生の石塁を除き南嶺山上部のみに存在することによる。南北に長く瀬戸内海を北に突き出た臨海性のある屋嶋をみた場合、人工構造物が認められない北嶺が古代山城の縄張りとして必要でないのかといえそうではない。これまでの分布調査等によって北嶺には南嶺同様平坦地が多く存在していることが判明しており、標高についても

は存在しないのである。南嶺で確認されている遺構をみる限り、人工物は断崖と断崖の間を埋めているにすぎない。南嶺外郭線の周長のうち、人工的な外郭線は長く見積もっても600m程度であり、南嶺外郭線の全長を4,000mとした場合、自然の断崖との割合は7分の1強である。このような状況を考えた場合、北嶺で認められる断崖を自然の要害とするならば、屋嶋城の外郭線は南嶺のみならず北嶺をも含めた全長約7,000mの外郭線であると考えられる。白村江の戦い以降、攻めてくる可能性のある唐・新羅の連合軍に対して、短期間の内に城の造営を完了しなければならない状況下では、最小の労力で最大の防御（効果）を考えた城のつくりであると想定できる。

さらに、浦生石塁をふくめて考えた場合、防御上重要な遺構である雉城と考えられる張り出しをもつ浦生の石塁を第1次防衛ライン（外郭）、山上部付近にある遺構を第2次防衛ライン（内郭）とする複郭構造の古代山城と想定される<sup>(6)</sup>。これについては今後、浦生の石塁の確認調査を行い構築時期の確定を行う必要がある。

### 3. 遺構について

これまでの確認調査や分布調査などによって屋嶋城に関係すると考えられる遺構が確認されている。各遺構の詳細については第3章第5節に詳しく述べた。ここでは確認された遺構を第109図に図示し、位置関係を整理しておきたい。

#### 城門

平成13年度の確認調査で西南斜面において確認された大規模な城門の他、浦生石塁の谷部近くの平坦地を城門に推定する意見もあるが<sup>(7)</sup>、現状では城門を特定できるものはない。ただし、本市教委では、石塁の北端近くに小規模な城門を推定しており、城門が確認および想定できるのはこの2箇所のみである。この2箇所は屋嶋城に入るための、中心的な登り口に設定されている。浦生石塁に想定される城門は西方から屋島を見た場合、視界の正面に位置する、最も危険にさらされる場所にある。屋嶋城を造る側もこれを想定し他の箇所よりも厳重に石塁を構築しているものと想定される。一方、西南斜面で確認された城門は眼下に屋島南西部を見下ろす位置にある。河川による堆積や埋め立てなどにより、現在はその姿を確認することはできないが、古代には大きな入江になっていたようである。屋島の南側は高松郷であるが、その高松（たかまつ）は高津（たかつ）が変化したものと考えられており、その津は新川河口右岸の屋島と陸地との間にある現在の水道（現相引川の交点）あたりに推定している<sup>(8)</sup>。当然、この港に入る船や当時の港湾施設からも常時城門が見えていたと想定されることから、城門の規模が大きなのは、見えること（敵を誘い込むこと？）を意識した造りであった可能性が考えられる。

#### 水門

山上部外郭線の内、屋島寺山門西側の谷部に1箇所、水族館北側の谷部に1箇所、浦生石塁の谷部に1箇所の合計3箇所を想定している。南嶺山上部には大きく3箇所の谷が認められるが、現在、水門が想定される遺構が2箇所で認められていることになる。この他、屋嶋城最大の貯水池を推定している瑠璃宝池（血の池）を中心とする池の下流には大規模な水門があったと想定されるが、現在は屋島ドライブウェイ駐車場の入口部分にあたり確認することができない。水門と想定される遺構のうち、ある程度構造がわかる南側の水門想定地（仮称南水門）は、谷部の水の影響を受けやすい部分については石積み認められ、水門（石積み）の両側には外郭線（内托土段）が存在する。この内托土段の端は斜面に取り付き終わる状況が認められる。北側の水門想定地（仮称北水門）付近の状況も、仮称南水門付近の状況と同様である。目測によるものであるが、北水門想定地の西側で一部確認した土段上部平坦面のレベルと東側の土段上部平坦面のレベルはほぼ同じである。このことから規模の差こそあれ、山上部で確認されている水門想定地は同様の構造で造られているものと考えられる。一方、浦生石塁の谷部に存在したと想定される水門部は、上部からの土砂・雨水等により相当崩落していると考えられる。谷部の水の流れに平行する形で側壁状の石積みが認められる箇所がある。谷部の排水方向が石塁に対して直交しない不自然な流れ方をすることから、平成15年度以降に行う調査の中で詳細な構造を確認したい。

#### 貯水池

屋嶋城の貯水池と考えられる池は、南嶺では平成13年度第3調査地点として調査した瑠璃宝池（血の

池)を含めて3箇所、北嶺は1箇所の合計4箇所を想定している。この内、瑠璃宝池(血の池)南側駐車場における確認調査では、小規模な調査でありながら最下層から屋島寺に關係する瓦などの遺物に混じって、7~8世紀にかけての遺物が認められたことから、屋嶋城が機能していた時期まで遡る可能性が考えられる。

#### 倉庫などの建物遺構

屋嶋城の倉庫などの建物遺構は、現在のところ確認されていない。その中であって、古代の遺物が比較的多く認められるのは、屋島寺宝物館建設に伴う発掘調査(第3章第6節参照)で、竪穴住居状遺構を認めたほか、7世紀中葉頃の遺物が出土している。さらに、前述した瑠璃宝池(血の池)南側駐車場の確認調査において、最下層から7世紀代と考えられる遺物が出土しているなど、南嶺山上部平坦地の内、屋島寺を中心とする範囲に倉庫など城の施設が想定される。

#### 4. 城壁構造について

分布調査や確認調査などから、城壁が作られる場所において外部構造に違いが認められることが判明した。屋嶋城の塁状構造は、内托法(内托土段)が一般的で、北斜面・東斜面・水門の両側などの外郭線構造に認められる。一方、外郭線の一部に城門を築く場合はその外郭線の一部が内托法(土段)ではなく夾築法(土塁)になる点が挙げられる。西南斜面の外郭線では、その一部から城門が確認され、城門南側の石塁背面の平坦地からは山側に面をもつ列石が確認された。現在は、上部の土塁がほとんど流出し多少の高まりを認めるのみであるが、この部分に夾築土塁が存在していたことが判明した。研究者によって評価が分かれる浦生に所在する石塁も構築方法は夾築法であり、石塁の北端には城門推定地、さらには雉城と考えられる張り出しもある。雉城と考えられる張り出しと城門推定地は至近距離にあり、『横矢掛かり』が十分行える位置にある。この位置関係は、今回城門が確認された山上部西南外郭線でも同様である。今後の調査を終なければならぬが、以上のように外郭線構造に夾築法を採用する部分には城門などの重要な遺構が存在し、城門を通過しようとする敵に対して攻撃ができるような施設(雉城)も配備され、厳重な防御を行おうとしていたことがうかがえる。

今回の城門調査によって、山上部に存在する外郭線の構造等を例に挙げて実戦向きの城郭であるとする遺構構造の評価がある<sup>(9)</sup>。そして、山上部外郭線の遺構構造と浦生の石塁を中心とする遺構構造には何ら違いは認められず、浦生石塁も実戦向きと考えられる。あえて違いを挙げるならば、上部からの土砂や雨水に対して各遺構の崩壊を最小限に防ぐことと周辺部で材料が調達しやすかったことによるものか浦生石塁の構築方法が芯まで石で作られている点と後世の再利用によって中世の遺物が出土したという点のみである。

#### 5. 城壁(土塁)の構築方法

屋嶋城に關係する外郭線の各所に設定した調査の成果により、土塁の構築には版築工法が採用されていない可能性が極めて高くなった。第3章の各トレンチの項で詳細については述べているが、現在のところ古代山城の土塁構造に特有な技法として使用されている版築は認められない<sup>(10)</sup>。城門遺構が確認された西南斜面外郭線に設定したトレンチでは、土塁部分で約10cmの厚さで土が積み上げられている状況が確認された。城門内部の構築土にも同様に約10cm程度毎に土の違いが認められた。西南斜面で確認できた土層断面はこの2箇所であるが、2箇所とも同様な積み方が確認されたことは、他の箇所においても同様の土塁構築をしている可能性が高く、西南斜面外郭線は外部の状況だけではなく内部の状況についても厳重な積み方をしていることが想定される。

古代山城の土塁構造に版築が認められないのは坂出市城山城でも確認例がある。平成10年度に坂出市教委が水門近くの内郭線が石塁から土塁へと変更する部分にトレンチを設定し調査を行っている。土塁の断ち割り状況の写真や報告書そして調査担当者からの教示によれば、石塁に使用されている個々の石材の高さに合わせて幾層にも分けて土層を積み上げてはいるが、版築とは呼べない積み方であるとの意見をいただいた<sup>(11)</sup>。土塁を構成する粘質土と小礫混在の状況は、屋嶋城北側外郭線斜面部で行ったトレンチ調査の状況と共通する。城山城における土塁構造を確認するためのトレンチ調査はこの1箇所

のみである。今後の調査の進展を待たなければならないが、可能性として古代山城外郭線土塁構造に版築が認められないのは、讃岐の古代山城の特徴として指摘できるかもしれない。

## 6. 城門遺構について

前述のとおり、今回の史跡天然記念物屋島基礎調査事業による確認調査の結果、屋嶋城の城壁構造・城壁に配置される遺構などについて、大まかな概要が述べられるまでになった。ここでは、重要な調査となった西南斜面の城門遺構について述べ最後としたい。

### 規模について

西南斜面で確認された城門は一部分を確認したにすぎず、今後の確認調査により変更の余地を多く残している。また、今回確認した部分は、側壁等崩落の著しい部分があり本来の状況がつかめない部分も存在する。現在判明している状況だけでは比較検討を行う上で情報量不足ではあるが、他の古代山城で確認されている城門との対比を行い、今回確認された城門の可能な限りの復元をしておきたい。ただし、各城門構造には違いが認められることから、すべてにおいて検討できるわけではない。比較した各城門の規模は第5表に示したとおりである。屋嶋城の城門幅 4.50 m は、坂出市城山城の城門幅 4.45 m と 5cm 違いであり、城門規模が非常に近似する。一方、瀬戸内海を挟んで対岸に存在する鬼ノ城南門・西門の城門幅は 4.10 m (心々間)・4.08 m (心々間) である。城山城の城門内の柱構造がどのようになるか不明であるが、大野城太宰府口城門や屋島城で確認された城門のように柱が側壁に接するように配置される場合と、鬼ノ城の各城門のように柱が壁に埋め込まれている場合とでは城門幅に多少の違いはでてくるが、備讃瀬戸を挟んで存在する古代山城の城門幅が 4 m を前後する規模に集中するのは偶然の一致ではないように思われる。

番号	城名	所在地	城門名	城門規模 (m)		備考
				間口(心々間)	城門幅	
1	大野城	福岡県大野城市他	太宰府口	5.25		
2	"	"	水城口	(4.80)		
3	御所ヶ谷城	福岡県行橋市他	中門		6.00	片側のみ残存
4	屋嶋城	香川県高松市		(4.00)	4.50~5.40	奥側が広い
5	城山城	香川県坂出市		(3.95)	4.45	
6	鬼ノ城	岡山県総社市	南門	4.10		
7	"	"	西門	4.08		
8	"	"	東門	3.20		
9	金田城	長崎県下県郡美津島町	一の木戸	3.20		

※ 城門規模における間口の規模 ( ) については柱穴等が未確認であったり、柱の規模が不明であることから推定である。

第5表 確認された古代山城の主な城門遺構の規模

### 床面構造について

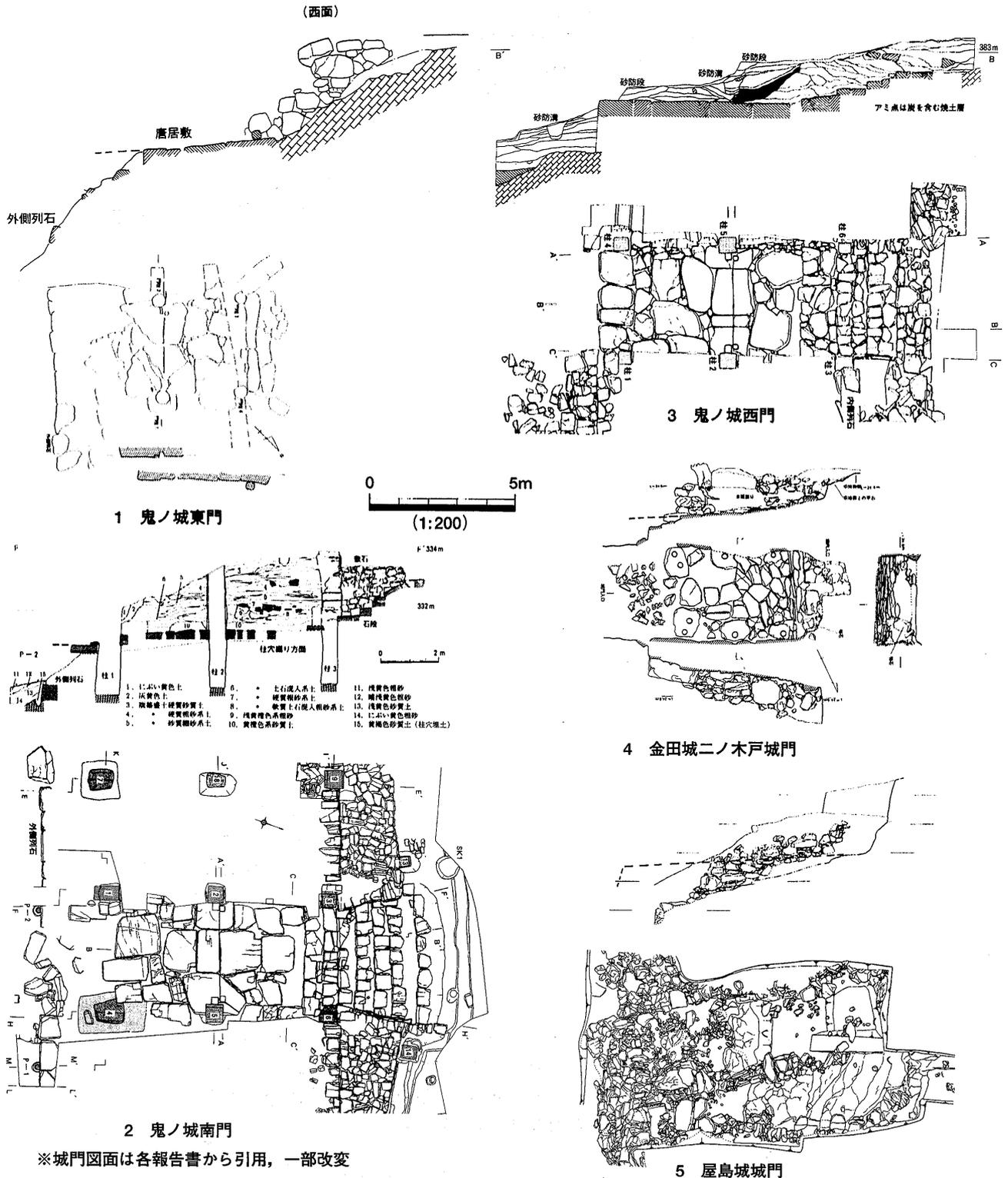
本文中でも述べたとおり、古代山城で確認されている城門の床面と屋嶋城の城門で現在認められる床面を対比した場合、形状に違いが多く認められる。ただし屋嶋城の場合は、排水溝の蓋石が存在しないこと等から城門前半部(谷側)を中心に下部へ流された可能性が考えられる。現在の床面の状況が城門遺構の下部構造(基礎部分)であることは前章で述べたとおりである。現在の床面からどの程度の盛土をして本来の床面を構築していたか不明であるが、金田城二の木戸城門や鬼ノ城東門・北門の状況からすれば、現在確認している排水口からは約 3 m 程度は高くなると想定され、城門前面は懸門式になるものと想定される(第 110 図)。

### 付属施設について

城門に付属する施設として、雉城と想定される張り出しが城門北側で確認され、張り出しの斜面中央部からは柱溝と想定される石のない部分も 1 箇所確認された。同様な構造物は鬼ノ城でも確認されており、確認された柱溝の状況から上部に構造物も想定されている。今回は十分な確認ができなかったが、張り出しの上部に構造物を想定する場合、今後の調査の中で柱溝と想定される石のない部分を数箇所において確認する必要がある。

7. 最後に

以上、分布調査・確認調査等により屋嶋城の城壁の状況、各付属施設（城門・水門等）の所在等は判明したが、各遺構の詳細については、上部からの土砂によって埋没したり、崩落しており、個々の遺構の全容が分かる状況にはない。今後、遺構周辺部の地形測量・確認調査等が必要である。現在のところ平成15年度以降、城門および周辺部・仮称南水門・西南斜面外郭線と浦生石塁の調査を予定しており、これらの調査によって屋嶋城の全容がより鮮明になってくるものと考えられる。



第 110 図 古代山城で確認された城門遺構の床面構造

## 注

- (1) a 関野 貞「天智天皇の屋嶋城」『史学雑誌』第28編第6号 史学会 1919年  
 b 岡田唯吉「屋嶋」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第1 香川県 1922年
- (2) 大正8・11年に浦生に所在する石塁が報告されて以降、下記の文献等に屋嶋城についての分析が述べられている。これらの中で屋嶋城は他の古代山城との比較の中で取り上げられることが多く、その中にあっての扱いは非常に低く、屋嶋城の構造を分析しようとする意図はあまり見受けられない。この原因は讃岐の中にあって、二重の外郭線構造や城門・水門・門礎石等の多くの遺構が確認されている城山城に比べて、『日本書紀』に記載はあるものの屋嶋城に関する遺構が浦生に所在する石塁に限られ、古代山城の特徴である山頂近くを取り囲む外郭線や古代山城を決定付ける遺構が確認されなかったことによる。
- ・「屋嶋」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第1 香川県史蹟名勝天然記念物調査会 1922年
  - ・藤井雄三『屋嶋城跡』高松市教育委員会 1981年
  - ・廣瀬常雄「讃吉國屋嶋城」とその遺構について『考古学と古代史』1982年
  - ・『新編香川叢書—考古編—』1983年
  - ・『香川県史1—原始・古代—』香川県 1988年
  - ・出宮徳尚「瀬戸内の古代山城」『新版古代の日本④ 中国・四国』角川出版 1992年
  - ・藤好史郎「屋嶋城と城山城—古代山城研究の一視点—」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V—7世紀の讃岐—』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997年
  - ・大山真充「7世紀の讃岐」特集のおわりに—考古学的調査・研究の現状と課題—『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V—7世紀の讃岐—』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997年
  - ・廣瀬常雄「城山神籠石と「讃吉國屋嶋城」」『森浩一70の疑問 古代探求』1998年
- (3) 村田修三「研究室旅行こぼれ話—屋嶋城—」『寧楽史苑』第30号 奈良女子大学史学会 1985年
- (4) 1998年(平成10年)5月21日に本市教委が行った記者発表資料による。  
 石塁発見の契機等については、のちに発見者である平岡氏が下記の文献に寄稿している。  
 平岡岩夫「屋嶋城跡の新発見の石塁について」『溝漣』第7号 古代山城研究会 1998年
- (5) 出宮徳尚「古代山城跡の検証覚書—その用兵の具のコンセプトを求めて—」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』古代吉備研究会 2002年
- (6) 向井氏も同様な指摘を行っている。向井一雄「古代山城研究の動向と課題」『溝漣』第9・10合併号 古代山城研究会 2001年  
 鬼ノ城でも城の下方にある池の下地区で、平野部をほぼ東西に閉ざす形で宅地一間幅の低い高まりが300mほど残っていることが知られており、従来から鬼ノ城との関係が指摘されている。その他、屋嶋城については下記文献に細かな記述は認められないが、古代山城の一覧表に記載がある。  
 阿部義平「古代山城と対外関係」『人類にとって戦いとは4—攻撃と防衛の軌跡—』国立歴史民俗博物館 2002年
- (7) 注1b文献と同じ
- (8) 石上英一「高松平野の古代社会」『讃岐国弘福寺領の調査—弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告—』高松市教育委員会 1992年
- (9) 注5文献と同じ
- (10) 現在確認されている北斜面については、トレンチ調査により土塁構造に版築は認められず、安山岩の風化土と小礫が混じった状態で構築されており、土の積み方の単位は確認できなかった。この土塁は多少の崩落は認められるものの、1300年あまりの年月の間ほとんど崩落せずに残存している。次年度以降に行う調査の中で、土木学的に版築と比較した場合、耐久性がある構築法であるのか否か、確認調査の中で検証していきたい。
- (11) 調査担当者である今井和彦氏の御教示による他、下記の文献に調査の詳細が報告されている。  
 今井和彦『坂出市内遺跡発掘調査報告書—平成10年度国庫補助事業報告書—』1999年 坂出市教育委員会

## 図面引用文献

- 鬼ノ城東門 『総社市埋蔵文化財調査年報6(平成7年度)』総社市教育委員会 1996年  
 鬼ノ城南門 『総社市埋蔵文化財調査年報8(平成9年度)』総社市教育委員会 1998年  
 鬼ノ城西門 『総社市埋蔵文化財調査年報7(平成8年度)』総社市教育委員会 1997年  
 金田城二の木戸城門『金田城跡』長崎県美津島町教育委員会 2000年

## 第3節 千間堂跡・屋島寺について

## 1. はじめに

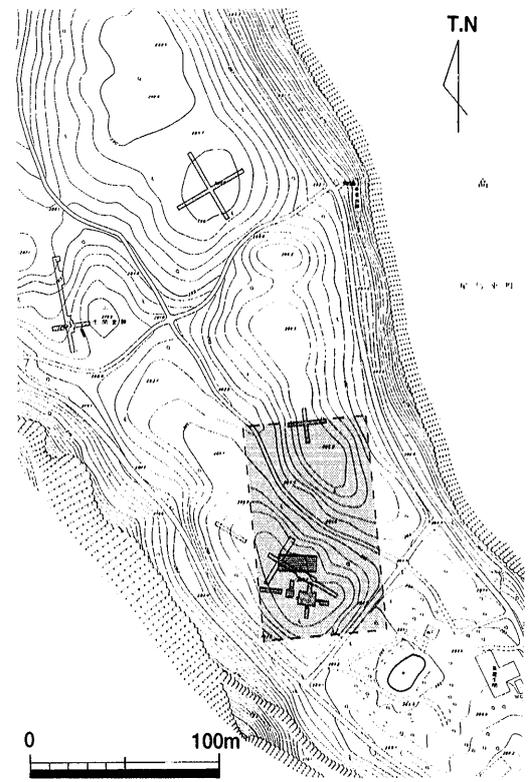
屋島南嶺山上部に所在する屋島寺は、南面山千光院と号し真言宗御室派に属する古寺で、四国霊場第84番札所として多くの参拝者が訪れている。屋島寺に残る記録である『屋嶋寺龍巖勸進帳』<sup>(1)</sup>では、「鑑真和尚が来朝の時、山頂に登った。その時、老翁が現れ、ここは七仏説法の間であり、天仙が集まる場であると言って消えた。そこで、和尚は一字の伽藍を建て、普賢菩薩を安置した。」とあり、その後、「弘法大師が千光院を建て、自ら千手御本尊を彫り、さらに両部大曼荼羅堂や一切経蔵、多宝塔を造った。」とある。内容の記載に多少の違いはあるが『金毘羅参詣名所図会』・『讃岐國名勝図会』<sup>(2)</sup>にも同様の記述がある。

さて、これまで寺伝などの数少ない文献によって屋島寺変遷の一部が知られていたが、室町時代より以前の記録は前述のとおり断片的であった。史跡天然記念物屋島基礎調査事業による確認調査により、文献上では不明であった時代については、考古学の成果を補完することで、大まかではあるが屋島寺の変遷を辿れるようになった。この中には、これまで北嶺に存在したとの伝承があったものの、実態が不明であった千間堂跡が、多口瓶の出土によって所在が確かめられたことは大きな成果である。北嶺の確認調査が終了したことから、調査によって判明した内容についてまとめを行うことにしたい。

## 2. 北嶺千間堂跡の伽藍配置について

屋島寺が開基された地である北嶺には平坦地が多く存在する。その面積に比べれば確認調査が行えた範囲は限られ、北嶺の全容を把握するには、十分な調査とは言えない。今後の調査によっては変更の余地が多く残されている状況であるが、確認された成果をもとに北嶺千間堂跡の伽藍配置を想定してみたい。

これまで北嶺で確認された遺構のうち、主だったものとして、土壇をもつ礎石建物跡・集石墓・長方形石積基壇・石列などがある。このうち石列については、周辺部から出土した土器より12世紀末から13世紀初頭の時期が考えられ、他の遺構に比べて後出するようである。平成12年度第3トレンチとして調査した長方形石積み基壇は、方向としては東西方向を示すが、両側には伸びずに完結する。長方形石積基壇の周辺からはほとんど遺物が出土しなかったことから、北嶺千間堂の北限を示す境界（傍示石）であるかもしれない。西側の境界は、平成11年度第2トレンチの北飛び地で北西方向への傾斜がはじまり、遺物は出土していないことから、平成11年度第2トレンチの南側部分の北端あたりで境界が引けそうである。北嶺山上部で遺物が多く出土するのは、礎石建物跡・集石遺構が確認された平成11年度第2トレンチ（南側）・平成13年度調査地に限られてくる。細かく見ると平成11年度第2トレンチ内でも遺物の出土量に違いが見られ、南側部分のトレンチ拡張部より南側ではほとんど遺物が出土しなくなる。一方、平成11年度第2トレンチの東側部分では平均的に遺物が出土している。このことから、平成11年度第2トレンチ東側部分から平成12年度第3トレンチの間はトレンチを設定して確認は行っていないが、これよりも北側に寺域が広がることを示している。平成11年度第2トレンチに一部重なる形で設定した平成13年度調査地でも比較的多くの遺物が出土し、遺物が多く認められる部分は遺構も多く確認された。さらに礎石建物跡の南側に設定したトレンチでも遺物が出土しているが、南側がどの程度広がるかは不明である。以上、確認された遺構と各トレンチでの遺物の出土状況から見た千間堂の想定範囲を示したものが第111図であり、こ



第111図 千間堂跡推定寺域

の状況からは南北に長い寺域を想定することができる。この寺域の中で中心となるのは、土壇をもつ礎石建物跡である。礎石建物跡は南面する東西建物であり2間×3間の規模をもつ。周辺部には目立った遺構は認められないこと、土壇中からは多口瓶が3点出土したこと、2間×3間の建物規模は仏堂としての最低規模に該当することから、この建物が千間堂の仏堂であったものと想定される。寺伝をそのまま信用するならば、普賢菩薩がこの仏堂の中に安置されていたことになる。前述の平成13年度の調査地では、調査前の想定として僧房などの大規模な建物跡を想定していたが、調査の結果、建物遺構を復元できたのは2棟であり、このうち全容がわかるのは1間×2間の規模をもつ1棟のみである。このような状況を総合すると北嶺千間堂の伽藍配置は土壇をもつ礎石建物跡（仏堂）を中心に小規模な掘立柱の建物遺構が点在する伽藍配置が想定される。

### 3. 北嶺で出土した平瓦の用途について

確認された土壇をもつ礎石建物跡は2間×3間の規模をもつがこの規模は、通常古代寺院では鐘楼や経蔵規模の建物あるいは付属雑舎程度のものである。これまでの千間堂跡の調査から、これ以上の規模の建物跡は確認されておらず、また標高284mにある山岳寺院であることを併せ考えると、この建物は本尊を祀るべく建てた小仏堂であると判断される。また、西側にある火葬墓と考えられる集石遺構中からは平瓦が出土している。平瓦に混じって多くの土器が出土しているが、これについては墓を造る際に周囲の土を掻き集めた中に含まれていたものであると考えられる。

出土した平瓦には完形品のものではなく、大きな破片でも幅は2分の1程度の法量であることから、これらの平瓦は熨斗棟に使用されていたものと想定される。平瓦の出土が少量であったことは、北嶺から南嶺への移動時に使えない平瓦は北嶺に残し、使える平瓦のみ南嶺にて再利用した可能性が考えられる。この場合、北嶺で確認した平瓦と法量・調整・胎土等が同じ物を南嶺において確認する必要があるが、現在のところ、同じ物は確認できていない。

### 4. 基壇中から出土した須恵器多口瓶について

#### 類例について

北嶺にある千間堂礎石建物跡の土壇から須恵器多口瓶が3点出土したことにより寺跡であることが判明したことは第3章第5節に詳述した。全体像が復元できたのは3点であるが、土壇中から出土した肩部から胴部への変化点に突帯を1条巡らせる須恵器片101は多口瓶104の肩部から胴部の形態が似るが、胴部径が違うことから同一個体ではないと考えられる。径の大きさからすれば、綾歌郡飯山町で確認されている多口瓶の規模に似る。この他、北嶺の確認調査では、出土した須恵器壺の口縁部形態が多口瓶の注口部の形態に似るもの119・173～176・237も認められることから、全体像が復元できた3点以外にも複数個体存在していたものと想定される。千間堂跡以外の須恵器多口瓶の類例は香川県内では前述の綾歌郡飯山町法勲寺<sup>(3)</sup>から1点出土している他、周辺部では姫路市播磨国分寺<sup>(4)</sup>から4点、倉吉市大御堂廃寺<sup>(5)</sup>から1点出土している。周辺部で出土している多口瓶は、これ以外にも存在していると考えられるが、肩部から胴部への変換点に存在する注口部が出土しないことには多口瓶とは認識されないことから、寺院跡から出土した須恵器長頸壺と報告されているものの中に、少数ながら含まれている可能性が考えられる。以下に周辺部で確認された多口瓶の類例をあげ類似点・相違点についてみてみたい。

#### ① 法勲寺（香川県綾歌郡飯山町）

調査は大東川の支流大窪谷の災害復旧工事に伴うもので、寺域の北限を画すると推定されている大窪谷川の南側護岸部分の確認調査で、礫混じりの流路（溝）堆積層より白鳳期～室町時代の瓦に混じって出土している。出土している多口瓶は注口部から胴部上半の破片である。千間堂跡出土の多口瓶の内、形態が似るのは胴部最大径に突帯を1条もつ多口瓶第112図7に似ている。法勲寺出土例も胎土に砂粒を多く含み。内面には接合痕が認められる。突帯の接合方法も上部は撫でられているが、下部は接合痕が認められるなど、第112図7と同じ工人・窯跡産のものである可能性が極めて高い。ただし、法勲寺例は反転復元された遺物実測図を見る限り、最大胴径14cm弱と第112図7に比べて一回り近く小さい。法量からすれば、多口瓶第112図5と同じぐらいの大きさになるものと想定される。法勲寺例は注口部

を欠損しているため、どのような注口部がつくのか不明であるが、多口瓶の形態・胎土などからすれば屋島千間堂跡例と同様に斜め上方に開く注口部をもつものと想定される。

② 播磨国分寺（兵庫県姫路市）

多口瓶は12次金堂区金の堂基壇南、西端から東端までの金堂南再堆積土中から出土している。多口瓶は4個体出土しており、出土した土器の大半が示す時期は10世紀後半～11世紀半ばに位置付けられると考えている。そのうちの2点については、遺物を実見された榑崎彰一氏が「寒風」産との評価をされたようである<sup>(6)</sup>。図示された播磨国分寺出土の多口瓶は肩部と胴部の境界に突帯を一条巡らせるが、注口の接合部によって突帯の一部が接合部に埋没する形状をとる。

兵庫県内では、これらの多口瓶以外に注口部が上を向くものが1点認められるようで、これについては灰釉陶器の影響下で作られたものと考えられる<sup>(7)</sup>。

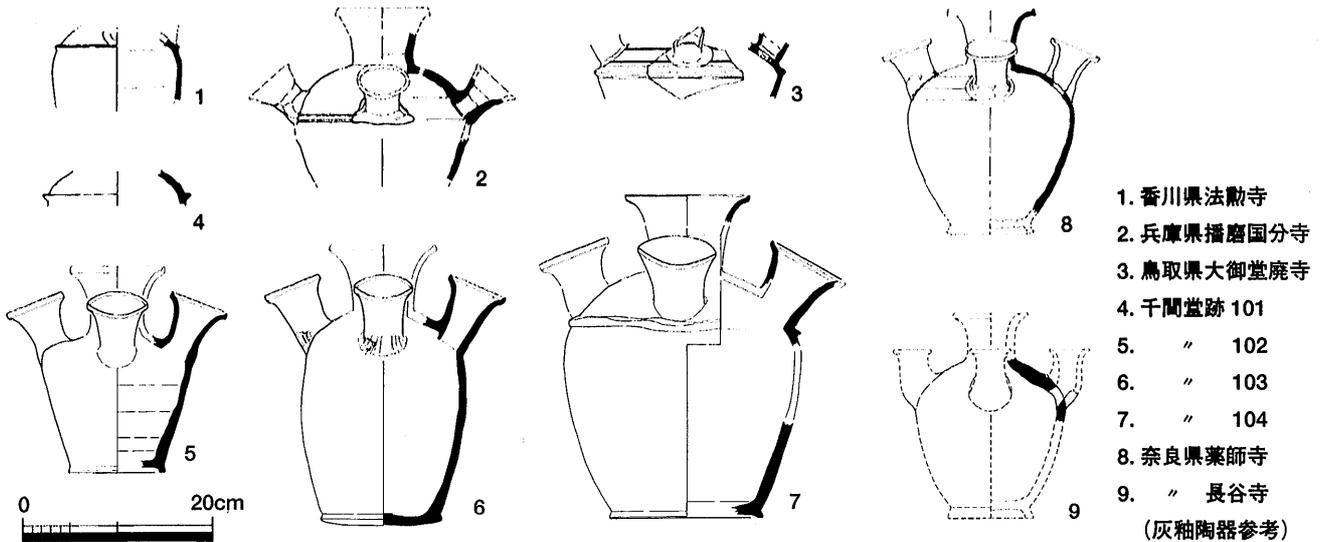
③ 大御堂廃寺（鳥取県倉吉市）

遺跡公園整備を目的に平成8年から平成12年まで試掘・確認調査が実施され、大規模な寺域や本格的な伽藍配置、長大な浄水施設などが確認されている。多口瓶は講堂SB05を中心とする範囲から同一個体と思われる破片が広く散在する状況で出土している。

大御堂廃寺出土の多口瓶は肩部から胴部の変化点に突帯を一条巡らせるが、変化点よりやや上部に注口がつけられていること、注口部の頸径より肩部に穿孔された穴の径の方が一回り小さく開けられるなど、注口と肩部の接合方法も異なる。

④ その他

平成11年5月に多口瓶の類例調査のため、奈良文化財研究所において同研究所が保管している突帯をもつ多口瓶等の類例を実見する機会を得た<sup>(8)</sup>。実見できたものの中には千間堂跡出土多口瓶1に類似する例は認められなかった。



第 112 図 周辺地域で確認された須恵器多口瓶の類例

千間堂跡出土多口瓶の産地について

讃岐を代表する窯業遺跡群として十瓶山窯跡群があり、ここで焼成された可能性がある。これまでの十瓶山窯跡群での発掘調査においては、多口瓶は現在のところ確認されていないようである<sup>(9)</sup>が、特殊な器種であることから生産数が限られ、窯場に残らなかった可能性も想定される。

5. 多口瓶の出土状況 —作壇作業について—

礎石建物跡土壇中から出土した多口瓶は土壇の東側の集石付近を中心に出土しているが、すべてが東側集石から出土しているわけではない。多口瓶の注口部片は土壇の西側からも確認されており、土器の出土深度は土壇表面から10cm程度の深さである。集石上で確認された多口瓶も形は大きかったものの破片で出土している。多口瓶の類例としてあげた倉吉市大御堂廃寺では講堂と考えられる建物の基壇中

から出土しているようで、報告書によれば、出土した多口瓶と同一個体と考えられる破片が周辺に広がっていたと報告している。姫路市播磨国分寺から出土した多口瓶も金堂の再堆積土から破片で出土している。北嶺千間堂をはじめ他の多口瓶も基壇を造る際の地鎮として、仏具である多口瓶を破碎し、基壇造成土に埋め込んだ可能性が考えられる。時代は古くなり、出土した遺物も異なるが、中央では寺院の下部遺構である基壇を作る際に明日香村川原寺の塔の場合は、無文銀銭と金銅円板が版築土中から発見されている他、西大寺東塔では、基壇完成までに銭播地鎮が少なくとも三回にわたって行われたことが確認されている。同寺西塔でも金銭開基勝宝が地鎮に使われていた可能性を想定されている<sup>(10)</sup>。時代も異なり、中央と地方の差はあるが、形を変え品を変えながらも、作壇の際には、寺の安寧を願うため仏具である多口瓶を破碎し、土壇に破片を埋納する地鎮を行いながら、作壇作業が行われたものと想定される。

## 6. まとめ -北嶺(千間堂)から南嶺(屋島寺)への変遷について-

最後に確認調査で判明した成果をもとにこれまでの記録との整合性を検討し、千間堂から屋島寺への変遷を考えてみたい。なお、第3章第6節において屋島寺の変遷については既に述べており、調査において大きな変化がなかった近世以降の重複する部分については触れていない。

屋島寺の出発点である北嶺千間堂の創建時期であるが、鑑真が開基したとされる754年前後まで遡る遺物は北嶺では認められない。北嶺では9世紀以降から遺物が認められるが、出土量は10～11世紀にかけての遺物が多い。寺の中心施設となる仏堂からは3個体の須恵器多口瓶が出土したが、多口瓶には底部などの形態から時期差が認められ、平底をもつ多口瓶が10世紀前半の時代の年代が与えられ最も新しい。他の2個体は寺に伝世していたものを10世紀の前半に土壇をもつ礎石建物を構築するため、破碎されたものと想定される。北嶺にて仏堂と考えられる礎石建物が建てられた時期よりもやや先行する時期に現在の屋島寺本尊である木造千手観音坐像が作られている。寺の記録には空海自らが彫り千光院に安置したとあるが、空海の存命期間(774～835)と製作年代が合わない。屋島寺は鑑真が北嶺に開基した時には、本尊は普賢菩薩であり、時代は下るが1391年(明德21年)の西大寺末寺帳に「屋嶋普賢寺」という寺名がみえ、この寺名は普賢菩薩に由来するものと想定されている。どの段階で本尊が変更になったものか現在のところ不明である。

さて、北嶺から南嶺への移動であるが、北嶺で出土する遺物が11世紀代を境に減少する一方、南嶺ではこの時期から遺物が増加することから、11世紀末から遅くとも12世紀初頭には寺が南嶺に移ったものと想定される。この移動の大きな原因は、この頃から四国霊場八十八箇所巡り<sup>(11)</sup>が始まったことにより、参拝に不便な北嶺(修験の場)から、平野に近い南嶺(世俗化)に移した結果であると考えられる。その後、寺域は拡張されていったようで、梵鐘に記載された銘文から1223年(貞応二年)讃岐国住人蓮阿弥陀仏の勧進によって梵鐘が铸造されている。かつて血の池とは一連の池であったと想定される貯水池推定地(平成13年度第3調査地点)の調査では、調査範囲は狭かったものの、調査の結果、堆積土のうちの第4～6層から炭・焼土とともに多くの瓦が出土した。瓦とともに出土した土器はやや時期差が認められ、土器よりも瓦の方が古相を呈しているように思われる。第6層から出土した軒丸瓦は瓦当文様に退化傾向が強い複弁八葉の軒丸瓦であるが、この文様に続く巴文軒丸瓦は香川では12世紀に入らないと出現しないようであることから、第6層出土の複弁蓮華文軒丸瓦の年代をひとまず11世紀代に求めることにしたい。これに対して同時に出土した土器のうち、時期が近い土器は2点ある。土師器杯は13世紀第2四半期～第3四半期の時期が与えられ、土師器皿は11世紀第2四半期～第3四半期頃の時期が与えられるが、6層の時期は新しい方の土師器杯の年代が考えられる。この第6層からは焼土・炭や火を受けた木材などが多く出土していることから、13世紀の中頃以降に寺の一部が焼失したものと考えられ、今回第6層から出土した遺物は、この火災によって出た廃品・廃材を血の池の南に投棄されたものであると考えられる。その後、本堂は鎌倉時代末頃に建てられたようで数度の改修を経て現在に至る<sup>(12)</sup>。明德21年(1391年)の西大寺末寺帳には「屋嶋普賢寺」という寺名がみえ、永享8年(1436年)の「西大寺坊坊寄宿諸末寺帳」には「讃岐國屋嶋寺」とあり<sup>(13)</sup>、現在の寺名になっている。この末寺帳から一時期真言律宗の寺になっていたことがうかがえる。前者では本尊に由来する普賢寺がみえるが、50年近く後には屋嶋寺に変わっていることから、この間に何らかの理由で本尊であ

る普賢菩薩が行方不明になり、現在に伝わらなかったと考えられる。

西大寺の末寺となっている15世紀初めには、土塀を北側につくり寺域を拡張していることが、平成8年度の確認調査で判明している。その後の状況はよく分からないが、大永4年(1524年)には梵鐘が金倉寺に一時的にはあるが移されており、この頃は屋島寺が力を失っていたものと考えられる。江戸時代以降は龍巖の勧進に始まり、歴代の藩主の加護を受け、急速に復興し現在に至っている。

屋島寺の末寺は、四天門前にあった南泉寺(讃岐國名勝図会の絵図にも記載がある)の他、一乗坊・善賢院・宝積坊・靈巖坊・比之坊・元久坊・東景坊・長崎坊の8末寺<sup>(14)</sup>が山上や近くにあったらしいが、江戸時代の中期までに廃されたと伝えられている。現在、これらの末寺の所在は不明であるが、平成9年度第2調査地点では中世段階の遺構・遺物が出土していることから、これら現在不明となっている末寺の内の一つである可能性も考えられる。

以上、調査で得られた資料をもとに千間堂～屋島寺の変遷を想定したが、資料が増加したとは言えない部分があり十分な変遷が迫れたとは言えない。特に屋島寺宝物館建設予定地内の調査で出土した遺物は、今回の報告では一部分を提示したにとどまり、未報告の遺物については十分な観察が行えなかった。この件に関しては機会を見て遺構・遺物の検討を行いたい。

#### 注

(1)「龍巖勧進帳」『香川叢書第一巻』1972年

(2)「金毘羅参詣名所図会」「讃岐國名所図会」『日本名所風俗図会』角川書店1981年

(3)森下英治「法勲寺」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成7年度 香川県教育委員会 1996年

(4)姫路市教育委員会山本和子氏には遠路高松まで実物をお持ち頂き、多口瓶を実見する機会を得た。播磨国分寺出土の多口瓶は下記の文献に1点のみ公表されている。

第3回 播磨考古学研究集会実行委員会編『古代寺院からみた播磨』第3回 播磨考古学研究集会 資料集2002

(5)『史跡 大御堂廃寺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会2001年

(6)姫路市教育委員会山本和子氏の御教示による。

(7)灰釉陶器の多口瓶は注口部が上方を向き口縁部は水平になる。これは金属器の浄瓶、水瓶を模倣したことによるもので、これは以前から指摘されている。このことから千間堂跡例のような注口部が斜め上方に開くものは地方窯で作られたものと想定される。

植崎彰一『日本陶磁大系5 多彩 緑釉 灰釉』平凡社1990年

(8)奈良文化財研究所巽淳一郎・金田明大両氏の協力により、同研究所が調査を行った須恵器多口瓶の類例を実見する機会を得ることができた。巽氏の御教示では9世紀後半から10世紀頃の古代でも末になると中央からの注文とは別に力の強くなった寺が、窯場に特注で製品を依頼している可能性があるという。

(9)香川県教育委員会 佐藤龍馬氏の御教示による。

岩橋 孝「すべつと4号窯跡」『かめ焼谷1号窯跡』香川県教育委員会1991年 写真中に注口をもつ壺が報告されている。

(10)巽淳一郎「まじないの世界Ⅱ」『日本の美術』361 至文堂1996年

(11)『今昔物語』卷第三十一第十四話に「今は昔、仏の道を行ひける僧三人ともなひて、四国の辺地といふは伊予、讃岐、阿波、土佐の海辺の廻りなり。その僧どもそこを廻りけるに…」とあるのが四国霊場の初現と言われている。

上原真人「平安京周辺の平安時代後期瓦の様相—生産地認定法と在地消費をめぐって—」『中世寺院の幕明け—11・12世紀の寺院の考古学的研究—』撰河泉文庫 撰河泉古代寺院研究会2001年

(12)『重要文化財屋島寺本堂修理工事報告書』香川県 1959年

(13)『香川県史8 古代・中世史料』香川県1986年

(14)松浦正一「屋島寺」『観光学術読本 屋島』高松市商工観光課1962年

#### 図面引用文献

法 勲 寺 注(3) 文献

播磨国分寺 注(4) 文献

大御堂廃寺 注(5) 文献

薬 師 寺 『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所、1987年

西 隆 寺 『西隆寺発掘調査報告書』奈良県教育委員会 1993年

圖

版



1 鯨の墓完掘状況（東から）



2 鯨の墓頂上部完掘状況（南から）



3 後円部南斜面発掘調査前状況（西から）



4 前方部発掘調査前の状況（西から）



5 第1トレンチ（東から）



6 第1トレンチ（西から）



7 第2トレンチ墳頂部（南西から）



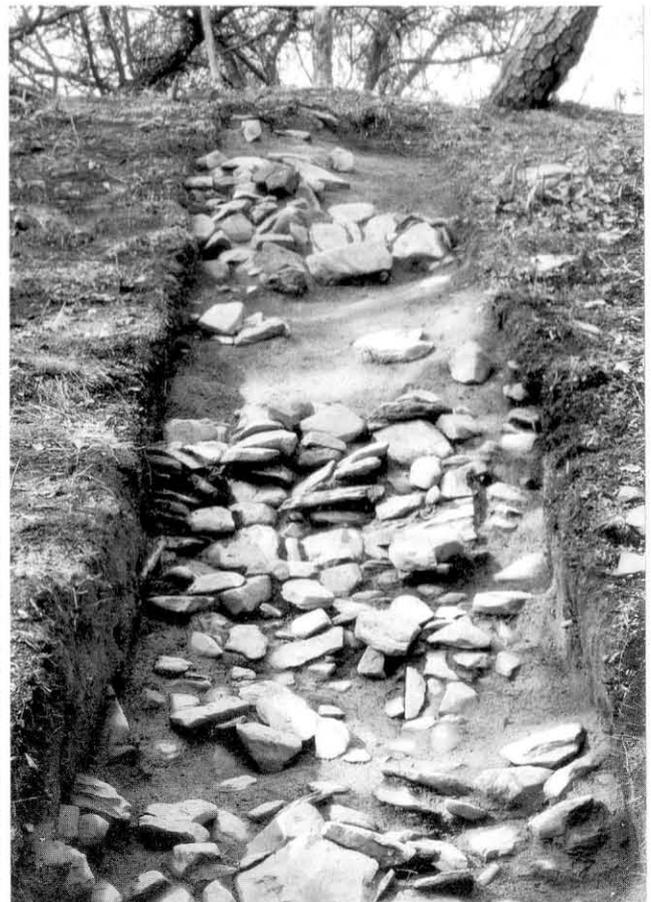
1 第2トレンチ (北から)



2 第2トレンチ (南から)



3 第3トレンチ (南から)



4 第3トレンチ 2・3段目葺石 (南から)



1 第3トレンチ2段目葺石（南西から）



2 第7トレンチ全景（北から）



3 第7トレンチ全景（南から）



4 第7トレンチ全景（南西から）



5 第7トレンチ全景（南東から）



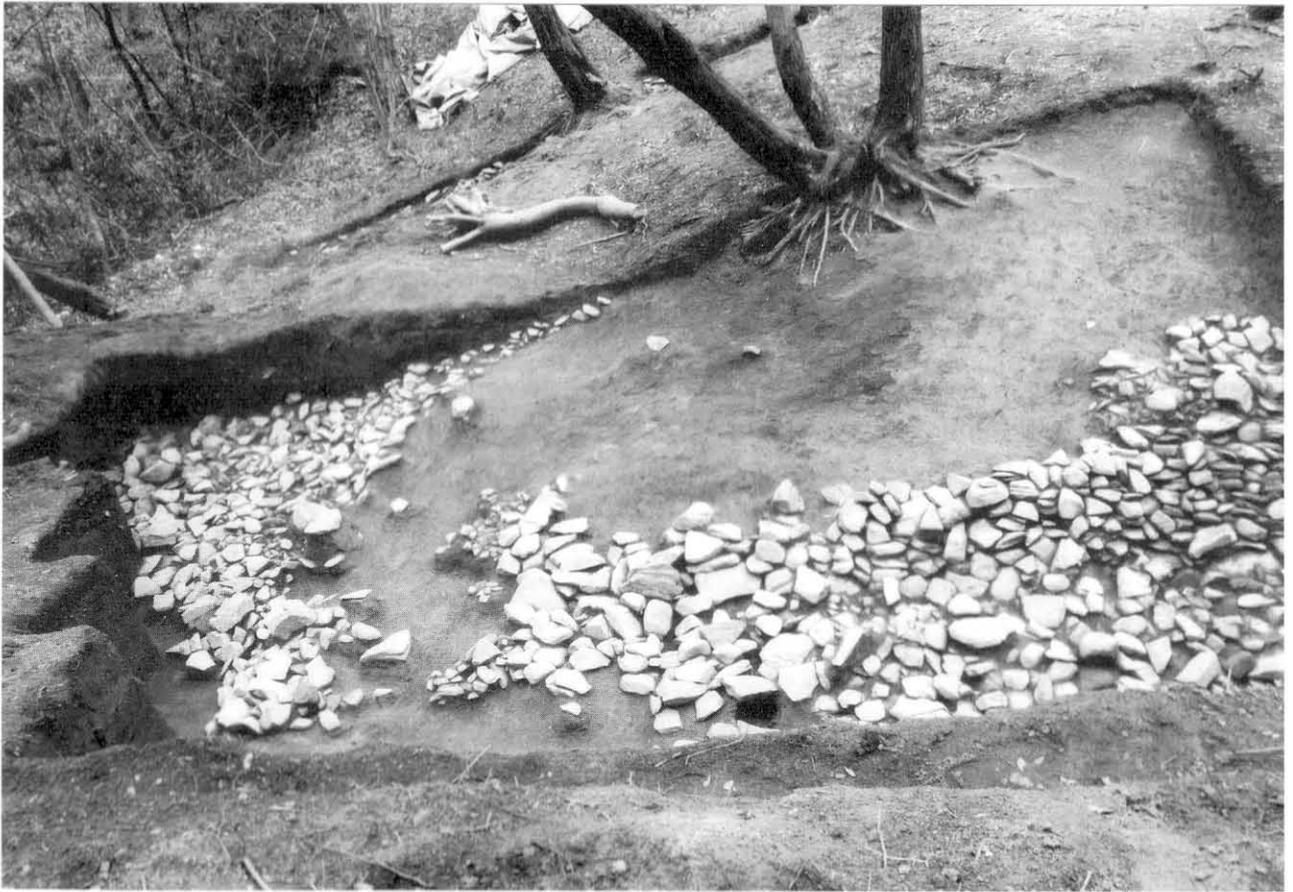
6 第3トレンチ3段目葺石（南西から）



7 第1・2・8トレンチ（東から）



8 第1・2・7トレンチ（東から）



1 第7トレンチ (西から)



2 第8トレンチ (西から)



1 第8トレンチ (南から)



2 第8トレンチ 3段目葺石 (南東から)



3 第8トレンチ 2段目葺石 (南東から)



4 第8トレンチ端部 (南から)



5 第8トレンチ (東から)



6 第8トレンチ (北東から)



7 第8トレンチ (北東から)



1 第4トレンチ (北から)



2 第4トレンチ (北から)



3 第4トレンチ2段目葺石 (北西から)



4 第4トレンチ3段目葺石 (北西から)



5 第4トレンチ墓壇 (北東から)



6 第4トレンチ石擲 (北から)



7 第4トレンチ墓壇土層 (東から)



1 第6トレンチ (南から)



2 第6トレンチ1段目葺石 (南東から)



3 第6トレンチ (南東から)



4 第6トレンチ3段目葺石 (南西から)



5 第6トレンチ墓壇 (北東から)



6 第6トレンチ墓壇掘削状況 (南から)



7 第6トレンチ墓壇土層 (東から)



1 第5トレンチ墳丘斜面部（東から）



2 第5トレンチ墳丘斜面部（西から）



3 第5トレンチ1段目葺石（南東から）



4 第5トレンチ2段目葺石（南東から）



5 第5トレンチ3段目葺石（南東から）



6 第5トレンチ3段目葺石（南から）



1 第5トレンチ石槨及び盗掘坑検出状況(西から)



2 第5トレンチ石槨及び盗掘坑検出状況(東から)



3 第5トレンチ墓壇(東から)



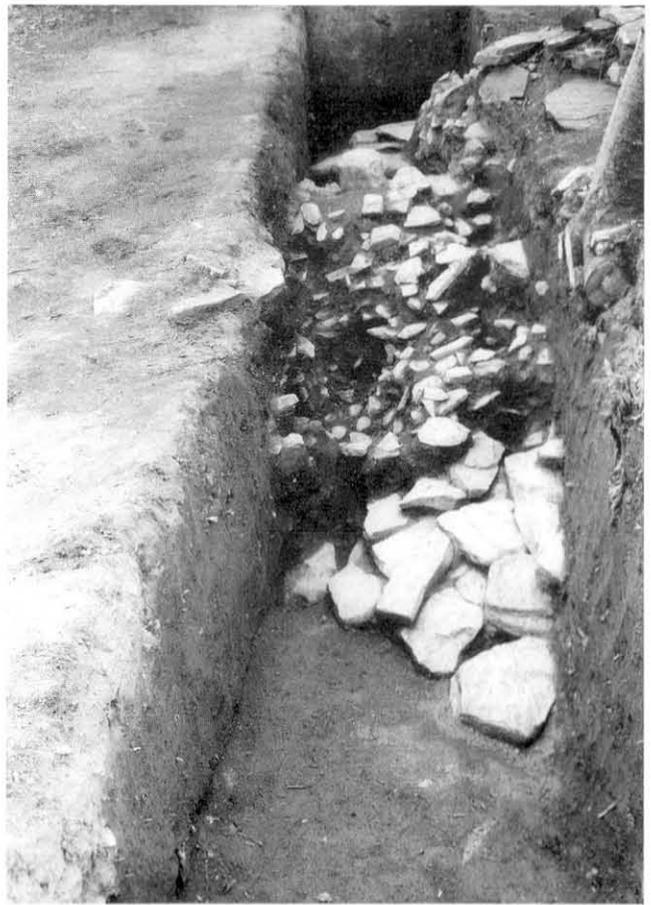
4 第5トレンチ墓壇(南東から)



5 第5トレンチ石槨西側(南から)



1 第5トレンチ石柳検出状況(西から)



2 第5トレンチ盗掘土除去中①(東から)



3 第5トレンチ盗掘土除去中②(南から)



4 第5トレンチ盗掘土除去中③(南から)



5 第5トレンチ盗掘土除去後①(南西から)



6 第5トレンチ盗掘土除去後②(南から)



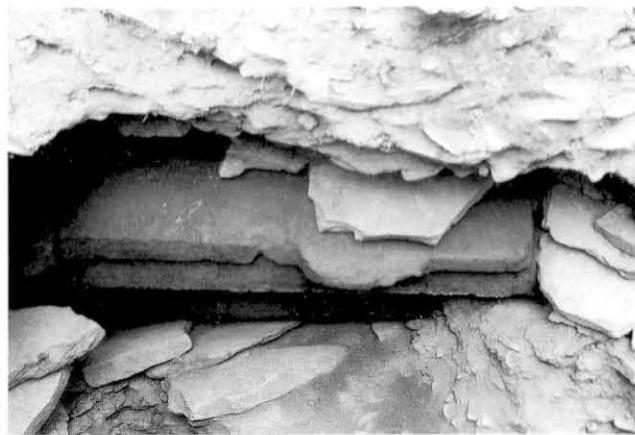
1 第5トレンチ石槨状況（東から）



2 第5トレンチ石槨下部状況（南東から）



3 第5トレンチ石槨（南東から）



4 第5トレンチ石槨（南から）



5 第5トレンチ石槨西側（南西から）



6 第5トレンチ石槨西側土層①（南から）



1 第5トレンチ石櫛西側土層②(南から)



3 第9トレンチ(西から)



2 第9トレンチ小段遺構(南から)



4 第10トレンチ全景(北から)



1 第10トレンチ1・2段目葺石(西から)



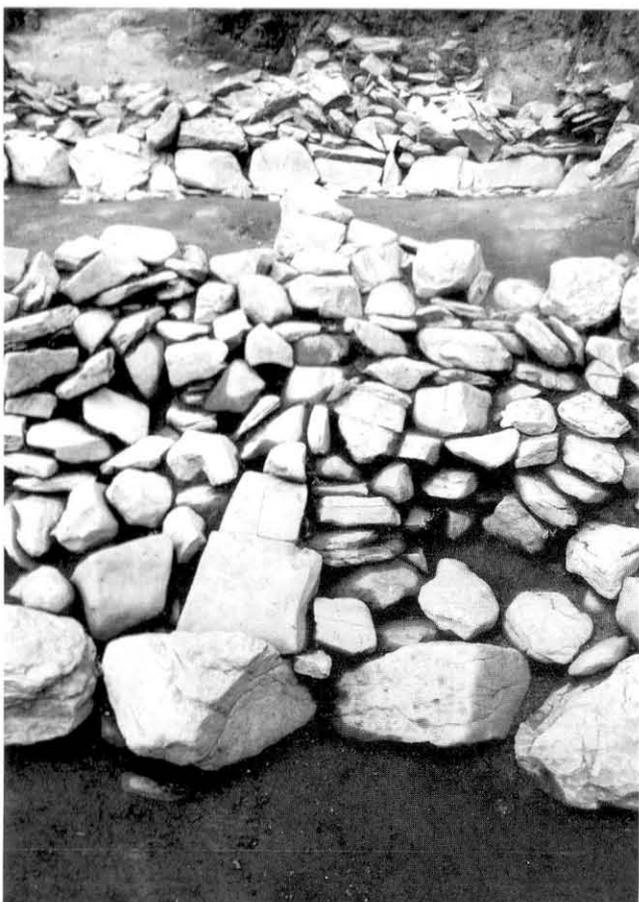
2 第10トレンチ1段目葺石(東から)



3 第10トレンチ2段目葺石(東から)



4 第10トレンチ3段目葺石(北東から)



5 第10トレンチくびれ部第1・2段目葺石(北から)



6 第10トレンチくびれ部1段目葺石(北から)



7 第10トレンチくびれ部2段目葺石(北から)



1 第 10 トレンチ遺物出土状況①（北から）



2 第 10 トレンチ遺物出土状況②（北から）



3 第 11 トレンチ全景①（南から）



4 第 11 トレンチ 2・3 段目葺石（西から）



5 第 11 トレンチ 1・2 段目葺石（西から）



1 第 11 トレンチ全景② (南西から)



2 第 11 トレンチくびれ部 1 段目葺石 (南西から)



3 第 11 トレンチくびれ部 2 段目葺石 (南西から)



4 第 11 トレンチくびれ部 3 段目葺石 (南西から)



5 第 11 トレンチ 2・3 段目葺石 (南東から)



1 土塁断ち割り状況（西から）



2 土塁断ち割り状況（東から）



3 石列完掘状況（北から）



4 石列完掘状況（南から）



5 土塁断面（東から）



6 土塁断面拡大（東から）



1 平成10年度石列西側遺物出土状況



2 平成11年度第1トレンチ遺物出土状況

3 平成11年度石列完掘状況（北から）



4 平成11年度石列完掘状況（南から）

5 平成11年度石列完掘状況（西から）



1 平成 11 年度石列完掘状況（南から）



2 平成 11 年度石列完掘状況（北から）



3 石列断ち割り状況（南から）



4 石列断ち割り状況（西から）



5 石列断ち割り状況（東から）



6 石列断ち割り状況（南から）



1 平成 11 年度第 2 トレンチ完掘状況 (北から)



2 同 (東から)



3 同 (西から)



4 トレンチ内遺物出土状況



5 トレンチ内遺物出土状況



1 礎石建物跡分布調査時確認状況（東から）



2 礎石建物跡トレンチ掘削状況（東から）



1 礎石建物跡基壇内集石状況（東から）



2 基壇内西側土層（南から）



3 基壇内中央部土層（南から）



4 基壇内西部土層（西から）



5 基壇中央部土層（西から）



1 礎石下部状況①



2 礎石下部状況②



3 基壇内遺物出土状況①



4 基壇内遺物出土状況②



5 基壇内遺物出土状況③



6 基壇内遺物出土状況④



7 基壇内遺物出土状況⑤



8 基壇内遺物出土状況⑥



1 集石遺構確認状況（北から）



2 集石遺構確認状況（北から）拡大



3 集石遺構確認状況（南から）



4 集石遺構確認状況（南から）拡大



5 散乱した集石除去後（北から）



6 散乱した集石除去後（東から）



7 集石遺構半裁状況（東から）



8 集石遺構半裁状況（東から）拡大



1 集石遺構内土壌検出状況（東から）



2 集石遺構内土坑完掘状況（北から）



3 集石内遺物出土状況①（灰釉陶器 皿）



4 集石内遺物出土状況②（土師器 杯）



5 集石内遺物出土状況③（平瓦）



6 集石内遺物出土状況④（土師器 羽釜）



7 集石内遺物出土状況⑤（土師器 杯）



8 集石内遺物出土状況⑥（土師器 羽釜）



1 集石遺構西トレンチ完掘状況（西から）



2 集石遺構北トレンチ完掘状況（南から）



3 集石遺構西トレンチ遺物出土状況①



4 集石遺構西トレンチ遺物出土状況②



1 長方形石積基壇（西から）



2 長方形石積基壇（北から）



3 長方形石積基壇（東から）



4 トレンチ掘削前状況（北から）



5 トレンチ掘削状況（西から）



6 南北トレンチ南端遺物出土状況



7 平成12年度第4トレンチ完掘状況（西から）



8 平成12年度第4トレンチ完掘状況（南から）



1 平成13年度トレンチ掘削状況（西から）



2 平成13年度トレンチ掘削状況（東から）



3 トレンチ東側完掘状況（北から）



4 トレンチ中央部完掘状況（北から）



5 トレンチ西側完掘状況（北から）



6 トレンチ内集石遺構



1 平成7年度調査区西半完掘状況（北から）



2 平成7年度調査区東半完掘状況（北から）



3 平成7年度調査区中央完掘状況（北から）



4 平成7年度調査区南半完掘状況（西から）



5 平成7年度調査区北半中央完掘状況（北から）



6 平成7年度調査区東端完掘状況（北から）



7 平成7年度調査区北半完掘状況（東から）



8 平成7年度調査区南東部集石遺構4現況



1 集石遺構 1 (南から)



2 集石遺構 2 (北から)



1 平成8年度西トレンチ全景（東から）



2 西土塁調査前（北から）



3 西土塁断ち割り状況（北から）



4 西土塁断ち割り状況（東から）



5 西土塁断ち割り状況（西から）



1 北トレンチ全景（南から）



2 北土塁調査前（西から）



3 北土塁断ち割り状況（西から）



4 北土塁断ち割り状況（北から）



5 北土塁断ち割り状況（南から）



1 東トレンチ全景（西から）



2 西トレンチ南東隅岩盤露出状況（西から）



3 北トレンチ土層状況（南西から）



4 トレンチ内遺物散布状況①



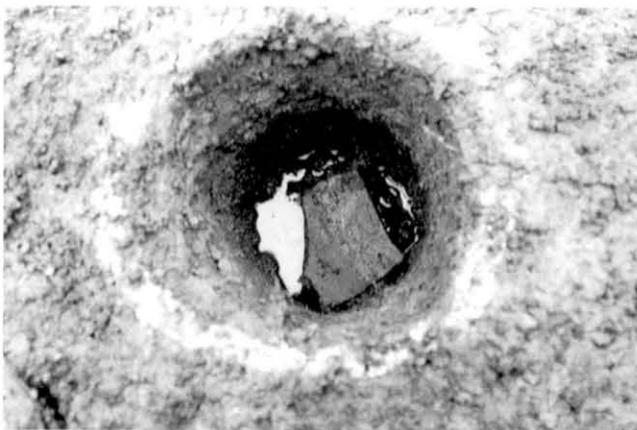
5 トレンチ内遺物散布状況②



1 主トレンチ 50～60m区ピット群（北から）



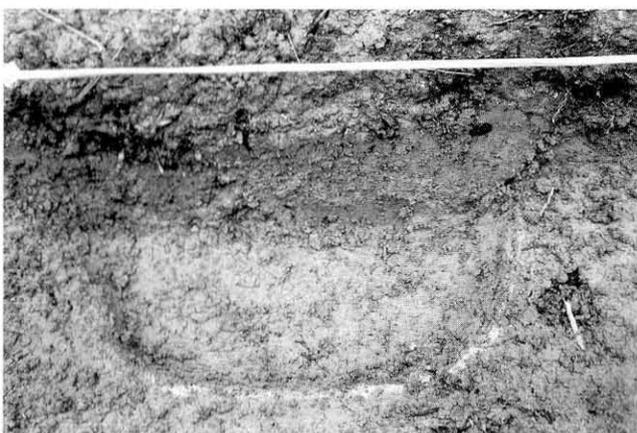
2 支トレンチ 75m区完掘状況（西から）



3 SP01 遺物出土状況



4 SP02 遺物出土状況



5 SK01 完掘状況



1 北側外郭線調査前状況① No.1 付近上段 (東から)



2 北側外郭線調査前状況② No.1 付近下段 (東から)



3 北側外郭線調査前状況③ No.2 付近 (東から)



4 北側外郭線調査前状況④ No.2 ~ 3 付近 (西から)



5 北側外郭線調査前状況⑤ No.3 ~ 4 付近 (西から)



6 北側外郭線調査前状況⑥ No.2 ~ 4 付近石塁遠景 (東から)



7 北側外郭線調査前状況⑦ No.3 ~ 4 石塁状況 (東から)



8 北側外郭線調査前状況⑧ No.3 ~ 4 石塁状況 (西から)



1 北側外郭線調査前状況⑨ No.4 ~ 5 付近 (東から)



2 北側外郭線調査前状況⑩ No.4 東側 (北から)



3 北側外郭線調査前状況⑪ No.5 (東から)



4 北側外郭線調査前状況⑫ No.5 付近 (西から)



5 北側外郭線調査前状況⑬ No.5 ~ 6 付近 (南東から)



6 北側外郭線調査前状況⑭ No.5 ~ 6 付近 (北西から)



7 北側外郭線調査前状況⑮ No.6 ~ 8 付近 (東から)



8 北側外郭線調査前状況⑯ No.8 (北から)



1 第1トレンチ下部完掘状況（北から）



2 第1トレンチ上部完掘状況（北から）



3 第1トレンチ上部完掘状況（南から）



4 第1トレンチ上部土層堆積状況（北西から）



5 第1トレンチ中央部土層堆積状況（北西から）



1 第2トレンチ完掘状況（北から）



2 第2トレンチ完掘状況（南から）



3 第2トレンチ完掘状況（南から）



4 第2トレンチ完掘状況（南西から）



5 第2トレンチ上部土層堆積状況



6 第2トレンチ下部土層堆積状況



1 第3トレンチ完掘状況（北から）



2 第3トレンチ完掘状況（南から）



3 第3トレンチ下部土層堆積状況



4 第4トレンチ遠景（西から）



5 第3～4トレンチ間石塁状況（西から）



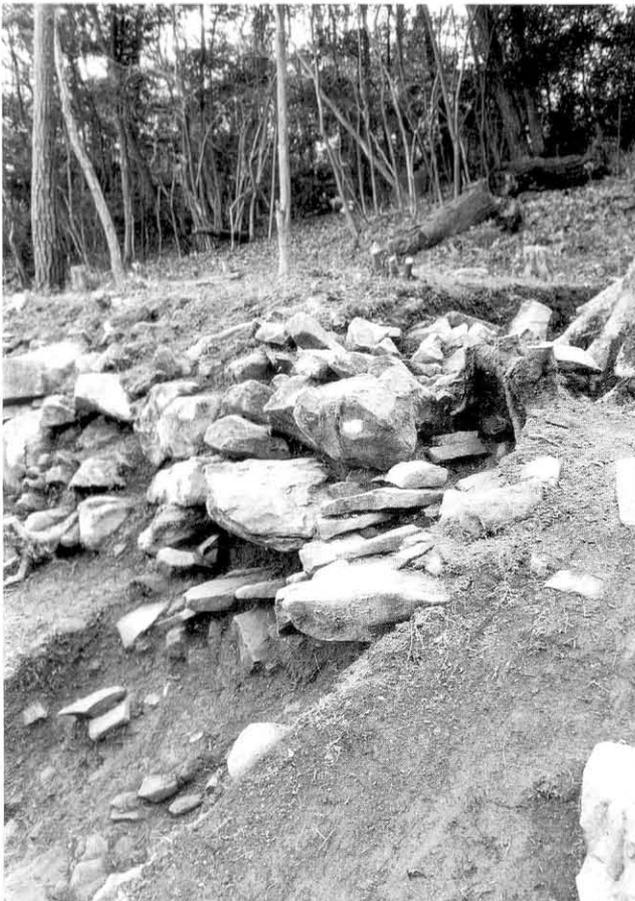
1 第4トレンチ完掘状況（北西から）



2 第4トレンチ完掘状況（北から）



3 第4トレンチ上部完掘状況（南から）



4 第4トレンチ完掘状況（北西から）



5 第4トレンチ上部土層堆積状況



6 第4トレンチ中央部土層堆積状況



1 第5トレンチ完掘状況（南から）



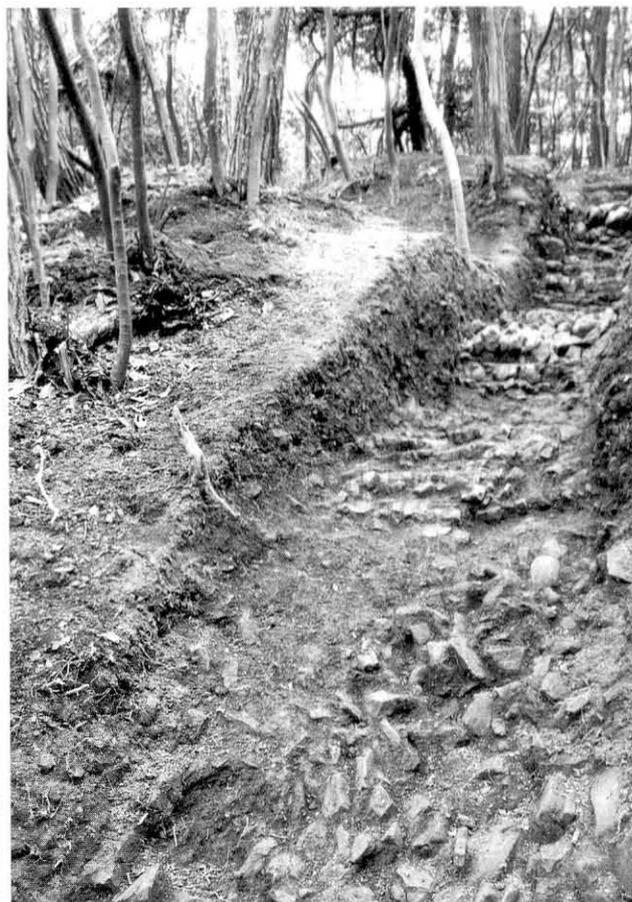
2 第5トレンチ完掘状況（北から）



3 第5トレンチ上部土層堆積状況



4 第5トレンチ中央部土層堆積状況



5 第5トレンチ下部土層堆積状況



1 西南外郭線調査前状況①（北から）



2 西南外郭線調査前状況②（北から）



3 西南外郭線調査前状況③（西から）



4 西南外郭線調査前状況④（西南から）



5 西南外郭線調査前状況⑤（北から）



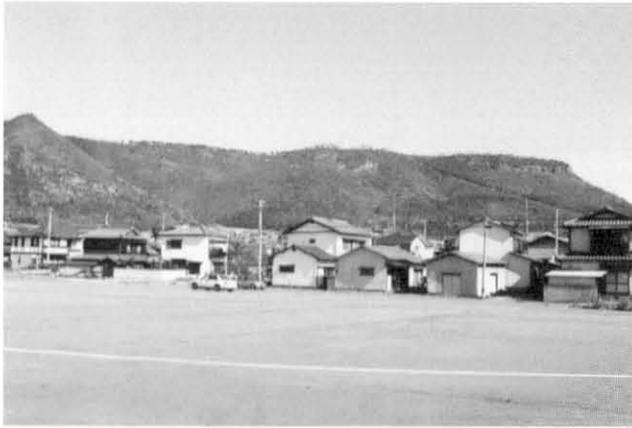
6 西南外郭線調査前状況⑥（南西から）



7 西南外郭線調査前状況⑦（南西から）



8 西南外郭線調査前状況⑧（西から）



1 西南外郭線遠景（南西から）



2 城門遺構調査前状況（北から）



3 城門遺構調査前状況（南から）



4 城門遺構調査前状況（東から）



5 城門遺構上部土層堆積状況



6 城門遺構下部土層堆積状況



7 城門側壁等崩落状況（西から）



8 城門側壁等崩落状況（東から）



1 南側壁崩落状況（北から）



2 南側壁崩落状況（北から）拡大



3 南側壁崩落状況（北から）拡大



4 北側壁崩落状況（南から）



5 城門遺構完掘状況（西から）



1 城門遺構完掘状況（東から）



2 城門遺構完掘状況（北から）



1 城門遺構完掘状況（南から）



2 城門遺構南東部完掘状況（北西から）



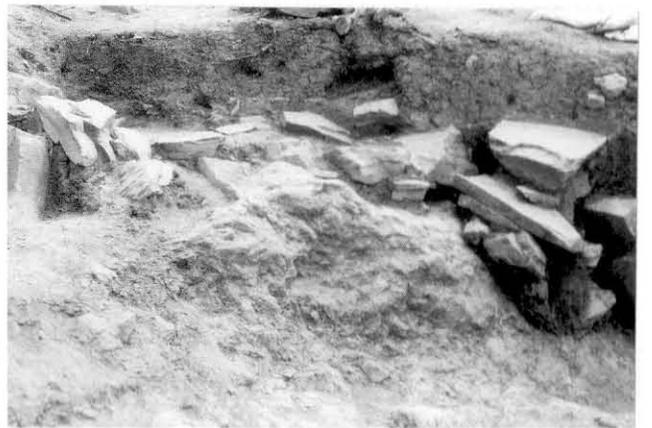
1 北側壁細部①



2 北側壁細部②



3 北側壁細部③



4 南側壁細部①



5 南側壁細部②



6 南側壁細部③



7 南側壁細部④



8 南側壁細部⑤



1 城門上部完掘状況（西から）



2 城門北側下部完掘状況（西から）



3 城門下部完掘状況（西から）



4 城門下部完掘状況（北から）



5 城門遺構土層（西から）



1 城門内排水溝（西から）



2 城門内排水溝（東から）



3 排水溝細部①（北から）



4 排水溝細部②（北から）



5 柱穴検出状況（北から）



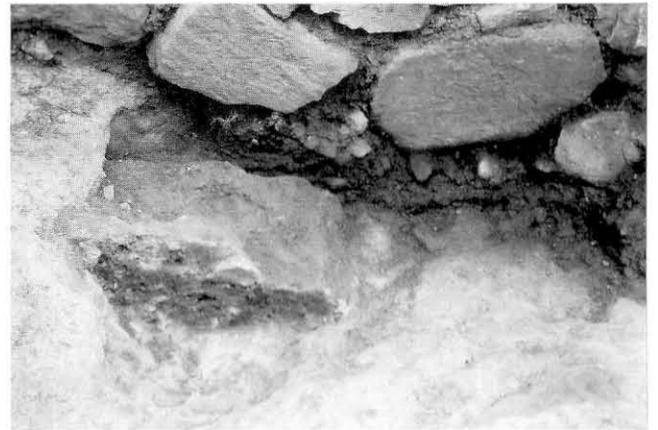
6 柱穴半裁状況（北から）



1 柱穴半裁状況（西から）



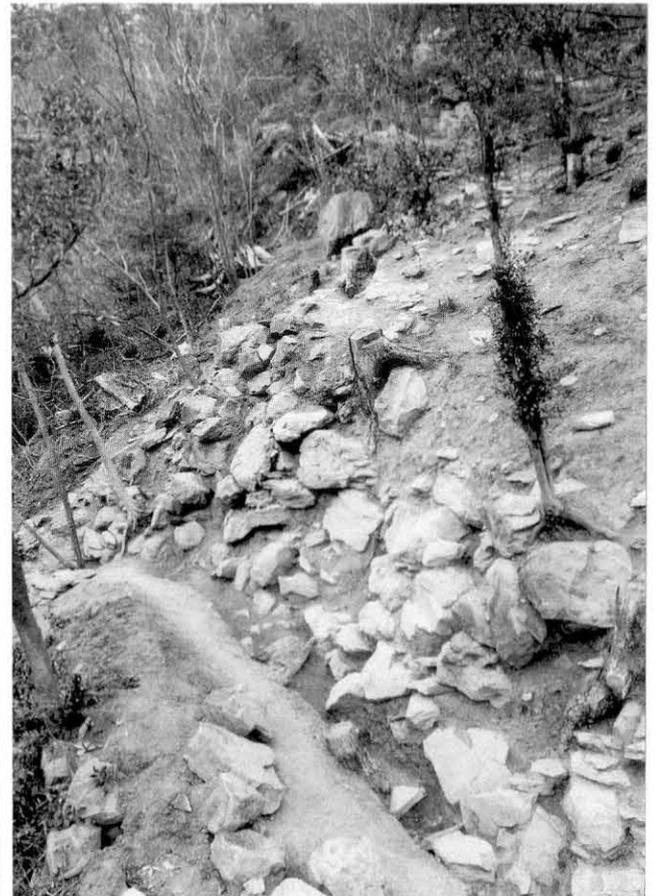
2 柱穴1半裁状況（北から）



3 柱穴2半裁状況（北から）



4 城門より南側石壘検出状況



5 城門より北側石壘検出状況



1 背面列石状況（西から）



3 背面列石状況（北から）



2 背面列石状況（北から）



4 背面列石状況（南から）



5 第2トレンチ完掘状況（西から）



1 第2トレンチ完掘状況（東から）



2 第2トレンチ土層①



3 第2トレンチ土層②



4 第2トレンチ土層③



5 城門北側張り出し部（雉城）



1 北側張り出し部（南から）



2 張り出し部にみられる柱溝（西から）



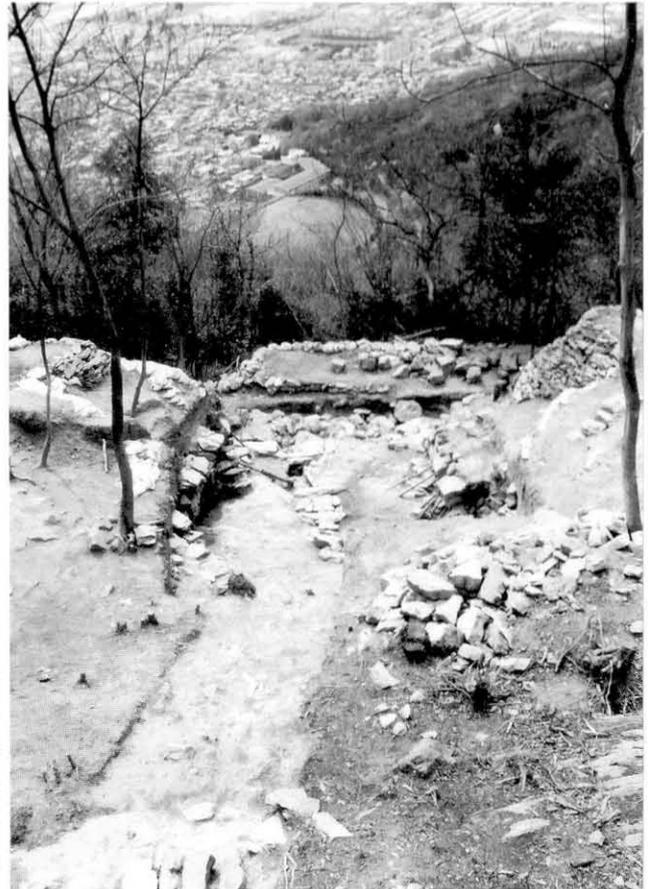
3 張り出し部にみられる柱溝（上から）



4 張り出し部（北から）



5 張り出し部遠景（南から）



6 城門遺構からみた屋島南西部（東から）



1 貯水池推定地調査前状況（西から）



2 貯水池推定地調査前状況（北から）



3 調査地南側池現況（東から）



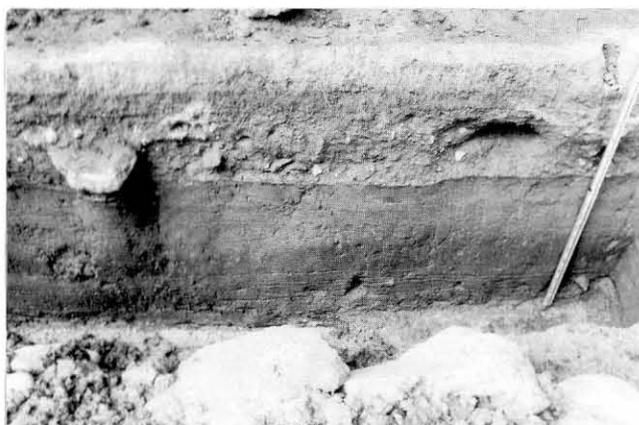
4 調査地南側池現況（南東から）



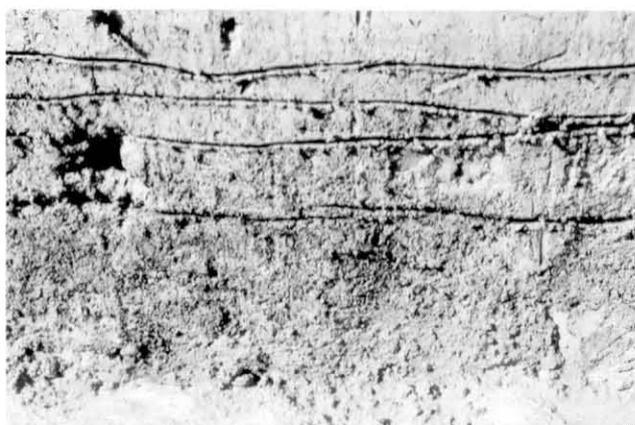
5 貯水池推定地トレンチ完掘状況（西から）



6 貯水池推定地トレンチ完掘状況（東から）



7 トレンチ内土層堆積状況（北から）



8 トレンチ内下部焼土・炭堆積状況



1 東側外郭線現況（北から）



2 東側外郭線南端現況（南から）



3 東側外郭線北端現況（南から）



4 東側外郭線前面状況（東から）



5 山門西側貯水池推定地現況（東から）



6 山門西側南水門現況（南西から）



7 山門西側南水門現況拡大（南西から）



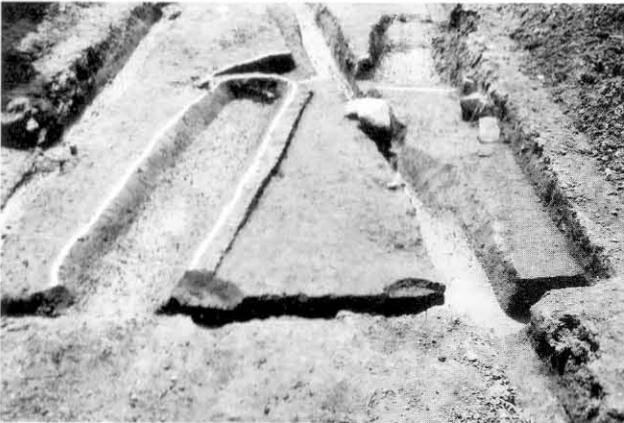
8 水族館北側北水門現況（北東から）



1 調査前風景（南から）



2 SX01 完掘状況（北から）



3 瓦溜遺構・SX02 完掘状況（北から）



4 SX03 完掘状況（北から）



5 SD02・溝状落ち込み完掘状況（西から）



6 SD02・溝状落ち込み完掘状況（東から）



7 SK03 完掘状況（東から）



2 SK03 断面（西から）



1 集石完掘状況（北から）



2 集石完掘状況（南から）



3 集石間の遺物出土状況（唐草文軒平瓦）



4 集石間の遺物出土状況（蓮華文軒丸瓦）



5 集石間の遺物出土状況（陶器碗）



6 調査区南側の遺構完掘状況（北から）



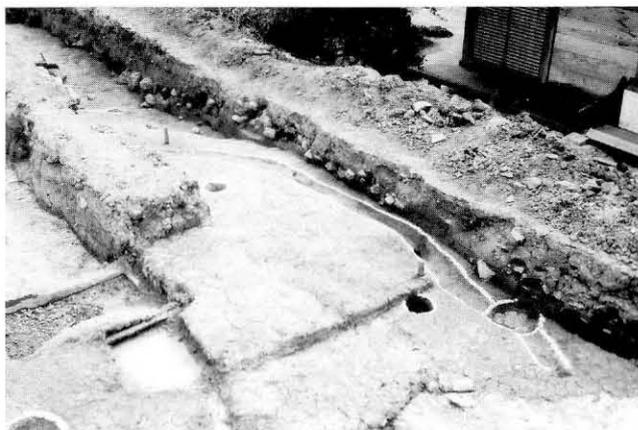
7 SD04 およびピット群完掘状況（北から）



8 ピット群完掘状況（北から）



1 SD04 完掘状況（北から）



2 SD05 完掘状況（東から）



3 埋甕検出状況（北東から）



4 埋甕内の寛永通宝出土状況



5 調査区南側の土層観察用断面（南端，東から）



6 調査区南側の土層観察用断面（集石，東から）



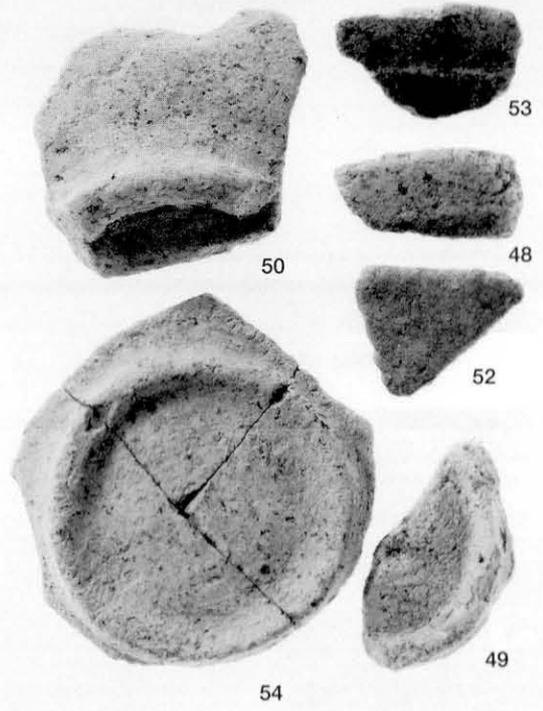
7 調査区南側の土層観察用断面（埋甕，東から）



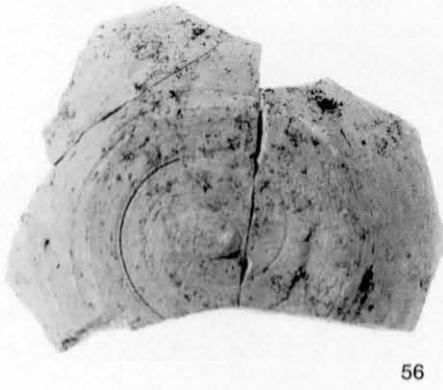
8 調査区北側の西壁土層（東から）



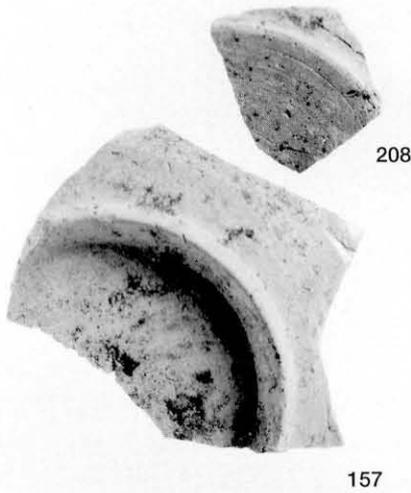
1 長崎鼻古墳第 10 トレンチ出土壺口縁部



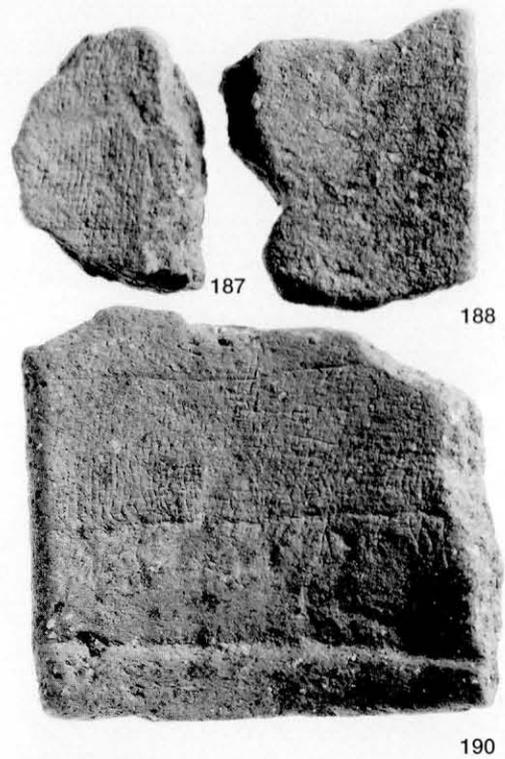
3 平成 10 年度石列西側出土遺物



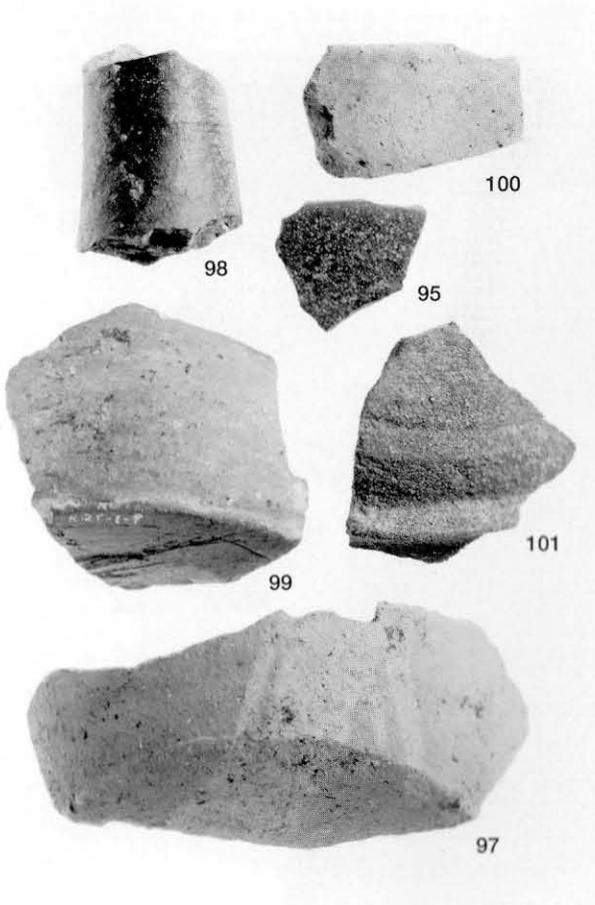
2 平成 11 年度第 1 トレンチ出土須恵器杯蓋



4 北嶺出土灰釉陶器・緑釉陶器



5 集石遺構出土平瓦



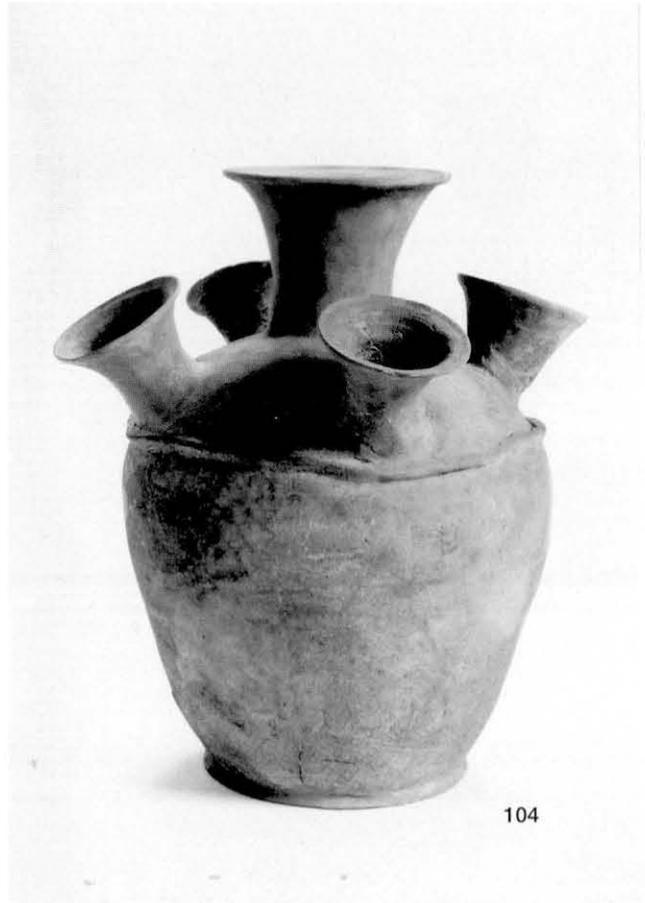
1 礎石建物跡基壇中出土遺物



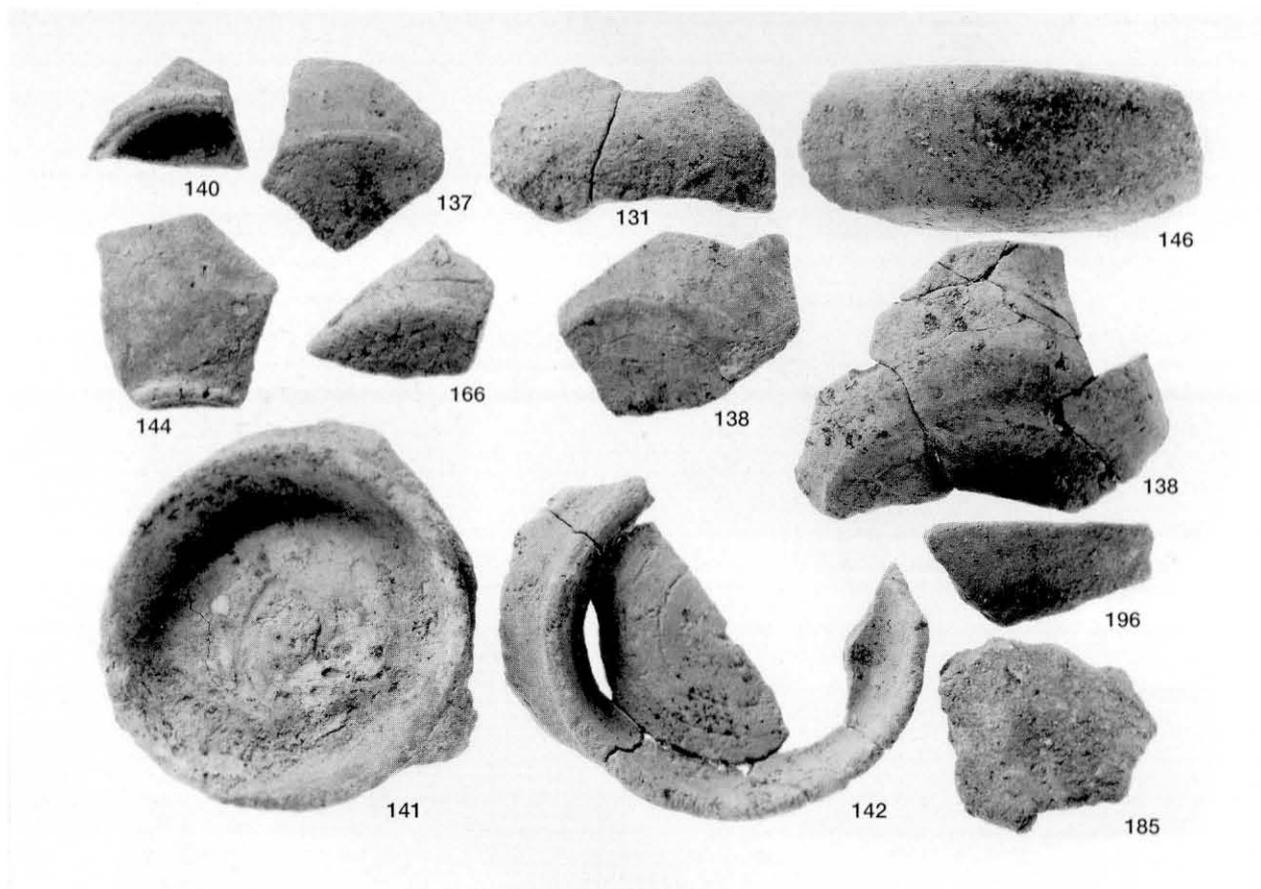
2 礎石建物跡基壇中出土多口瓶 1



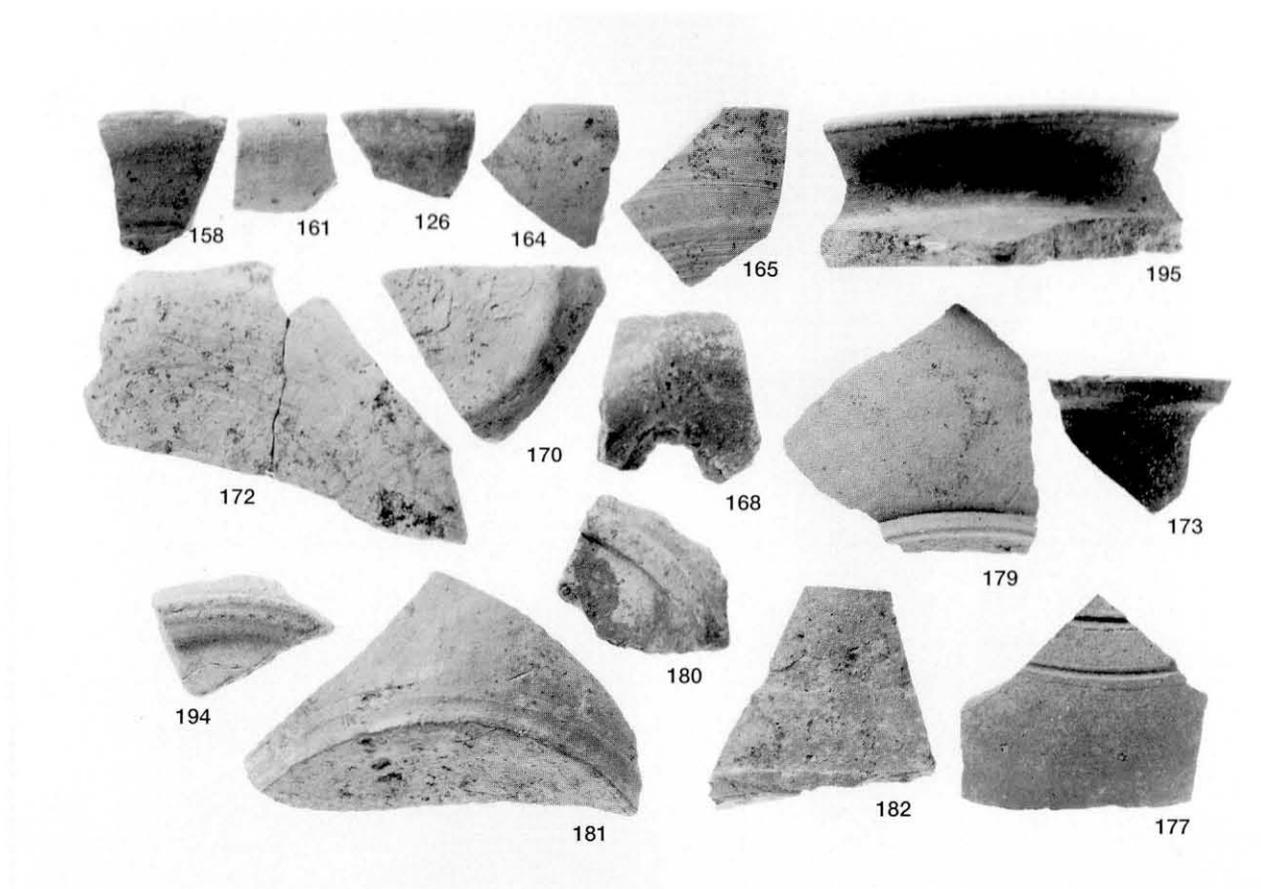
3 礎石建物跡基壇中出土多口瓶 2



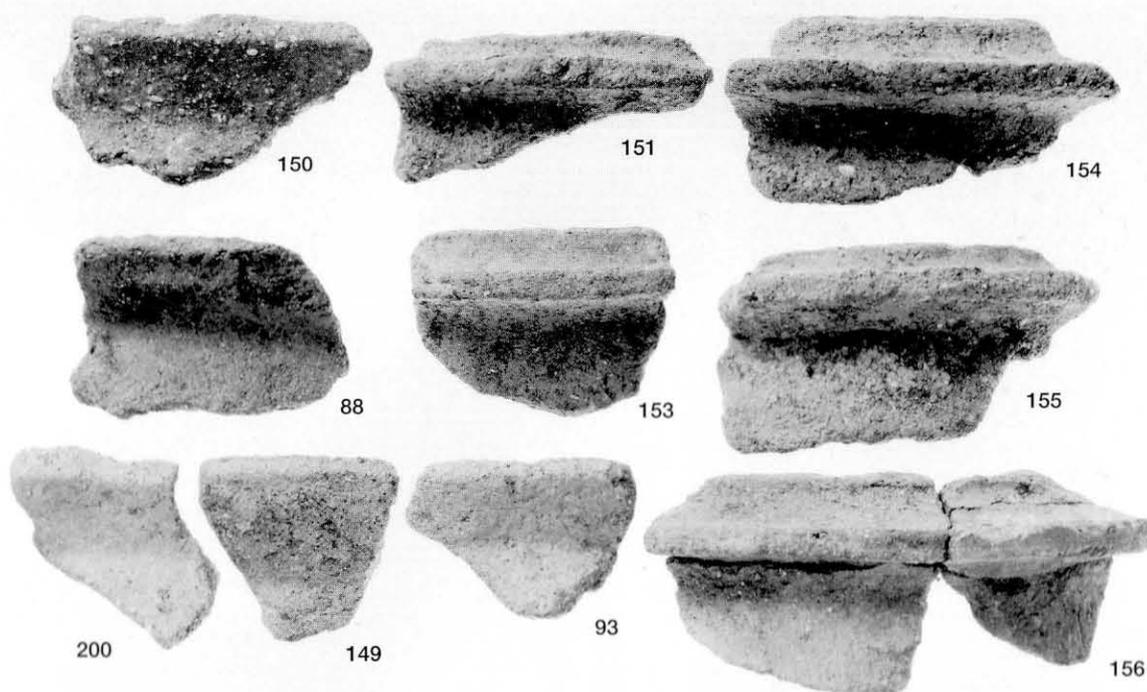
4 礎石建物跡基壇中出土多口瓶 3



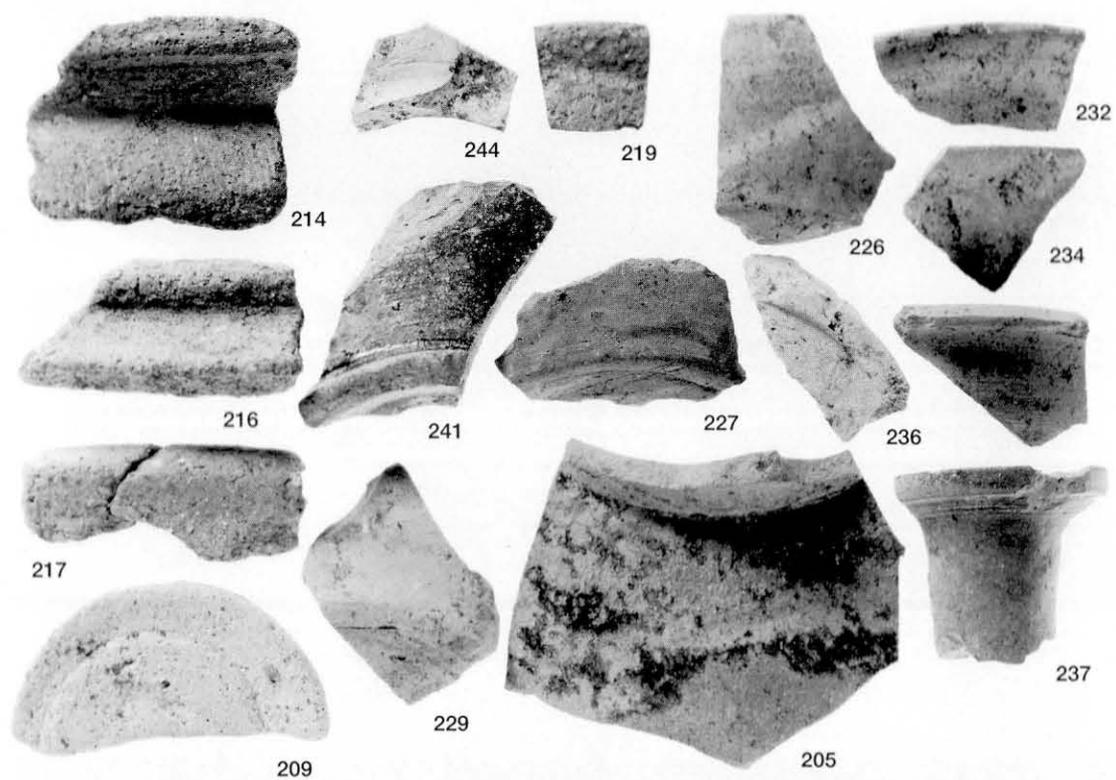
1 集石遺構出土土師器



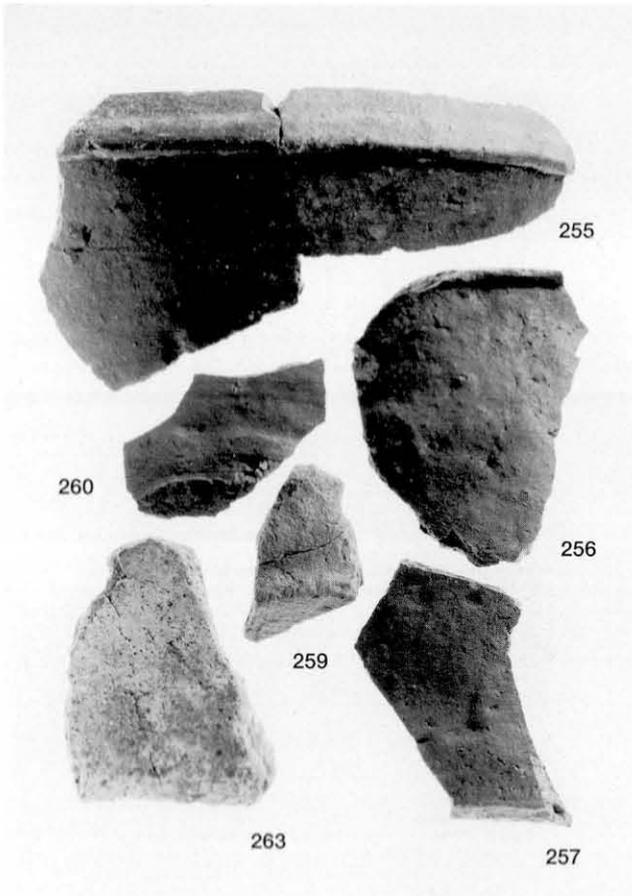
2 集石遺構出土須恵器



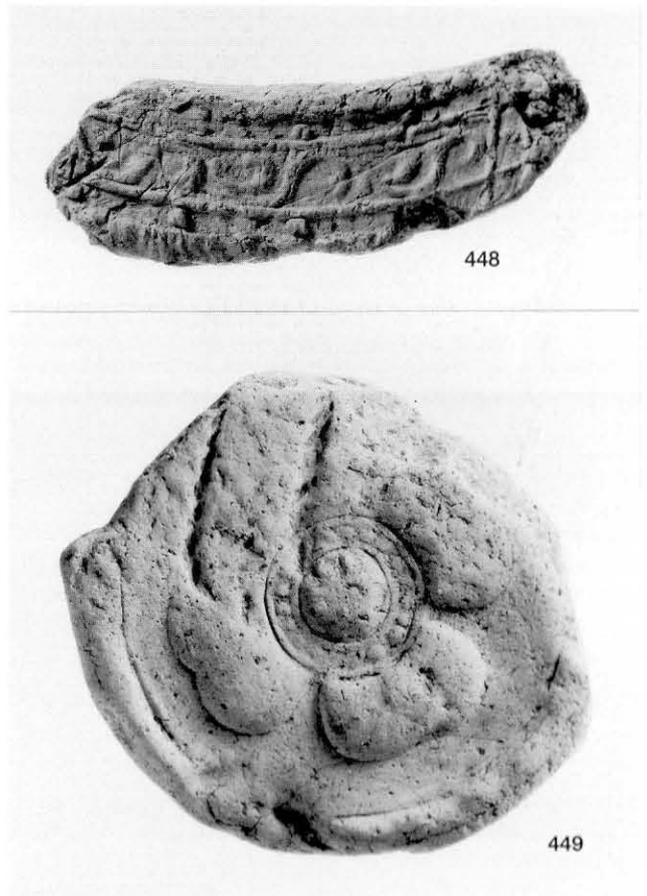
1 集石遺構出土土師器 2 (88, 93 を除く)



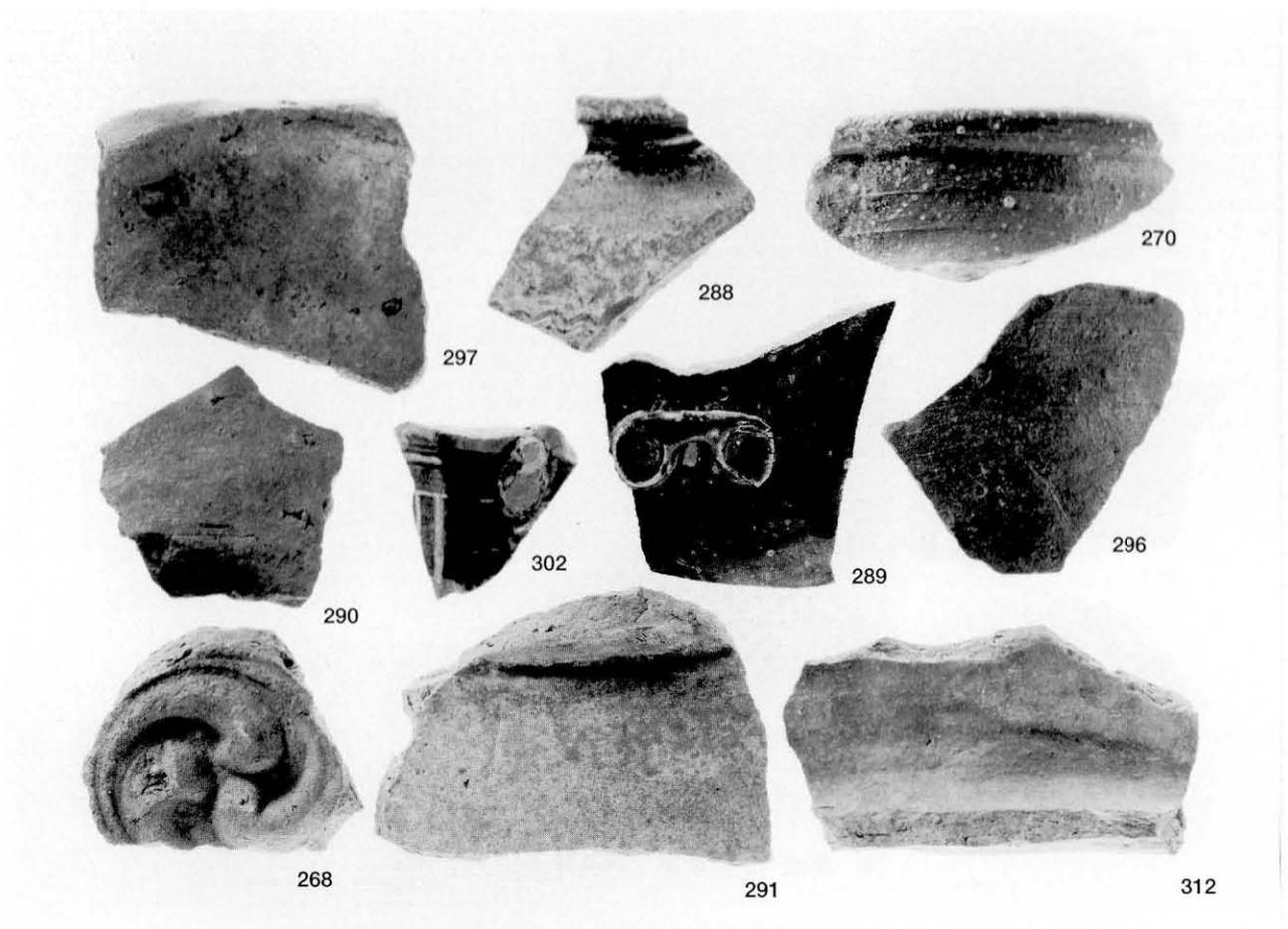
2 平成 13 年度第 2 調査地点出土遺物



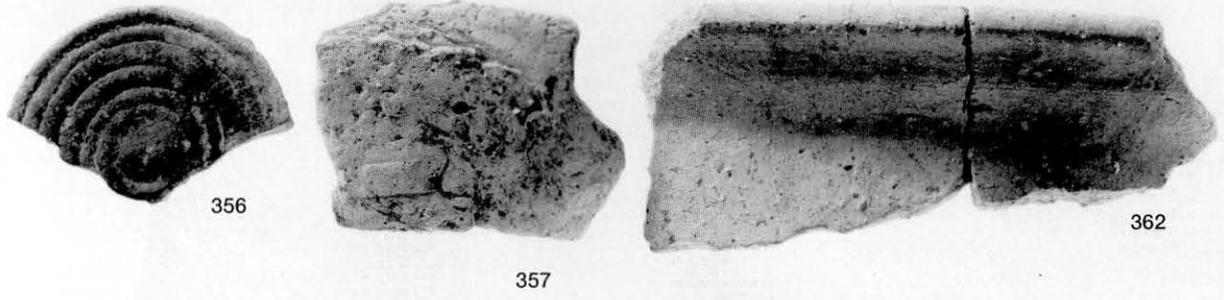
1 平成7年度調査地点出土遺物



2 屋島寺宝物館集石間出土軒平瓦・軒丸瓦



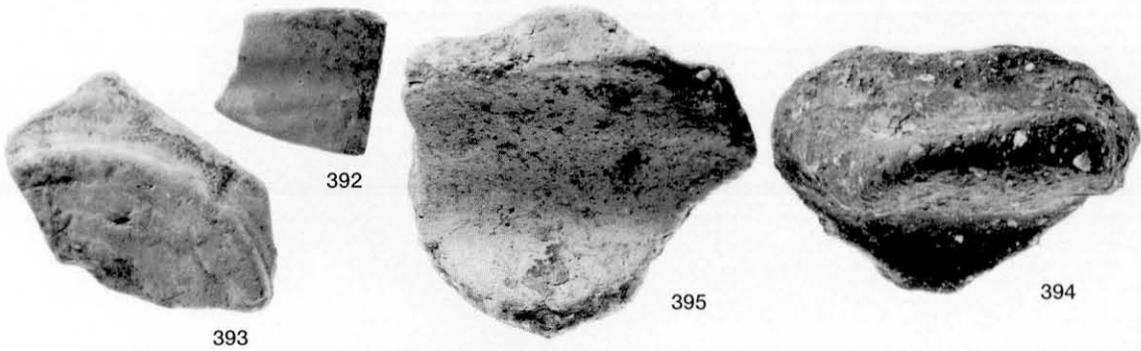
3 平成8年度第2調査地点出土遺物



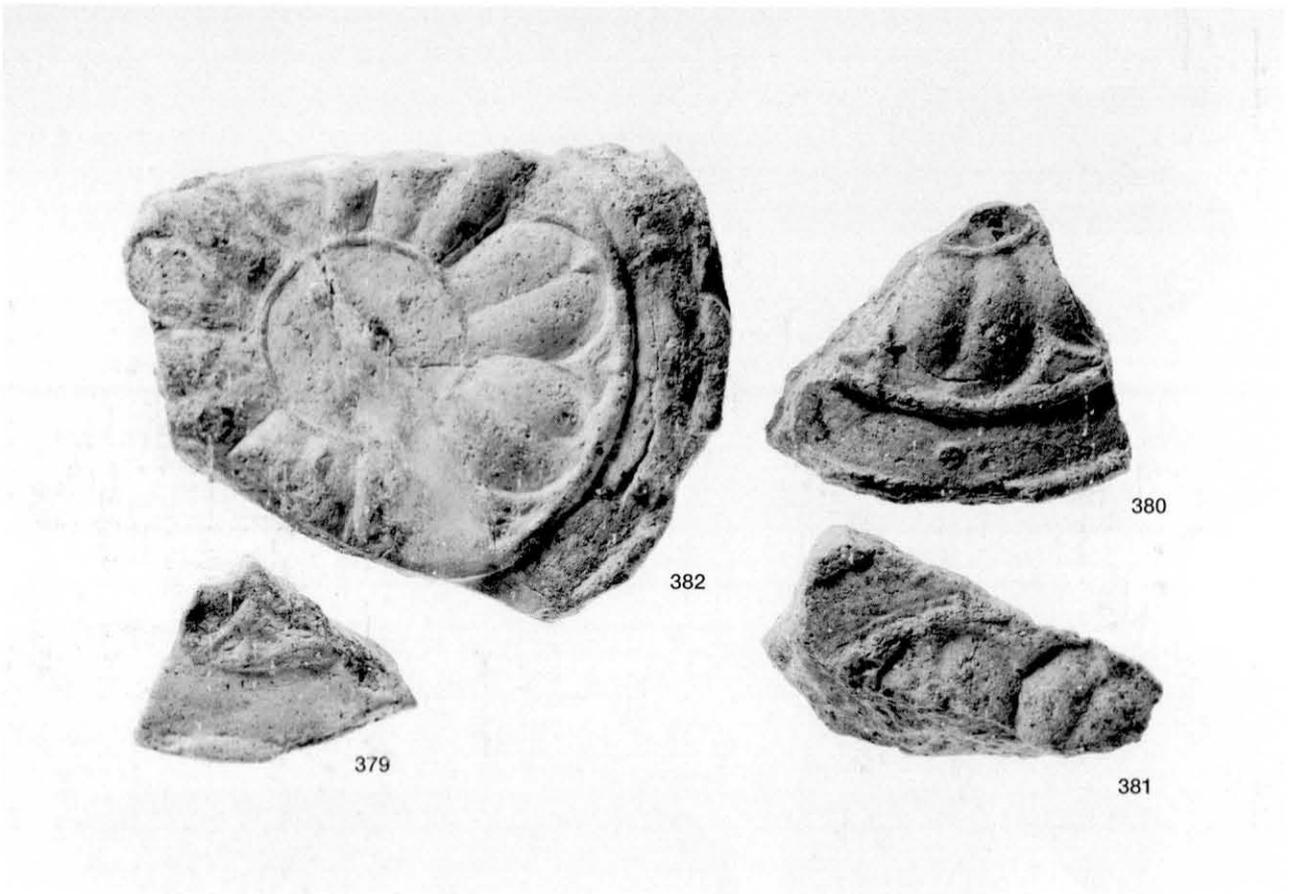
1 貯水池推定地第3層出土遺物



2 貯水池推定地第4～6層出土遺物



3 貯水池推定地第6層出土遺物



1 貯水池推定地第6層出土蓮華文軒丸瓦



2 貯水池推定地第4～6層出土平瓦・丸瓦

報告書抄録

ふりがな	しせきてんねんきねんぶつやしま							
書名	史跡天然記念物屋島							
副書名	史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	山元 敏裕							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087 (839) 2636							
発行年月日	平成15年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平成7年度 調査地点 (屋島寺)	やしまひがしまち 屋島東町1821番地1	37201		34° 21′ 03″	134° 6′ 10″	H 8.3.11 ～ H 8.3.29	600㎡	基礎調査
平成8年度 第1調査地点 (長崎鼻古墳)	やしまにしまち 屋島西町屋島国有林 26林班は3小班	37201		34° 22′ 7″	134° 05′ 50″	H 9.3.3 ～ H 9.3.31	90㎡	基礎調査
平成8年度 第2調査地点 (屋島寺)	やしまひがしまち 屋島東町1814番地1 1814番地2	37201		34° 21′ 03″	134° 6′ 10″	H 9.3.3 ～ H 9.3.31	360㎡	基礎調査
平成9年度 第1調査地点 (長崎鼻古墳)	やしまにしまち 屋島西町屋島国有林 26林班は3小班	37201		34° 22′ 7″	134° 05′ 50″	H 9.12.17 ～ H10.1.30	347㎡	基礎調査
平成9年度 第2調査地点 (屋島寺)	やしまひがしまち 屋島東町1828番地1	37201		34° 21′ 1″	134° 6′ 20″	H10.2.9 ～ H10.3.31	235㎡	基礎調査
平成10年度 第1調査地点 (長崎鼻古墳)	やしまにしまち 屋島西町屋島国有林 26林班は3小班	37201		34° 22′ 7″	134° 05′ 50″	H11.1.18 ～ H11.3.30	128㎡	基礎調査
平成10年度 第2調査地点 (千間堂跡)	やしまにしまち 屋島西町北嶺山上 国立公園内	37201		34° 22′ 00″	134° 06′ 00″	H11.3.1 ～ H11.3.30	60㎡	基礎調査
平成11年度 第1調査地点 (屋嶋城)	やしまひがしまち 屋島東町1821番地1 やしまにしまち 屋島西町屋島国有林 26林班は4小班	37201		34° 21′ 24″	134° 06″ 15″	H12.2.8 ～ H12.3.30	18㎡	基礎調査
平成11年度 第2調査地点 (千間堂跡)	やしまにしまち 屋島西町北嶺山上 国立公園内	37201		34° 22′ 00″	134° 06′ 09″	H12.2.8 ～ H12.3.30	342㎡	基礎調査
平成12年度 第1調査地点 (千間堂跡)	やしまにしまち 屋島西町北嶺山上 国立公園内	37201		34° 22′ 00″	134° 06′ 09″	H12.11.6 ～ H13.3.16	484㎡	基礎調査
平成12年度 第2調査地点 (屋嶋城)	やしまひがしまち 屋島東町1821番地1 やしまにしまち 屋島西町屋島国有林 26林班は4小班	37201		34° 21′ 24″	134° 06′ 15″	H13.1.16 ～ H13.3.21	107.5㎡	基礎調査
平成12年度 第3調査地点 (屋嶋城)	やしまひがしまち 屋島東町1782番地1	37201		34° 21′ 4″	134° 6′ 4″	H13.2.5 ～ H13.3.7	8.5㎡	基礎調査
平成13年度 第1調査地点 (屋嶋城)	やしまひがしまち 屋島東町1782番地1	37201		34° 21′ 04″	134° 06′ 04秒	H13.10.19 ～ H14.3.29	149㎡	基礎調査
平成13年度 第2調査地点 (千間堂跡)	やしまにしまち 屋島西町北嶺山上 国立公園内	37201		34° 22′ 00″	134° 06′ 09″	H13.2.18 ～ H13.3.7	180㎡	基礎調査
平成13年度 第3調査地点 (屋嶋城)	やしまひがしまち 屋島東町1811番地1	37201		34° 21′ 00″	134° 6′ 20″	H13.9.20 ～ H13.10.19	25㎡	基礎調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平成7年度 調査地点 (屋島寺)	寺院	室町時代	集石遺構	備前焼, 東播系須恵器	
平成8年度 第1調査地点 (屋島寺)	寺院	室町時代	土塁(築地塀)	備前焼, 軒丸瓦	
平成8年度 第2調査地点 (長崎鼻古墳)	古墳	古墳時代	葺石		
平成9年度 第1調査地点 (長崎鼻古墳)	古墳	古墳時代	葺石		
平成9年度 第2調査地点 (屋島寺)	寺院	古代~中世	ピット, 土坑	弥生土器, 土師器, 須恵器, 瓦器, 黒色土器	
平成10年度 第1調査地点 (長崎鼻古墳)	古墳	古墳	葺石, 石棺	土師器	阿蘇熔結凝灰岩製 舟形石棺
平成10年度 第2調査地点 (千間堂跡)	寺院	古代~中世	石列	瓦器, 黒色土器	
平成11年度 第1調査地点 (屋嶋城)	城館	古代	内托土段	須恵器, 弥生土器	
平成11年度 第2調査地点 (千間堂跡)	寺院	古代		土師器, 須恵器, 平瓦	
平成12年度 第1調査地点 (千間堂跡)	寺院	中世	礎石建物跡, 火葬 墓, 長方形石積 基壇	須恵器, 土師器, 灰釉陶器, 瓦器, 平瓦	須恵器多口瓶3点
平成12年度 第2調査地点 (屋嶋城)	城館	古代	土塁, 石塁	弥生土器	
平成12年度 第3調査地点 (屋嶋城)	城館	古代	石積み?		
平成13年度 第1調査地点 (屋嶋城)	城館	古代	城門遺構		排水溝をもつ城門遺 構
平成13年度 第2調査地点 (千間堂跡)	寺院	古代	掘立柱建物跡, 柵 列, 土坑	須恵器, 土師器, 緑釉陶器	
平成13年度 第3調査地点 (屋嶋城)	城館・寺院	古代 中世	池跡	弥生土器, 須恵器, 土師器, 軒 丸瓦, 平瓦	

高松市埋蔵文化財調査報告 第62集

## 史跡天然記念物屋島

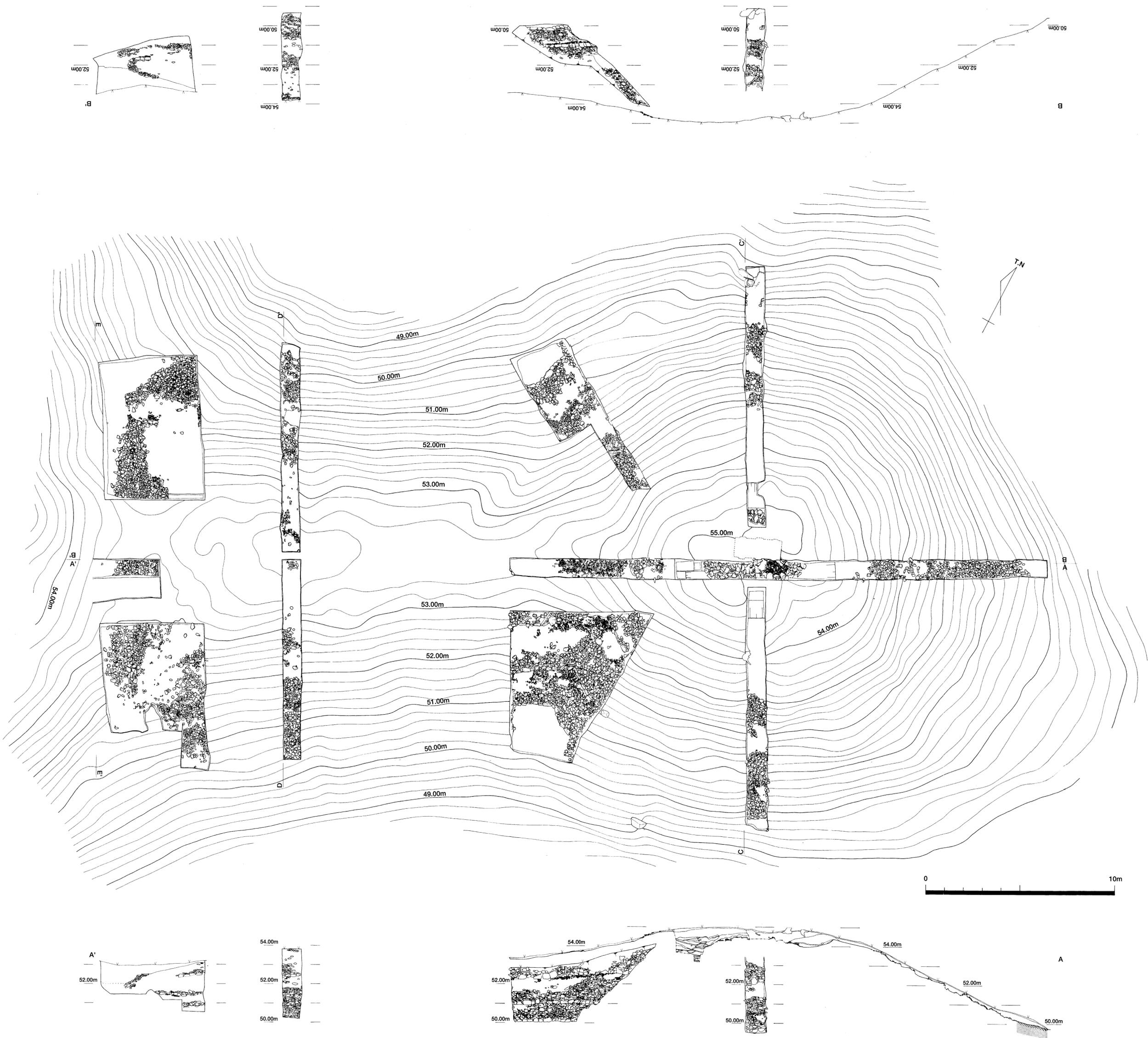
一史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ-

平成15年3月31日発行

編集 高松市教育委員会

発行 高松市番町一丁目8番15号

印刷 (有)中央ファイリング



付図1 長崎鼻古墳トレンチ図・墳丘縦断面図・墳丘立面図



付図2 城門実測図